
大 宮 市

上ノ宮遺跡

県営大宮東門前団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 9 9

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



調査区全景（合成写真）



炉穴群 1 出土土器



炉穴群 1 (第 1 ~ 10 号炉穴)



No.		
6		
1	2	
5	4	3



第2号方形周溝墓中心埋葬施設出土玉類

方形周溝墓出土土器



方形周溝墓群

序

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しいづくり」を基本理念に、21世紀の豊かな彩の国を目指して、多彩なまちづくりを進めています。

大宮市、浦和市を中心とする県南地域では、首都機能を含めた高次都市機能の集積が図られ、埼玉副都心の整備が進められています。

一方、過密問題を解消し、安全で質の高い都市空間を再構築するため、公的住宅の供給など、住環境の整備が行われており、その一環として、県営大宮東門前団地の建設が行われることになりました。

県営大宮東門前団地建築予定地内には、埋蔵文化財の所在が確認されておりました。その取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託を受けて、発掘調査を実施いたしました。

今回報告いたします上ノ宮遺跡の調査によって、縄文時代、古墳時代、平安時代、中・近世など、多時期にわたる遺構・遺物が見つかっております。

とりわけ、縄文時代早期の炉穴群から多数の遺物が

出土し、当時の集落の様子を伝える貴重な資料を得ることができました。さらに、弥生時代から古墳時代の移行期に顕著な墓制である方形周溝墓が群をなして発見されました。埋葬施設から出土したガラス玉をはじめとする出土遺物は、当期の墓制を考える上で貴重な知見となりました。

本書は、これらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県住宅都市部住宅建設課、大宮市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成11年10月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県大宮市に所在する上ノ宮遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

上ノ宮遺跡 (KMNMY)
大宮市大字東門前字上ノ宮446番地1他
平成10年4月27日付け教文第2-12号
3. 発掘調査は、県営大宮東門前団地建設事業にともなう事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、小野美代子、新屋雅明が担当し、平成10年4月1日から平成10年6月30日まで実施した。整理報告書作成事業は新屋雅明が担当し、平成10年4月8日から平成10年10月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量および航空写真撮影は株式会社日成プランに、遺物の巻頭カラー写真、土器の展開写真撮影は小川忠博氏、ガラス玉の材質分析は東京大学アイソトープ総合センター小泉好延氏、東京大学原子力研究総合センター小林紘一氏にそれぞれ委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は小野・新屋が行い、遺物写真撮影は大屋道則が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は縄文時代については新屋、古墳時代については福田聖、平安時代については赤熊浩一が行った。また、ガラス玉・管玉の実測と観察を杉崎茂樹が行った。本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、IV-2・V-2を福田が、IV-3を赤熊が、それ以外を新屋が行った。
8. 本書の編集は、新屋があたった。
9. 本書にかかる資料は平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、大宮市教育委員会、下村克彦・山形洋一・田代治・笹森紀己子の諸氏からは御教示・御協力を賜った。記して謝意を表するものである。

凡 例

1. 全体図等のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。

SJ=住居 SH=方形周溝墓 SK=土壙
FP=炉穴 SD=溝 SX=その他の遺構
4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。

遺構全測図 1/400 住居跡・土壙・炉穴 1/60
方形周溝墓 1/80 1/40 溝 1/200
5. 遺物図における網かけは赤彩部位を示す。
6. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。

土器 1/4 ガラス玉 1/1
石器 2/3 1/3 土器拓影 1/3 1/4
7. 縄文土器の分類は、早期・前期・中期・後期の土器をそれぞれ第1群土器から第4群土器にあてた。早期の土器については最もまとまった資料が出土した炉穴群2の土器を第1類~第4類等に分類し、他の遺構出土土器はこれに準じた。
8. 方形周溝墓の規模は周溝の方台部側の下端の間隔で示した。
9. 遺物観察表中のアルファベットは次の含有物を示す。A石英、B角閃石、C斜長石、D赤色軟質粒子、E雲母

目次

口絵	(1) 住居跡	10
序	(2) 炉穴	11
例言	(3) 土壌	52
凡例	(4) グリッド出土土器	52
目次	(5) 石器	59
I 発掘調査の概要	2. 古墳時代	65
1. 調査に至る経過	3. 平安時代	81
2. 発掘調査・報告書作成の経過	4. 中・近世	83
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	V 結語	86
II 遺跡の立地と環境	1. 縄文時代	86
III 遺跡の概要	2. 古墳時代	90
IV 遺構と遺物	付編 上ノ宮遺跡より出土した	
1. 縄文時代	ガラス玉の材質分析	101

表目次

第1表 新旧対応表	8	第7表 第2号方形周溝墓出土土器観察表	73
第2表 炉穴一覧	12	第8表 第3号方形周溝墓出土土器観察表	75
第3表 土壌一覧	57	第9表 第4号方形周溝墓出土土器観察表	78
第4表 石器観察表	64	第10表 第2号住居跡出土遺物観察表	83
第5表 第1号方形周溝墓出土土器観察表	71	第11表 大宮台地の中心埋葬施設	92
第6表 第2号方形周溝墓出土玉類計測表	73	第12表 ガラス玉の分析結果	102

挿図目次

第1図	埼玉県の地形	4	第36図	第11・12号炉穴出土土器(3)	49
第2図	周辺の遺跡	5	第37図	第20～22・27号炉穴出土土器	50
第3図	上ノ宮遺跡位置図	6	第38図	第29・32・35号炉穴出土土器	51
第4図	上ノ宮遺跡全体図	9	第39図	土壇(1)	53
第5図	第1号住居跡	10	第40図	土壇(2)	54
第6図	第1号住居跡出土土器	11	第41図	土壇(3)	55
第7図	炉穴群1(第1～10号炉穴)	14	第42図	土壇(4)	56
第8図	炉穴群1(第1～10号炉穴)出土状況図	15	第43図	土壇出土土器	58
第9図	炉穴群1出土土器(1)	16	第44図	グリッド出土土器(1)	60
第10図	炉穴群1出土土器(2)	17	第45図	グリッド出土土器(2)	61
第11図	炉穴群1出土土器(3)	18	第46図	グリッド出土土器(3)	62
第12図	炉穴群1出土土器(4)	19	第47図	グリッド出土土器(4)	63
第13図	炉穴群1出土土器(5)	20	第48図	出土石器	64
第14図	炉穴群1出土土器(6)	21	第49図	第1号方形周溝墓(1)	66
第15図	炉穴群1出土土器(7)	22	第50図	第1号方形周溝墓(2)	68
第16図	炉穴群2(第13～17・19号炉穴)	26	第51図	第1号方形周溝墓(3)	69
第17図	炉穴群2 第11・12号炉穴出土状況図	27	第52図	第1号方形周溝墓(4)	70
第18図	炉穴群2出土土器(1)	28	第53図	第1号方形周溝墓出土土器	71
第19図	炉穴群2出土土器(2)	29	第54図	第2号方形周溝墓(1)	72
第20図	炉穴群2出土土器(3)	30	第55図	第2号方形周溝墓(2)	73
第21図	炉穴群2出土土器(4)	31	第56図	第2号方形周溝墓出土玉類	73
第22図	炉穴群2出土土器(5)	32	第57図	第2号方形周溝墓出土土器	73
第23図	炉穴群2出土土器(6)	33	第58図	第3号方形周溝墓(1)	74
第24図	炉穴群2出土土器(7)	34	第59図	第3号方形周溝墓(2)	75
第25図	炉穴群2出土土器(8)	35	第60図	第3号方形周溝墓出土土器	75
第26図	炉穴群2出土土器(9)	36	第61図	第4号方形周溝墓・出土土器(1)	76
第27図	炉穴群2出土土器(10)	37	第62図	第4号方形周溝墓・出土土器(2)	78
第28図	炉穴群2出土土器(11)	38	第63図	第5号方形周溝墓	79
第29図	炉穴群3(第24・25・28号炉穴)	41	第64図	第6号方形周溝墓	80
第30図	炉穴群3出土土器(1)	42	第65図	第2号住居跡	81
第31図	炉穴群3出土土器(2)	43	第66図	第2号住居跡出土遺物	82
第32図	第11・12・20～23号炉穴	45	第67図	溝	84
第33図	第18・26・27・29～35号炉穴	46	第68図	その他の遺構	85
第34図	第11・12号炉穴出土土器(1)	47	第69図	縄文時代早期の土器	87
第35図	第11・12号炉穴出土土器(2)	48	第70図	縄文時代早期の土器	88

第71図	古墳時代の遺構	91	第77図	本遺跡出土の紺色ガラス玉の PIXEスペクトル	102
第72図	大宮台地の中心埋葬施設	92	第78図	長野県榎田遺跡出土 紺色ガラス玉 のPIXEスペクトル	102
第73図	土器の出土位置	93	第79図	神奈川県受地だいやま遺跡出土 紺色ガラス玉のPIXEスペクトル	102
第74図	土器の2次被熱部位	93			
第75図	上ノ宮遺跡の群構成	94			
第76図	上ノ宮遺跡周辺の 単純口縁壺・山形文施文壺	96			

図版目次

図版1	遺跡遠景	図版16	炉穴群2出土土器
図版2	遺跡全景（調査区東半） 遺跡全景（調査区西半）	図版17	炉穴群2出土土器
図版3	遺跡近景（調査区東半） 遺跡近景（調査区西半 遺構確認時）	図版18	第11・12号炉穴出土土器
図版4	第1号住居跡 第1号住居跡出土土器	図版19	グリッド出土土器
図版5	炉穴群2（第13～17・19号炉穴） 第13・14号炉穴 第15号炉穴 第16号炉穴 第17号炉穴	図版20	炉穴群3出土土器 出土石器
図版6	炉穴群1遺物出土状況 第11・12号炉穴	図版21	炉穴群1出土土器展開写真
図版7	第27号炉穴 炉穴群3（第28号炉穴他） 第31号炉穴	図版22	第1号方形周溝墓 第1号方形周溝墓遺物出土状況
図版8	第20・21号炉穴 第24・25号炉穴 第26号炉穴	図版23	第2号方形周溝墓 第2号方形周溝墓中心埋葬施設 第2号方形周溝墓遺物出土状況
図版9	土壌群近景	図版24	第3号方形周溝墓 第3号方形周溝墓遺物出土状況
図版10	炉穴群2出土土器 炉穴群3出土土器	図版25	第4号方形周溝墓 第4号方形周溝墓溝中土壌
図版11	炉穴群1出土土器	図版26	第5号方形周溝墓 第6号方形周溝墓
図版12	炉穴群1出土土器	図版27	第2号住居跡 第2号住居跡カマド
図版13	炉穴群2出土土器	図版28	第1・2・3号溝近景
図版14	炉穴群2出土土器	図版29	地下式坑（SX2）第1号井戸
図版15	炉穴群2出土土器	図版30	第1号方形周溝墓出土土器
		図版31	第2号方形周溝墓出土土器 第3号方形周溝墓出土土器 第4号方形周溝墓出土土器
		図版32	第2号方形周溝墓出土玉類 第2号住居跡出土土器

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県では「快適でうるおいのある生活空間の形成」を目指して、すべての県民が安全で快適な生活を営むことができるよう、質の高い住まいの計画的な供給促進を図り、住環境の整備を行っている。

こうした施策の一環として、埼玉県では県営住宅を計画的に建設している。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県営大宮東門前団地建設にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成9年11月21日付け住建第1207号で、埼玉県住宅都市部住宅建設課長より埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成10年2月20日付け教文第1489号で、上ノ宮遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称 (No.)	種別	時代	所在地
上ノ宮遺跡 (12-118)	集落跡	縄文	大宮市大字 東門前字上ノ宮 446-1 他

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官当への発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と住宅建設課と文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。その結果、平成10年4月1日から平成10年6月30日までの期間で、実施することになった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

上ノ宮遺跡 平成10年4月27日付け

教文第2-12号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

上ノ宮遺跡の調査は、平成10年4月1日から平成10年6月30日まで行った。調査面積は約2967.47㎡である。

調査は、掘削土を場内処理したため、東西に2分割して行った。期間の前半に西側、後半に東側の調査を実施した。

発掘調査の実施経過は、以下のとおりである。

4月上旬、住宅建設課と調査方法・日程等について打ち合わせを行った。調査を実施するに先立ち、隣接地の家屋調査を実施した。

4月中旬、家屋調査の終了後、東側の一角に現場事務所のユニットハウスを設置し、水道・ガス・電話線などの付帯工事を実施した。敷地の境には安全確保のため囲柵工事を施した。

調査区の西側半分について、重機による表土掘削を開始した。また、調査区内に基準杭・正方眼杭の設置を委託して実施した。

4月下旬、補助員による作業を開始した。

遺構精査を行ったところ、調査区西側部分には住居跡2軒のほか、炉穴群、方形周溝墓群の存在が明らかとなった。

これらの遺構の土層断面図作成、遺物出土状況の記録作成などを行いながら順次、掘り下げた。

住居は縄文時代中期と平安時代の所産であった。炉穴群から出土する土器は早期の後半の条痕文系土器であり、覆土の上部からも少なからず出土したため、位置を記録しながら調査を行った。

6基の方形周溝墓は周溝部から壺を主体とする土器群が十数個体見つかかり、出土状況図・写真撮影などを行いながら取り上げた。

また、方形周溝墓のうち3基については埋葬施設が確認され、第2方形周溝墓の埋葬施設からはガラス玉が出土した。ガラス玉は小さいので、埋葬施設の覆土はふるいをかけながら検出に努めた。

5月上旬から中旬は、引き続き調査区西側部分の調査を行い、遺構の写真撮影を行った後、平面図作成を行う。5月15日には、航空写真撮影を実施する。

5月下旬には、平面図作成を主体としながら作業を続け、西側の調査が完了する。調査が完了した部分から埋め戻しを開始し、調査区東側の掘削に着手した。

6月上旬、遺構精査を行ったところ、土壌群、溝などが確認された。中旬にかけて土層断面図を作成しながら完掘し、6月16日には航空写真撮影を行う。

6月中旬、東側部分の平面図作成を行う。

6月下旬、調査の完了とともに、調査区の埋め戻しを行う。器材の搬出、現場事務所の撤去などを行って、発掘事業をすべて終了した。

整理・報告書刊行期間

整理事業は、平成11年4月8日から平成11年8月31日まで実施した。

4月には遺物の水洗・注記・遺構図面の整理を開始した。第2方形周溝墓出土のガラス玉の材質分析を委託して実施した。

5月には遺物の接合・復元・実測、遺構の2次原図作成を行った。縄文時代早期の土器については拓影図を作成し、断面の実測を行った。

6月には遺物、遺構図のトレースを開始した。7月には報告書の版下として仕上げた。また、遺物の写真撮影を行い、遺構の写真もあわせてレイアウトを行った。こうした作業に平行して割付を作成し、原稿執筆を行った。

8月には遺物の委託写真撮影を行った。引き続き原稿執筆・割付作業を行ってこれらを完了し、実作業は終了に向かった。

入札を経て、校正作業を行い、10月末に本書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成10年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久
庶務課長 金子 隆
主任 田中 裕二
主任 長滝 美智子
主任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 谷井 彪
調査部副部長 水村 孝行
調査第二課長 杉崎 茂樹
統括調査員 小野 美代子
主任調査員 新屋 雅明

(2) 整理・報告書刊行 (平成11年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長兼経理課長 関野 栄一
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二
主任 菊池 久
庶務課長 金子 隆
主任 田中 裕二
主任 江田 和美
主任 長滝 美智子

資料部

資料部長 高橋 一夫
専門調査員兼副部長 石岡 憲雄
専門調査員 市川 修
主任調査員 新屋 雅明

II 遺跡の立地と環境

上ノ宮遺跡は大宮市東部の東門前字上ノ宮に所在する遺跡である。

東武野田線七里駅から東へ1kmの位置にある。調査区の北側に接して主要地方道大宮・春日部線（旧国道16号線）が東西に延びている。旧国道16号線と国道16号線の交差点から南西へ0.4kmに位置している（第3図）。

当遺跡の周辺は近年まで近郊農村地域であったが、昨今は住宅建設が進行しており、市街地へと変貌しつつある。

上ノ宮遺跡の立地する大宮台地は埼玉県の東部を占めている。大宮台地は東を中川低地によって下総台地、西を荒川低地によって武蔵野台地と対峙する位置にある（第1図）。

大宮台地の中には元荒川、綾瀬川、芝川、鴨川などの中小河川が台地を開析しており、樹枝状の谷地形が発達している。こうした中小河川によって分かれた支台のうち、東部に位置する大和田・片柳支台の東端に

遺跡は位置する。

大和田・片柳支台は西を芝川、東を綾瀬川に開析され北北西から南南東に延びている。

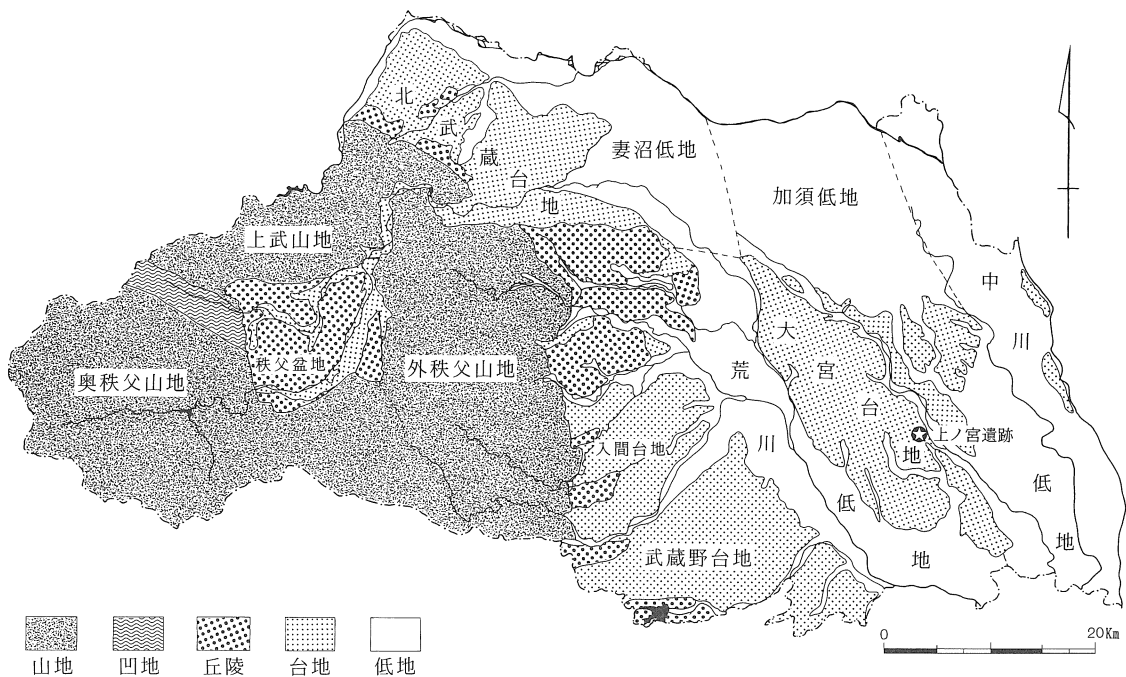
遺跡の周辺は東を綾瀬川の谷が開析し、西側は現在見沼代用水の流れている谷が北北西から南南東に延びている。したがって、遺跡の立地する台地は東西を谷地形に挟まれており、大和田・片柳支台の東側に島状に分離した幅400m、長さ2kmの細長い台地となっている。

遺跡は綾瀬川の谷に面した標高10.1～10.6mのローム台地上にある。

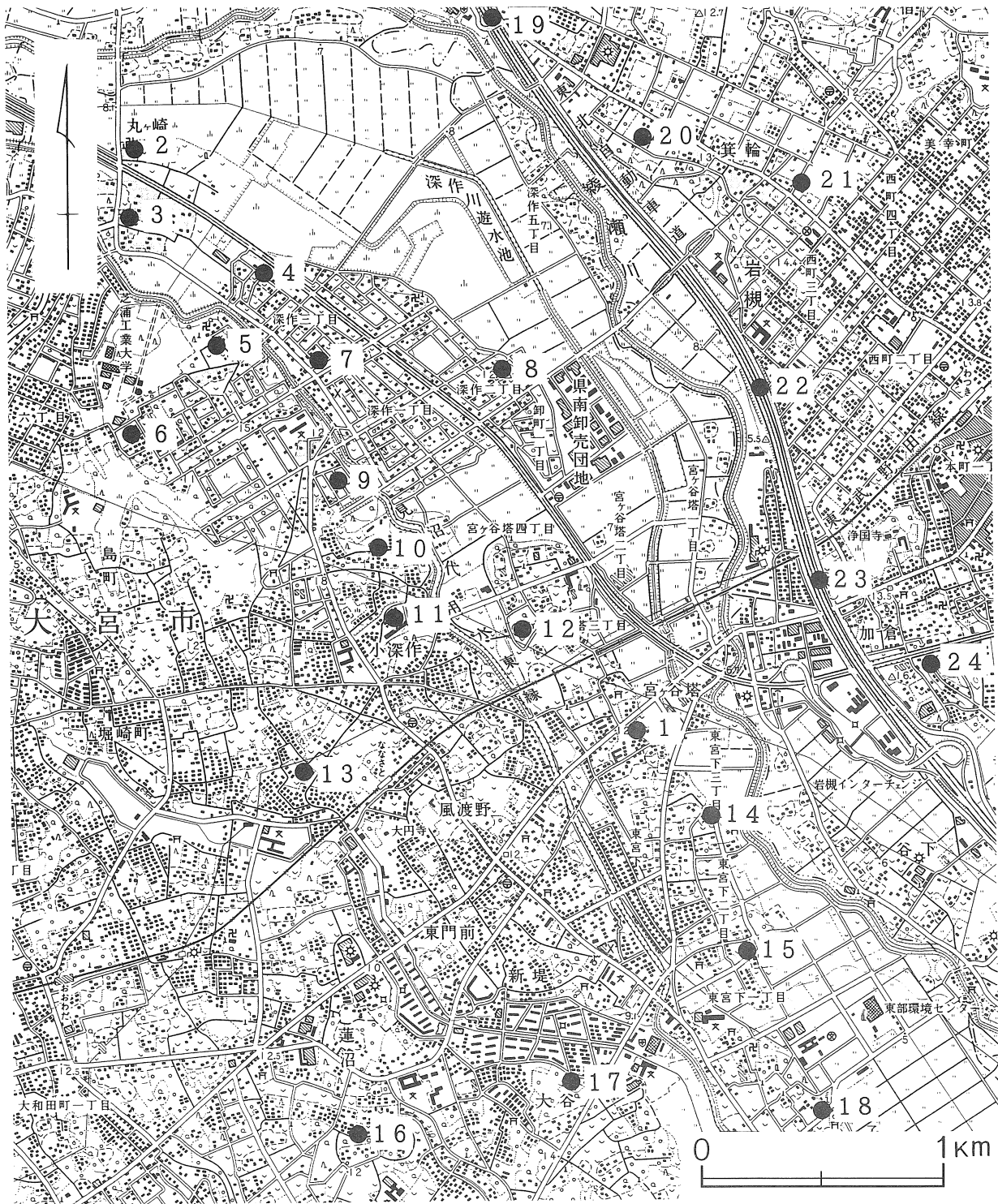
調査区から現在の綾瀬川の流路まで東北東へ400m弱、見沼代用水東縁は西南西へ300mの距離しかなく、東西に幅の狭いローム台地上に遺跡が立地していることがうかがえる（第3図）。

この細長い台地上には当遺跡の他に宮ヶ谷塔遺跡群（12）、A-116遺跡（14）、中里遺跡（15）などの遺跡が分布している（第2図）。

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



- 1 上ノ宮遺跡 2 A-146号遺跡 3 丸ヶ崎遺跡 4 貝崎貝塚 5 A-137号遺跡 6 稻荷原遺跡 7 深作東部遺跡群
- 8 深作水川神社裏遺跡 9 深作稲荷台遺跡 10 A-230号遺跡 11 小深作前遺跡 12 宮ヶ谷塔遺跡群
- 13 小深作遺跡 14 A-116号遺跡 15 中里遺跡 16 A-83号遺跡 17 後遺跡 18 膝子八幡神社遺跡 19 平林寺遺跡
- 20 西原三遺跡 21 箕輪貝塚 22 西原遺跡 23 加倉遺跡 24 加倉中島遺跡

当遺跡の周辺には綾瀬川やその支谷に面した台地上に多くの遺跡が分布している。

これまでに報告書が刊行された遺跡を中心にして、発掘調査の成果を概観していく。

上ノ宮遺跡についての詳細は後述するが、今回の調査では縄文時代、古墳時代、平安時代の遺構が検出されている。第2図に示した諸遺跡の中には同時代の遺跡が多数認められる。

第2図1～17は大宮市の東部、大和田・片柳支台・

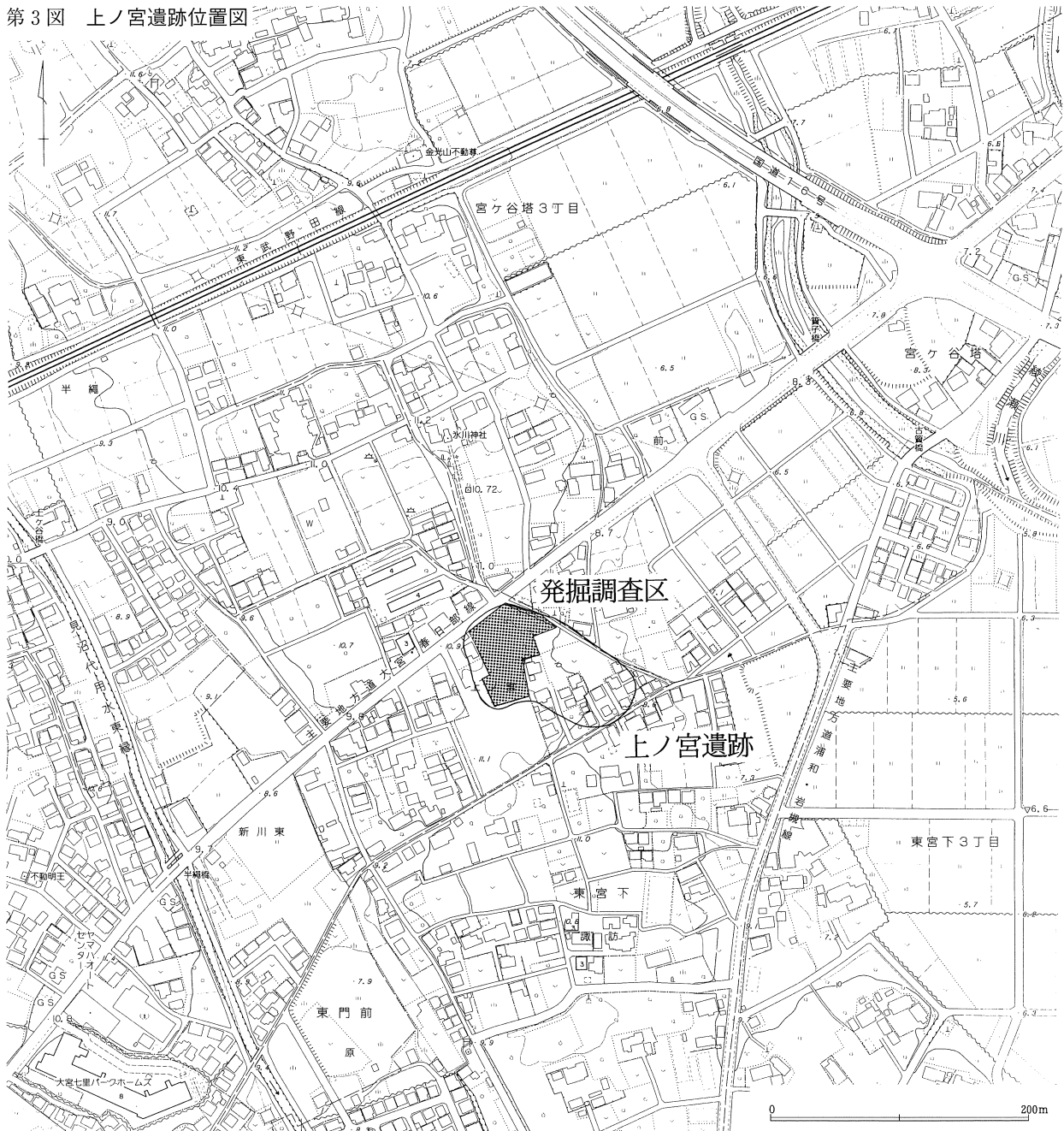
鳩ヶ谷支台に位置する諸遺跡である。

A-146遺跡(2)では縄文時代早期の条痕文系土器が出土している(立木・山形 1985)。

丸ヶ崎遺跡(3)では縄文時代後期前葉の称名寺式期の住居跡が検出されている(下村・宮内 1976)。

貝崎貝塚(4)は綾瀬川右岸最奥に位置する前期の貝塚として著名である。古くは「深作貝塚」として知られ、大山史前学研究所によって調査が行われている。大宮市教育委員会による数次の調査が実施され、縄文

第3図 上ノ宮遺跡位置図



時代前期の集落・貝塚が明らかになっている（下村・庄野 1978）。

A-137号遺跡（5）では縄文時代中期の住居跡が検出されている（田代 他 1994）。

稲荷原遺跡（6）は縄文時代早期・撚糸文系土器の「稲荷原式」の標識遺跡である（三友・安岡 1966）。

深作東部遺跡群（7）は13遺跡の総称であり、旧石器時代から平安時代に至る各時代の様相が明らかとなった調査事例である（立木 他 1984）。

深作東部遺跡群に隣接する深作稲荷台遺跡（9）も同様に縄文時代前期・中期、古墳時代、平安時代の各期の住居跡が検出されている。また、早期の炉穴も検出されている（田代 他 1994）。

深作氷川神社裏遺跡（8）は縄文時代早期の炉穴と平安時代の住居跡が検出されている。

A-230号遺跡（10）は縄文時代早期の炉穴、中期の住居跡、古墳時代前期の住居跡等が検出されている（立木・田代他 1987）。

小深作前遺跡（11）では縄文時代早期の炉穴、平安時代の住居跡が検出されている（立木 他 1983）。

宮ヶ谷塔遺跡群（12）は縄文時代前期の地点貝塚が8箇所確認されている。縄文時代前・中期、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代の住居跡が検出されている。また、早期の炉穴も検出されている（田代・笹森他 1985、立木・山形 1985）。

上ノ宮遺跡に近い8～12の諸遺跡はいずれも早期の炉穴が検出されている。詳細な時期は前後するものと思われるが、早期後半貝殻条痕文期の遺跡が多く分布する傾向が認められる。

小深作遺跡（13）は芝川の支谷に面した台地上にあり、やや立地を異にする。縄文時代後・晩期の豊富

な資料が報告されている（大宮市教育委員会 1971）。

上ノ宮遺跡の南東0.5kmに位置しているA-116号遺跡（14）では古墳の周溝が検出されている（笹森・田口他 1986）。

中里遺跡（15）は弥生時代～古墳時代、平安時代の住居跡が検出されている（下村・宮崎 1988）。

A-83号遺跡（16）、後遺跡（17）は弥生時代の遺跡として知られている。

膝子八幡神社遺跡（18）は縄文時代、弥生時代の住居跡が検出されている（立木・山口他 1982）。

第2図19～24の諸遺跡は当遺跡とは綾瀬川を挟んで対岸の岩槻支台に立地している。岩槻支台は西側を綾瀬川、東側を元荒川により開析された台地である。19～24はいずれも岩槻市の北東部に相当する。

平林寺遺跡（19）は弥生時代中期の土壇、古墳時代前期の住居跡等が検出されている（埼玉県遺跡調査会 1972）。西原三遺跡（20）は古墳時代の住居跡が検出されている（小林・青木 1993）。

西原遺跡（22）は縄文時代中期・加曾利E式期、弥生時代中・後期の集落が検出されている。また、縄文時代早期の炉穴が10基見つかっている（埼玉県遺跡調査会 1972）。

加倉遺跡（23）は古墳時代前期の住居跡が検出されている（埼玉県遺跡調査会 1972）。加倉中島遺跡（24）は古墳時代前期の住居跡から多数の出土遺物が検出されている（小林・青木 1995）。

やや冗長に概観してきたが、上ノ宮遺跡の周辺は縄文時代早期、古墳時代前期の遺跡が数多く分布する地域である。当遺跡の縄文時代早期の炉穴群や古墳時代前期の方形周溝墓群はこうした諸遺跡の中に新たに位置づけられよう。

Ⅲ 遺跡の概要

今回の調査は遺跡の西側、2967.47㎡について実施したものである。

標高10.1～10.7mのローム台地上に遺構が形成されている。ローム面の標高は調査区西側のB-5グリッド付近でもっとも高く、10.7mである（第4図）。

このB-5グリッドを頂点として東側は綾瀬川の谷に続く緩斜面となっている。すなわち、B-3グリッドとD-6グリッド付近を結ぶラインから東側では、東向きあるいは東北東向きの緩斜面をなし、標高が最も低い東端のF-4グリッドでは10.1mである。

グリッド6～8列を中心とする調査区の南部はほぼ平坦な地形が広がっている。

グリッド9列と8列の一部は南南東に向かって斜面をなす。遺跡の立地する台地は南南西から北北東に向かう細長い台地である。8・9列の南南東向きの斜面は台地の延びている方向に直行するものであることから、台地を開析する小支谷の存在が想定される。

口絵に示したように調査区全体に近年の攪乱が顕著であり、遺構も少なからずその影響を受けていた。

検出された遺構・遺物は縄文時代、古墳時代、平安時代、中・近世の各時期にわたっている。発見した遺構は住居跡2軒、炉穴35基、土壇75基、方形周溝墓6基、溝3条、堅穴状遺構1基、地下式坑1基、井戸1基がある。

縄文時代早期の遺構は炉穴35基、土壇75基が見つかっている。早期の遺構は調査区北部を中心に分布する。遺構からの出土土器は早期後半の貝殻条痕文系土器であり、野島式期に限定される。炉穴群を中心として良好な資料が検出された。縄文時代中期の遺構は住居跡1軒が調査区南西隅から見つかっている。

遺構外からも縄文土器が出土したが、早期の土器が多く、他の時期は少量の出土であった。

古墳時代の遺構として方形周溝墓6基が見つかっている。調査区南半に偏って分布している。6基のうち4基には埋葬施設が認められた。

第2号方形周溝墓の埋葬施設からはガラス玉5点、管玉1点が出土している。他に周溝覆土から当期の壺・甕などが出土した。

平安時代の住居跡は調査区の北西で1軒が見つかっている。須恵器坏、土師器坏、土師器甕、台付甕などが出土している。また、中・近世の遺構には堅穴状遺構1軒、地下式坑1基、井戸1基、溝3条がある。

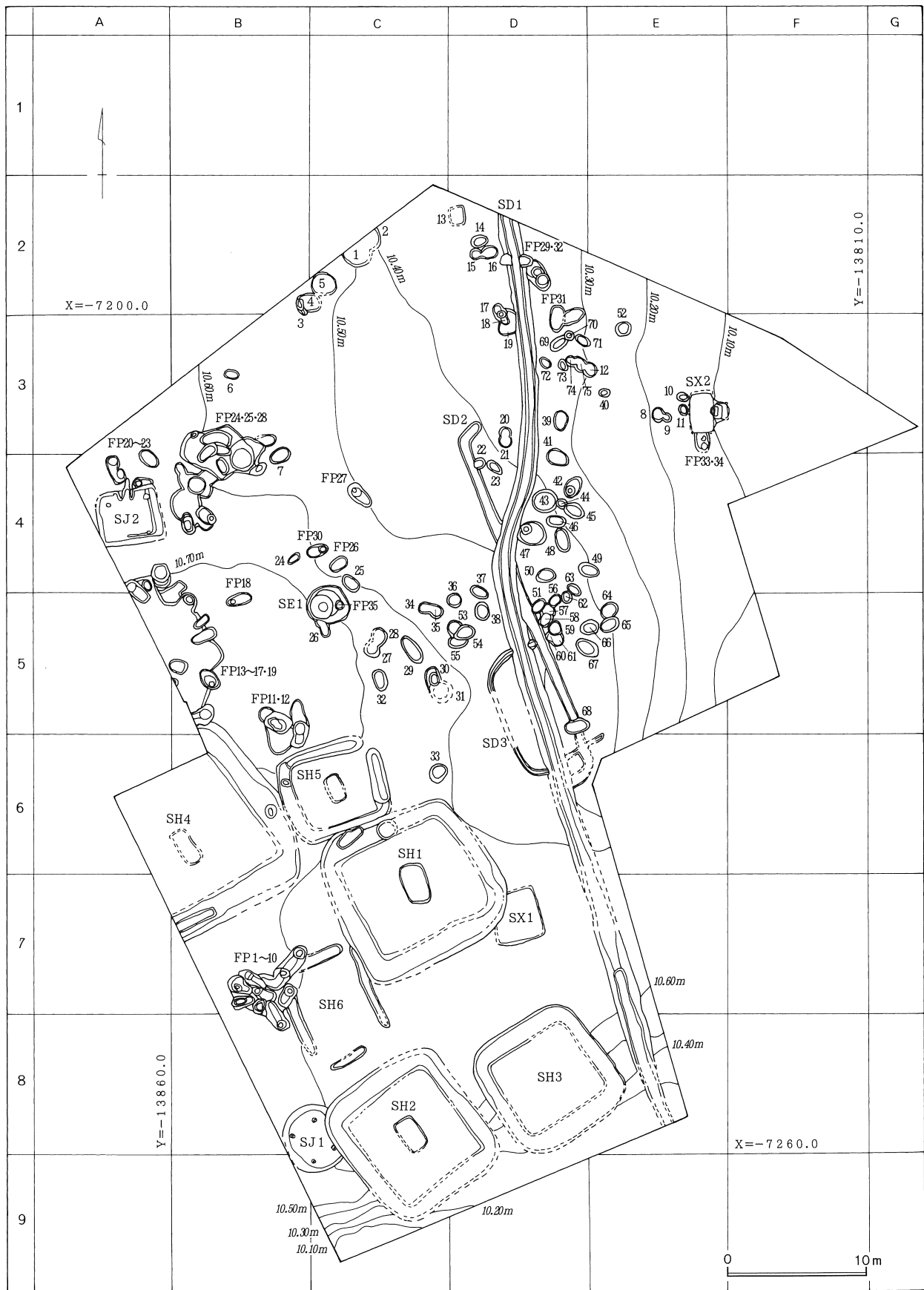
報告書作成にあたって、土壇については番号・名称をふり直した。炉穴群内の土壇や井戸（SE1）などに名称変更の必要が生じたためである（第1表）。

他の遺構は調査時のままの名称・記号である。なお、第1表では旧番号のSK24、77～80を欠いているがこれらは調査時の欠番である。

第1表 新旧対応表

新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称
SK1	SK8	SK13	SK13	SK25	SK25	SK37	SK37	SK49	SK49	SK61	SK61	SK73	SK73
SK2	SK9	SK14	SK14	SK26	SK26	SK38	SK38	SK50	SK50	SK62	SK62	SK74	SK74
SK3	SK10	SK15	SK15	SK27	SK27	SK39	SK39	SK51	SK51	SK63	SK63	SK75	SK75
SK4	SK11	SK16	SK16	SK28	SK28	SK40	SK40	SK52	SK81	SK64	SK64	SE1	SK1
SK5	SK12	SK17	SK17	SK29	SK29	SK41	SK41	SK53	SK53	SK65	SK65	炉穴群2	SK2
SK6	SK6	SK18	SK18	SK30	SK30	SK42	SK42	SK54	SK54	SK66	SK66	炉穴群3	SK3
SK7	SK7	SK19	SK19	SK31	SK31	SK43	SK43	SK55	SK55	SK67	SK67	炉穴群3	SK4
SK8	SK82	SK20	SK20	SK32	SK32	SK44	SK44	SK56	SK56	SK68	SK68	炉穴群3	SK5
SK9	SK83	SK21	SK21	SK33	SK33	SK45	SK45	SK57	SK57	SK69	SK69	炉穴群3	SK52
SK10	SK84	SK22	SK22	SK34	SK34	SK46	SK46	SK58	SK58	SK70	SK70		
SK11	SK85	SK23	SK23	SK35	SK35	SK47	SK47	SK59	SK59	SK71	SK71		
SK12	SK76	SK24	SK86	SK36	SK36	SK48	SK48	SK60	SK60	SK72	SK72		

第4図 上ノ宮遺跡全体図



IV 遺構と遺物

1. 縄文時代

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第5図)

発掘区の南西端、B-8・9、C-8・9グリッドに位置する。

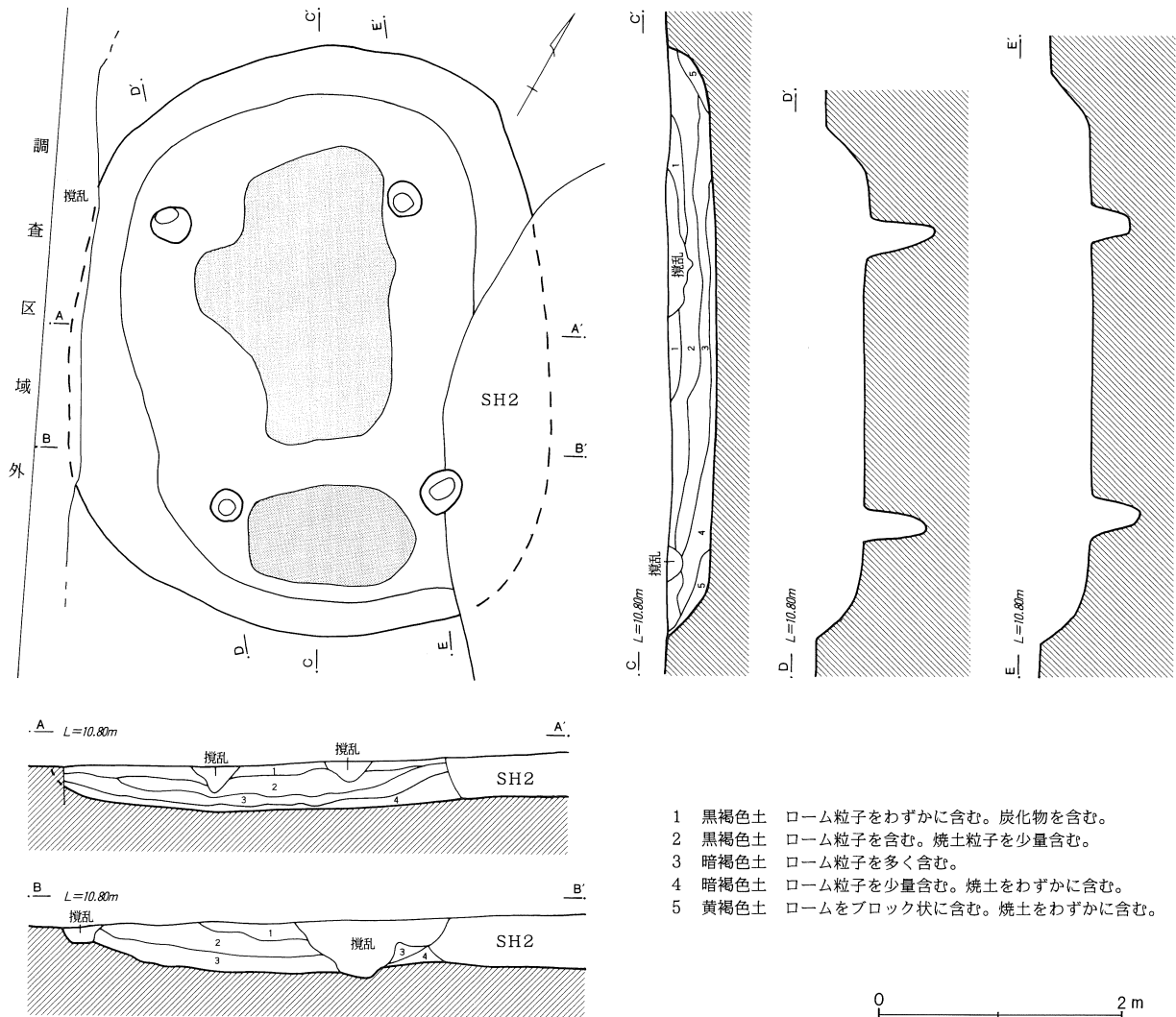
平面形は楕円形である。西側の壁の立ち上がりが攪乱を受けている。また、南東側は第2方形周溝墓によって壊されている。この重複部分は第2方形周溝墓周溝北西コーナーにあたる。コーナー部分の深度と当住居跡の深度が同様であったため、立ち上がりは全く残存していない。

主軸はN-35°-Wである。壁の立ち上がりは北側、南側に比べて、西側ではごく緩い傾斜で立ち上がる。東側の立ち上がりは重複によって大部分が残存していない。深度は0.2m~0.28mであり、立ち上がり付近では0.2m、中央付近ではやや深い。

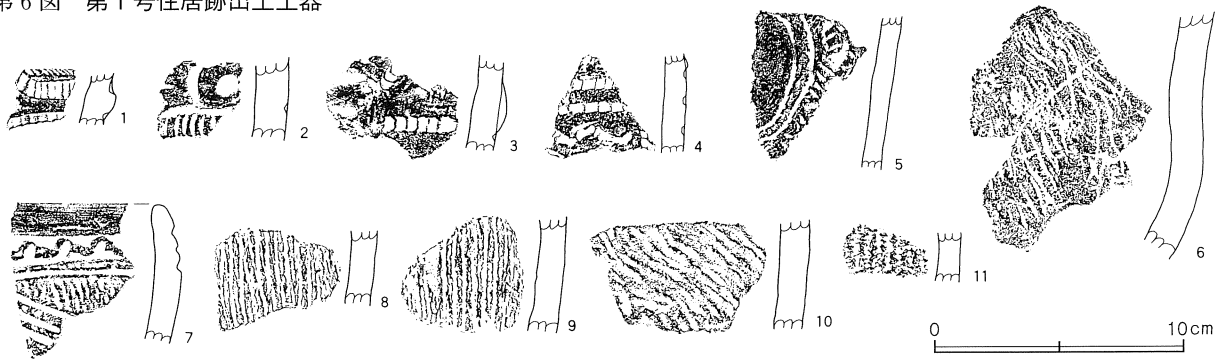
柱穴は4本である。長方形に配置される。

床面の遺存は良好であった。中央や南壁付近では堅い部分が顕著であった。その範囲をスクリーントーンによって図示した。

第5図 第1号住居跡



第6図 第1号住居跡出土土器



周溝、炉は認められなかった。炉が欠如する点から、関東東部に分布する2段掘り込みの住居についても想定したが、2段目の掘り込みの痕跡は皆無であった。

出土遺物は少なかった。縄文時代中期の土器片が少量出土しており、住居跡は中期の所産と考えられる。

第1号住居跡出土土器 (第6図)

1～6は中期中葉の土器である。

いずれも深鉢形土器の胴部破片である。1は隆帯に沿って、爪形文を施す。胎土に雲母片を含む。2は隆

帯に沿って爪形文を施す。貼付文を施す。3は沈線文、刻み目を施す。4は隆帯、角押文を施す。5は隆帯、爪形文、刻みを施す。胎土に雲母片を含む。6はLの撚糸文を施す。

7～11は中期の加曾利E式である。7は連弧文土器の口縁部破片である。交互刺突文を施す。地文にLの撚糸文を施す。8、9はLの撚糸文を施す。同一個体である。10は無節のRを施す。11は単節RLの縄文を施す。

(2) 炉穴

炉穴は35基が検出されている。いずれも、縄文時代早期後半の貝殻条痕文系土器の時期であり、出土土器から野島式期に比定されるものである。

炉穴の分布には顕著な集中箇所が認められる。

第1～10号炉穴が見つかった調査区南西部のB-7グリッド近辺、第11～28、30、35号炉穴の25基が見つかった調査区北西部のA-4・5、B-4・5、C-4・5グリッド近辺、第29、31～34号炉穴の5基が見つかったD-2・3、E-3グリッド近辺に集中している(第4図)。

第29、31～34号炉穴を別にすれば、総数35基のうち30基がローム面の標高10.5～10.7メートルの台地頂部に認められる。第1～10号炉穴は第11～28、30、35号炉穴の25基とやや隔絶しているようにも見られる。しかし、その間にも炉穴は本来存在し、第4・5号方形周溝墓の造営や近年の攪乱によって煙滅した可能性も高い。

土器の接合関係から見ると、炉穴群2の土器と第11・12号炉穴の土器が接合しており、同時期に広い範囲が生活領域であったことを示唆している。

調査時の所見では、B-5グリッド近辺ではソフトロームの上層に条痕文系土器を包含する暗褐色土とローム漸移層が認められた。A-5・6グリッド近辺は25基の炉穴の検出に見るように遺構もしくは旧地形の遺存状況が良好であったとみることができる。

調査の精査時にローム面において、不整形の広がりをもつプランを確認した。覆土中の土器片から早期後半の炉穴群の存在が想定された。結果的に第1～10号炉穴、第13～17・19炉穴、第24・25・28号炉穴の3つの炉穴群として調査を終了した。

炉穴群は野島式期に著しく切り合って設けられたことが想定されるが、覆土上部は複数の炉跡が同一の覆土によって埋積する状況を土層図で確認する場合も多かった。したがって、炉穴群の覆土上部では切り合い

関係が不明の場合が多く、出土遺物は炉穴群で一括して取り上げ、可能な限り位置を記録した。位置を記録した遺物のうち、大形の土器、有文の土器について、接合図に出土位置を示した。

炉穴群1～3はそれぞれに特色があり、必ずしも同列には扱えない。炉穴群1（第1～10号炉穴）は炉穴群10基の切り合いそのものであり、付随する土壌や落ち込みがない。炉穴群2（第13～17・19炉穴）は長径10メートル、深度0.3メートルの平場周辺に土壌や炉穴が設けられた遺構である。炉穴群3（第24・25・28

号炉穴）は土壌の切り合いの中に3つの炉穴が認められるものである。

炉穴群2、3の出土土器については炉穴そのものではなく、付随する平場や土壌中からの出土遺物が大半を占めることを付記しておく。

当遺跡の炉穴はそれぞれ単独のものとして比較してみると共通性が強い。平面形は不整楕円形であり、やや整った形のものには楕円形や隅丸長方形に近い形態のものもある。火床は長軸方向の片側によった部分に設けられており、大半が円形の掘り込み（炉跡部分）、

第2表 炉穴一覧

(単位 m)

炉穴番号	挿図番号	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	主軸方向	炉跡部分の長径	炉跡部分の短径	足場部分の長さ	足場部分の幅	備考
1	第7図	B-7	楕円形	(2.05)	1.20	0.52	N-40° - E	0.84	0.80	(1.05)	0.55	炉穴群1
2	第7図	B-7	楕円形	1.62	1.30	0.55	N-40° - E	0.70	-	0.90	0.50	炉穴群1
3	第7図	B-7	楕円形	1.65	0.86	0.50	N-58° - W	0.70	0.62	0.84	0.65	炉穴群1
4	第7図	B-7	楕円形	1.90	0.78	0.48	N-64° - W	-	-	0.78	0.50	炉穴群1
5	第7図	B-7	楕円形	1.20	0.84	0.50	-	-	-	-	-	炉穴群1
6	第7図	B-7	楕円形	2.16	0.78	0.55	N-58° - W	0.50	0.35	1.18	0.38	炉穴群1
7	第7図	B-7	不整形	1.85	1.30	0.55	N-68° - W	0.64	0.48	-	-	炉穴群1
8	第7図	B-7	楕円形	1.64	0.92	0.52	N-115° - W	1.25	0.65	0.40	0.36	炉穴群1
9	第7図	B-7	楕円形	1.66	1.05	0.58	N-39° - E	0.76	0.72	0.53	0.52	炉穴群1
10	第7図	B-7	楕円形	2.46	1.03	0.70	N-152° - E	0.60	-	1.54	0.46	炉穴群1
11	第32図	B-5・6	楕円形	1.90	1.18	0.56	N-10° - E	0.82	0.72	0.62	0.56	
12	第32図	B-5・6	不整形	3.00	(1.90)	(0.70)	N-0° - W	1.25	0.88	1.35	1.82	
13	第16図	A-4	楕円形	1.90	0.94	0.58	N-40° - W	0.74	0.64	0.94	0.60	炉穴群2
14	第16図	A-4	-	-	-	0.36	-	0.84	0.60	-	-	炉穴群2
15	第16図	B-5	-	-	-	0.54	-	0.70	0.64	-	-	炉穴群2
16	第16図	B-5	楕円形	1.74	1.18	0.70	N-137° - E	0.98	0.65	0.54	0.90	炉穴群2
17	第16図	B-5	楕円形	-	1.20	0.46	N-84° - E	0.84	0.72	-	0.38	炉穴群2
18	第33図	B-5	楕円形	1.95	0.70	0.26	N-105° - W	0.50	-	1.24	0.60	
19	第16図	B-5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	炉穴群2
20	第32図	A-4	不整形	-	0.84	0.38	N-22° - W	0.64	-	-	-	
21	第32図	A-4	不整形	1.12	1.00	0.30	N-72° - E	0.60	-	0.32	-	
22	第32図	A-4	楕円形	1.54	0.85	0.26	N-55° - W	0.61	0.52	-	-	
23	第32図	A-4	楕円形	1.36	-	0.35	N-94° - W	0.68	-	0.62	-	
24	第29図	B-4	楕円形	1.50	0.96	0.46	N-128° - E	0.68	0.54	0.68	0.82	炉穴群3
25	第29図	B-4	楕円形	1.56	0.90	0.64	N-169° - E	1.02	0.60	0.54	0.26	炉穴群3
26	第33図	C-4	楕円形	1.30	0.90	0.12	N-36° - E	-	-	-	-	
27	第33図	C-4	楕円形	2.00	1.08	0.64	N-43° - W	0.65	0.54	1.05	0.73	
28	第29図	B-4	楕円形	1.22	0.70	0.52	N-59° - E	-	-	-	-	炉穴群3
29	第33図	D-2	楕円形	2.08	1.28	0.38	N-134° - E	0.60	-	1.05	1.16	
30	第33図	C-4	楕円形	1.58	0.90	0.34	N-30° - W	0.64	0.50	0.74	0.64	
31	第33図	D-2	楕円形	1.87	1.00	0.20	N-2° - W	-	-	-	-	
32	第33図	D-2	楕円形	2.45	0.90	0.35	N-85° - W	-	-	-	-	
33	第33図	E-3	楕円形	-	1.17	0.28	N-176° - E	0.46	-	-	-	
34	第33図	E-3	楕円形	-	1.17	0.28	N-176° - E	0.54	0.44	-	-	
35	第33図	C-5	-	-	-	-	-	0.72	0.63	-	-	

一段高い平担部（足場部分）を伴っている。炉跡部分の覆土は赤褐色の焼土の堆積がある。

平面図には焼土である赤褐色土と地山が焼けて赤くなっている部分をスクリーントーンで示した。

断面図には前者のみを示したので平面図と断面図は整合していない場合があることを付記しておく。

以下、炉穴群1（第1～10号炉穴）、炉穴群2（第13～17・19）、炉穴群3（第24・25・28）、その他の炉穴の順に出土土器もあわせて報告する。

炉穴群1（第1～10号炉穴）（第7・8図）

B-7グリッド南西部に10基の炉穴が集中していた。10基の炉穴は炉穴群の中心から外側に向かって、炉跡部分を設ける傾向にある。したがって、主軸方向も全周に向かっている。

精査時、平面における10基の炉穴の切り合い関係は確認し得なかったため、十字に土層を残して、調査を行った（A-A'、B-B'）。炉穴群上層においては炉跡・足場部分の底面が確認面へと立ち上がる層位は確認出来ず、確認面における切り合いとしては反映しないことがわかった。炉穴群上層ではA-A'、B-B'の2層、5層のようにわずかに焼土粒子を含む黒褐色土が全体を覆っている。

火床となる炉跡部分の上層には黄褐色土が認められる場合が多かった。A-A'のうち、第1号炉穴では1層、第2号炉穴では6層、第5号炉穴では9層がこれにあたる。B-B'は第6号炉穴の炉跡部分を通っているが、12層がこれにあたる。

土層の観察から、第一に炉穴群は切り合って結果的に重複したものであるものの、ひとつの炉穴が完全に埋没してから新たに掘り込まれたものでなく、炉穴が機能している間、炉穴群一帯は埋まった状況になかったことがうかがえる。第二に炉跡部分上部にはロームブロックを多く含む黄褐色土が顕著であり、炉穴の構造を反映したものであると思われる。

炉穴の新旧関係は土層図から、A-A'においては第1号→第2号→第5号という切り合い、第4号→第2号、第3号→第5号という関係がある。B-B'におい

ては第5号→第6・9号という切り合い関係がある。

土層図の他に、炉跡部の焼土の切り合いによって、第3・4号→第6号の新旧が観察された。第3・4号炉跡の焼土は第6号炉跡の足場部分の掘りこみによって切られていた。第7・8・10号炉穴についての他の炉穴との関係は不明である。

第1号炉穴から底部を欠くのみで完形に近い深鉢形土器（第9図2）が出土した。また、第2号炉穴から第11図1、第9号炉穴から第9図1、第11図2の土器が出土した。覆土中層からの出土である。

最後に第2表以外の個別の所見にふれておく。

第1号炉跡は足場部分を第2号炉穴によって切られている。第3号炉穴は炉穴群の中央に位置している。第4号炉穴は炉跡部分の掘りこみが浅く、わずかに焼土の堆積が認められた。

第5号炉穴の足場部分は検出し得なかった。土層の新旧から見ると第3号炉跡より新しく、第3号炉跡の足場部分をそのまま利用しているようである。

第6号炉穴はやや幅の狭い形態である。第7号炉穴は平面形が不整形である。第8号炉穴は炉跡部分が不整の楕円形をしており他に比べやや大きい。第9号炉穴は平面形が隅丸方形に近く整然としている。第10号炉穴は幅の狭い足場部分が長く設けられている。

炉穴群1（第1～10号炉穴）出土土器（第9～15図）

いずれも早期の野島式に相当するものである。胎土には繊維を含む。

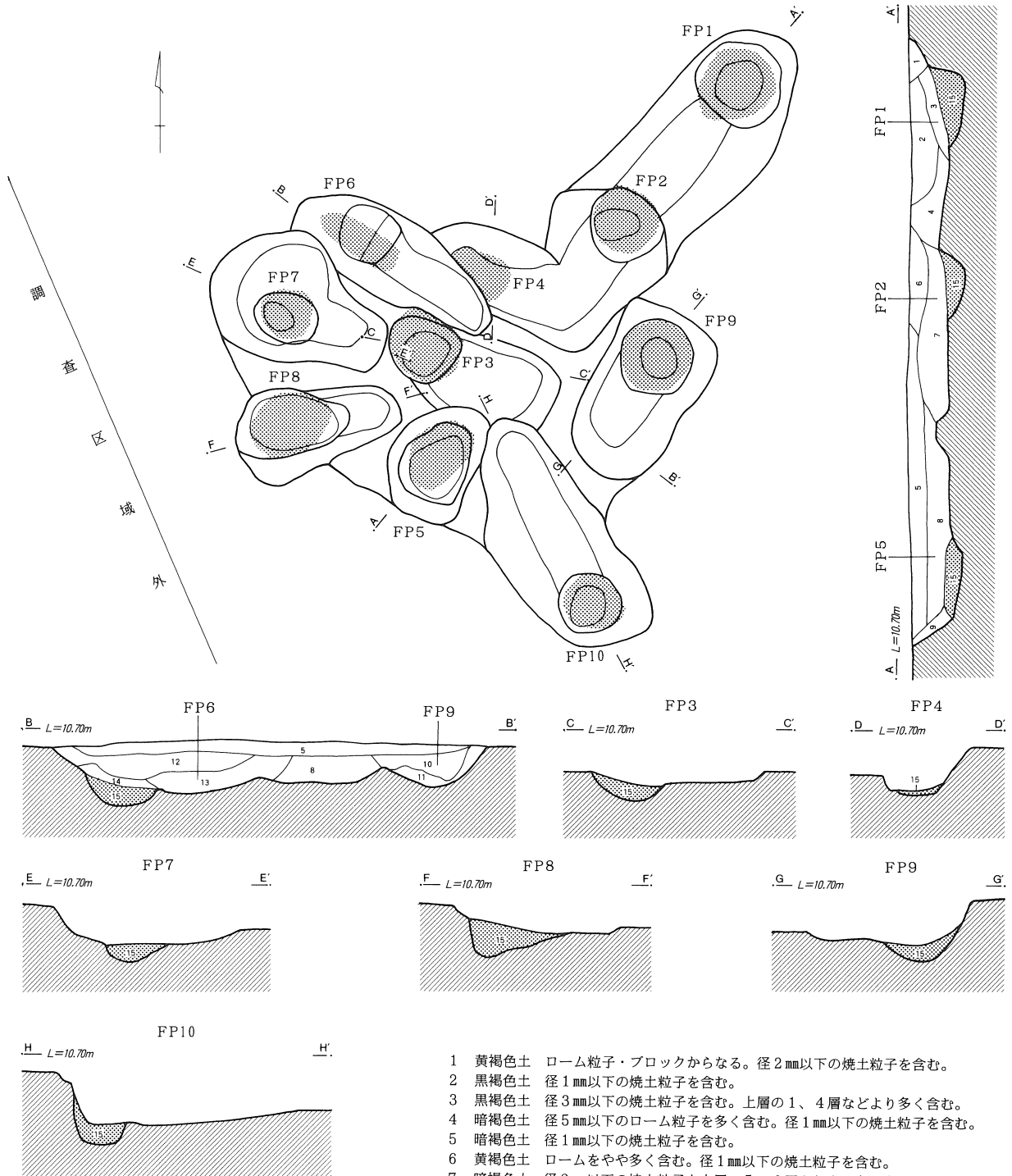
第1類 主として細隆起線によって文様を施す土器を一括する。文様の構成上、a～cに分類する。

a（第13図1～4、9）

平行する縦位の細隆起線文を口縁部に施すもの。

1、9は横位の細隆起線を口辺部に巡らせ、縦位の平行する細隆起線とつなぐものである。2は波状部の破片で、波頂部下の平行する縦位の細隆起線間を斜位の細隆起線文でつないでいる。3、4はやや幅の広い文様帯である。縦位の細隆起線間を斜位の細隆起線でつないでいる。いずれも内面に条痕を施す。1～4はやや丸みを帯びた口唇部である。

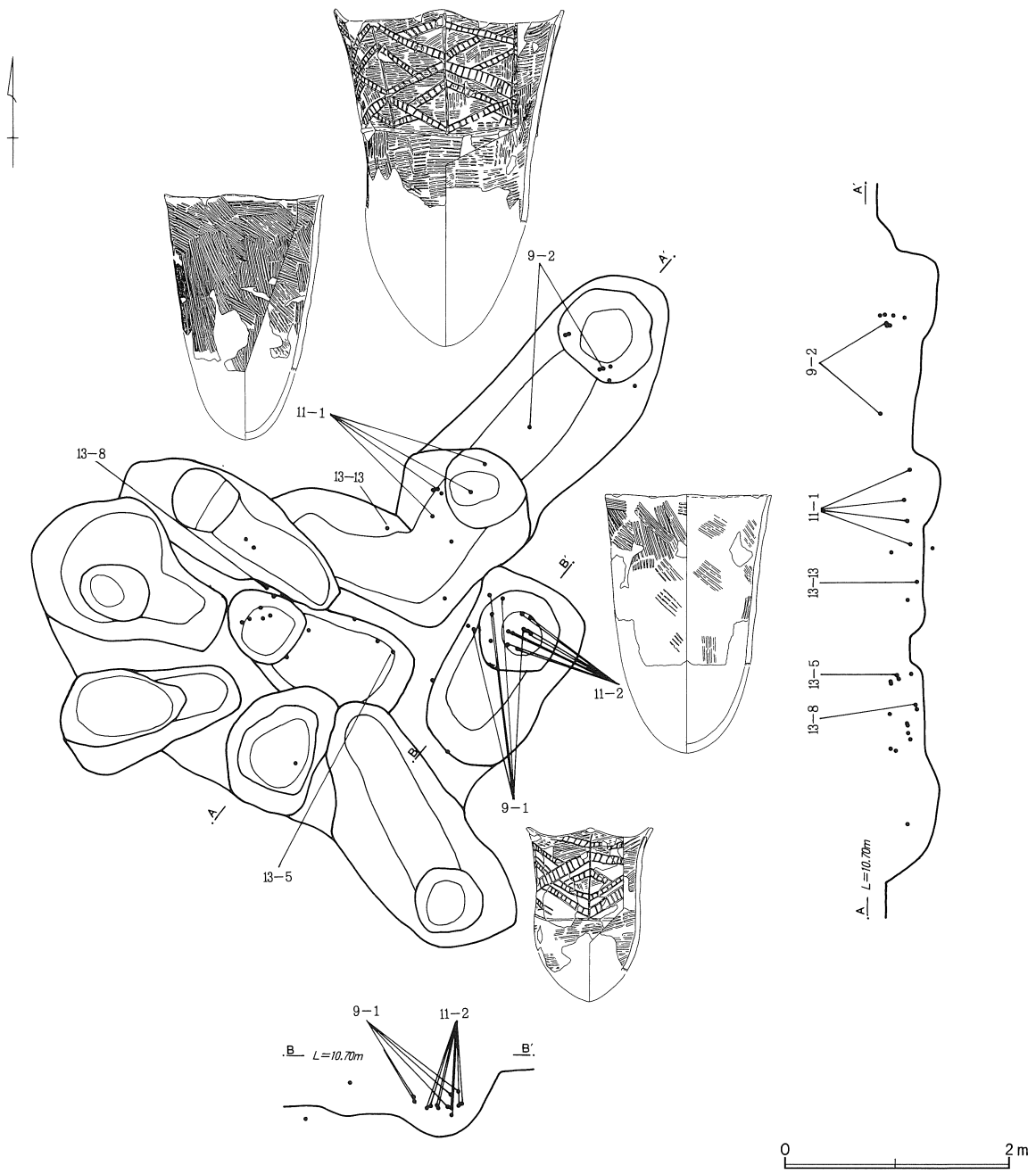
第7図 炉穴群1 (第1~10号炉穴)



- 1 黄褐色土 ローム粒子・ブロックからなる。径2mm以下の焼土粒子を含む。
- 2 黒褐色土 径1mm以下の焼土粒子を含む。
- 3 黒褐色土 径3mm以下の焼土粒子を含む。上層の1、4層などより多く含む。
- 4 暗褐色土 径5mm以下のローム粒子を多く含む。径1mm以下の焼土粒子を含む。
- 5 暗褐色土 径1mm以下の焼土粒子を含む。
- 6 黄褐色土 ロームをやや多く含む。径1mm以下の焼土粒子を含む。
- 7 暗褐色土 径2mm以下の焼土粒子を上層の5、6層よりやや多く含む。
- 8 暗褐色土 径3mm以下の焼土粒子を上層の5層よりやや多く含む。
- 9 黄褐色土 ローム、ロームブロックを多く含む。
- 10 黒褐色土 径2mm以下の焼土粒子を含む。
- 11 黒褐色土 径50mm前後のロームブロックを含む。
- 12 黄褐色土 ローム、ロームブロックを含む。径2mm以下の焼土粒子を含む。
- 13 暗褐色土 径4mm以下の焼土粒子を含む。上層よりやや多く焼土粒子を含む。
- 14 暗褐色土 径30~50mm前後の焼土ブロックを含む。火床面直上。
- 15 赤褐色土 径80mm以下の焼土ブロックを非常に多く含む。

0 2m

第8図 炉穴群1（第1～10号炉穴）出土状況図



b (第13図5～8、10、11)

斜位の細隆起線文を多用し、幾何学的な文様を施すもの。

5～8は口縁部の破片である。5は剥落が多く不明確であるが、斜位の細隆起線が用いられている。口縁部付近は薄手のつくりになっている。6も口縁部に斜位の細隆起線文を施す。口縁部は角頭状のつくりである。7は鋸歯状に区画する斜位の細隆起線文が認めら

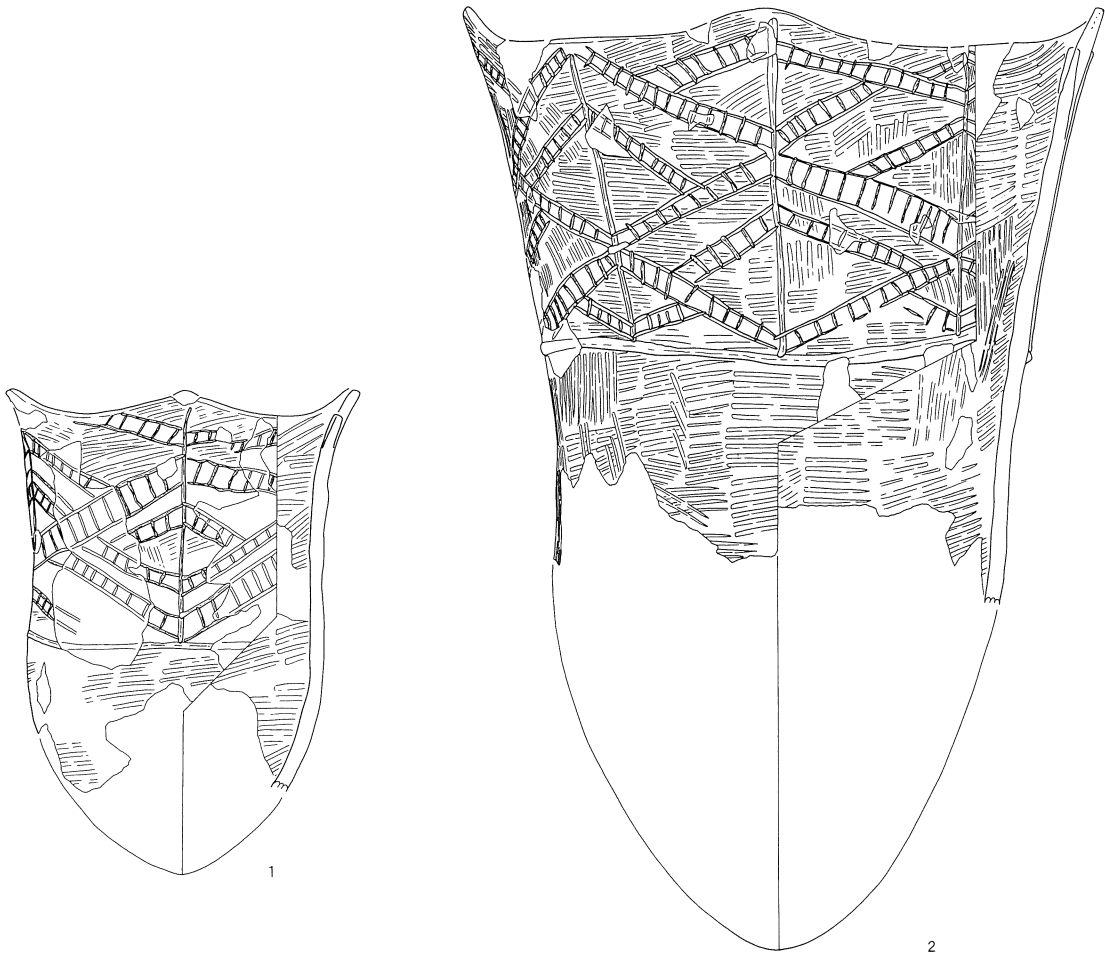
れる。口縁部は内削ぎ状のつくりになっている。8は三角形の区画が認められる。全体の構成は不明であるが、縦位の細隆起線文も認められる。口縁部は角頭状のつくりである。5～8の内面には条痕を施す。

10、11も口辺部付近の破片と見られ、斜位の細隆起線文を施す。内外面に条痕を施す。

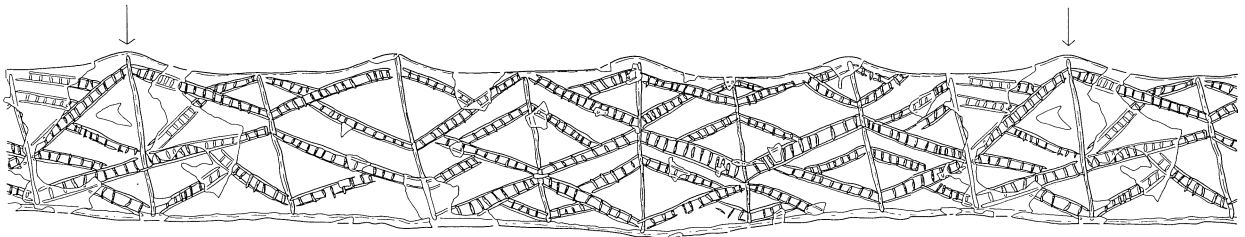
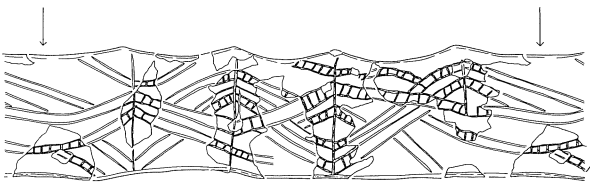
c (第9図1、2)

2条の細隆起線文間、もしくは沈線間を充填するよ

第9图 炉穴群1出土土器(1)

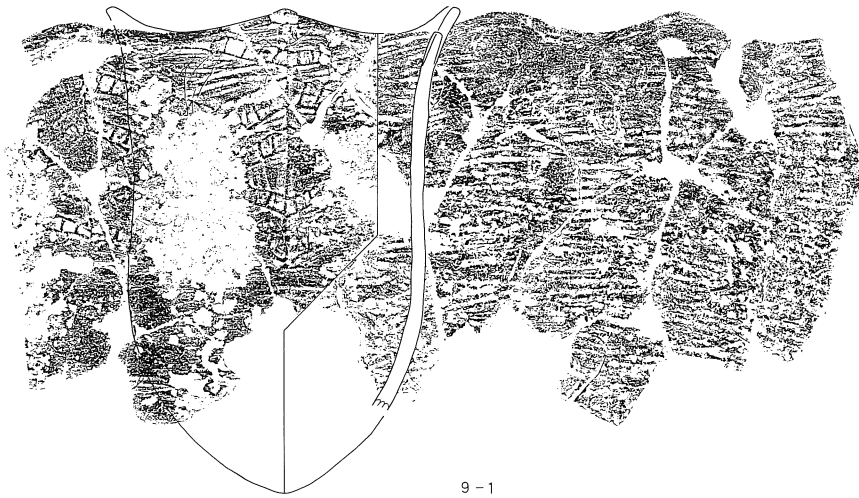


0 10cm

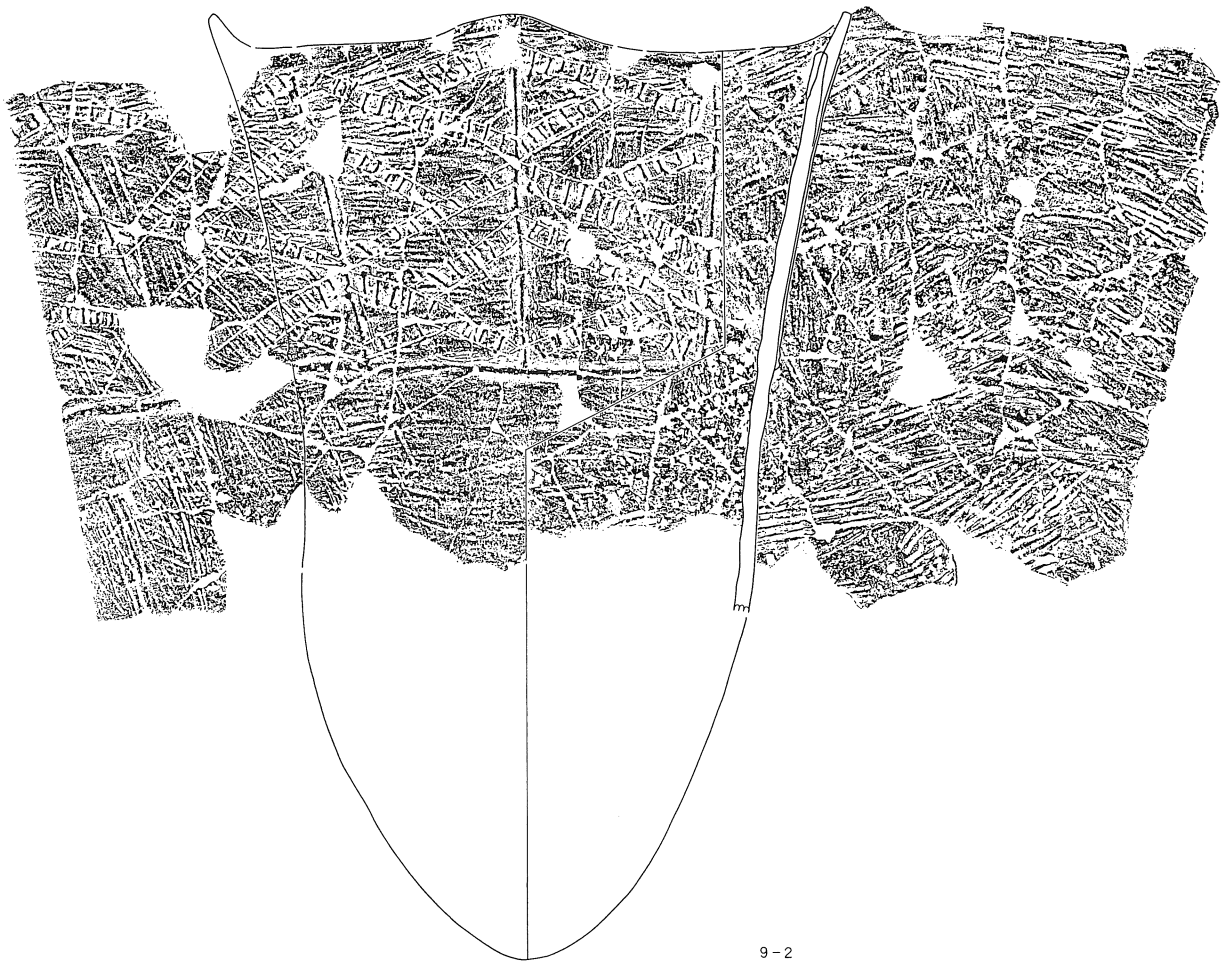


0 20cm

第10図 炉穴群1出土土器(2)



9-1



9-2

0 10 cm

第11図 炉穴群1出土土器(3)



うに短い細隆起線文でつなぎ、梯子状の文様によって各種の文様を構成するもの。

第9図1は4単位の波状口縁の土器である。胴部に横位の細隆起線を巡らせた後、波頂部下に縦位の細隆起線を施し、斜位の梯子状文でつないでいる。梯子状文は2条の細隆起線を短い細隆起線でつないだものである。全体の約2/3が残存するものの、外面の剥落が著しく、文様が明確である部分は施文部の1/2に満たない。内外面ともに明瞭な横位の条痕を施す。口縁部は角頭状であり、口唇部は平坦である。

第9図2も4単位の波状口縁の土器である。胴部に横位の隆起線を巡らせた後、波頂部下に縦位の細隆起線を施す。その後、並行する2条の斜沈線を施しており、最後に2条の並行する沈線間を短い細隆起線でつないで梯子状の文様としている。口縁部はほぼ角頭状のつくりであるが、やや丸みを帯びた部分もある。

内外面ともに明瞭な条痕を施す。外面は横位、斜位の条痕以外に、縦位の条痕も施す。内面は横位、斜位

の条痕を施す。胴部下半から底部を欠く。

第2類 (第13図12~17)

充填の文様要素として沈線文を用いる土器を一括する。縦位、横位の区画は太い沈線や隆帯を施す土器がある。

12~14は太い横線と斜沈線を施し、細沈線で充填している。12、13の口縁部は角頭状である。12、14は同一個体である。条痕はいずれも不明瞭である。

15、16は細沈線を施す。17は縦位の沈線と斜位の沈線を施す。いずれも内面に浅い条痕を施す。

第4類 (第11、12図、第13図18~34、第14、15図)

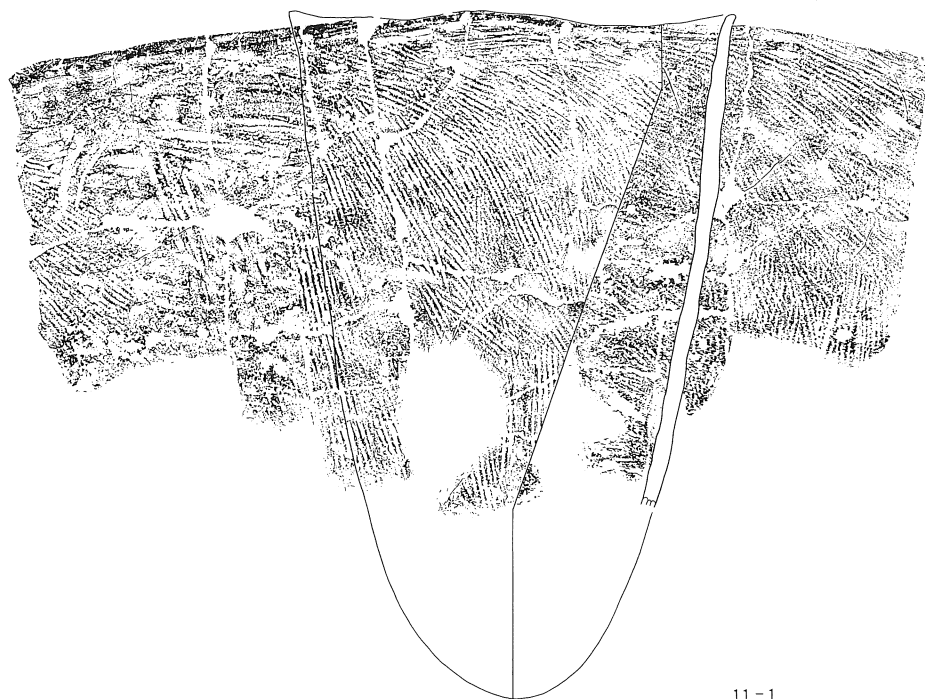
文様をもたない土器、あるいは文様のない部位の破片を一括する。

a (第13図18、19、22~24、第14図1~7)

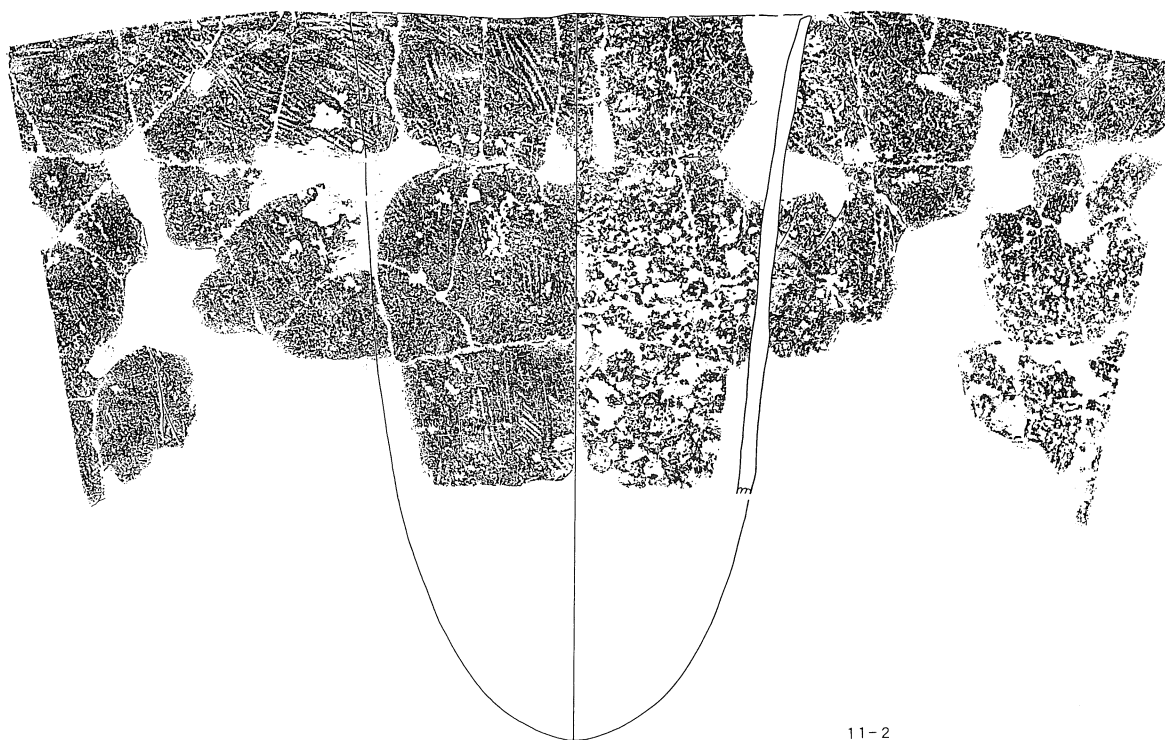
内外面ともに条痕が認められないものを一括する。

第13図18、19、22~24は口縁部の破片である。18は口唇部がやや丸みを帯びているが、これ以外は角頭状の口縁部をしている。擦痕状の調整を内外に施す。

第12图 炉穴群1出土土器(4)



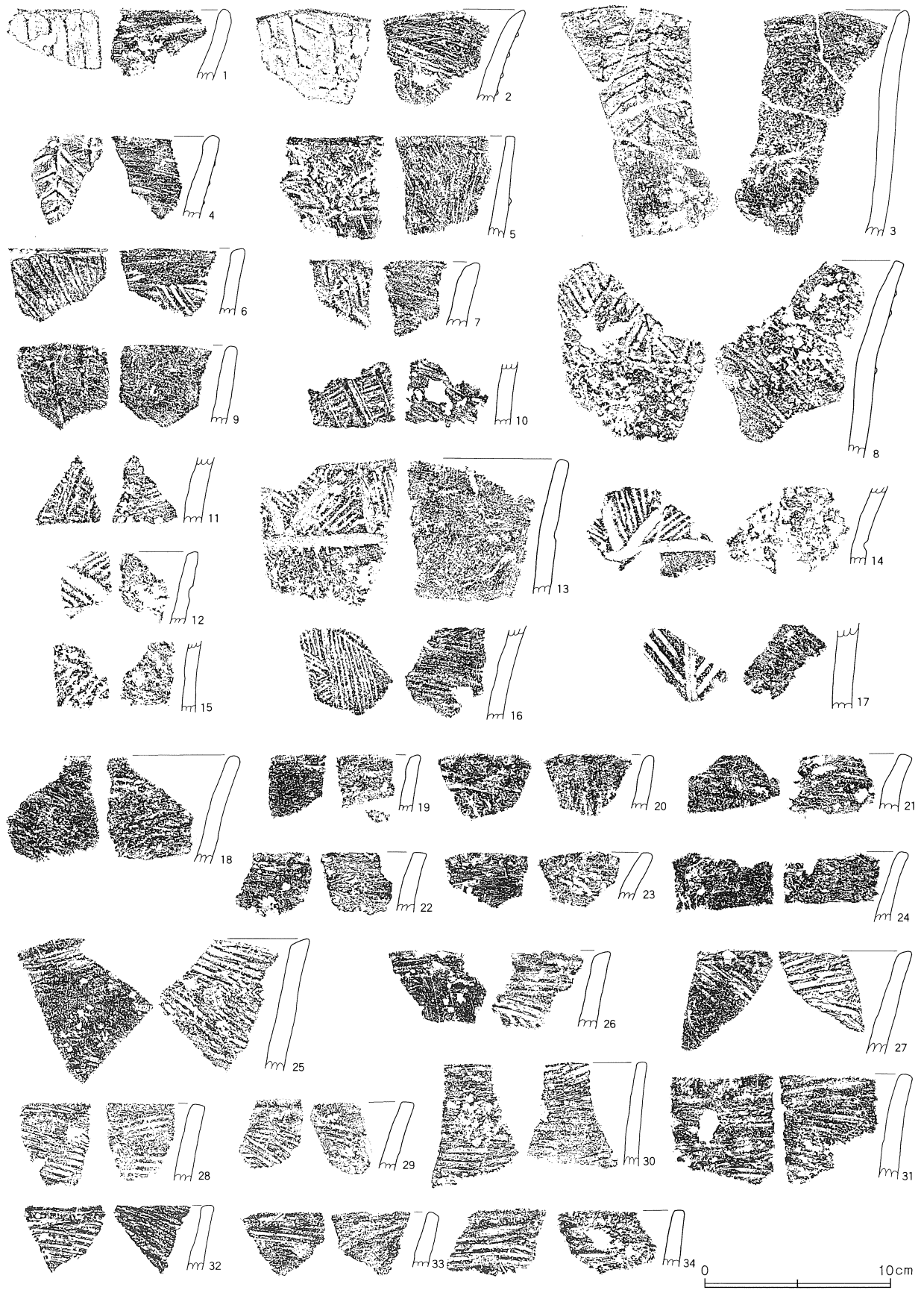
11-1



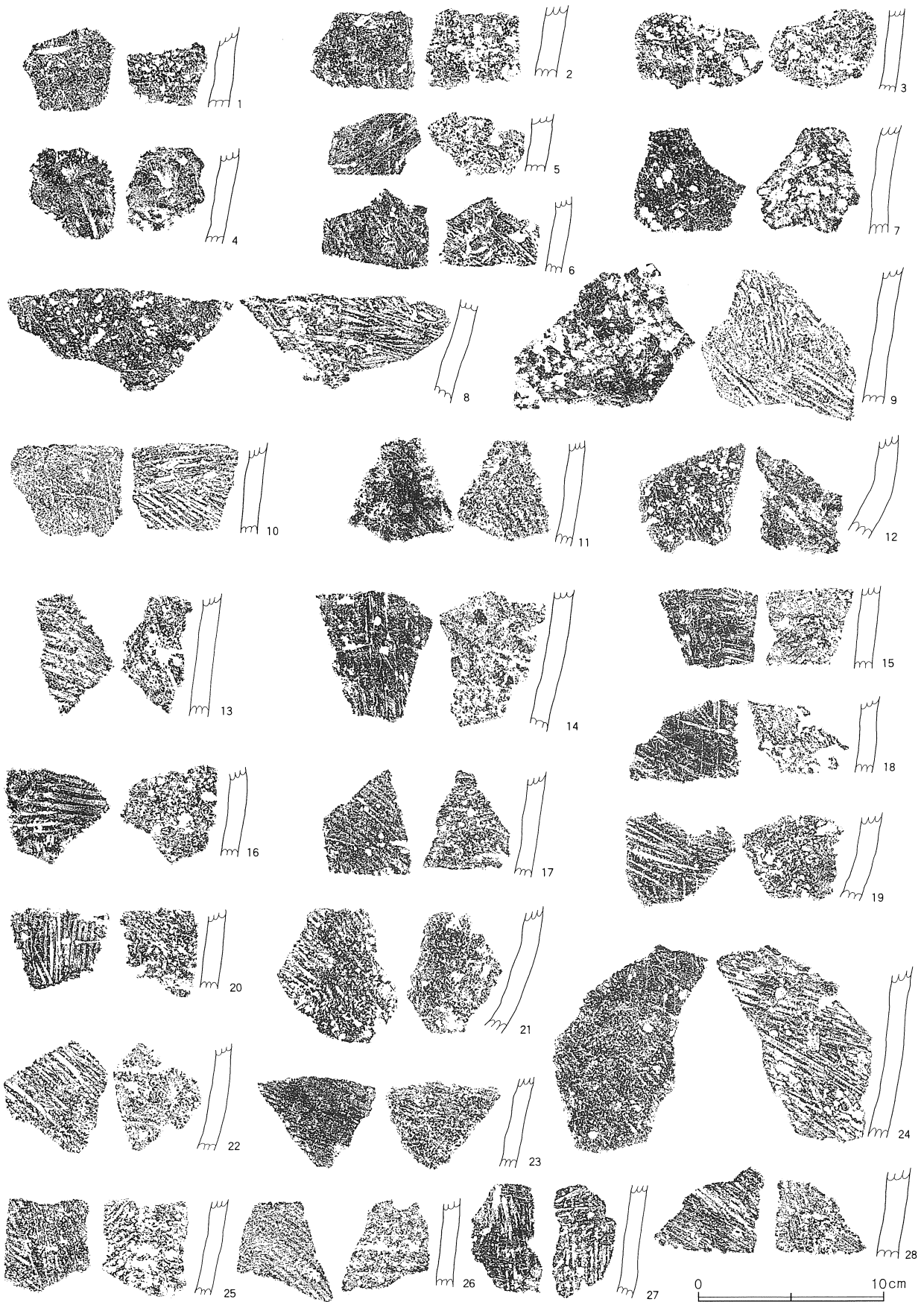
11-2

0 10cm

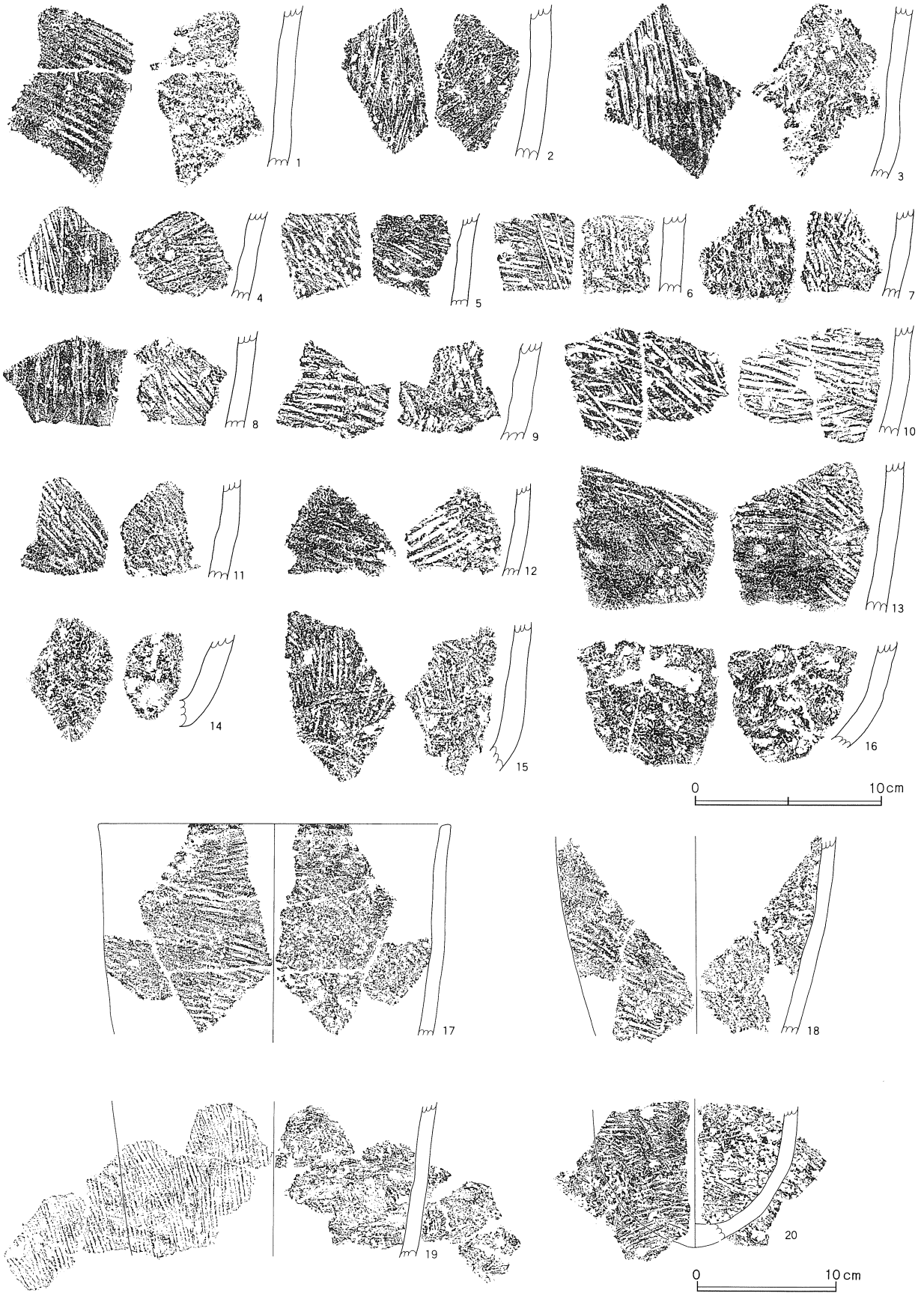
第13图 炉穴群1出土土器(5)



第14图 炉穴群1出土土器(6)



第15图 炉穴群1出土土器(7)



第14図1～7は胴部の破片である。外面は斜位もしくは縦位に擦痕状の調整を施す。

b (第13図20、21、第14図8～12)

外面に条痕が認められず、内面に条痕を施すもの。

第13図20、21は口縁部の破片である。20は丸みを帯びた口唇部、21は角頭状の口縁部である。

第14図8～12は胴部破片である。8～10は内面に明瞭な条痕を、11、12はごく浅い条痕を施す。

c (第14図13～19)

外面に条痕を施し、内面に条痕が認められないもの。

いずれも胴部破片である。14、15は幅の細い条痕を施す。

d (第11、12図、第13図25～34、第14図20～28、第15図)

内外面に条痕が施されるもの。第4類中ではd類が多数を占めている。

条痕の種類には深くはっきりしたもの、浅く不明瞭なもの、その中間的なものなど各種がある。また、条痕の太さや方向も様々である。

第11図1はごく緩い波状口縁の土器である。内外面ともに斜位の明瞭な条痕を施す。口縁部は角頭状である。口縁部の1/2が残存する。

第11図2は平口縁の土器である。外面は口縁部に条痕を施すが、胴部以下は擦痕状の調整がなされ、条痕はまばらである。内面は不明瞭な条痕を施す。口縁部は角頭状である。底部を欠損する。全体の4/5が残存する。

第13図25～34は口縁部の破片である。

いずれも角頭状の口縁部である。25、26は外面の口縁部に横位の条痕を施す。27～34は内外面に明瞭な条痕を施す。

第14図20～28、第15図1～16は胴部の破片である。各種の条痕がある。第15図14～16は底部近くの破片である。

17～20はやや大形の破片である。17は角頭状の口縁部。内面にごく浅い条痕を施す。18、19も浅い条痕を施す。20は丸みを帯びた底部の破片である。

炉穴群2 (第11～17・19号炉穴) (第16図・第17図)

炉穴群2 (第11～17・19号炉穴) は調査区北西部のA-4・5、B-5グリッドから見つかった。炉穴群2の周辺はローム層の上部に暗褐色土、ローム漸移層が認められ遺構の遺存状況は良好であった。暗褐色土中には早期の条痕文系土器が認められ、これを精査しながら炉穴群2の平面形を把握した。

炉穴群2は炉穴が平場の周囲に分布する。平場は北西から南東方向に延びており、西側は調査区外となっている。平場の深度は0.2～0.3メートル程度であり、特に硬化した部分はなかった。平場の覆土はいくつかの層位によって別れ、層によって焼土粒子、炭化物の多寡が認められる。平場の周辺、内部には土壌のような落ち込みが確認された(A-A'、C-C'、D-D'、G-G'、H-H')。これらは焼土の堆積や火床が顕著ではなく炉穴とは認められなかった。炉穴はいずれも平場の周辺に位置しており、焼土が堆積している炉跡部分は平場を内側とすると、外側に向かって設けられる傾向にある。

第13号炉穴は北側に位置しており、第14号炉穴と隣接している。新旧関係は第13号→第14号である。第14号、第15号炉穴は足場部分の掘りこみを確認し得なかった。第16号炉穴は不整形で足場部分も他と比べ整然としていない。第17号炉穴の足場部分は調査区外へ延びている。第19号炉穴は炉跡部分の検出はなかったが、焼土が他の土壌に比べ多かったことから、炉穴とした。おそらく足場部分であり、炉跡部分は調査区外である。

第17図には土器の接合関係を示した。第13号炉穴の土器と平場の土器との接合例が確認されている他、隣接する第12号炉穴などと接合する破片もある。

第18図1の土器は第16号炉穴の焼土面直上から出土している。

第18図2は平場中央部から出土した土器片と第12号炉穴確認面付近の土器片が接合した。

第18図3、6の土器は第17号炉穴の焼土面直上から出土している。

第18図4の土器は破片が平場に広く分布しており、第12号炉穴確認面や第11・12号炉穴東の遺構外からも出土している。

第18図5は第13号炉穴、足場部分の中層から出土した破片と平場中央部からの破片が接合した。

なお、土器の他に第48図1・2の石鏃、第48図8・9の磨石も当遺構から出土した。

炉穴群2（第11～17・19号炉穴）出土土器

（第18図～第28図）

いずれも胎土中に繊維を含み、器面には条痕、擦痕が施される。

区画充填の手法上、細隆起線文（第1類）、沈線文（第2類）に区分し、ごく少数ながら貝殻腹縁を施すもの（第3類）、多数を占める無文の土器（第4類）に大きく分類する。第1類、第2類は文様構成によってさらに分類する。

第1類 主として細隆起線によって文様を施す土器を一括する。文様の構成上、a～cに分類する。

a（第18図1、第20図1～17、第20図28～31、第21図7～13、第28図10）

平行する縦位の細隆起線を口縁部に施すもの。

a 1（第18図1、第20図1～13、第21図7～13、第28図10）

口辺部もしくは胴部上位に、横位の隆帯を巡らせた後、横位の隆帯と口縁部間に縦位の隆帯を貼付する。波状口縁と平口縁の別がある。2～5などは波状部の破片である。9、10などは平口縁であろう。

第18図1は角頭状の口縁部である。1/6以下の残存度である。内外面に擦痕状の調整痕を残す。

第20図1～7、9、10は口縁部の破片である。いずれも角頭状の口縁部形態であり、口唇部は平坦であるが、刻み等の装飾はなされていない。

第20図1～13のうち外面は擦痕状の調整がなされるものが多いが、9は例外で明瞭な条痕を施す。1、12、13には外面に浅い条痕を施す。内面は擦痕状の調整がなされるもの（8、11、12）、浅い条痕を施すもの（1、2、4、6、9、10、13）、明瞭な条痕を施すもの（3、

5、7）などがある。

第21図7～13はいずれも文様の下端が認められる。後述するeとの区別は明確でない。9は他よりやや太い細隆起線を施す。7、10は内外面ともに擦痕状の調整、8、13は内外面ともに条痕、9、11は内面のみに浅い条痕、12は外面のみに条痕を施す。

第28図10も文様の下端が認められる。外面は縦位に擦痕状の調整、内面は横位に条痕を施す。

a 2（第20図14～17）

口縁部に縦位の短い細隆起線文を梯子状に施し、その下位に各種の文様を施すもの。

梯子状の文様の直下に14は縦位の細隆起線を15、16は斜位の隆帯を垂下させる。17は口縁部に横位の細隆起線文を2条巡らせ、縦位に短い細隆起線を加えて梯子状の文様とし、幅の狭い無文帯を置いて鋸歯状の文様を施す。

第20図14～17はともに角頭状の口縁部形態であり、口唇部は平坦であるが、刻み等の装飾はなされていない。14、17は擦痕、16は浅い条痕の調整を外面に施す。また14～16は条痕、16は浅い条痕を内面に施す。

a 3（第20図28～31）

縦位の細隆起線文間に横位、もしくは斜位の細隆起線文を施すもの。縦位の隆帯を垂下させた後、隆帯間を横位の細隆起線でつないでいる。幅広の文様帯構成をとる。30は外面に浅い条痕を施す。内面はいずれも条痕を施す。

b（第18図2、第20図18～27、第21図6）

斜位の細隆起線文を多用し、三角形などの幾何学的な構成をとるもの。

第18図2は1/6以下の残存度である。内外面ともに横位に浅い条痕を施す。

第20図18～20はともに角頭状の口縁部形態であり、口唇部は平坦であるが、刻み等の装飾はなされていない。21は器壁が薄手のつくりで、口唇部は丸みを帯びている。21、27は浅い条痕を外面に施す。内面はいずれも条痕を施す。第21図6は文様下端がわずかに見えるだけで判然としない。内面に条痕を施す。

c (第20図32~34、第21図1~5)

2条の細隆起線文間を短い細隆起線文でつなぐ梯子状の文様によって各種の文様を構成するもの。

第20図32~34、第21図2は口縁部の破片である。角頭状の口縁部形態で口唇部は平坦であるが、刻み等の装飾はなされていない。第20図32は横位、斜位に梯子状の文様を施す。内面に浅い条痕を施す。第20図33、34は同一個体であろう。波状口縁の土器である。内面に浅い条痕を施す。第21図2は内外面に浅い条痕を施す。

第21図1、3~5は胴部破片である。斜位の梯子状文を施す。1、4は内面に浅い条痕を施す。

第2類 充填の文様要素として沈線文を用いる土器を一括する。区画文は沈線や隆帯によって施す。文様の構成上、a~cに分類する。

a (第18図3、第21図14~16)

第18図3に代表される。口辺部に幅の狭い文様帯を設定し、口縁部に斜沈線等を施すもの。

第18図3は横位の太い沈線を波状口縁に沿うように施した後、口縁部を斜沈線によって充填する。三角形の区画になっている部分も認められるが、単に斜沈線の方向を変えているだけの部分もある。部分的には細沈線の部分もあるが横位の区画よりやや細い沈線が主である。沈線の切り合いから見て実測図左から右へと施文されている。外面の調整は縦位、斜位に擦痕、内面は横位に条痕を施す。1/3程度の残存度である。

第21図14、15、16は口縁部の破片である。口縁部は内削ぎ状に調整されており、口唇部はやや尖り気味である。14は横位の細隆起線に斜沈線を施す。下位に文様の存在も想定される。その場合b類の可能性もある。15は太い横線で区画し、斜位の細沈線を鋸歯状に施す。16も斜位の細沈線を施す。14、15は内外面ともに擦痕状の調整、16の外面は擦痕状の調整、内面は浅い条痕を施す。

b (第18図4、第21図17~30)

第18図4に代表される。上下に幅の広い文様帯が特徴である。縦位の隆帯、沈線によって区画し、区画内

に沈線によって幾何学的な文様、矢羽状の沈線等を充填している。

b 1 (第21図17、18)

区画した縦位の沈線間に斜位の沈線を施すもの。第21図17は全体の文様が不明だが、縦位沈線と同様な太さの斜沈線が認められる。内外面に擦痕状の調整を施す。第21図18は区画した縦位の太沈線間を矢羽状の細沈線によって充填するもの。外面は擦痕状の調整、内面に条痕を施す。

b 2 (第21図20~22)

区画した縦位の太沈線間に鋸歯状に斜位の細沈線を施すもの。20は口縁部を内削ぎ状に調整して口唇部近くの器壁を薄くしている。口唇部に刻みを施す。21、22は胴部の破片である。いずれも外面は擦痕状の調整、内面に条痕を施す。

b 3 (第21図19)

横位、縦位に細隆起線文を施した後、格子目状の沈線をほどこしたもの。内面に条痕を施す。

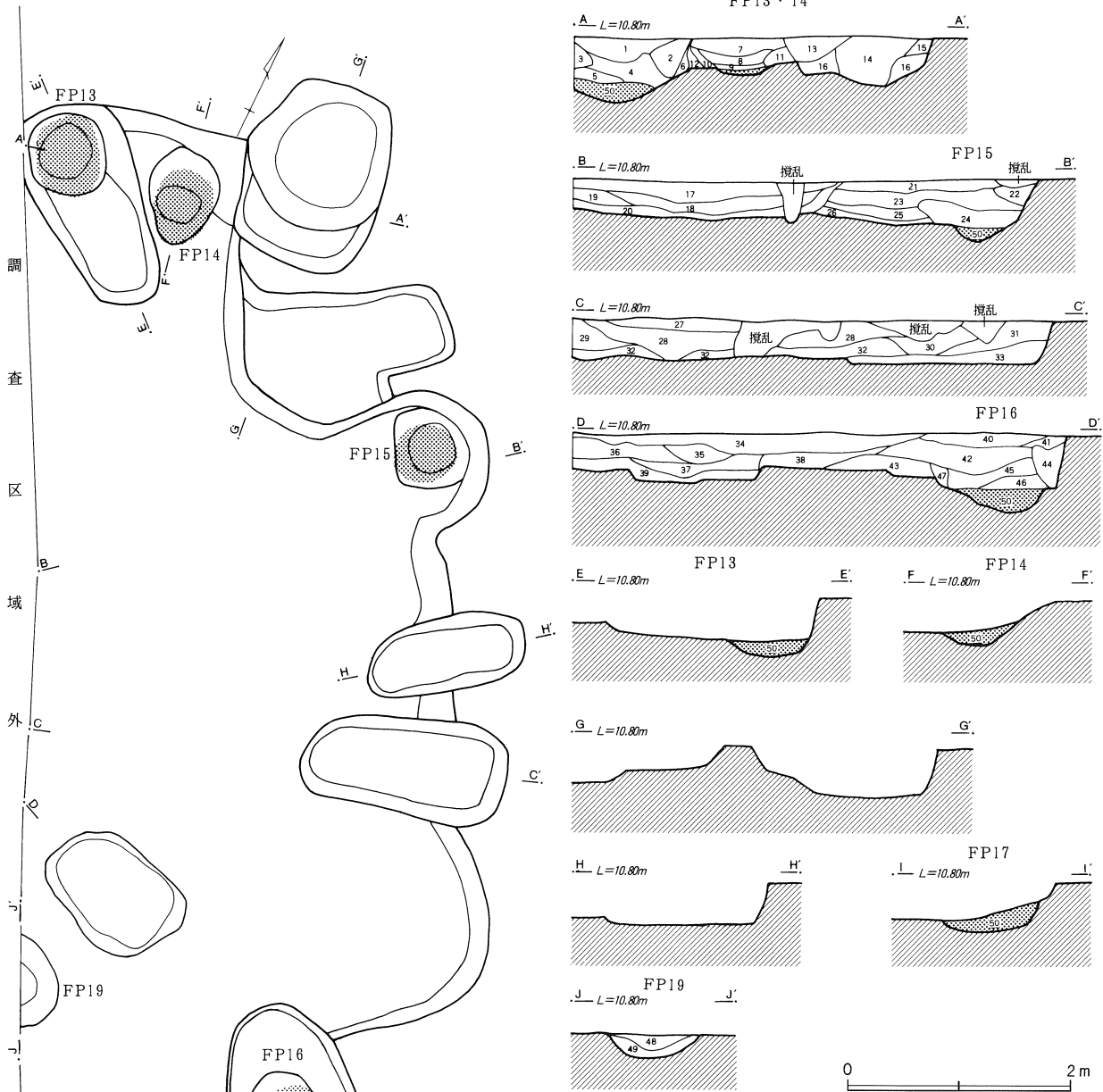
b 4 (第18図4、第21図23~25)

縦位の沈線、隆帯を斜位の沈線でつなぎ、さらにこの沈線内を斜沈線によって充填するもの。

第18図4は大波状の土器である。胴部中位に太い隆帯を巡らせた後、波頂部下に刻みを施した隆帯、波底部下に沈線を垂下させ文様を区画する。さらにこれらの縦位の区画を斜沈線、横線でつないで幾何学的な小区画を設け、小区画内に沈線によって充填している。口縁部や胴部中位の横位隆帯には縦位の短沈線を施す。口縁部は角頭状をしており、口唇部には平坦部が認められる。口唇部に刻みを施す。内面の口辺部には横位に、胴部内面には縦位にごく浅い条痕を施す。1/6程度の残存度である。

第21図23は縦位、斜位の太沈線間を細沈線で充填している。23の外面は擦痕による調整、内面は摩滅している。24は刻みのある縦位の隆帯を施し、太沈線によって小区画を配した後、鋭利な細沈線によって充填している。内面に条痕を施す。25は横位、斜位に太い沈線で区画した後、細沈線を縦位に施す。

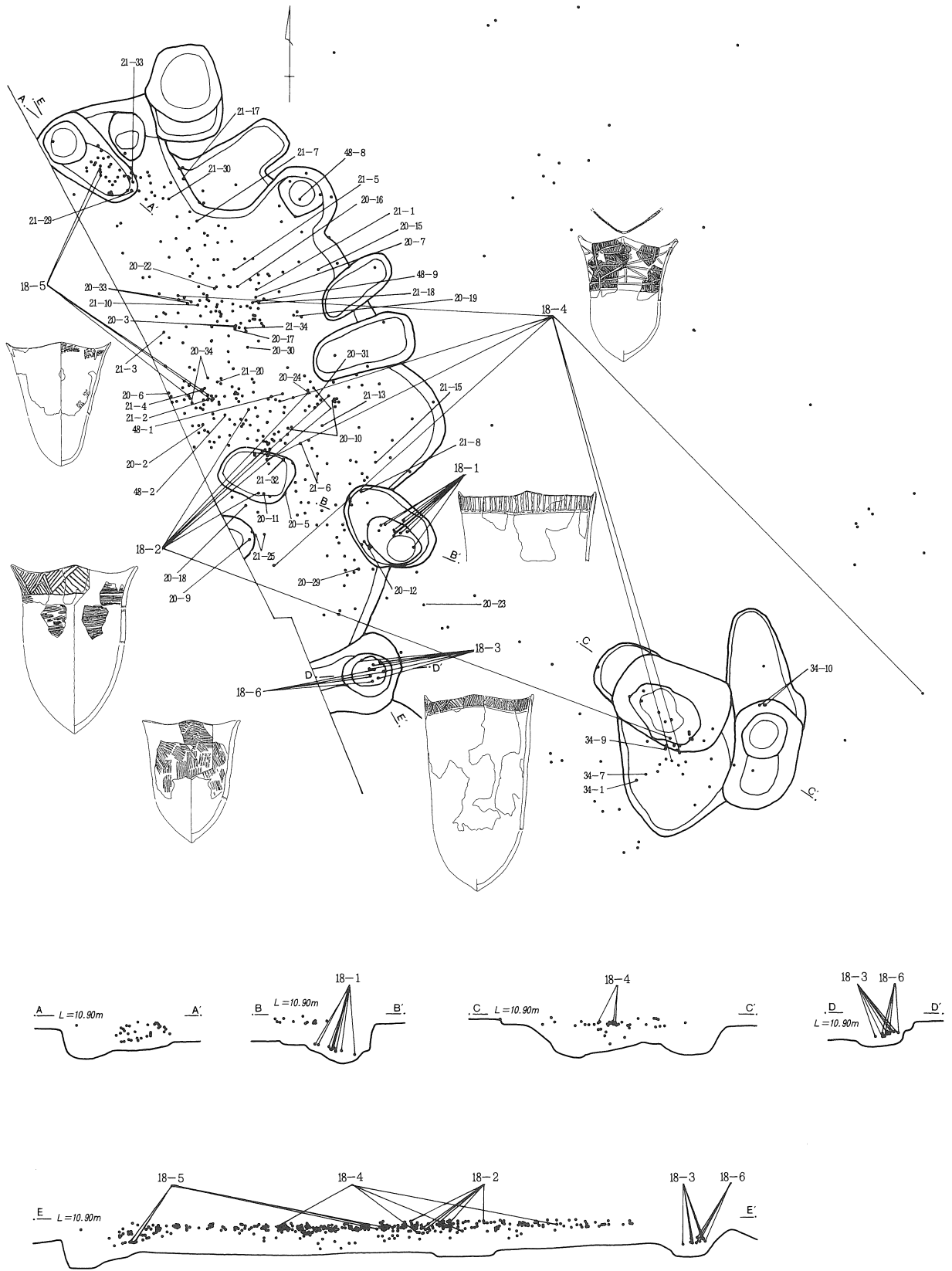
第16図 炉穴群2 (第13~17号炉穴)



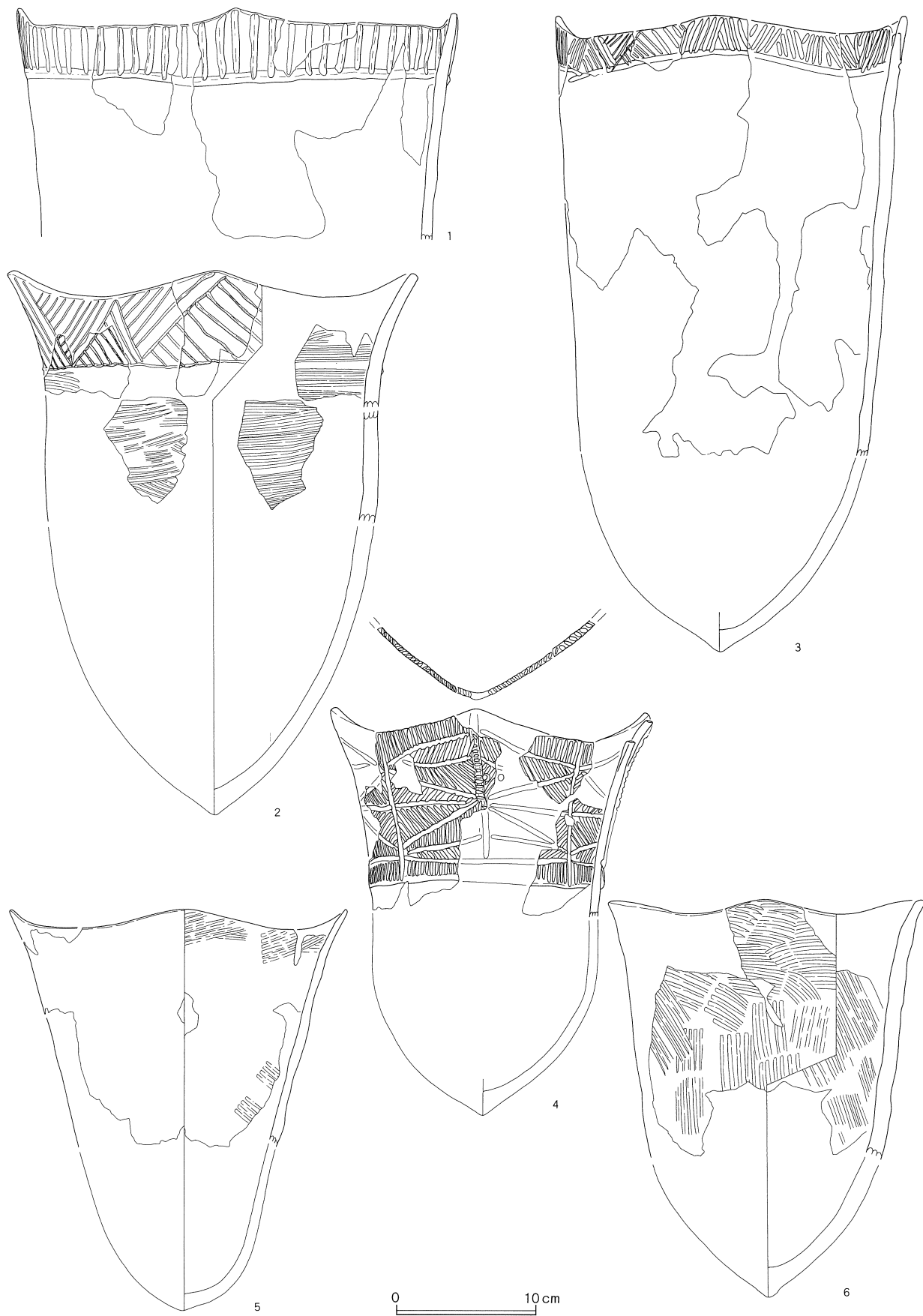
- 1 黒褐色土 ローム粒子を含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック、焼土粒子を含む。
- 3 暗褐色土 焼土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒子をかすかに含む。
- 5 明赤褐色土 火床直上。約9割が焼土。
- 6 褐色土 焼土粒子を少量含む。
- 7 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。
- 8 褐色土 焼土粒子をかすかに含む。
- 9 褐色土 焼土粒子を含む。
- 10 褐色土 炭化物を含む。
- 11 褐色土 ローム、焼土粒子をかすかに含む。
- 12 黄褐色土 粘性あり。固くしまっている。
- 13 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 14 暗褐色土 ロームブロック多く、炭化物を少量含む。
- 15 黄褐色土 ローム粒子を含む。
- 16 褐色土 径30~80mmのロームブロックを多く含む。
- 17 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
- 18 黒褐色土 焼土粒子をかすかに含む。
- 19 褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 20 灰褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 21 黒褐色土 ローム粒子多く、焼土粒子をかすかに含む。
- 22 黄褐色土 良くしまった土。均質である。
- 23 暗褐色土 焼土粒子を含む。
- 24 黒褐色土 ロームブロック・焼土小ブロックを含む。
- 25 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 26 褐色土 ロームブロックを多く含む。

- 27 黒褐色土 焼土粒子をかすかに含む。
- 28 黒褐色土 27層よりも焼土粒子を多く含む。
- 29 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 30 褐色土 焼土小ブロックを少量含む。
- 31 黄褐色土 焼土粒子を多く含む。
- 32 灰黄褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 33 黄褐色土 焼土粒子をかすかに含む。
- 34 暗褐色土 焼土粒子を多く含む。
- 35 褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 36 褐色土 焼土・炭化物粒子を少量含む。
- 37 褐色土 ロームブロックを含む。焼土粒子を少量含む。
- 38 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。
- 39 暗褐色土 焼土・炭化物粒子を少量含む。
- 40 黒褐色土 焼土粒子をかすかに含む。
- 41 黄褐色土 炭化物をかすかに含む。
- 42 黒褐色土 焼土粒子、炭化物をかすかに含む。
- 43 灰黄褐色土 焼土粒子をかすかに含む。
- 44 褐色土 ロームブロックを含む。
- 45 暗褐色土 焼土粒子を多く含む。
- 46 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 47 褐灰色土 ロームブロックを含む。
- 48 黒褐色土 焼土ブロック、炭化物を含む。
- 49 褐色土 焼土粒子をかすかに含む。
- 50 赤褐色土 径30mm以下の焼土ブロックを多く含む。

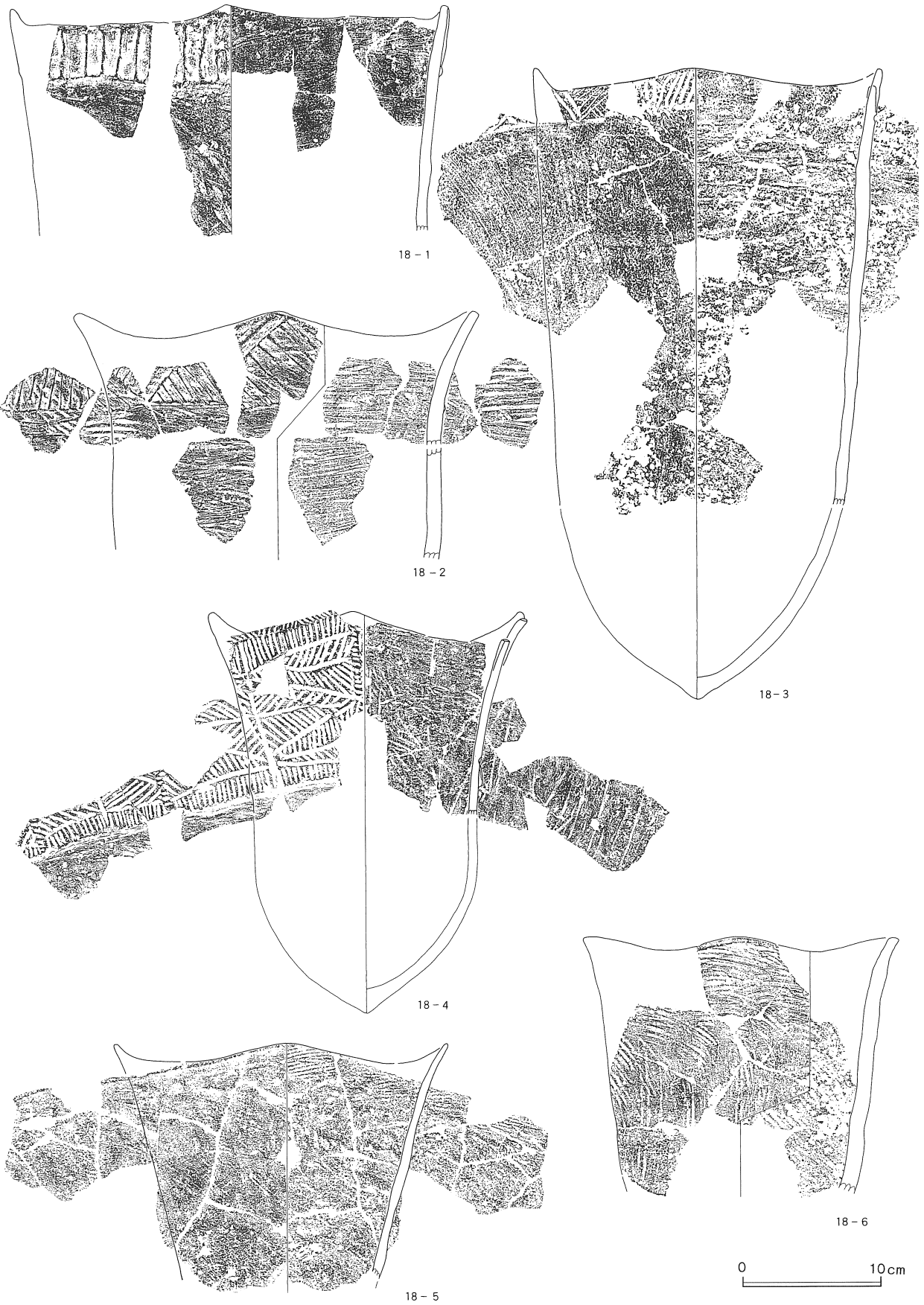
第17图 炉穴群2·第11·12号炉穴出土状况图



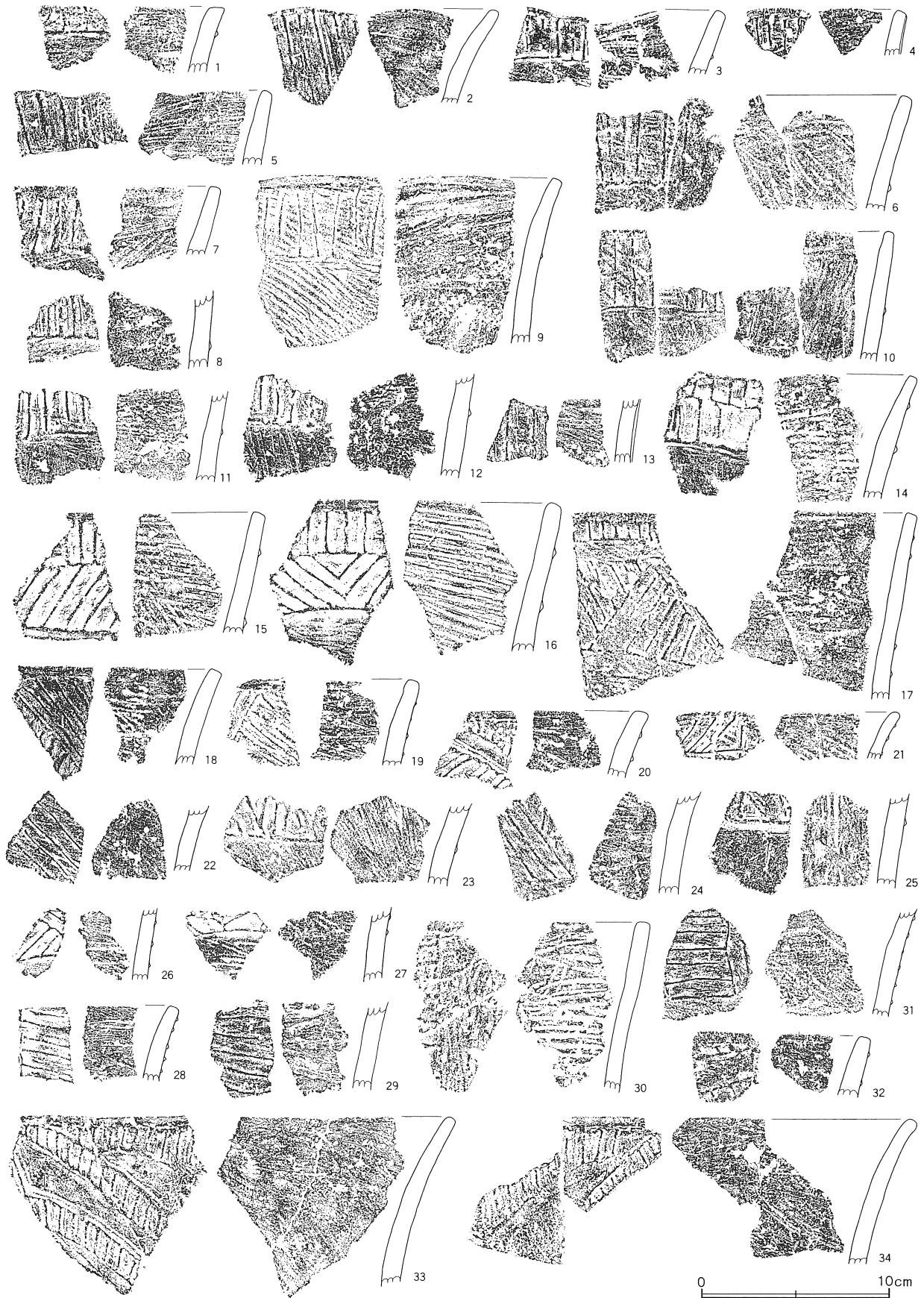
第18图 炉穴群2出土土器(1)



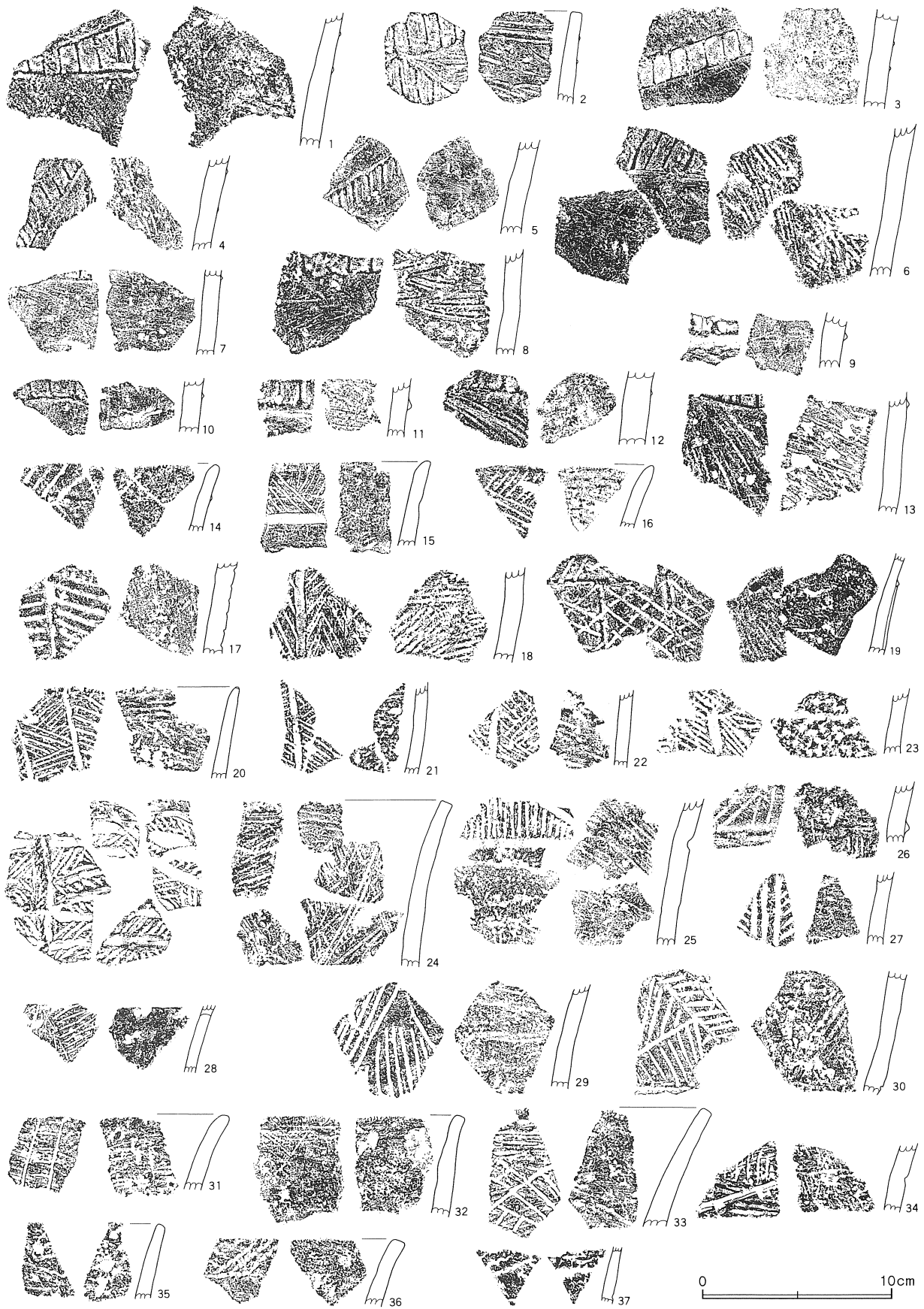
第19图 炉穴群2出土土器(2)



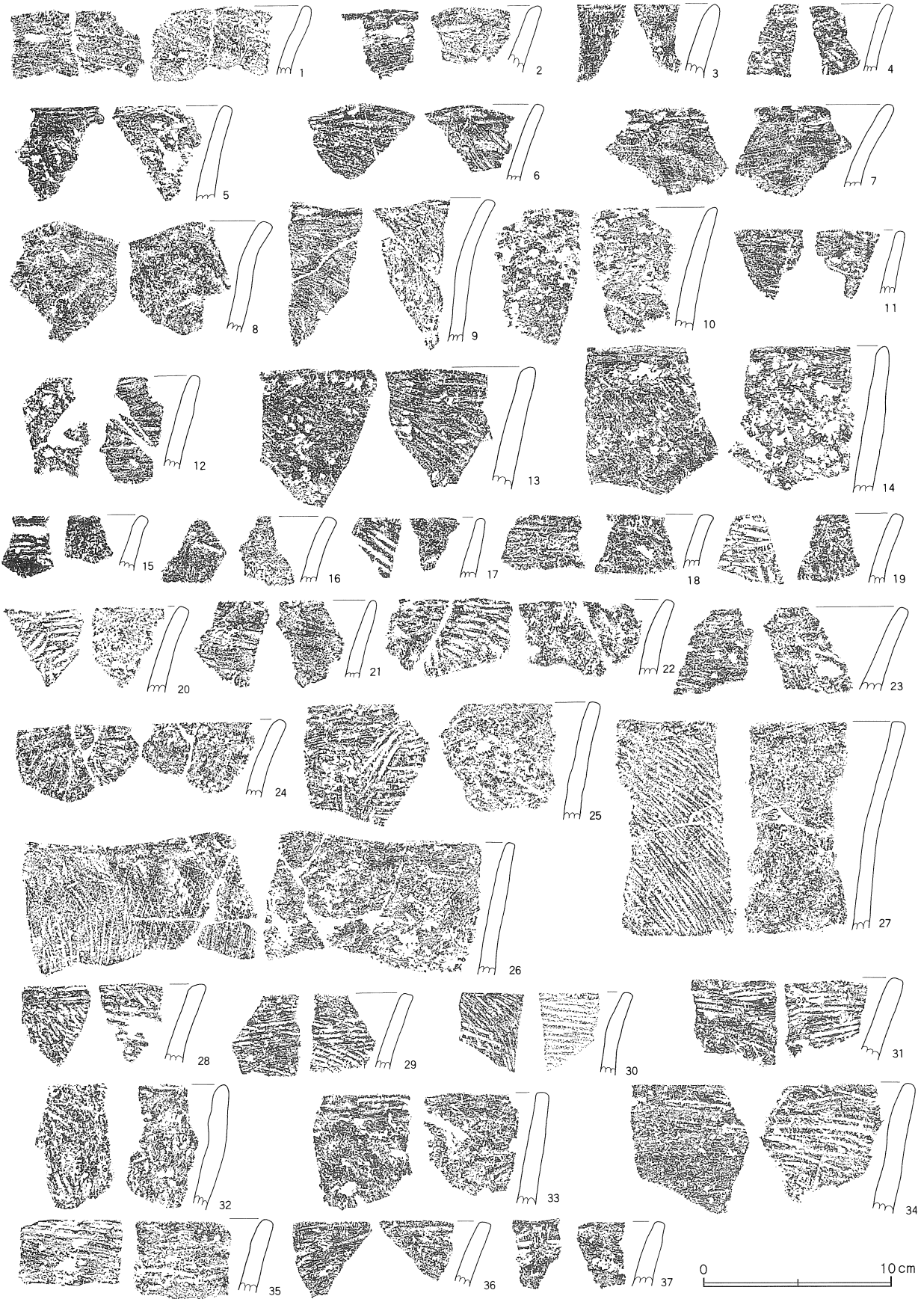
第20图 炉穴群2出土土器(3)



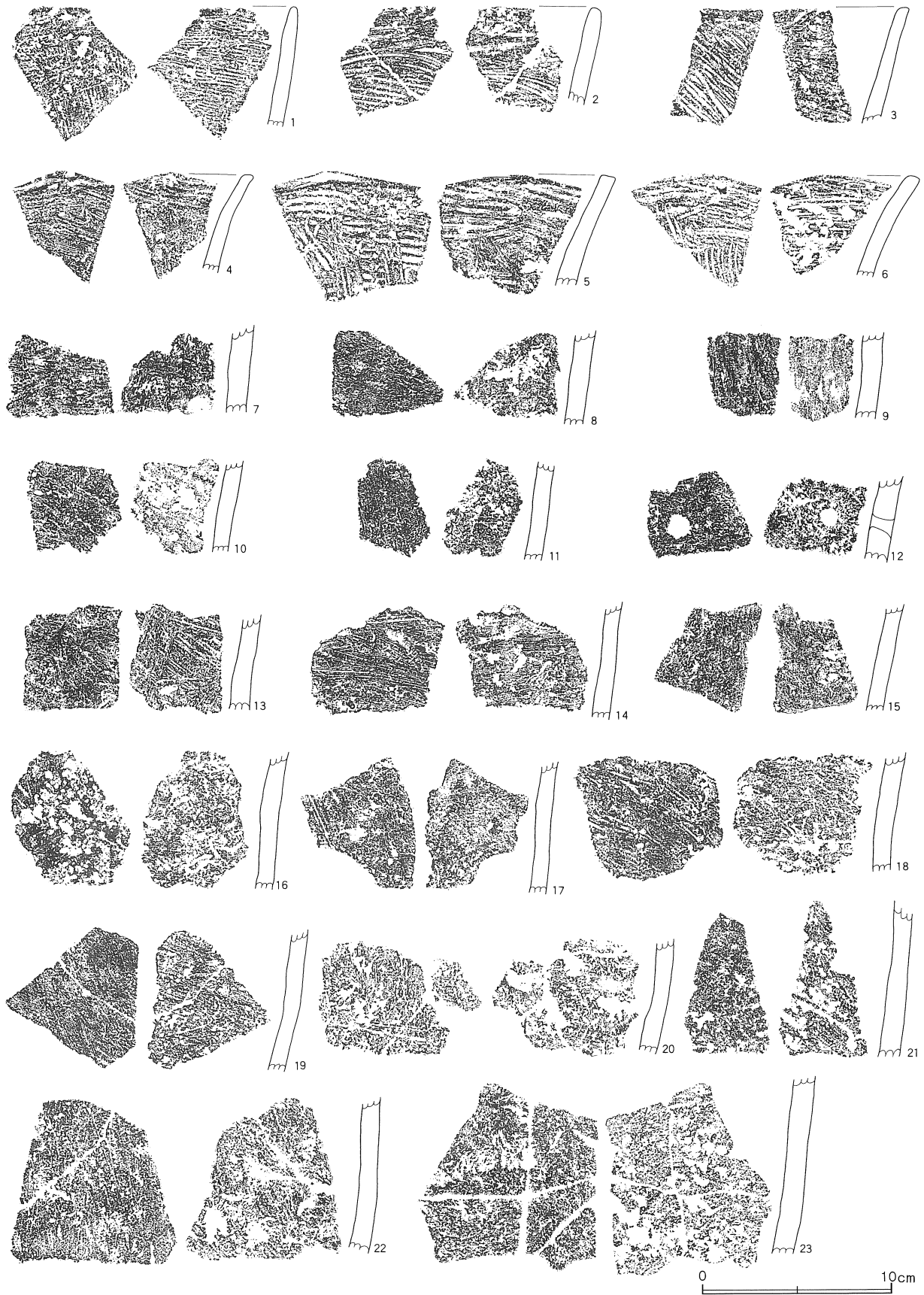
第21图 炉穴群2出土土器(4)



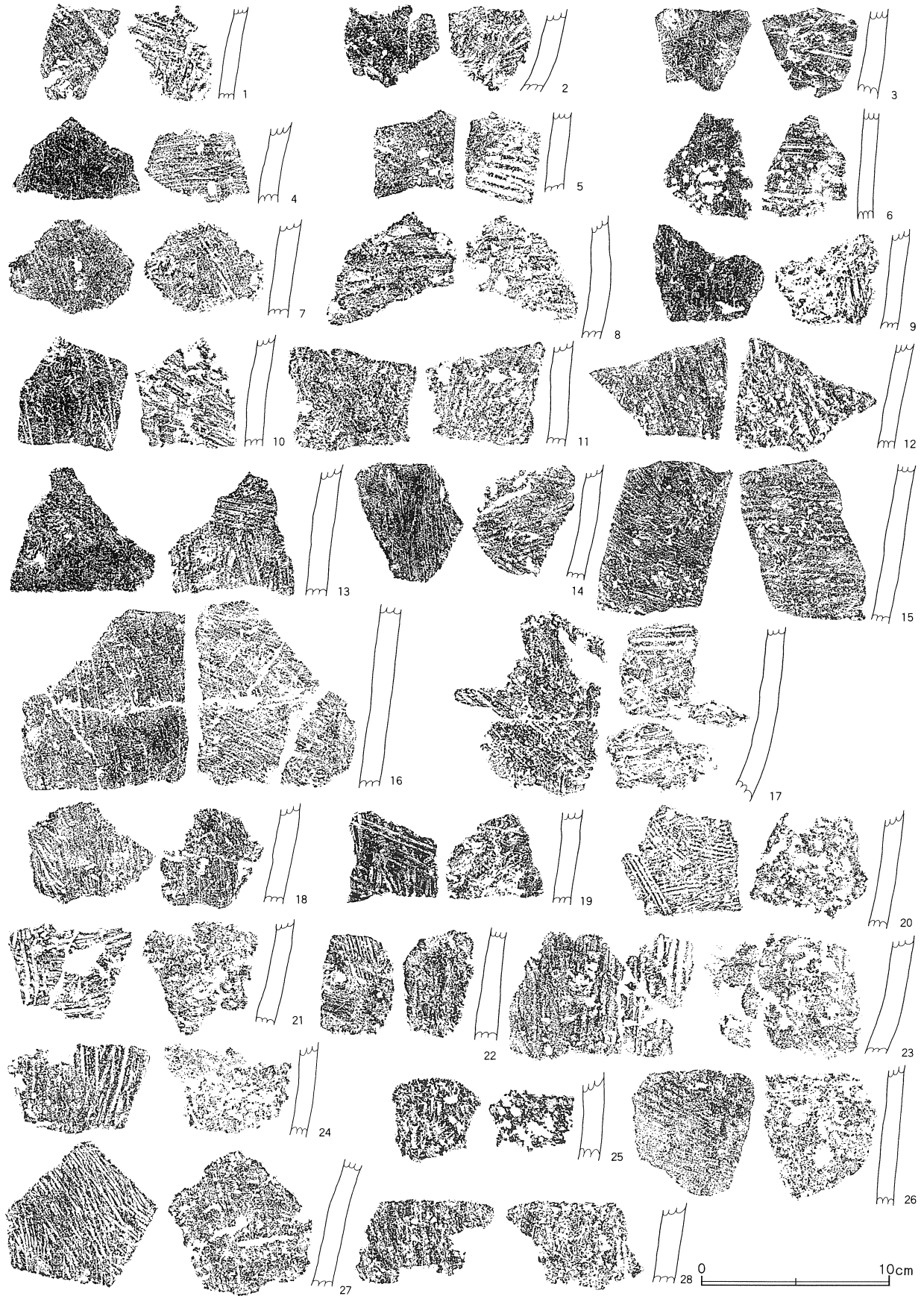
第22图 炉穴群2出土土器(5)



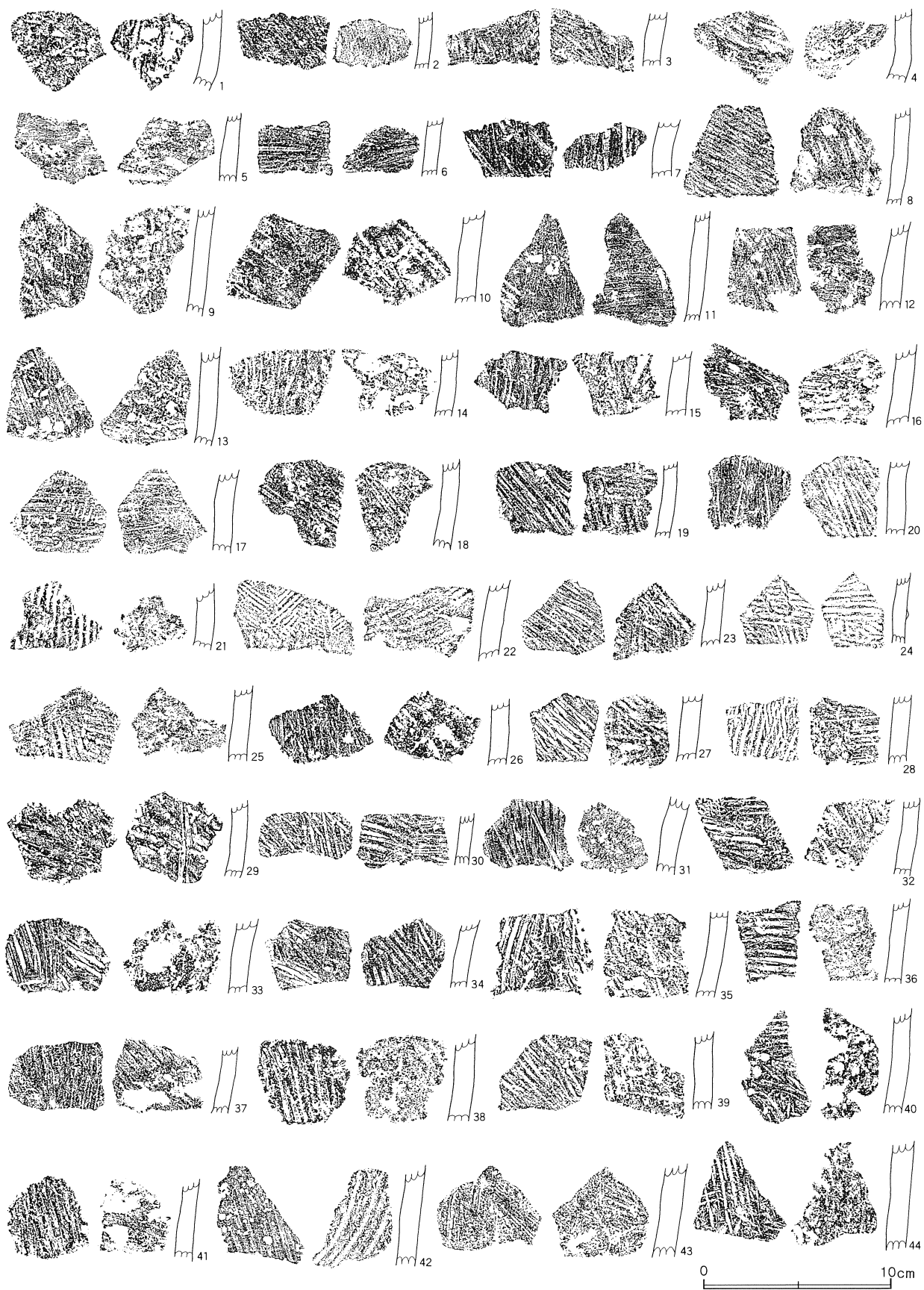
第23图 炉穴群2出土土器(6)



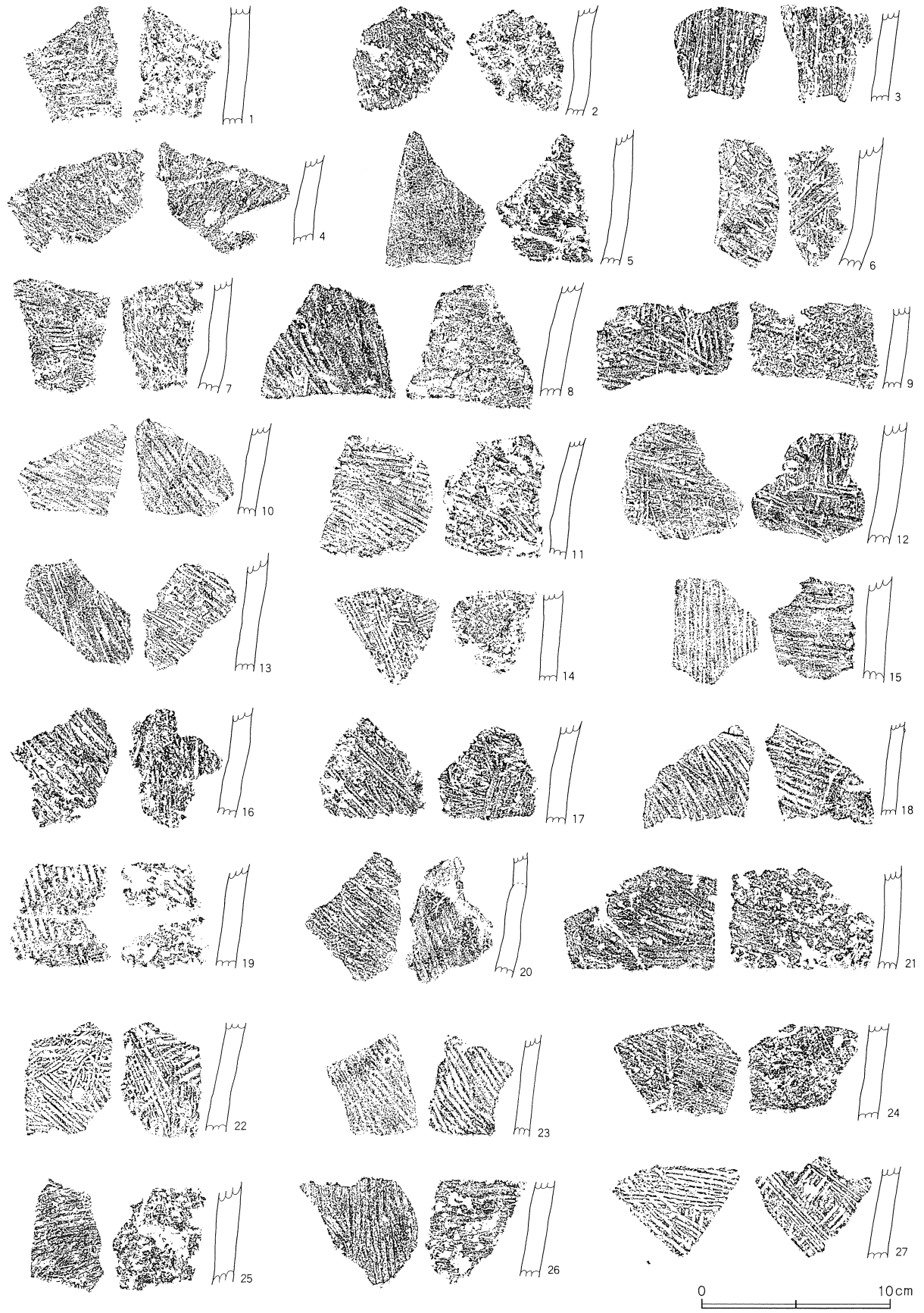
第24图 炉穴群2出土土器(7)



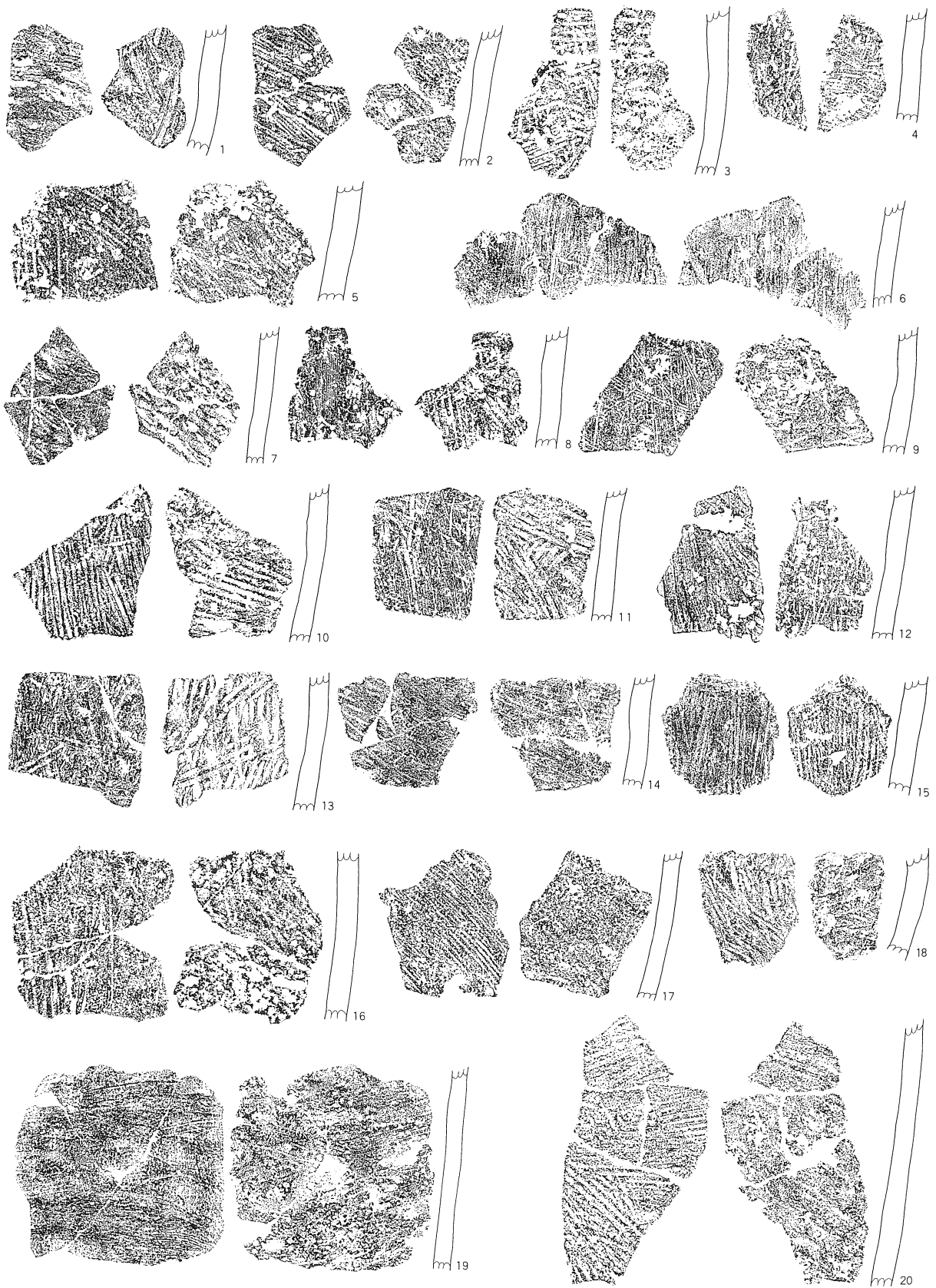
第25图 炉穴群2出土土器(8)



第26图 炉穴群2出土土器(9)

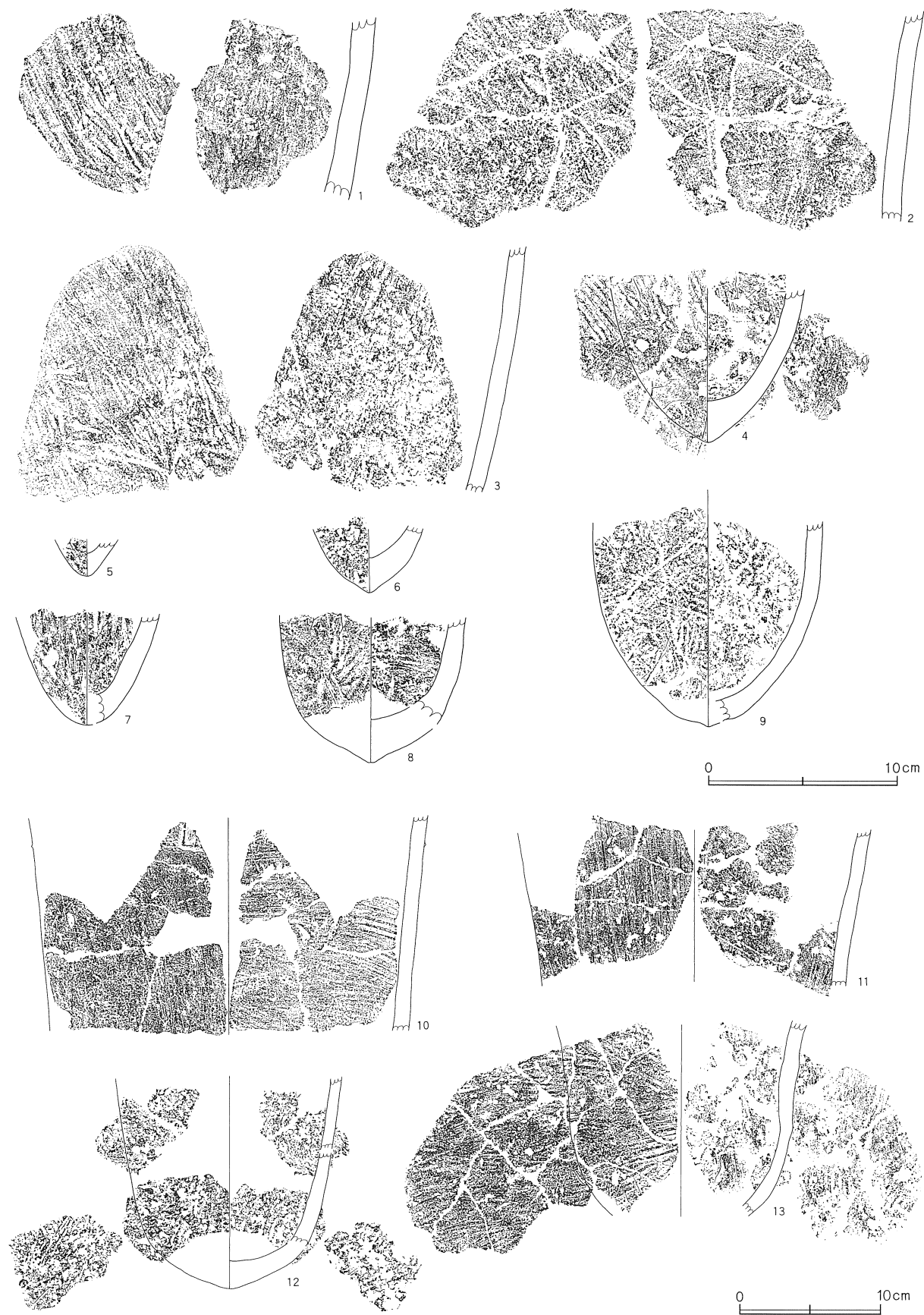


第27图 炉穴群2出土土器(10)



0 10cm

第28图 炉穴群2出土土器(11)



b 5 (第21図26~30)

その他の土器で全体の構成が不明なものを一括する。26は隆帯と斜沈線を施す。27~30は幾何学的な区画内を斜沈線によって充填する。

26は外面に擦痕状の調整、内面に条痕を施す。27、28は内外面に擦痕状の調整を施す。28はやや薄い作りである。29、30は外面に擦痕状の調整、内面に条痕を施す。

c (第21図31~34)

沈線による梯子状の文様によって文様を構成する。

31は口縁部を内削ぎ状に調整している。内外面に条痕を施す。32は角頭状の口縁部形態である。内外面に擦痕状の調整を施す。33も角頭状の口縁部である。34は胴部の破片である。33、34は内外面に条痕を施す。

第3類 (第21図35~37)

貝殻文を口縁部に施すものを一括する。少数であった。35、36は口縁部の破片である。35は口唇部がやや丸みを帯び、36は角頭状の口縁部で口唇部は平坦をなす。35~37はいずれも貝殻腹縁を斜位に施す。内外面ともに擦痕状の調整がなされている。

第4類 (第18図5、6、第22図~第27図、第28図1~9、11~13)

文様をもたない土器を一括する。条痕の有無によって分類するが、条痕の有無は部位によって異なるので便宜的な分類にすぎない。また、第1類から第3類の胴部破片も当然含まれることになる。しかし、調整という観点からすれば、条痕の頻度、条痕・調整の種類等、おおよその傾向を見ることはできよう。

a (第22図1~11、第23図7~23)

内外面ともに条痕が認められないものを一括する。細かい擦痕状の調整痕が観察されるものが多い。

第22図1~11は口縁部の破片である。口唇部は丸みを帯びたものが多いが、2は内削ぎ状に調整したもの、4~6は角頭状の口縁部で口唇部を平坦に調整している。6、8、9は波状部の破片である。

第23図7~23は胴部の破片である。各種の方向からの細かい調整痕が観察される。

b (第18図5、第22図12~14、第24図1~17)

外面に条痕が認められず、内面に条痕を施すもの。

第18図5は波状口縁の土器である。外面は斜位に擦痕状の調整がなされている。内面は口縁部付近に条痕が認められる。口唇部付近は器壁を薄くした作りになっている。全体の1/6以下の残存度である。

第22図12~14は口縁部の破片である。口唇部は丸みを帯びている。12、13は内面に浅い条痕を施す。14は浅く細い条痕を施す。第24図1~17は胴部の破片である。外面は縦位、斜位の擦痕が観察されるものが多い。内面の条痕は総じて浅いものが多い。

c (第22図15~27、第24図18~28)

外面に条痕を施し、内面に条痕が認められないもの。

第22図15~27は口縁部の破片である。16、21の口唇部は丸みを帯びているが、全体に角頭状の口縁部形態が多く、口唇部は平坦である。26は緩い波状をしている。第24図18~28は胴部の破片である。

d (第18図6、第22図28~37、第23図1~6、第25図~第27図、第28図1~9、11~13)

内外面に条痕が施されるもの。第4類中ではd類が多数を占めている。

第18図6は波状口縁の土器である。外面の口辺部は横位に、胴部は縦位に条痕を施す。内面の口縁部付近は横位、胴部は斜位に条痕を施す。角頭状の口縁部で口唇部は平坦部をもつ。1/6以下の残存度である。

第22図28~37、第23図1~6は口縁部の破片である。32、35は口唇部が丸みを帯び、1は口縁部の器壁を薄く仕上げている。これ以外は全体に角頭状の口縁部形態が多く、口唇部は平坦な作りとなっている。4~6は波状部の破片である。

第25図~第27図は胴部の破片である。条痕の種類には深くはっきりしたもの、浅く不明瞭なもの、その中間的なものなど各種がある。また、条痕の太さや方向も様々である。

第28図1~9、11~13は比較的大形の破片や底部近くの破片である。1の内面は外面に対して浅い条痕を施す。2、3も内面はかすかな条痕を施す。4~9、

12、13は底部や底部近くの破片である。4、6、9、12、13の内面は浅い条痕を施す。

炉穴群3（第24・25・28号炉穴）（第29図）

B-3・4グリッドに位置している。

精査時、焼土粒子を含む黒褐色土が不整形の広がり
を示しており、炉穴群1と同様に炉穴の多数の重複を
想定して着手したところ、結果的にはわずか3基の炉
穴と土壙群からなるものであった。この土壙・炉穴群
からは土器が少なからず出土した。ここでは炉穴群3
として報告する。

土壙は十数基が切り合ったもので、いずれも不整の
形態をしている。深度は0.2~0.4メートルである。

第24号炉穴は整った形態をしている。炉跡部分にお
ける焼土の堆積は少量であり、炉穴中心部でも2セン
チメートルほどであった。第25号炉穴は足場部分が狭
い。第28号炉跡は足場部分を検出し得なかった。炉跡
の底面は小さく、地山に火床が認められたが小さなも
のであり、下層に焼土粒子を多く含むものの、焼土そ
のものの堆積はなかった。

炉穴群3出土土器（第30図、第31図）

第1類（第30図2、第31図1、2）

細隆起線によって文様を施す土器を一括する。

第30図2は平行する縦位の細隆起線を口縁部に施
す。波状口縁の土器である。口辺部に横位の細隆起線
を巡らせた後、平行する縦位の細隆起線を垂下させる。
外面は斜位に擦痕状の調整を施す。内面の口縁部は横
位に胴部は斜位、縦位に条痕を施す。全体の1/5が
残存する。

第31図1は波状部の破片である。波状の口縁部に
沿って、斜位の細隆起線が施され、縦位に短い細隆起
線を施す。波頂部下から縦位に細隆起線が垂下する。
梯子状の文様を斜位に施す土器であろう。

第31図2は斜位の細隆起線文を施すものである。

第4類（第30図1、3、第31図3~20）

文様をもたない土器を一括する。

a（第30図3、第31図8~10、19）

内外面ともに条痕が認められないものを一括する。

第30図3は平口縁の小形土器である。内外面ともに擦
痕状の調整を施す。第31図8~10は胴部、19は底部の
破片である。

b（第31図11）

外面に条痕が認められず、内面に条痕を施すもの。

11は胴部破片で外面には擦痕状の調整を施す。

c（第31図13）

外面に条痕を施し、内面に条痕が認められないもの。

13は胴部の破片で、内面に擦痕状の調整を施す。

d（第30図1、第31図3~7、12、14~18、20）

内外面に条痕が施されるもの。

第30図1は波状口縁の土器である。外面の口縁部付
近は横位に胴部は縦位に明瞭な条痕を施す。内面も同
様な方向で条痕を施すが、やや不明瞭である。全体の
1/6以下の残存度である。

第31図3~7は口縁部の破片である。いずれも角頭
状の口縁部である。3、7は波状部の破片である。第
31図12、14~18、20は胴部の破片である。

第11・12号炉穴（第32図）

B-5・6グリッドに位置する。2基の炉穴が切り
合っている。第11号炉穴が第12号炉穴を切っており新
しい。第11号炉穴はほぼ主軸を北にする。炉跡部分の
北側にも浅く、平坦な掘りこみが認められた。

第12号炉穴はかなり不整な形態である。炉跡部分は
深く、大きい。炉穴の数値は炉跡部分の南側を足場部
分と見なして計測した。

土器以外に第48図3の石鏃、7の磨石が出土した。

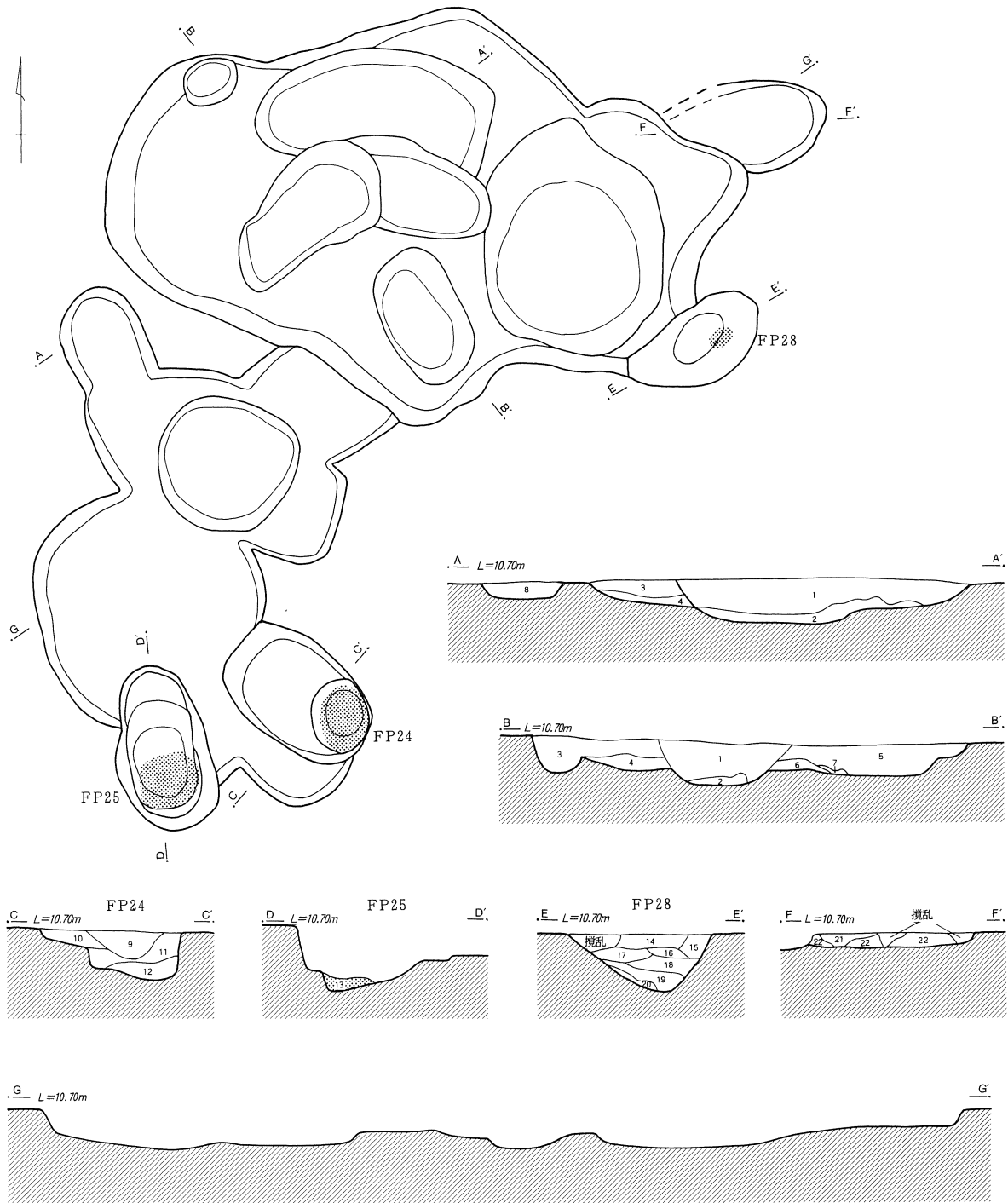
第20~23号炉穴（第32図）

第2号住居跡北側の4基である。第20号炉穴は第21
号炉穴に切られている。第21号、第23号炉穴は第2号
住居跡に切られている。いずれも小規模なものである。
第21号、第22号炉穴は足場部分の平坦部が狭く、整然
としていなかった。第20号~第22号炉跡からは土器片
が出土したが（第37図）、第23号炉跡からは図化しう
るものは認められなかった。

第18・26・27・29~35号炉穴（第33図）

単独の炉穴を第33図にまとめた。

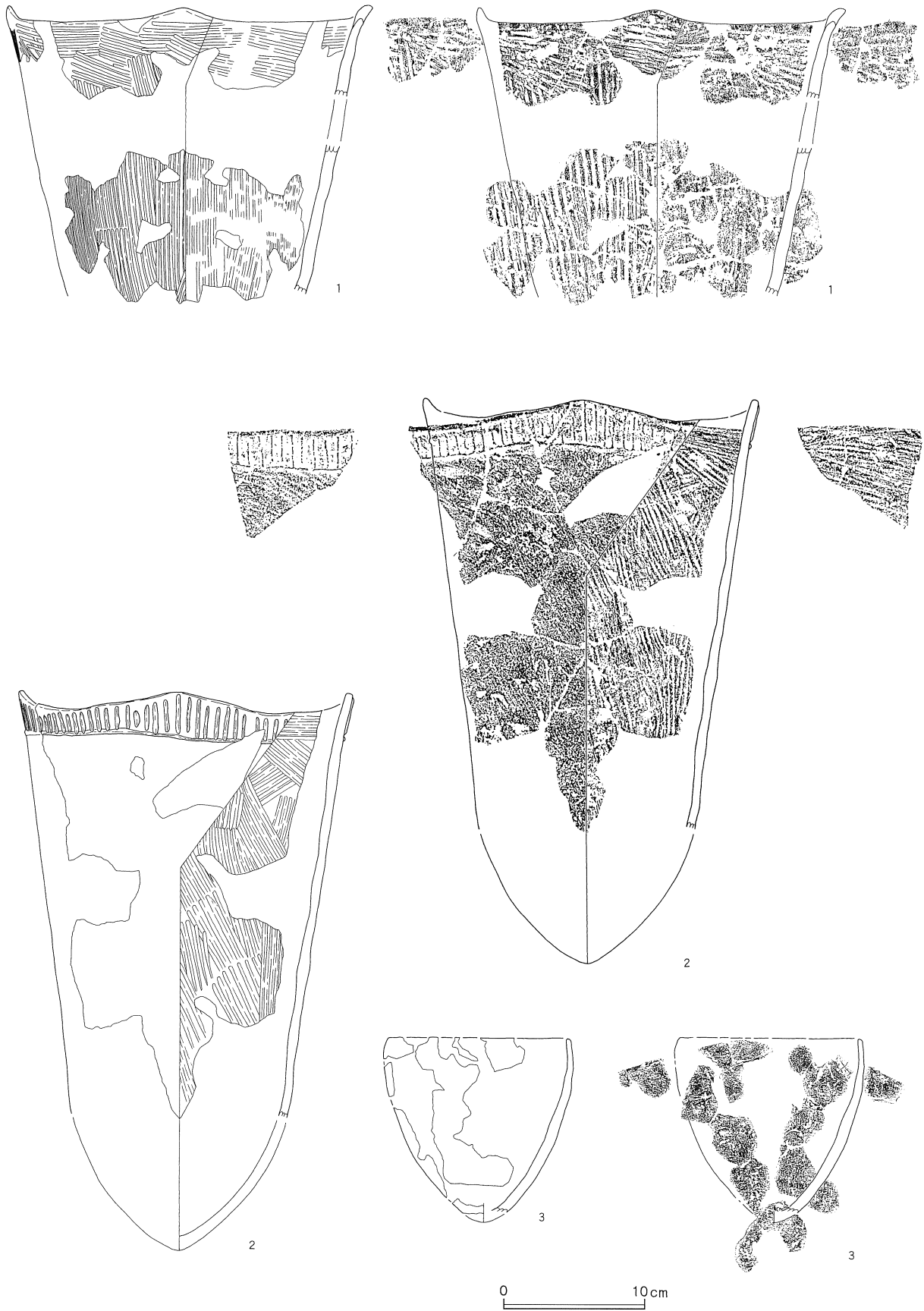
第29図 炉穴群3 (第24・25・28号炉穴)



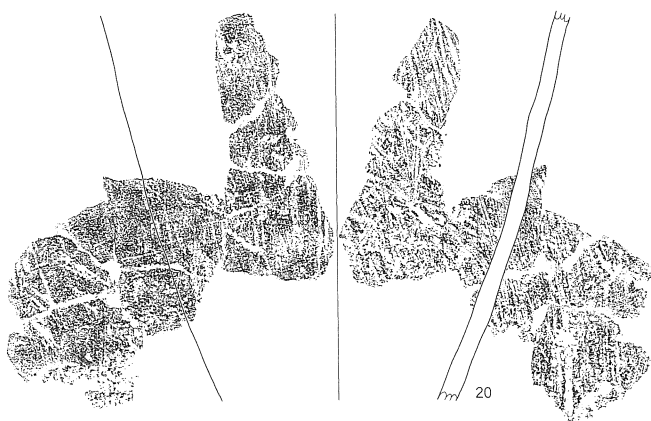
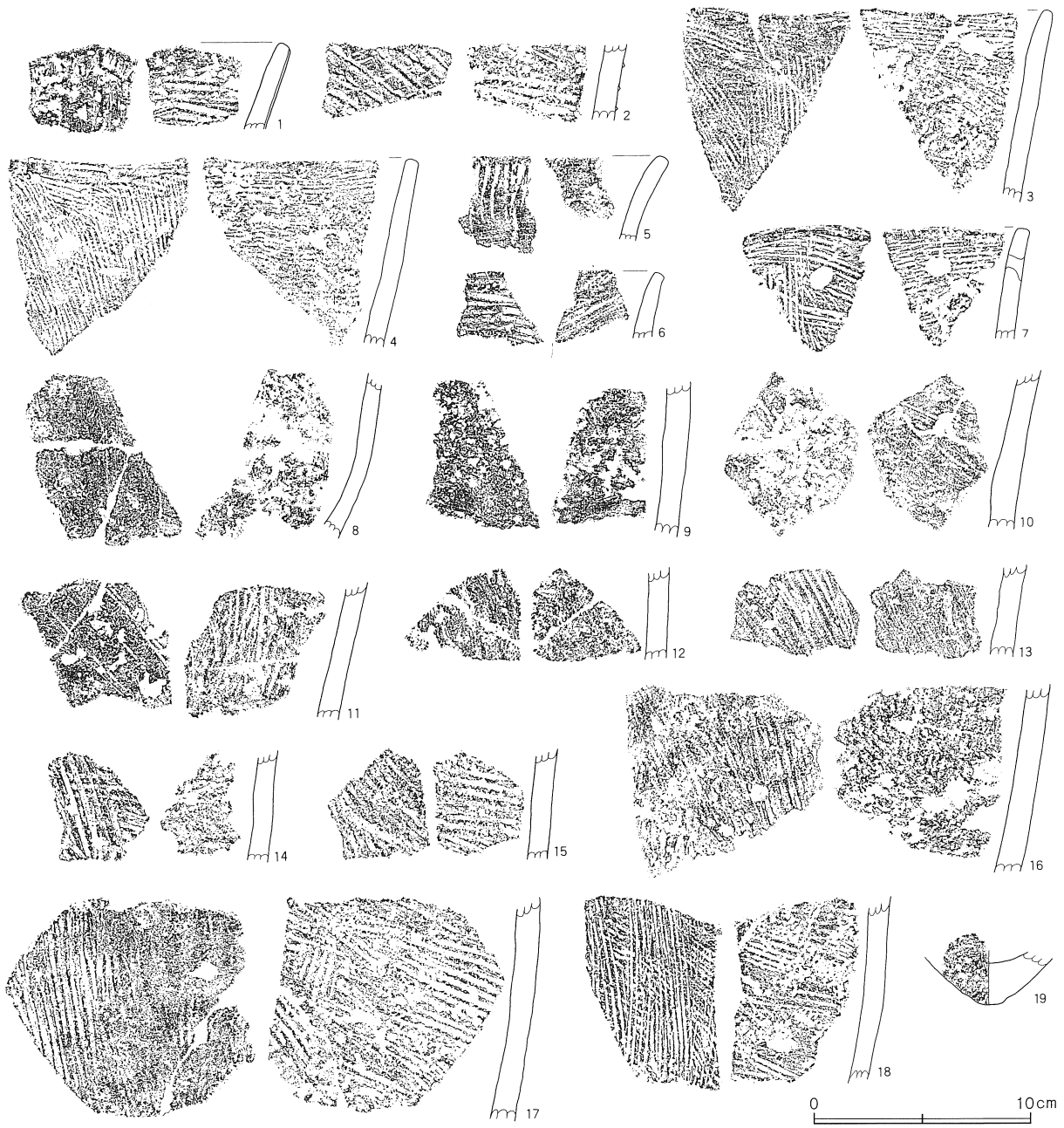
- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1 黒褐色土 径2mm以下のローム・焼土・炭化物粒子を少量含む。 | 12 褐色土 ロームを含む。径10mm以下の焼土粒子を含む。 |
| 2 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。 | 13 赤褐色土 ロームブロックを含む。径20mm前後の焼土ブロックを多く含む。 |
| 3 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。 | 14 黄褐色土 径2mm以下のローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。 |
| 4 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。 | 15 灰黄褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。 |
| 5 黒褐色土 径2mm以下のローム・焼土・炭化物粒子を少量含む。 | 16 灰黄褐色土 径2mm以下のローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。 |
| 6 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。 | 17 暗褐色土 径2mmのローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。 |
| 7 褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。 | 18 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。 |
| 8 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを含む。 | 19 黒褐色土 径2~8mmのローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を多く含む。 |
| 9 暗褐色土 ローム細粒、焼土細粒を少量含む。 | 20 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。 |
| 10 褐色土 ロームブロックを多く含む。焼土粒子を少量含む。 | 21 黒褐色土 径5~30mmのロームブロックを少量含む。 |
| 11 褐色土 ロームをやや多く含む。径2mm以下の焼土粒子を含む。 | 22 暗褐色土 径5~25mmのロームブロックを多く含む。 |

0 2m

第30图 炉穴群3出土土器(1)



第31图 炉穴群3出土土器(2)



第18号炉穴は炉穴群2の東側、B-5グリッドに位置する。炉跡部分の掘り込みは浅く、焼土の堆積は少量であった。

第26・27・30号炉穴はC-4グリッドに位置する。

第26号炉穴は炉穴の底面に火床が認められたが、炉跡部分の掘り込みは確認できなかった。第27号炉穴は遺存状況がよく、典型的な形態をしている。第30号炉穴は覆土中に焼土粒子は認められたが、焼土の堆積は認められなかった。

第29・31・32号炉穴はD-2グリッドに位置する。

第29号炉穴は第32号炉穴と切り合っている。第29号炉穴の足場部分は平坦でなく、一段掘り込まれている。第32号炉穴は第1号溝に切られていた。炉跡部分の掘り込みは残存していなかった。第31号炉穴は炉跡部分の掘り込みを確認できなかった。底面の一部に火床が認められた。

第33・34号炉穴は地下式坑(SX2)に切られている。第35号炉穴は第1号井戸(第70図)に切られ、炉跡部分の痕跡が確認されたものである。

第27・29・32・35号炉穴からは土器が出土した(第37・38図)が、第18・26・30・31・33・34号炉穴からの出土遺物は少なかった。早期条痕文系土器の小片を検出したのみである。

第11・12号炉穴出土土器(第34図～第36図)

いずれも胎土中に繊維を含み、器面には条痕、擦痕が施される。

第1類(第34図1～7)

細隆起線によって文様を施す土器を一括する。

1は平行する縦位の隆帯を口縁部に施すもの。2～5は斜位の細隆起線文を多用し、三角形などの幾何学的な構成をとるもの。

6、7は梯子状の文様によって各種の文様を構成するもの。

1、2は角頭状の口縁部、3、4は口唇部が丸みを帯びている。1は内面に擦痕状の調整、2～7は条痕を施す。

第2類(第34図8～12)

沈線文を用いる土器を一括する。

8は口辺部に横位の沈線を巡らせ、口縁部に斜沈線を施す。9は上下に幅の広い文様帯を設定し、縦位の細隆起線、斜沈線をほどこす。10は横位に区画する沈線を施す。11は斜沈線により区画と充填をする。12は縦位、斜位の沈線を施す。

8、11は内削ぎ状、9は角頭状の口縁部である。いずれも擦痕状の調整か、きわめて浅い条痕を施す。

第4類(第34図13～32、第35図、第36図)

文様をもたない土器を一括する。

a(第34図25～28、第36図15)

内外面ともに条痕が認められないものを一括する。いずれも胴部破片であり、擦痕状の調整を施す。

b(第34図29～32)

外面に条痕が認められず、内面に条痕を施すもの。いずれも胴部破片であり、擦痕状の調整を施す。

c(第34図22、23、第35図1～5)

外面に条痕を施し、内面に条痕が認められないもの。22は内削ぎ状の口縁部である。23の口唇部は丸みを帯びている。1～5は胴部破片である。

d(第34図13～21、24、第35図6～33、第36図1～14、16～18)

内外面に条痕が施されるもの。

第34図13～18は口縁部の破片である。内外面にきわめて浅い条痕を施す。13、14は丸みのある口唇部である。15、17は内削ぎ状の口縁部、16、18は角頭状の口縁部である。

第34図19～21、24、第36図16も口縁部の破片である。明瞭な条痕を内外に施す。いずれも角頭状の口縁部で、24は口唇部に刻みを施す。

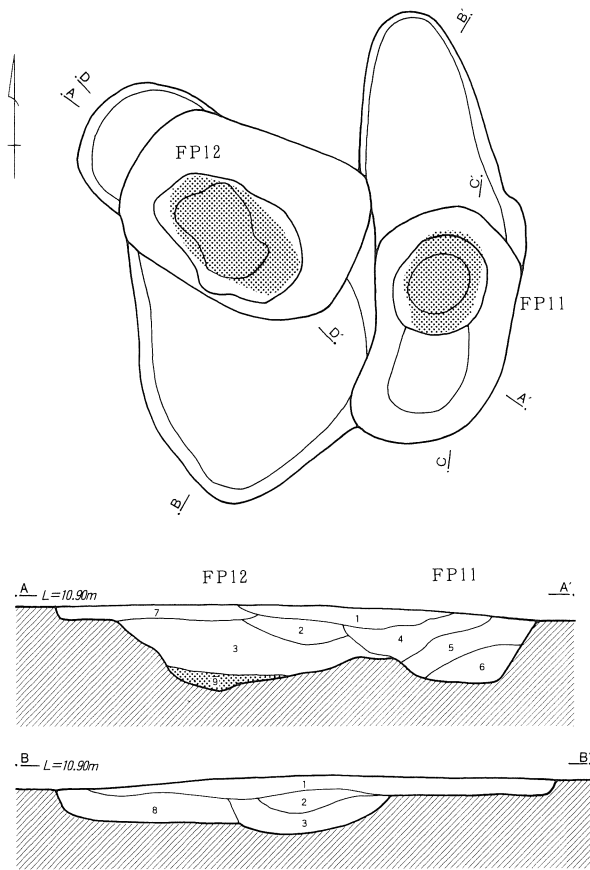
第35図6～16はきわめて浅い条痕を施す。

第35図17～33、第36図1～14、17は各種の条痕が認められる胴部の破片である。18は底部である。尖り気味の形態をしている。

第20・21号炉穴出土土器(第37図1～6)

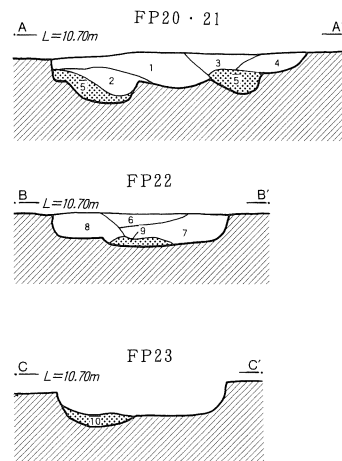
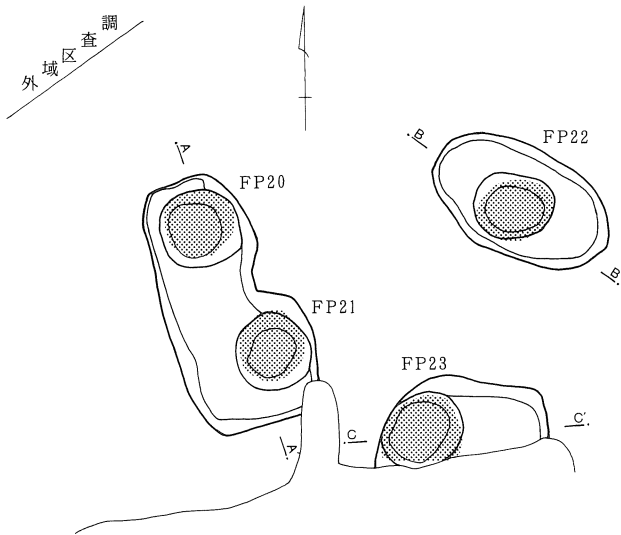
いずれも文様のない土器あるいは文様のない部位の破片である。1は口縁部の破片である。波状部の破片

第32図 第11・12・20～23号炉穴



- 1 黒褐色土 径1mm以下の焼土粒子を含む。
- 2 黒褐色土 径2mm以下の焼土粒子を含む。
- 3 暗褐色土 径2mm以下の焼土粒子を含む。上層の2層よりやや多い。ロームブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 径2mm以下の焼土粒子を含む。ローム細粒・ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 径2mm以下のローム粒子、焼土粒子を含む。ロームは4層に比べ少ない。
- 6 黒褐色土 5層よりやや多く径3mm以下のローム粒子、焼土粒子を含む。
- 7 黒褐色土 径1mm以下の焼土粒子を含む。1層よりやや多くロームブロックを含む。
- 8 暗褐色土 径1mm以下の焼土粒子を極く少量含む。ロームブロックを多く含む。
- 9 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。

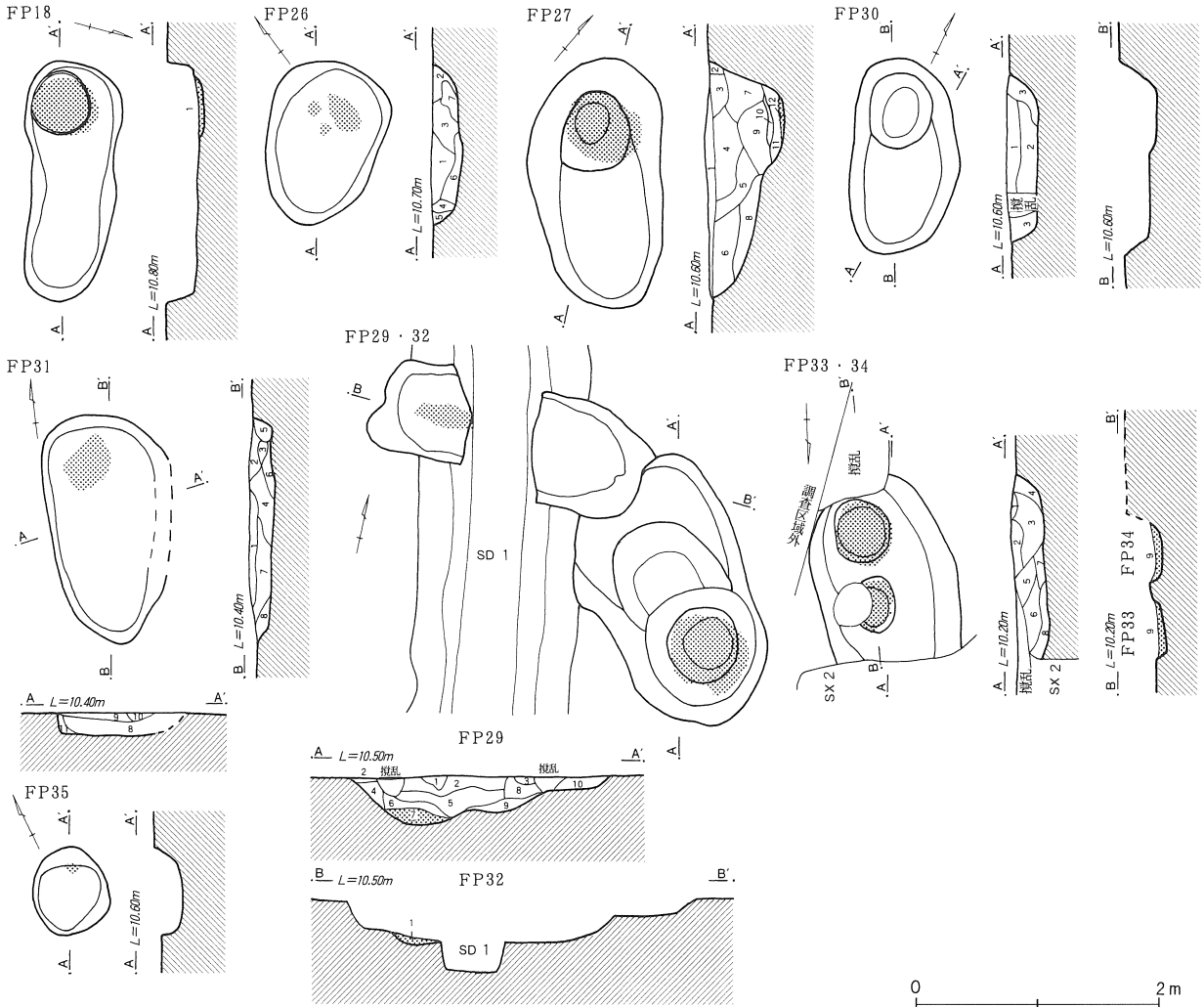
0 2m



- 1 暗褐色土 径2mm以下のローム粒子、焼土粒子を含む。
- 2 黒褐色土 径3mm以下のローム粒子を多く含む。径2mm以下の焼土粒子を含む。
- 3 黒褐色土 径1mm以下のローム粒子、径2mm以下の焼土粒子を含む。
- 4 黄褐色土 ローム細粒を多く含む。焼土粒子をかすかに含む。
- 5 赤褐色土 径80mm以下の焼土ブロックを非常に多く含む。黒褐色土を含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。径1mm以下の焼土粒子を少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。径3mm以下の焼土粒子を含む。
- 8 黄褐色土 ローム、ロームブロックを多く含む。焼土粒子をかすかに含む。
- 9 赤褐色土 ロームブロックを含む。径50mm以下の焼土ブロックを多く含む。
- 10 赤褐色土 径50mm以下の焼土ブロックを含む。黒褐色土を含む。

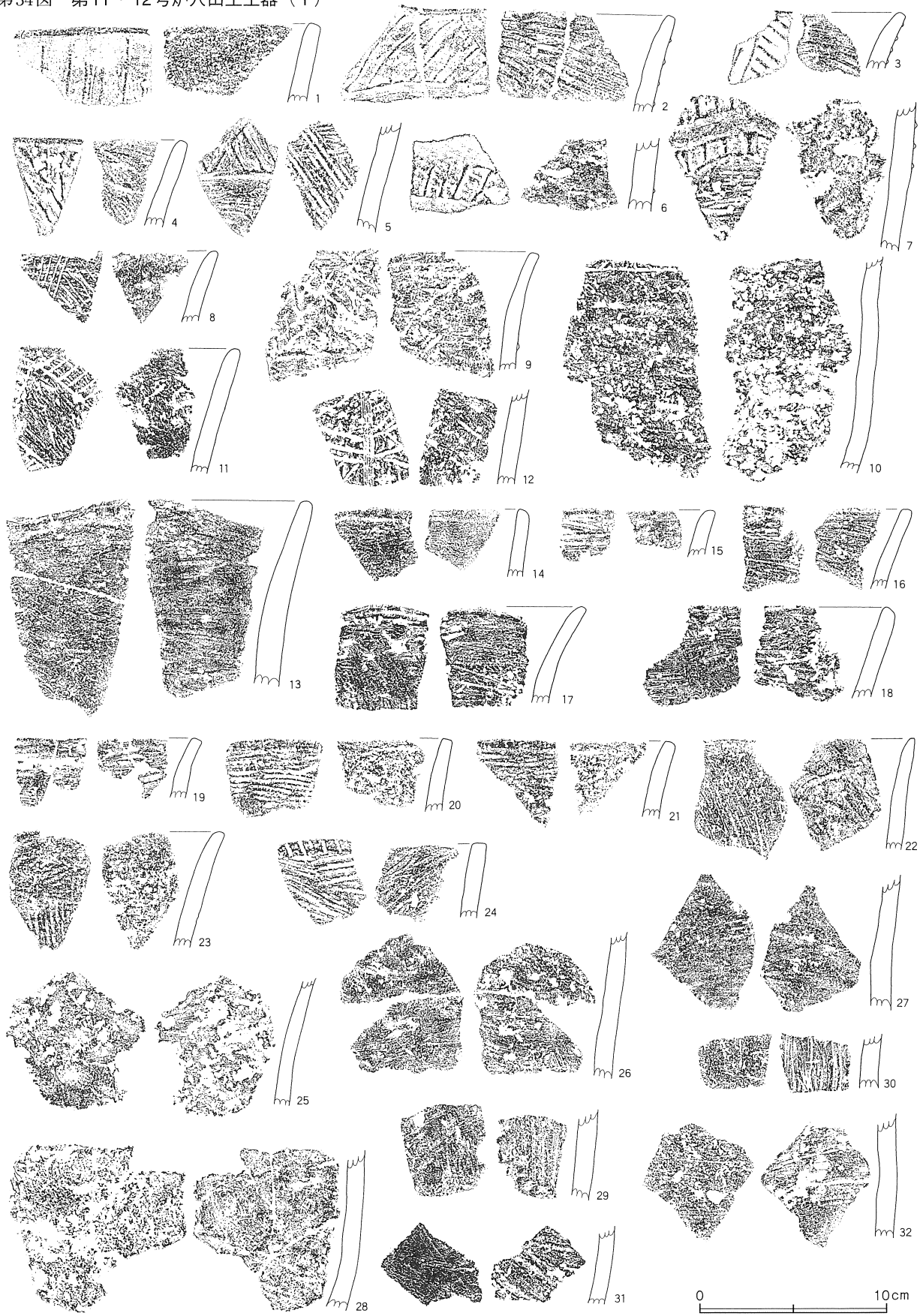
0 2m

第33図 第18・26・27・29～35号炉穴

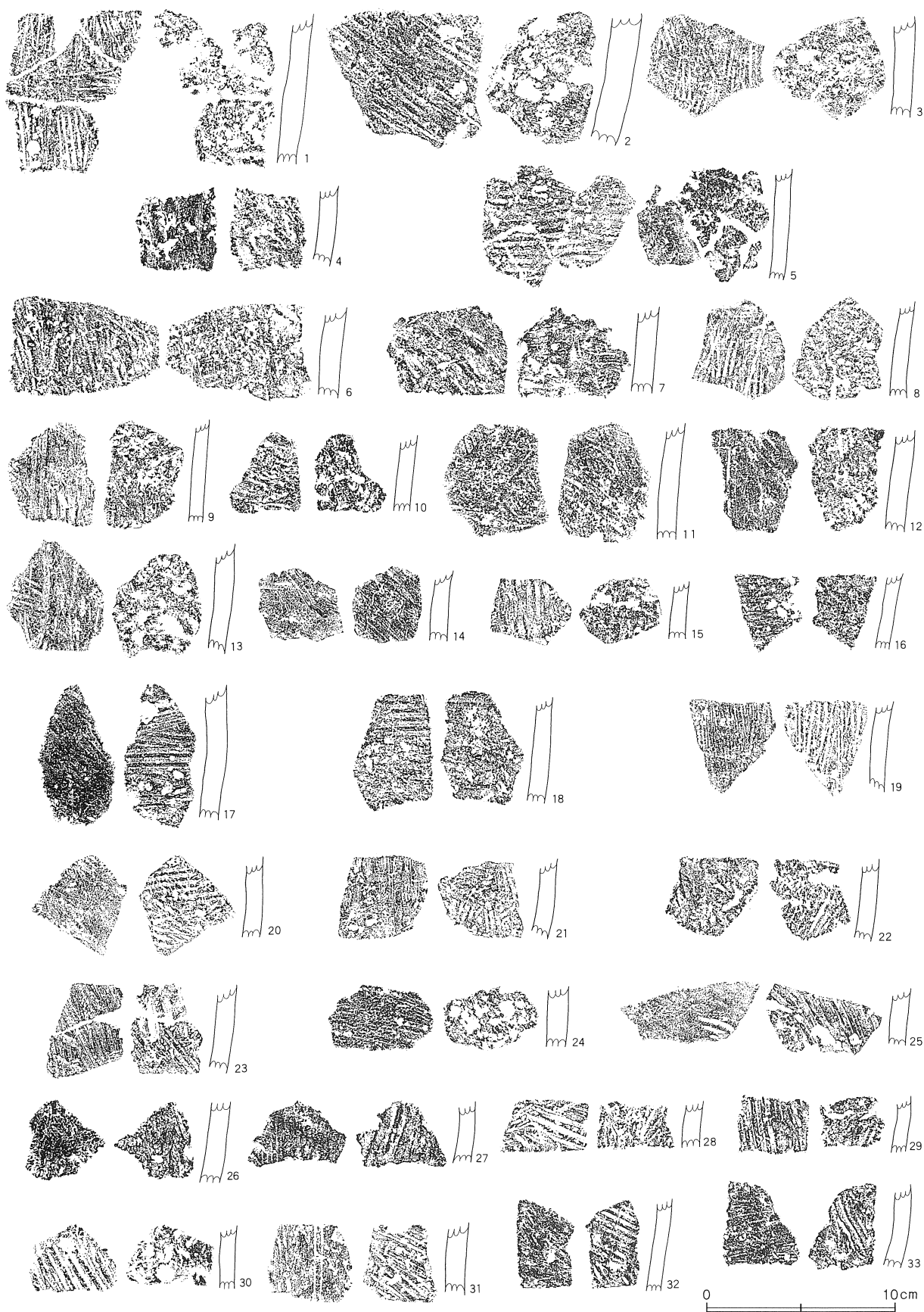


- FP18
1 明赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- FP26
1 黒褐色土 径2mm以下のローム・焼土粒子を少量含む。
2 褐色土 径5～20mmのロームブロックを多く含む。壁の崩落土と思われる。
3 暗褐色土 径2mmのローム・焼土粒子を多く含む。径2～5mmの炭化物粒子を少量含む。
4 黒褐色土 径5～15mmのロームブロックを多く含む。
5 黄褐色土 径5～20mmのロームブロックを多く含む。
6 暗褐色土 径5～15mmのロームブロックを少量含む。径2mm以下の焼土粒子を少量含む。
7 褐色土 径5～15mmのロームブロックを少量含む。径2～5mmの焼土・炭化物粒子を含む。
- FP27
1 黒褐色土 径2mm以下のローム粒子を少量含む。
2 黄褐色土 径5～15mmのロームブロックを少量含む。壁の崩落土。
3 黒褐色土 径2mmのローム・焼土・炭化物粒子を少量含む。
4 黒褐色土 径2mmのローム・焼土・炭化物粒子を少量含む。
5 黒褐色土 径2mmのローム・焼土・炭化物粒子を多く含む。
6 黒褐色土 径2mmのローム粒子、焼土粒子を少量含む。
7 黒褐色土 径5～30mmの被熱により固くなったロームブロック、径2～5mmの焼土・炭化物粒子を少量含む。
8 黒褐色土 径5～25mmのロームブロックを多く含む。
9 暗褐色土 径2～5mmのローム・焼土・炭化物粒子を多く含む。
10 褐色土 径5～20mmの焼土ブロックを多く含む。火床面の直上。
11 褐色土 径5～30mmの焼土ブロックを非常に多く含む。
12 赤褐色土 径5～30mmの焼土ブロックを含む。
- FP29
1 褐色土 径2～5mmの焼土・炭化物粒子を少量含む。
2 暗褐色土 径2～5mmのローム粒子、径2mmの焼土・炭化物粒子を少量含む。
3 黄褐色土 径2～5mmのローム粒子を少量含む。
4 褐色土 径5～30mmのロームブロックを非常に多く含む。崩落土。
5 暗褐色土 径5～20mmのロームブロックを少量含む。
6 褐色土 径1～5mmの焼土・炭化物粒子を少量含む。
7 暗褐色土 径2～5mmのローム粒子、焼土粒子を多く含む。
- FP30
1 暗褐色土 径5～15mmのロームブロックを少量含む。
2 暗褐色土 径5～25mmのロームブロックを少量含む。径2～5mmの焼土粒子を少量含む。
3 褐色土 径5～30mmのロームブロックを多く含む。
- FP31
1 暗褐色土 径2～5mmのローム粒子を少量含む。
2 暗褐色土 径2mm以下のローム粒子、焼土粒子を少量含む。
3 暗褐色土 径2～5mmのローム粒子、焼土粒子を多く含む。
4 暗褐色土 径5～15mmのローム、径2mm以下の焼土粒子を少量含む。
5 褐色土 径5～20mmのロームブロックを多く含む。径2mm以下の焼土粒子を少量含む。
6 褐色土 径2～5mmのローム粒子、焼土・炭化物粒子を少量含む。
7 褐色土 径2～5mmのローム粒子、焼土・炭化物粒子を少量含む。
8 褐色土 径5～30mmのロームブロックを多く含む。
9 褐色土 径5～30mmのロームブロックを多く含む。
10 暗褐色土 径2～5mmのローム粒子を少量含む。
11 暗褐色土 径5～15mmのロームブロックを多く含む。
- FP32
1 褐色土 径20～30mmの焼土・ロームブロックを多く含む。
- FP33・34
1 暗褐色土 焼土、炭化物をかすかに含む。
2 褐色土 径70mm以下のロームブロックを含む。焼土、炭化物をかすかに含む。
3 赤褐色土 焼土を多く含む。層の下面が顕著に焼けている。
4 暗褐色土 焼土をかすかに含む。
5 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。
6 暗褐色土 焼土粒子を多く含む。
7 赤褐色土 径30～50mmのロームブロックを含む。焼土を少量含む。
8 赤褐色土 焼土層。径80mm以下の焼土ブロックを含む。
9 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。

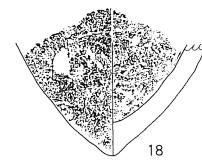
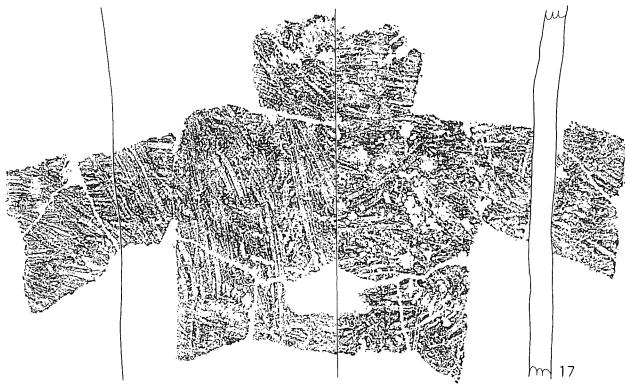
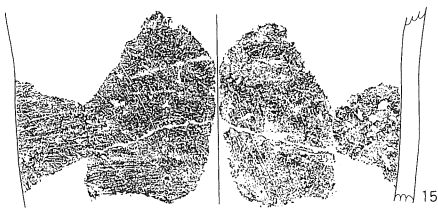
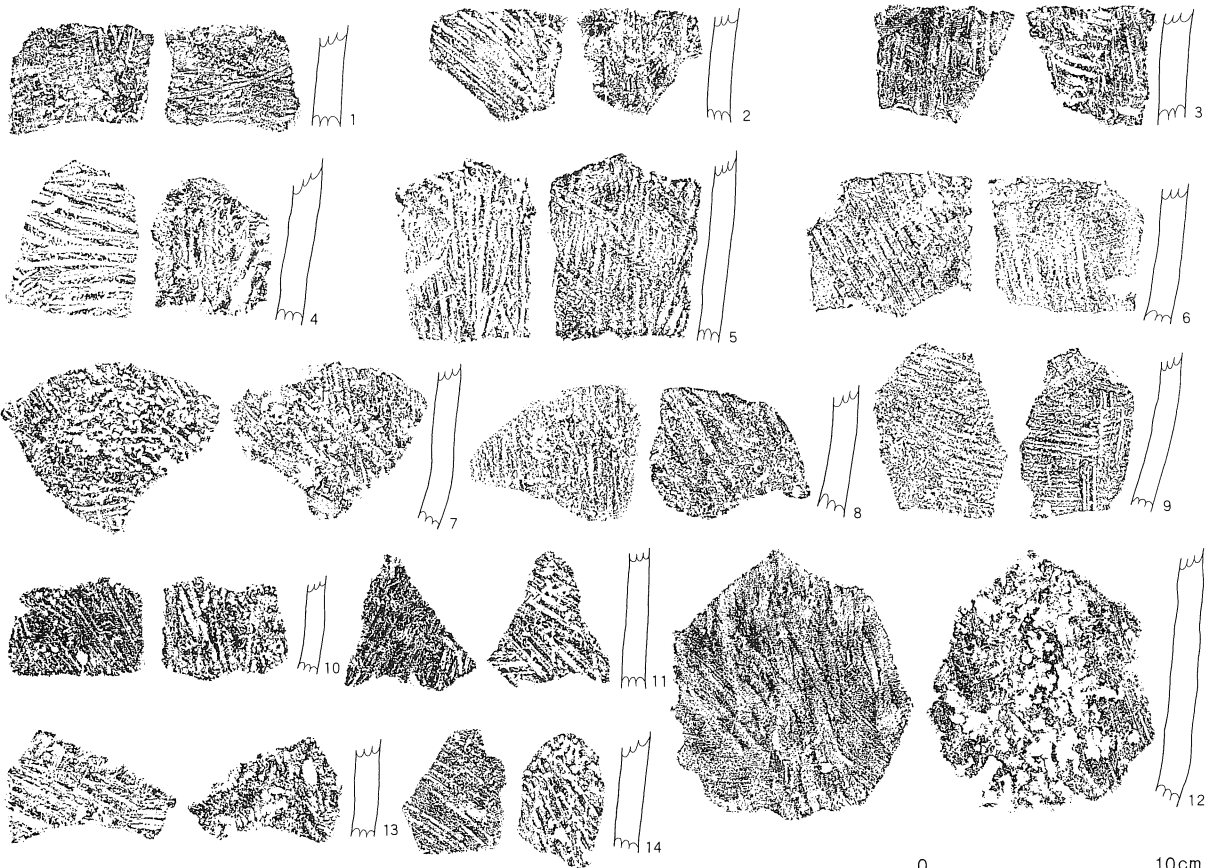
第34图 第11·12号炉穴出土土器(1)



第35图 第11·12号炉穴出土土器(2)

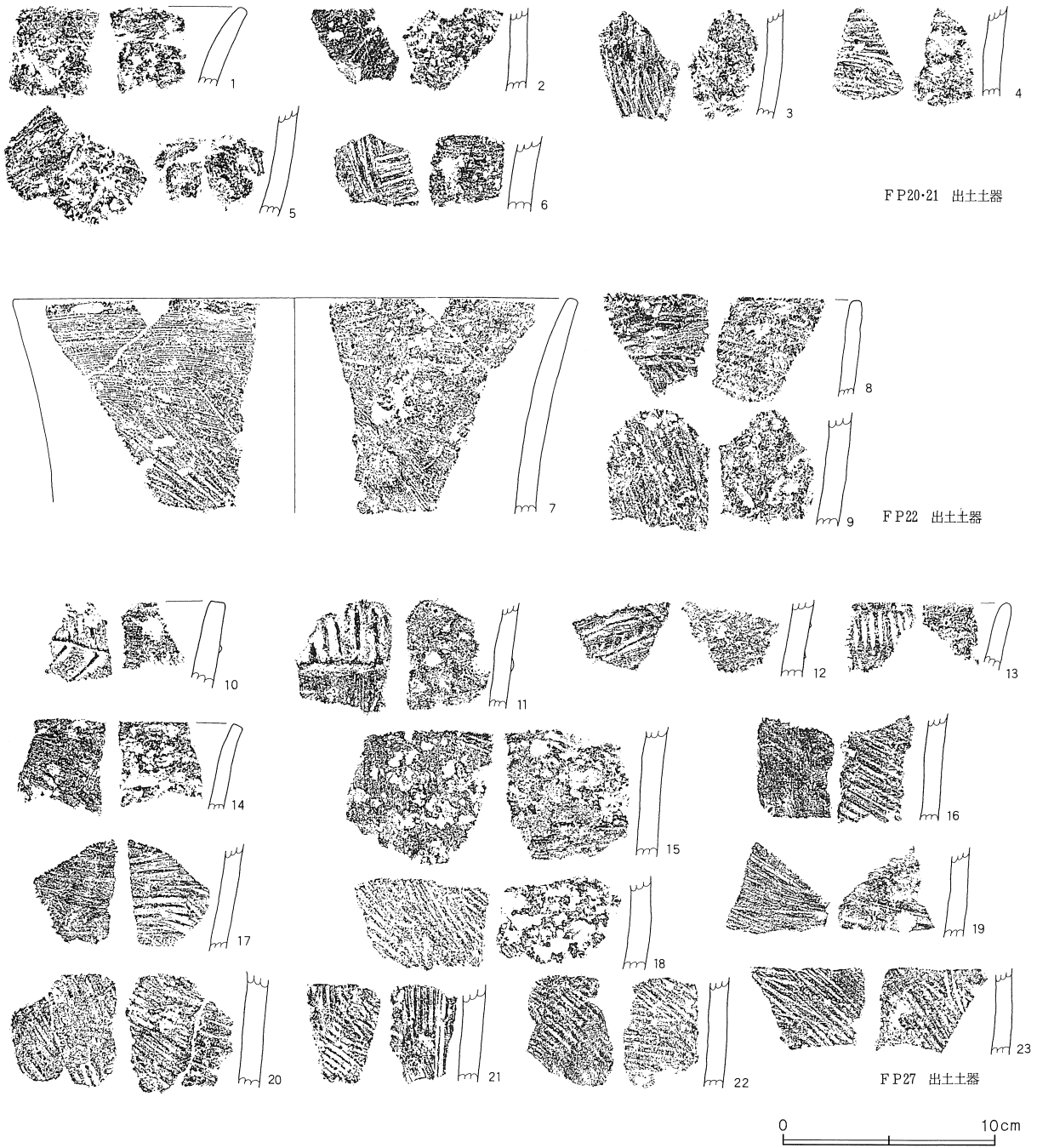


第36图 第11·12号炉穴出土土器(3)



0 10cm

第37図 第20～22・27号炉穴出土土器



で、口縁部は角頭状の形態である。横位に擦痕状の調整を施す。2～4は外面のみに条痕が認められる。5、6は内外面に条痕が認められるが、内面の条痕はきわめて浅く、不明瞭である。

第22号炉穴出土土器 (第37図7～9)

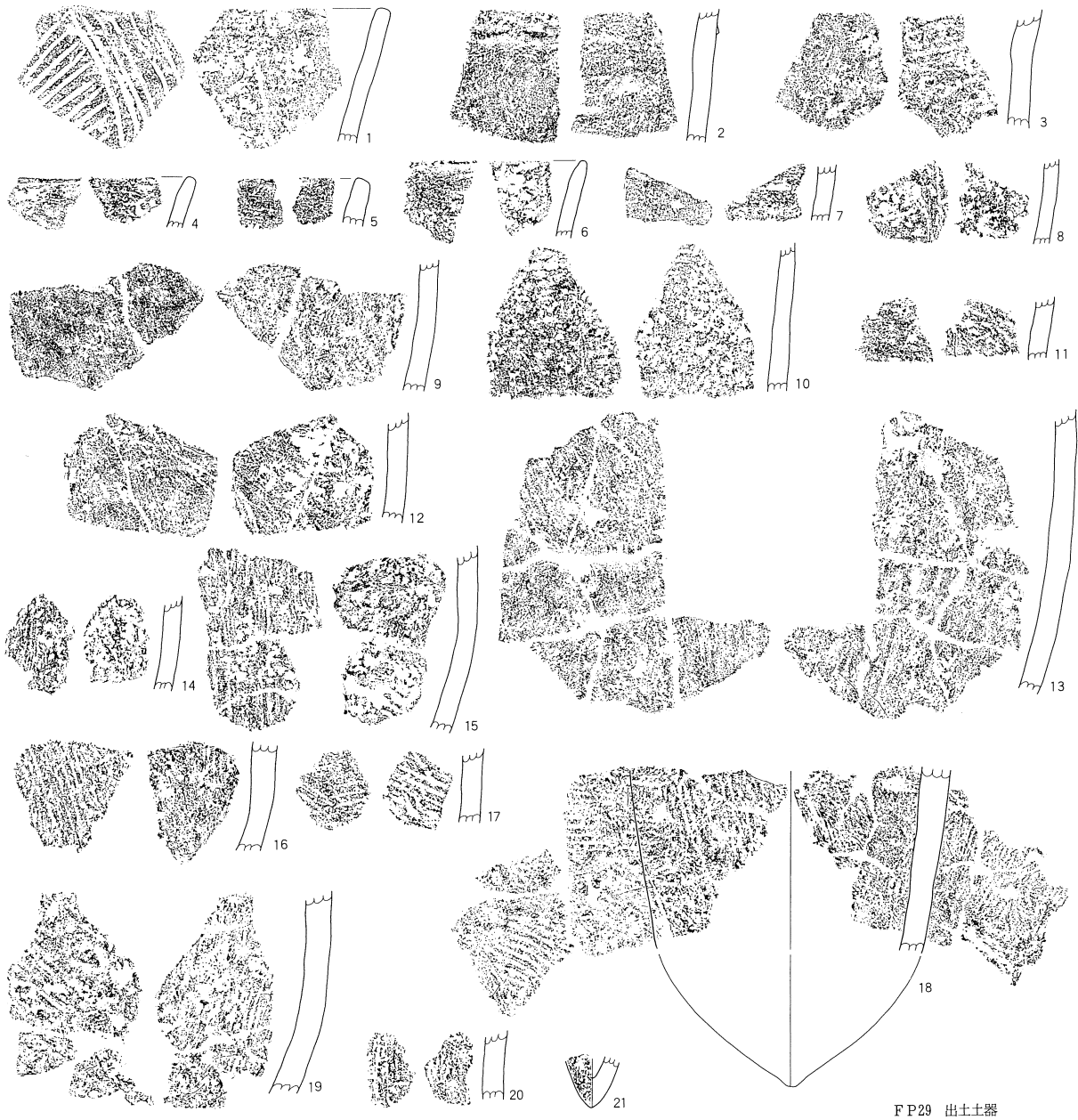
いずれも文様のない土器あるいは文様のない部位の破片である。7、8の口縁部は角頭状の形態である。

7は内外面に擦痕状の調整を施す。8は内外面ともに浅い条痕を施す。9は外面にのみ条痕が認められる。

第27号炉穴出土土器 (第38図10～23)

10は縦位、斜位の細隆起線を施す。口縁部は角頭状である。11は口縁部に平行する縦位の細隆起線を施すもの。12は斜位の細隆起線を施す。10～12は内外面ともに擦痕状の調整を施す。

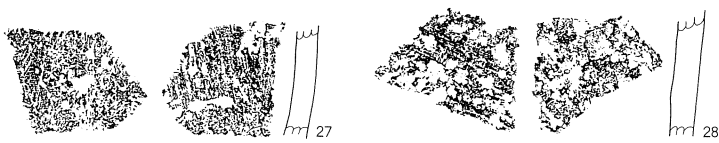
第38图 第29·32·35号炉穴出土土器



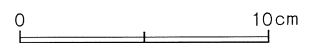
FP29 出土土器



FP32 出土土器



FP35 出土土器



13～23は文様のない土器、あるいは文様のない部位の破片である。13は口縁部の破片で丸みを帯びた口唇部である。外面のみに条痕が認められる。14は角頭状の口縁部である。内外面に擦痕状の調整を施す。15、16の外面は擦痕状の調整を施す。17～23は内外面に条痕を施す。

第29号炉穴出土土器 (第38図1～21)

1は沈線により三角形の文様を施す。角頭状の口縁部である。2は横位の細隆起線を施す。1、2の内外面は擦痕状の調整を施す。

3～21は文様のない土器、あるいは文様のない部位の破片である。4～6は口縁部の破片である。4は丸みを帯びた口唇部、5は平坦な口唇部、6は尖り気味

(3) 土壙

土壙は75基が検出された。

土壙からの出土遺物は少なく、早期の条痕文系土器が微少なながら覆土中に認められる場合が多かった。また、覆土の色調などは炉穴と同一の内容であった。

時期の詳細がわかる出土土器(第43図)はいずれも野島式であり、それ以外に土壙の時期を示す資料は皆無であった。土壙の時期は炉穴と同様に早期の野島式期に相当するものと考えられる。

炉穴が台地頂部を中心に分布しているのに対し、土壙は台地頂部から綾瀬川の谷に向かう緩斜面を中心に分布する。グリッドC・D列、2～5列を中心とした部分である(第4図)。総数の2/3近くを占めるD列付近では重複が著しかった。

詳細については第3表に示した。浅いものが多く、0.1～0.2メートルのものが多数である。形態は不整の

(4) グリッド出土土器

第1群土器 (第44図～第46図、第47図1～12)

早期の貝殻条痕文系土器を一括する。いずれも野島式土器である。胎土中に繊維を含む。

第1類 主として細隆起線によって文様を施す土器を一括する。

の口唇部である。内外面ともに擦痕状の調整を施す。7～20は胴部の破片である。8～10は内外面ともに擦痕状の調整、11、12は内面のみ、14、15は外面のみに条痕が認められる。13、16～19は内外面ともに条痕を施す。21は底部の破片である。

第32号炉穴出土土器 (第38図22～26)

22は口縁部の破片である。丸みを帯びた口唇部である。外面にのみ条痕が認められる。

23～26は胴部の破片である。いずれも外面にのみ条痕が認められる。

第35号炉穴出土土器 (第38図27、28)

胴部破片である。27は内外面、28は外面にのみ条痕が認められる。

楕円形もしくは円形のものが大半を占めている。

土壙出土土器 (第43図)

いずれも胎土中に繊維を含む。

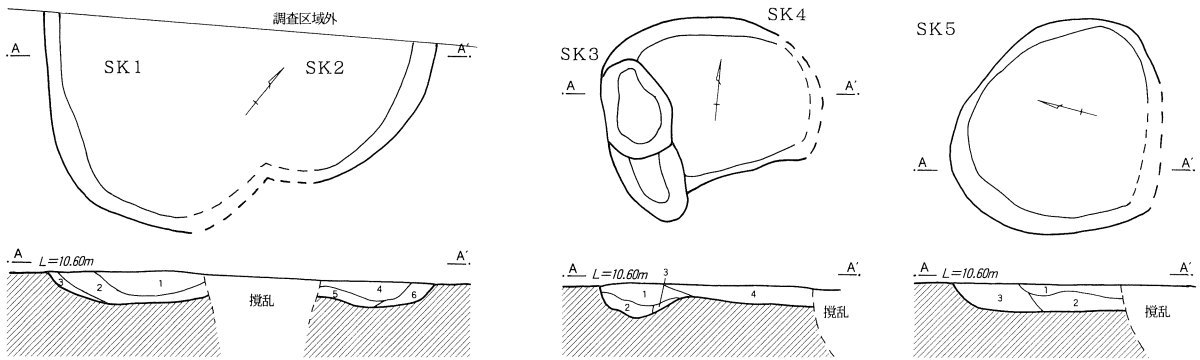
1は口縁部の破片で、文様のない土器である。内外面に条痕を施す。2は口縁部に斜位の細隆起線を施す。3は内外面に明瞭な条痕を施す。4は外面のみ、5は不明瞭ながら内外面に条痕を施す胴部破片である。

6は口縁部に斜位の細隆起線を施す。7は外面に擦痕、内面に条痕、8は内外面に条痕を施す胴部破片である。9は口縁部の破片で縦位、斜位の細隆起線を施す。10は胴部破片で文様帯下端の横位の細隆起線と斜位の細隆起線が見られる。11は外面に条痕を施した胴部の破片である。12は梯子状に細隆起線を施した胴部の破片である。13・15・17は内外面、14・16・18は外面に条痕を施した胴部破片である。

a (第44図1～17、32～34)

縦位の細隆起線を施す土器を一括する。1～12は平行する縦位の細隆起線を施す。2は横位の細隆起線の下位にも文様がある。13～17は縦位の細隆起線を横位、斜位の細隆起線でつなぐものである。

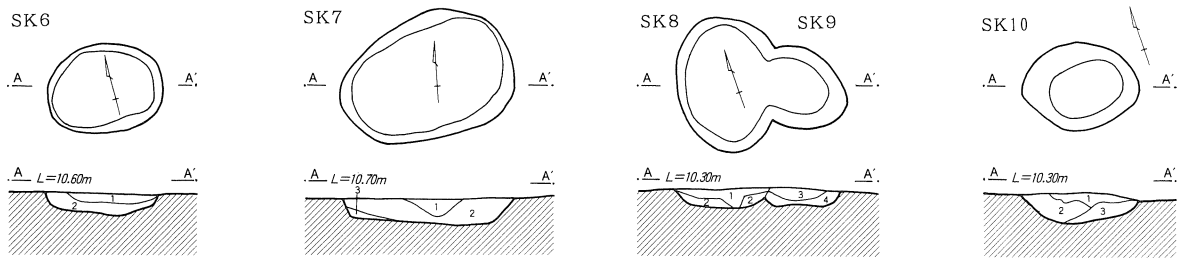
第39図 土壌 (1)



- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 径2~10mmのローム粒子・ブロックを少量含む。
- 5 黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 6 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。

- 1 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子、焼土粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 径2~8mmのローム粒子・ブロックを少量含む。

- 1 黒褐色土 径5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 黄褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。

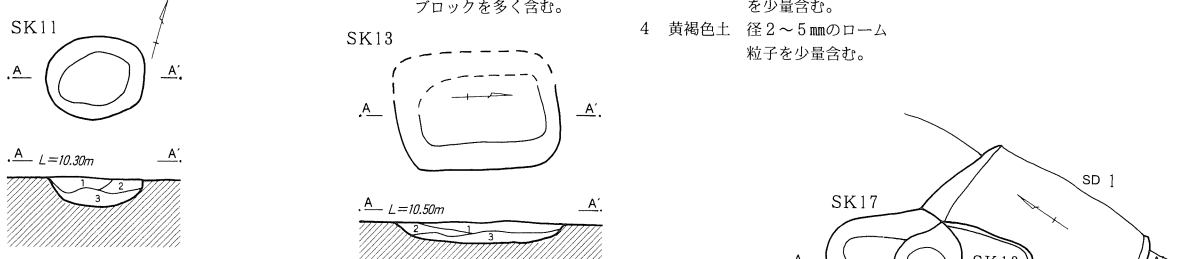


- 1 褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径2~5mmのローム・炭化物粒子を少量含む。

- 1 暗褐色土 径2mmのローム・焼土粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 3 黄褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。

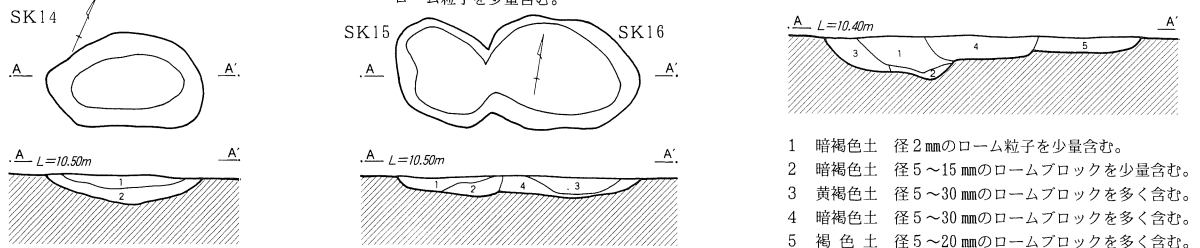
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を多く含む。
- 2 褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 4 黄褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。

- 1 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む。
- 2 黄褐色土 焼土をかすかに含む。
- 3 黄褐色土 焼土を少量含む。



- 1 暗褐色土 焼土、炭化物を多く含む。
- 2 暗褐色土 炭化物をかすかに含む。
- 3 黄褐色土 焼土、炭化物をかすかに含む。

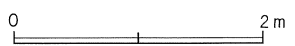
- 1 暗褐色土 径2mmのローム・炭化物粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 3 黄褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。



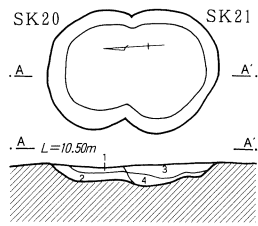
- 1 黄褐色土 径5~10mmのロームブロックを少量含む。
- 2 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。

- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 褐色土 径5~10mmのロームブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 4 黄褐色土 径5~10mmのロームブロックを多く含む。

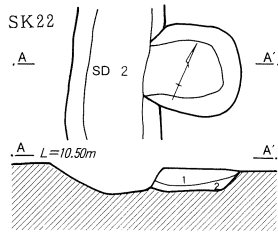
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 5 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



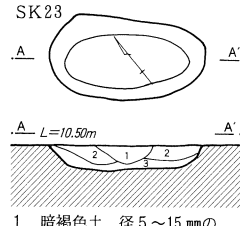
第40図 土壌 (2)



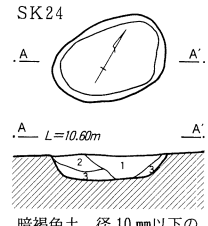
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



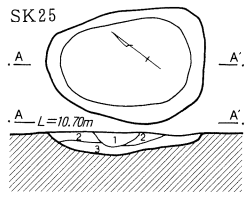
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



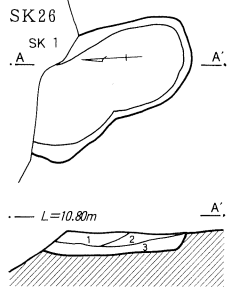
- 1 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを少量含む。



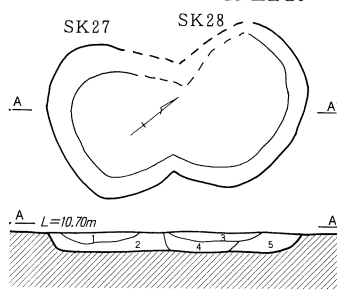
- 1 暗褐色土 径10mm以下のロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土 径30mm前後のロームブロックを含む。
- 3 黄褐色土 径80mm以下のロームブロックを極多く含む。



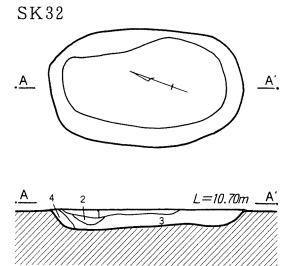
- 1 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を多く含む。径2mmの炭化物粒子を少量含む。
- 3 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



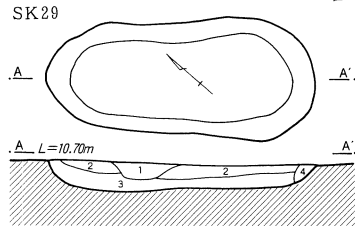
- 1 黒褐色土 径2mmのローム・焼土・炭化物粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を多く含む。径2mm以下の焼土・炭化物粒子を少量含む。
- 3 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



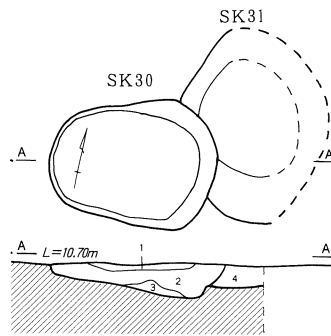
- 1 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を多く含む。径2mm以下の焼土・炭化物粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を多く含む。
- 4 暗褐色土 径5~25mmのロームブロックを多く含む。
- 5 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



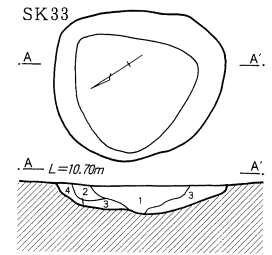
- 1 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。
- 3 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 4 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



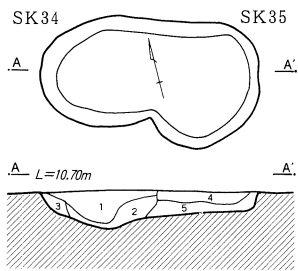
- 1 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 3 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 4 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



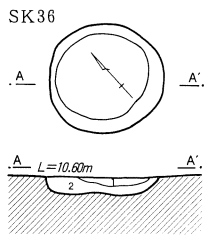
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 4 黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



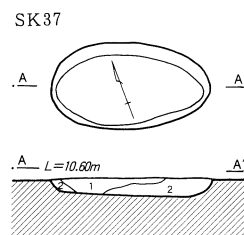
- 1 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。



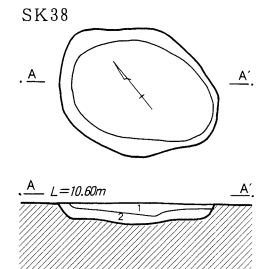
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。
- 3 褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 5 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



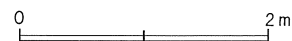
- 1 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



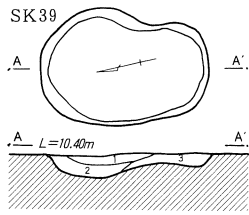
- 1 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を多く含む。
- 2 黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



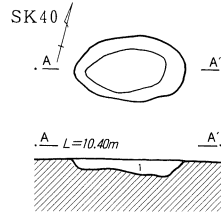
- 1 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



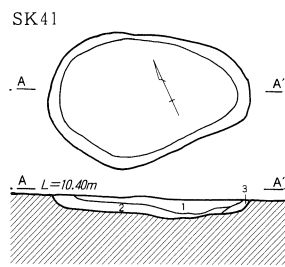
第41図 土壌 (3)



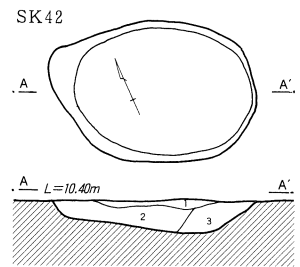
- 1 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 黄褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。



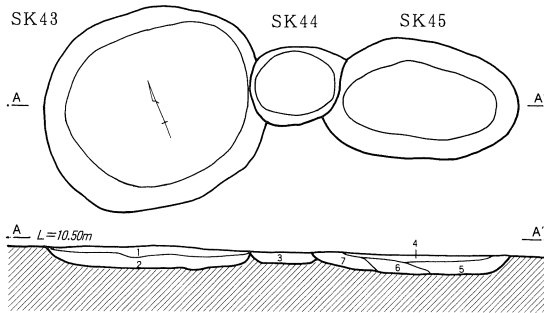
- 1 褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。



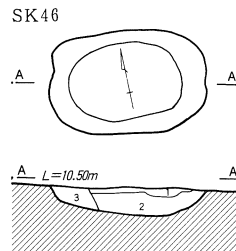
- 1 黒褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



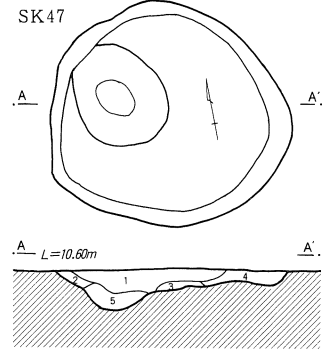
- 1 暗褐色土 径2mm以下のローム・炭化物粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径2~5mmのロームを少量含む。
- 3 黄褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。



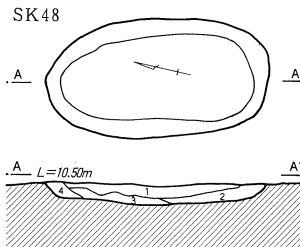
- 1 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 4 黒褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 5 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 6 黒褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 7 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



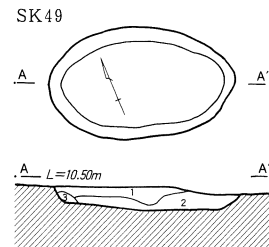
- 1 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



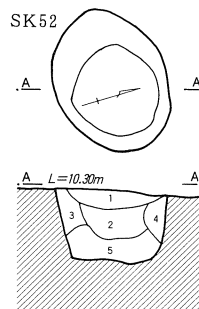
- 1 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 5 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを少量含む。



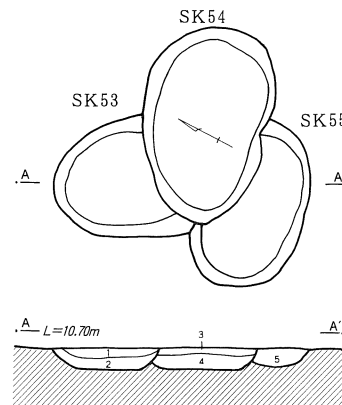
- 1 黒褐色土 径2mm以下のローム・炭化物粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 4 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



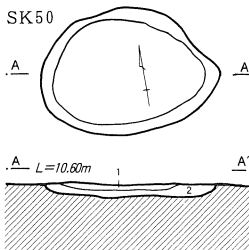
- 1 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 黄褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。



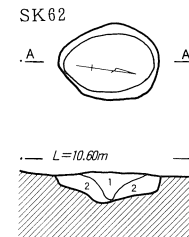
- 1 黒褐色土 径2mm以下のローム粒子を少量含む。
- 2 黒褐色土 径2mm以下のローム粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 5 黒褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。



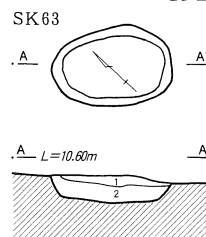
- 1 黒褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 2 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 4 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 5 灰黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



- 1 暗褐色土 径2mm以下のローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。



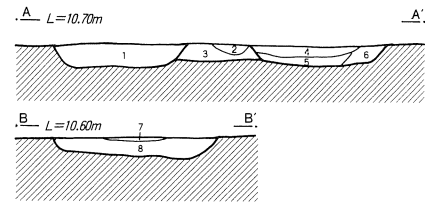
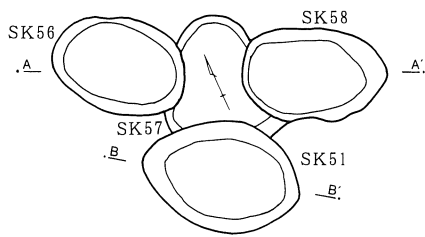
- 1 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



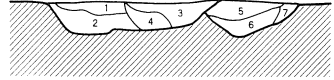
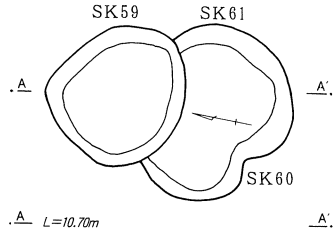
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。

0 2m

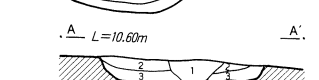
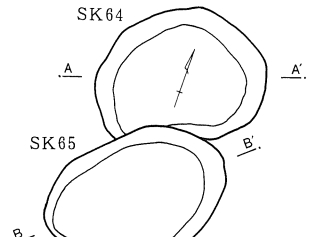
第42図 土壌 (4)



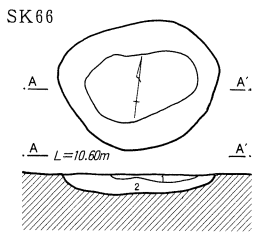
- 1 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 径2mmのローム・焼土・炭化物粒子を少量含む。
- 5 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
- 6 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 7 暗褐色土 径2mm以下のローム粒子を少量含む。
- 8 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



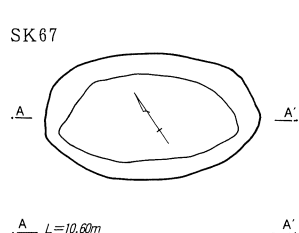
- 1 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。径2mm以下の炭化物粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 褐色土 ローム等を殆ど含まない。
- 4 褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。
- 5 黒褐色土 径5~10mmのロームブロックを少量含む。
- 6 褐色土 径5~30mmのロームブロックを非常に多く含む。
- 7 褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。



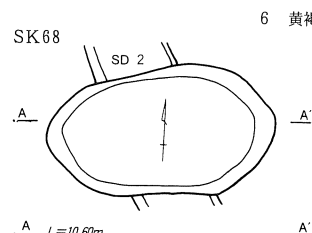
- 1 褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~15mmのを多く含む。
- 3 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 5 黄褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 6 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



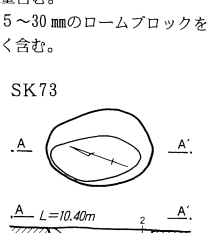
- 1 灰黄褐色土 径2mm以下のローム粒子を少量含む。
- 2 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



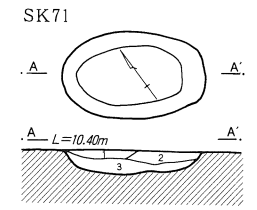
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を多く含む。
- 2 褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。
- 3 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



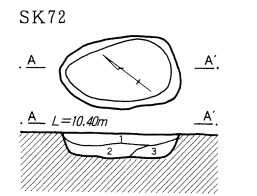
- 1 黒褐色土 径2~5mmのローム・炭化物粒子を少量含む。
- 2 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 3 黒色土 径2mmのローム・炭化物粒子を少量含む。



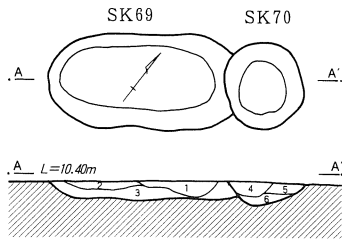
- 1 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。
- 3 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 4 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



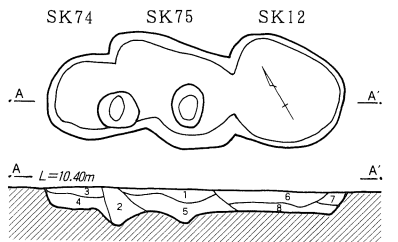
- 1 暗褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



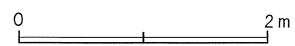
- 1 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 3 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。



- 1 黒褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 3 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 5 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 6 褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。



- 1 黒褐色土 径2mmのローム・炭化物粒子を少量含む。
- 2 褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。
- 3 褐色土 径5~15mmのロームブロックを多く含む。
- 4 黄褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 5 褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
- 6 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 7 暗褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
- 8 暗褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。

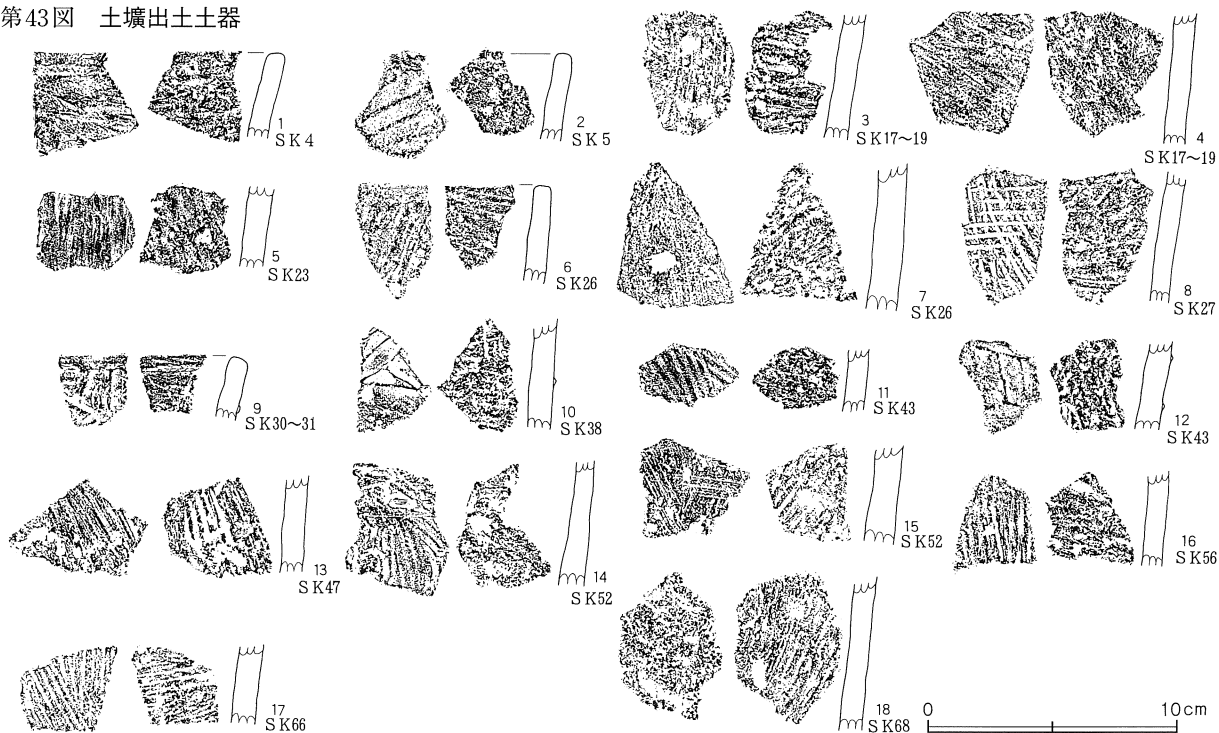


第3表 土壌一覽

土壌番号	挿図番号	グリッド	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	主軸方向	備 考
1	第39図	C-2	-	-	-	0.25	-	
2	第39図	C-2	-	-	-	0.21	-	
3	第39図	B-2	不整形	1.30	0.56	0.28	N-22° -W	
4	第39図	B・C-2	不整形	-	1.25	0.15	N-85° -E	
5	第39図	C-2	円形	1.80	-	0.23	-	
6	第39図	B-3	楕円形	0.94	0.70	0.16	N-85° -W	
7	第39図	B-3・4	楕円形	1.42	1.00	0.21	N-72° -E	
8	第39図	E-3	楕円形	1.06	-	0.14	N-20° -E	
9	第39図	E-3	楕円形	-	0.64	0.16	N-70° -W	
10	第39図	E-3	楕円形	0.94	0.70	0.24	N-71° -W	
11	第39図	E-3	楕円形	0.81	0.67	0.23	N-70° -E	
12	第42図	D・E-3	楕円形	0.96	0.86	0.16	N-40° -W	
13	第39図	D-2	隅丸方形	0.81	-	0.17	N-5° -W	
14	第39図	D-2	楕円形	1.28	0.75	0.23	N-65° -E	
15	第39図	D-2	楕円形	0.95	0.72	0.17	N-45° -W	
16	第39図	D-2	楕円形	1.20	0.88	0.16	N-80° -E	
17	第39図	D-2・3	楕円形	1.10	0.81	0.33	N-35° -W	
18	第39図	D-3	楕円形	-	0.58	0.17	N-35° -W	
19	第39図	D-3	不整形	1.72	-	0.11	-	
20	第40図	D-3	円形	0.95	-	0.12	-	
21	第40図	D-3	円形	0.98	-	0.17	-	
22	第40図	D-4	楕円形	-	0.72	0.20	N-80° -E	
23	第40図	D-4	楕円形	1.28	0.65	0.20	N-54° -W	
24	第40図	B-4	楕円形	0.95	0.61	0.20	N-46° -E	
25	第40図	C-4	楕円形	1.28	0.91	0.19	N-31° -W	
26	第40図	C-5	楕円形	-	0.73	0.19	N-26° -W	
27	第40図	C-5	楕円形	1.25	-	0.14	N-76° -W	
28	第40図	C-5	楕円形	1.30	-	0.14	N-25° -W	
29	第40図	C-5	楕円形	2.18	0.93	0.25	N-36° -W	
30	第40図	C-5	不整形	1.34	0.98	0.36	N-85° -E	
31	第40図	C-5	-	1.55	-	0.18	-	
32	第40図	C-5	楕円形	1.52	0.95	0.17	N-24° -W	
33	第40図	C-6	円形	1.38	1.17	0.25	-	
34	第40図	C-5	円形	-	0.88	0.30	-	
35	第40図	C-5	円形	1.00	-	0.19	-	
36	第40図	D-5	円形	0.92	0.87	0.12	-	
37	第40図	D-4・5	楕円形	1.29	0.70	0.15	N-69° -W	
38	第40図	D-5	楕円形	1.32	1.03	0.17	N-36° -W	
39	第41図	D-3	不整形	1.38	0.92	0.18	N-15° -E	
40	第41図	E-3	楕円形	0.90	0.52	0.12	N-75° -E	
41	第41図	D-3・4	楕円形	1.62	1.08	0.16	N-75° -W	
42	第41図	D-4	楕円形	1.67	1.12	0.25	N-65° -W	
43	第41図	D-4	楕円形	1.85	1.58	0.17	N-85° -E	
44	第41図	D-4	楕円形	(0.72)	0.61	0.09	N-70° -W	
45	第41図	D-4	楕円形	(1.44)	0.95	0.16	N-68° -W	
46	第41図	D-4	楕円形	1.24	0.81	0.23	N-75° -W	
47	第41図	D-4	円形	1.94	1.79	0.31	-	
48	第41図	D-4	楕円形	1.79	0.93	0.18	N-13° -W	
49	第41図	D・E-4	楕円形	1.50	0.90	0.19	N-67° -W	
50	第41図	D-4	楕円形	1.43	1.02	0.10	N-81° -W	
51	第42図	D-5	楕円形	1.29	0.90	0.16	N-53° -W	
52	第41図	E-3	楕円形	1.17	0.90	0.57	N-85° -E	

土壙番号	挿図番号	グリッド	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	主軸方向	備考
53	第41図	D-5	楕円形	-	0.95	0.20	N-25°-W	
54	第41図	D-5	楕円形	1.54	1.02	0.20	N-70°-E	
55	第41図	D-5	楕円形	1.33	-	0.18	N-75°-E	
56	第42図	D-5	楕円形	1.08	0.74	0.18	N-50°-W	
57	第42図	D-5	不整形	1.10	-	0.12	-	
58	第42図	D-5	楕円形	1.18	0.72	0.15	N-65°-W	
59	第42図	D-5	円形	1.15	1.10	0.28	-	
60	第42図	D-5	-	-	-	0.19	-	
61	第42図	D-5	-	1.20	-	0.29	-	
62	第41図	D-5	楕円形	0.81	0.61	0.23	N-10°-W	
63	第41図	D-4・5	楕円形	0.96	0.64	0.21	N-41°-W	
64	第42図	E-5	楕円形	1.38	1.00	0.18	N-72°-E	
65	第42図	E-5	楕円形	1.52	0.99	0.17	N-50°-E	
66	第42図	D・E-5	楕円形	1.30	0.99	0.16	N-82°-E	
67	第42図	D・E-5	楕円形	1.72	1.00	0.20	N-55°-W	
68	第42図	D-5	楕円形	1.84	1.02	0.12	N-88°-E	
69	第42図	D-3	楕円形	1.43	0.74	0.18	N-53°-E	
70	第42図	D-3	楕円形	0.70	0.62	0.16	N-40°-W	
71	第42図	D・E-3	楕円形	1.18	0.68	0.20	N-56°-W	
72	第42図	D-3	楕円形	0.98	0.58	0.18	N-40°-W	
73	第42図	D-3	楕円形	0.86	0.60	0.30	N-20°-W	
74	第42図	D-3	-	-	0.68	0.32	-	
75	第42図	D-3	-	1.24	0.79	0.28	-	

第43図 土壙出土土器



1～10、13は口縁部の破片である。1～3、5～8、10、13は角頭状の口縁部、4、9は口唇部が丸みを帯びている。

15～17は縦位の細隆起線が認められる胴部の破片である。幅広の文様帯を構成する。

b (第44図18～24)

斜位の細隆起線文を多用し、三角形などの幾何学的な構成をとるもの。18、19は口辺部に三角形区画の文様を施すものと思われる。角頭状の口縁部である。20～24は斜位の細隆起線を施す。

c (第44図25～31)

斜位の梯子状の文様によって各種の文様を構成するもの。いずれも胴部の破片である。

d (第44図35)

細隆起線よりやや太い横位の隆線が施されている。

第2類 (第44図36、37、第45図1～15)

充填の要素に沈線文を用いる土器を一括する。

a (第45図1～5)

幅の狭い文様帯を設定し、口縁部に斜沈線等を施すもの。1、3は角頭状、2は内削ぎ状の口縁部。

b (第44図36、37、第45図6～10)

幅の広い文様帯を設定し、区画内に沈線による文様を施すもの。

第44図36、37は口縁部の破片である。角頭状の口縁部形態である。第44図36は太い縦位の沈線と多条の細沈線による菱形文様を施し、その下位に横線間の刺突を施す。37は横位の隆帯を巡らせ、口縁部に斜沈線、隆帯の下位に縦位沈線と三角形区画の文様を施す。口唇部に刻みを施す。

第45図6は細隆起線も施す。7～10は縦位に区画する沈線、斜位の沈線を施す。6は丸みを帯びた口唇部、7は平坦な口唇部で刻みを施す。

c (第45図11～15)

沈線による梯子状の文様によって文様を構成する。15は口縁部の破片で角頭状の口縁部である。

第4類 (第45図16～43、第46図、第47図1～12)

文様をもたない土器を一括する。

第45図16～35は口縁部の破片である。20～22、25、26、30、33、34などは口唇部が丸みを帯びており、他はおおむね角頭状の口縁部で口唇部に平坦部を有する。各種の条痕や擦痕状の調整を施す。

第45図36～43、第46図は胴部、底部の破片である。

第45図36～40は内外面ともに条痕が認められないも

ので、擦痕状の調整を施す。第45図41～43は外面に条痕が認められず、内面に条痕を施すもの。第46図1～7は外面に条痕を施し、内面に条痕が認められないもの。第46図8～28は内外面に条痕をほどこす胴部破片である。各種の条痕を施す。29～32は底部もしくは底部付近の破片である。

第2群土器 (第47図13～17)

前期の土器を一括する。13は関山式の胴部破片である。組紐による縄文を施す。14、15は諸磯式である。14は半截竹管文を施した胴部の破片である。15は口縁部が「く」の字状に肥厚する。口縁部には矢羽状沈線、貼付文を施す。16、17は十三菩提式の胴部破片である。同一個体である。16は結節沈線によって曲線的なモチーフを施す。17は横位の区画と曲線的なモチーフを施す。

第3群土器 (第47図18～38)

中期の土器を一括する。

18～23は中期前半の土器である。18は突起、爪形文を施す。19は楕円区画文を施す。20、21は隆帯、角押文を施す。22は隆帯と爪形文、23は波状沈線と爪形文を施す。

24～38は中期後半の土器である。24～27はキャリパー形深鉢形土器の口縁部である。隆帯と縄文を施す。28～30は単純な形態の深鉢形土器である。28は沈線と縄文、29は隆帯と縄文、30は撚糸文を施す。31～34は頸部付近の破片である。隆帯を施す。35は撚糸文、36は沈線と縄文、37は隆帯、38は条線を施した胴部破片である。

第4群土器 (第47図39～47)

後期の土器を一括する。

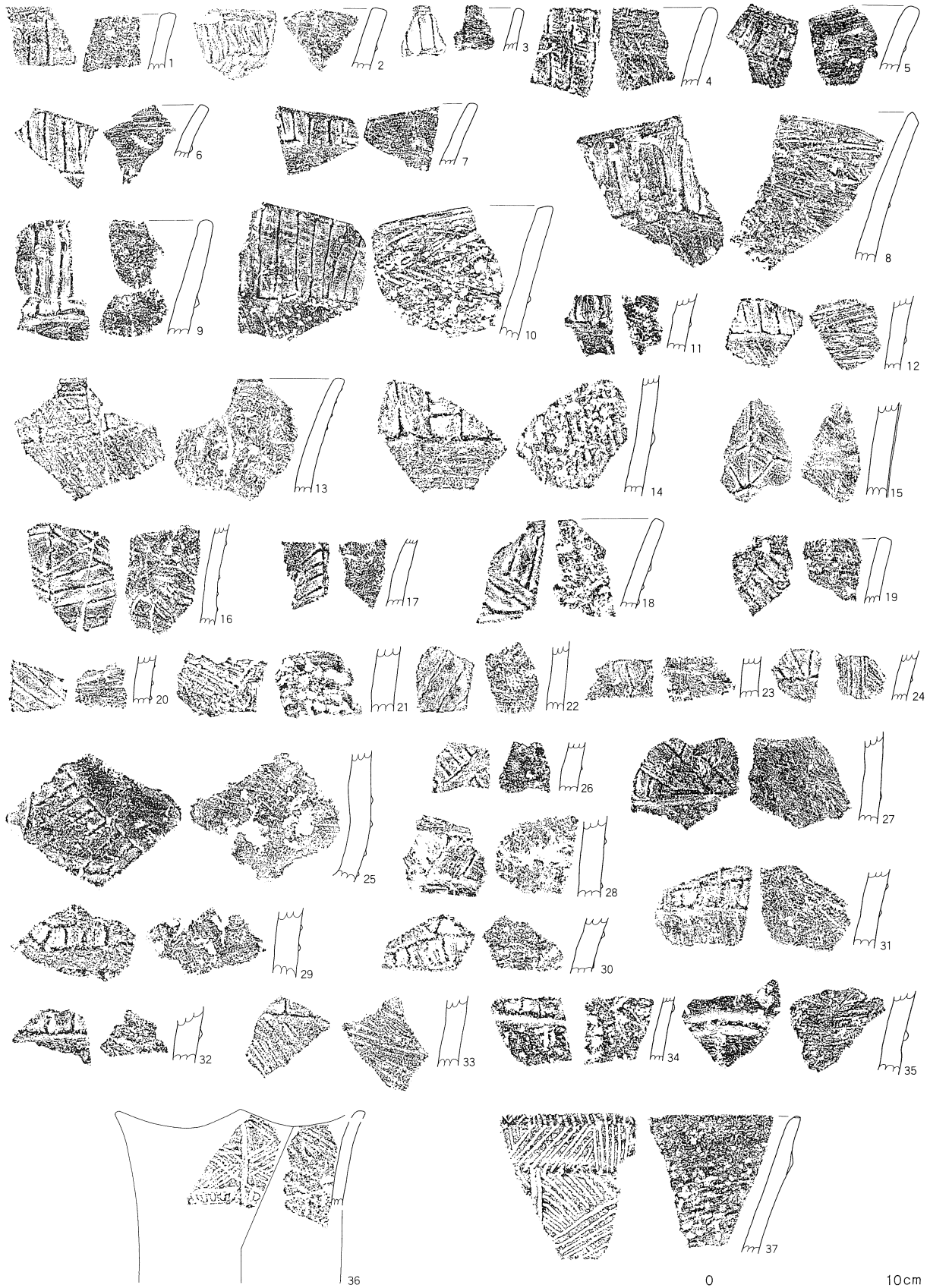
39は称名寺式である。沈線間に縄文を充填する。40～46は器面に縄文のみを施した後期前葉の土器である。47は後期中葉の土器で粗い縄文を施す。

(5) 石器

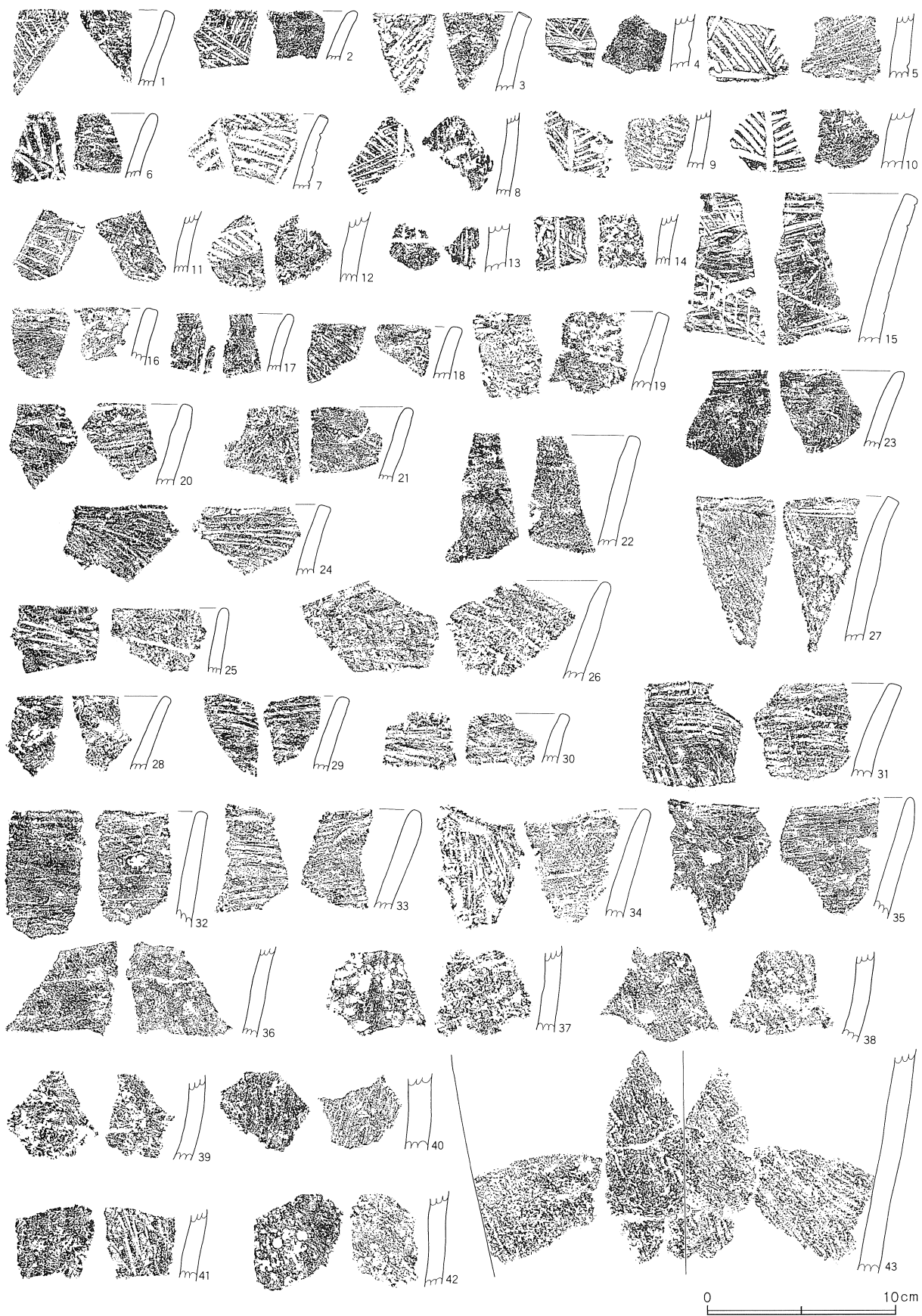
1～3は石鎌である。いずれも基部には緩い抉りが認められる。2は先端を欠損する。

4、5は打製石斧である。形態は撥形である。4は完形である。5は正面に多く自然面を残している。

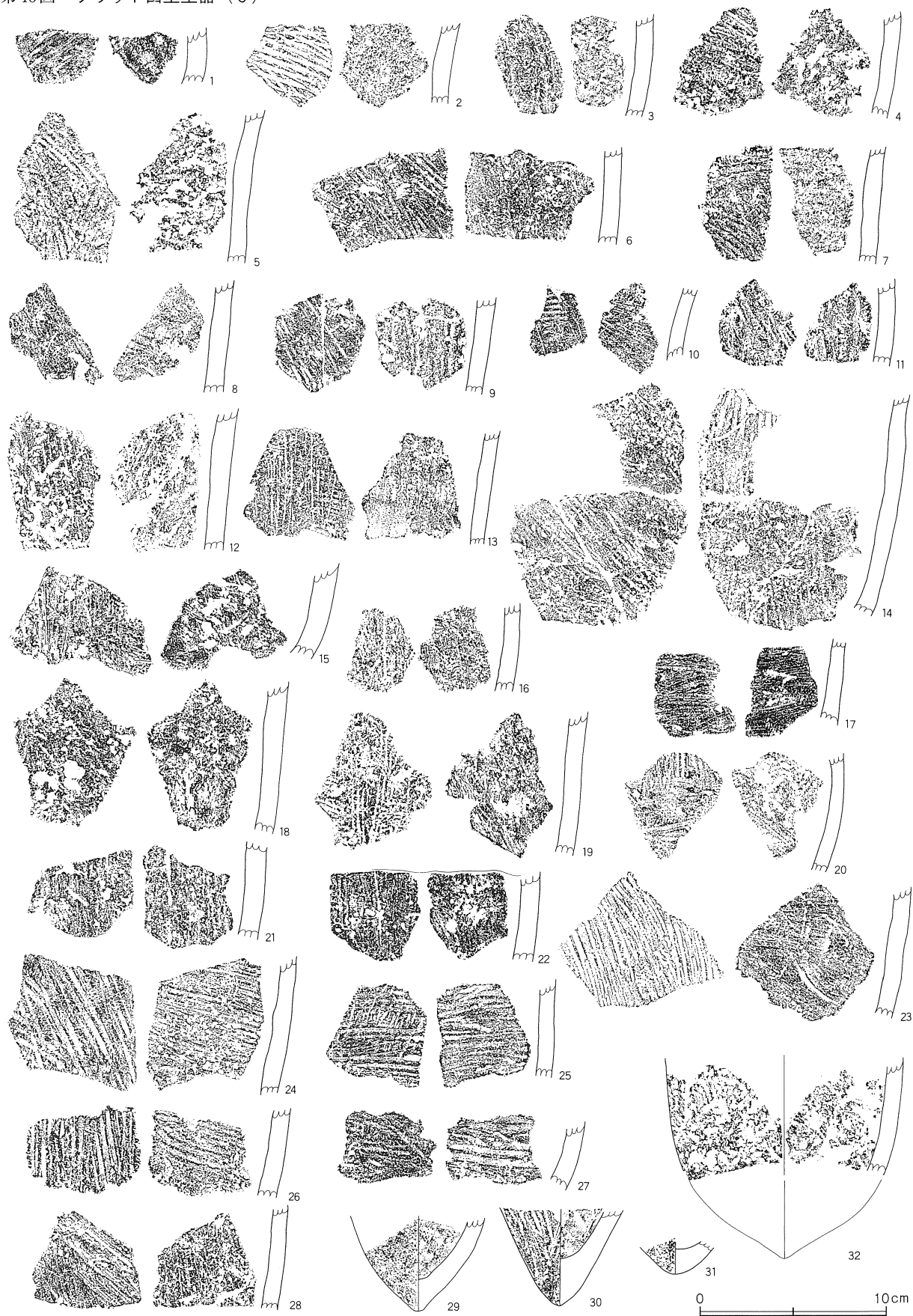
第44図 グリッド出土土器（1）



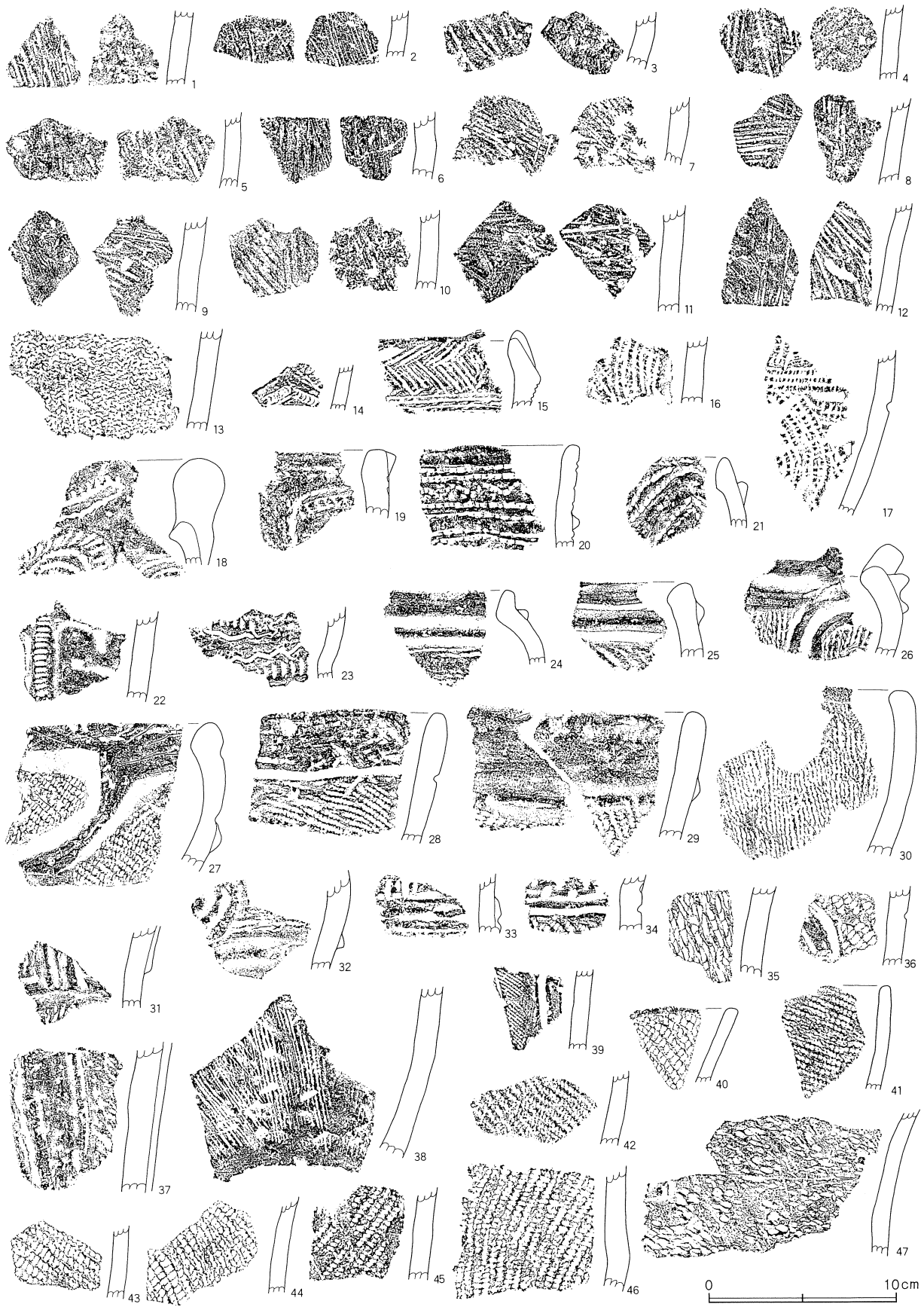
第45図 グリッド出土土器（2）



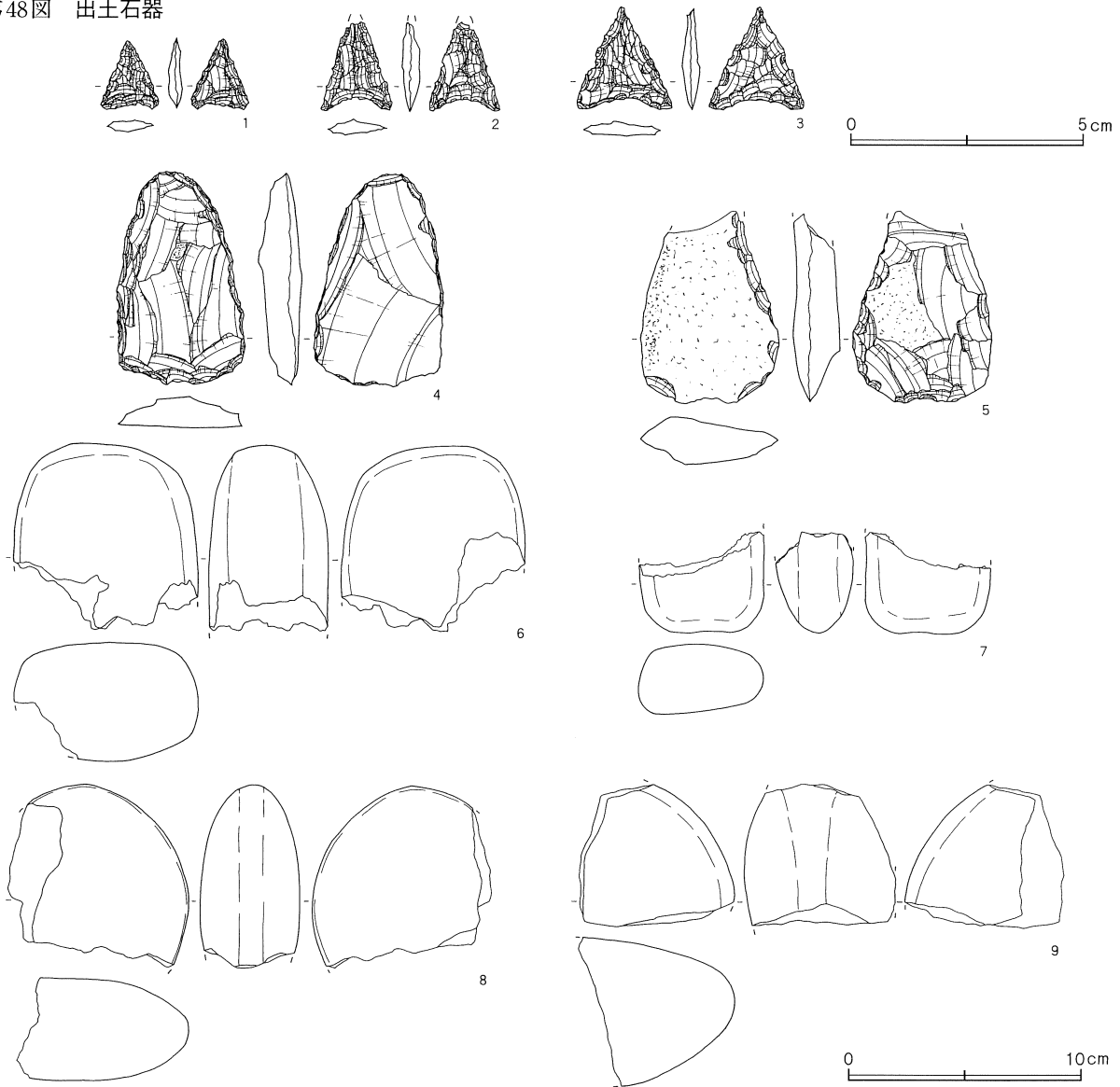
第46図 グリッド出土土器 (3)



第47図 グリッド出土土器(4)



第48図 出土石器



第4表 石器観察表

番号	器種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	石鏃	炉穴群 2	1.5	1.2	0.3	0.50	チャート	
2	石鏃	炉穴群 2	(1.85)	1.5	0.4	0.70	チャート	
3	石鏃	第11・12号炉穴	2.2	2.0	0.4	1.15	チャート	
4	打製石斧	C-5グリッド	9.0	5.4	1.9	113.6	粘板岩	
5	打製石斧	S H 1	(8.1)	5.9	2.0	109.2	砂岩	
6	磨石	S D 1	(7.9)	(7.8)	5.1	407.6	安山岩	
7	磨石	第11・12号炉穴	(4.3)	5.4	(3.3)	93.6	閃緑岩	
8	磨石	炉穴群 2	(7.0)	(7.6)	4.3	367.9	安山岩	
9	磨石	炉穴群 2	(6.0)	(6.6)	(6.2)	250.1	砂岩	

6～9は磨石である。いずれも欠損している。1、2、8、9は炉穴群2。3、7は第11・12号炉

穴から出土した。4は遺構外、5、6は時期の異なる後世の遺構中から混在して出土したものである。

2. 古墳時代

第1号方形周溝墓（第49図～第53図）

C-6・7、D-6・7グリッドに位置する。第5号周溝墓と北溝を、第6号周溝墓と東溝を連結する。東・西・南溝の一部が攪乱されていた。主軸方位は、N-29°-Wである。全体の平面形は各辺がやや丸みを帯びた方形である。方台部は北西-南東方向がやや長い整った方形である。周溝は全周する。規模は、9.2m×8.0mである。

埋葬施設は、方台部の中央に検出された不整な長方形の土坑である。主軸方向2.98m、短軸方向1.75mで、深さは15cm前後と浅い。覆土は自然の成因によるものと考えられた。遺物は出土していない。

周溝は幅1.2～2.0mで、北・東溝が1.3～1.5mと細く、特に北東コーナー付近が狭くなっている。断面形はほぼ逆台形で、立ち上がりは方台部側がやや急になっている。深さは北溝が浅く25cm、それ以外は40～50cmである。底面はほぼ平坦で、北溝に2箇所の中土坑がある。西側の溝中土坑は不整な長楕円形で、長軸2.1m、短軸1.0m、深さ20～40cmで、埋め戻された可能性がある。東側の溝中土坑は長軸1.4m、短軸1.2m、深さ50cmである。覆土は自然堆積である。

実測可能な遺物は壺6点と台付甕1点、鉢1点で、図示したもの以外に壺の細片が出土した。第53図4は北溝の溝中土坑西側の方台部からの流れ込みである確認面直下から出土した。1・2は南西コーナーの、3・5は北東コーナーの、いずれも底面から10cmほど浮いた状態で出土した。6は東溝の肩から10cmほど浮いた状態で出土した。いずれも遺棄あるいは投棄とは考え難く、1～5は方台部からの流れ込みと考えられる。4は方台部からの転落の可能性もある。6は周溝外側からの流れ込みの可能性もある。

第53図1・4は素口縁の壺である。相似した土器で、外面は縦位のヘラミガキ、内面は丁寧なヘラナデである。1と2は赤彩され、同一個体の可能性がある。3は底部に内側からの焼成後穿孔が施される。4は1と

相似の壺である。5は赤彩され、肩部に単節のLR-RLの縄文が横位に2段施され、上段の下端と下段の上端にS字状の結節文が施される。縄文の下位には、山形にヘラによる沈線が施される。縄文施文の部分を除いて、横位のヘラ磨きが施され赤彩される。

6は壺の口縁部で、端部に粘土が2重に貼付されている。

第2号方形周溝墓（第54図～第57図）

C・D-8・9グリッドに位置する。北側2mに第6号周溝墓が、東側1mに第3号周溝墓がある。方台部の西側半分は攪乱により南溝の大部分と、北・東・西溝の一部が攪乱により壊されていた。主軸方位は、N-38°-Wである。全体の平面形は各辺がやや丸みを帯びた方形と考えられる。方台部は北西-南東方向がやや長い整った方形である。周溝は全周する。規模は、7.8m×7.4mである。

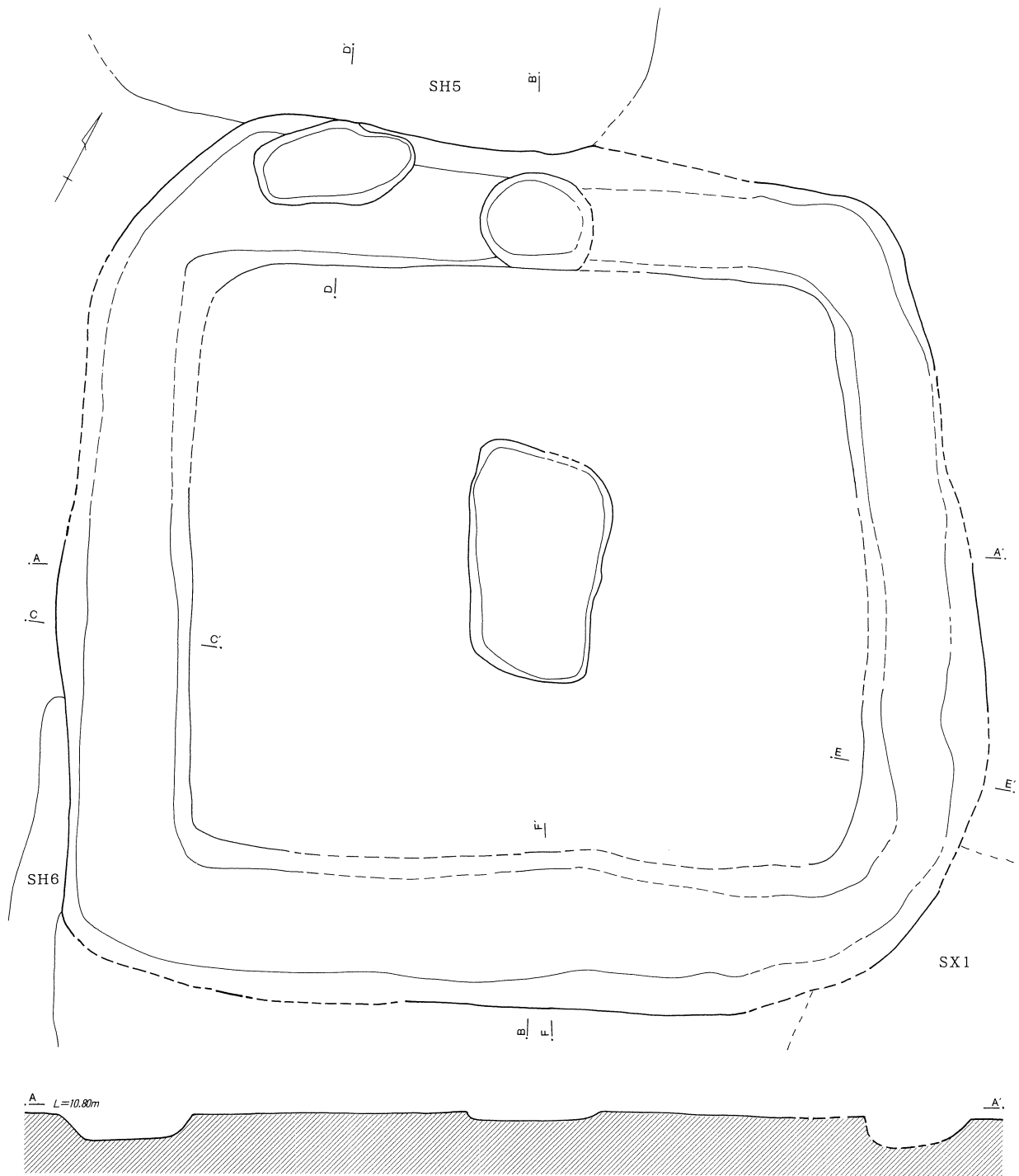
埋葬施設は、方台部の中央に検出された長方形の土坑である。主軸方向2.54m、短軸方向1.38mで、深さは15cm前後と浅い。底面は平坦であった。覆土はローム土を含み、施設が崩れたものである可能性がある。遺物は北西側からガラス小玉4点が、2点は底面に接して、2点は確認面直下から出土した。この埋葬施設の覆土をすべて3mm方眼のフルイにかけて、玉類の検出を図った結果、第56図5・6が見つかった。

周溝は幅1.5～1.6mのほぼ均等な幅である。断面形はほぼ逆台形で、立ち上がりは方台部側がやや急になっていた。深さは25～30cmで、底面はほぼ平坦であった。覆土は1・2・4層が方台部からの、3層が外周からの流れ込みで、4～7層は周溝の立ち上がり部分の崩落土と考えられる。

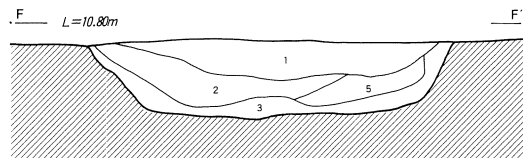
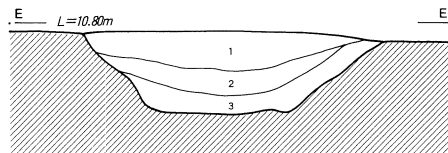
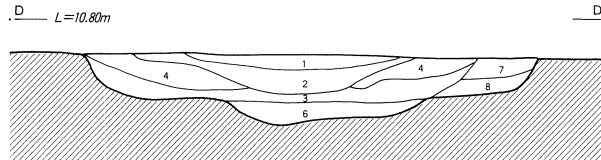
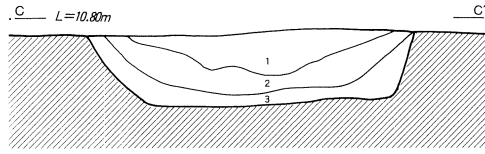
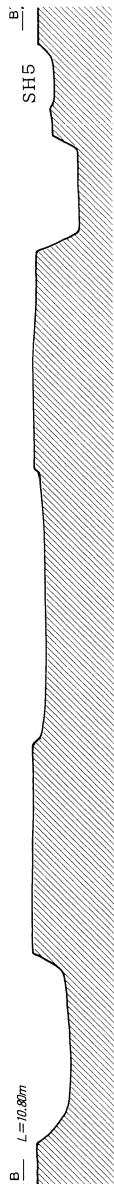
第56図1～5はガラス玉で、いずれも紺色である。1、2、4はニゴリ感があり、3、5は輝度、透明感がある。

微細に観察すると素材中に微細な気泡を含んでいて、4はこれが表面に露出して痘痕状に荒れた部分が

第49图 第1号方形周溝墓(1)

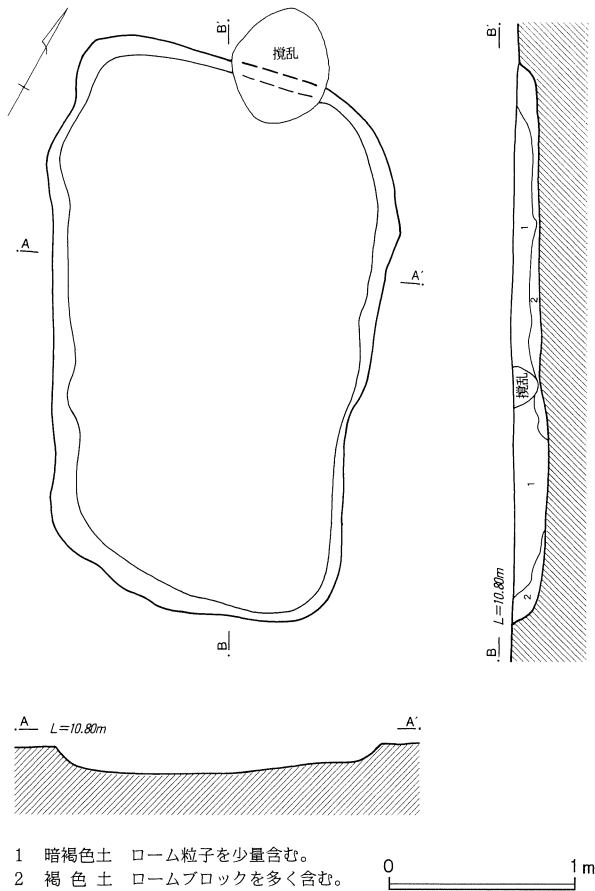


0 2m



- 1 暗褐色土 ローム細粒を霜降り状に含む。
- 2 黒褐色土 ローム細粒を霜降り状に含む。
- 3 黒褐色土 ローム細粒・ブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 ローム細粒をやや多く、霜降り状に含む。
- 5 黒色土 ローム細粒を霜降り状に含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロックを極く多く含む。
- 7 暗褐色土 ローム細粒を含む。
- 8 黄褐色土 ローム細粒・ブロックを多く含む。
暗褐色土を含む。

第50図 第1号方形周溝墓(2)



目立っている。1と4は、素材中の不純物であろうか、白い筋状の部分が紐孔の穿孔方向と同一方向に認められる。

まだ材料が柔らかいうちに、何か平らな面のある工具で紐の周囲を押さえており、紐孔の周囲に幅0.7～1.5mmの「面」が全ての玉に形成されている。

6は極細の管玉である。材質は赤色の瑪瑙製で、側面には研磨による幅の狭い「面」(最大幅1mm)が穿孔方向と同一方向に16面形成されている。

ガラス玉、管玉、それぞれの寸法、重量については別表のとおりである。外径、孔径は最大値と最小値を示した。また、ガラス玉(1～5)は成分分析を実施したので、その報告も併せて参照されたい。

出土土器は僅少で、実測可能なものは壺1点のみである。西コーナーの方台部側、底面から10cm前後浮いて横転した状態で出土した。方台部から転落したもの

と考えられる。

第57図1は縦長の壺である。外面の上半と、内面の所々に煤が付着する壺である。相似した土器で、外面は縦位のへラミガキ、内面は丁寧なへラナデである。底部の内面は2次的な被熱により、赤変しボロボロになっている。

第3号方形周溝墓(第58図～第60図)

D-7・8、E-8グリッドに位置する。北側13mに第1号周溝墓が、西側1mに第2号周溝墓がある。遺構の南側の方台部の大部分、南西溝の南側半分と北西溝・北東溝の一部が攪乱により壊されていた。攪乱が著しく、中心埋葬施設は検出されていない。主軸方位は他の周溝墓と同様とすれば、N-34°-Wである。全体の平面形は各辺がやや丸みを帯びた方形と考えられる。方台部は軸方向の規模を計測できる部分が壊されているため確実ではないが、遺存している部分を参考にすると6.7m程度と考えられる。遺構の西側の様相からは整った方形と考えられる。

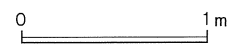
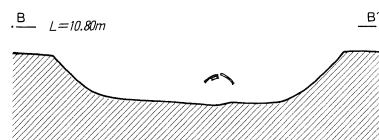
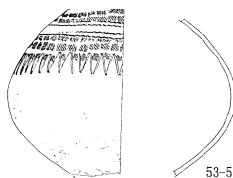
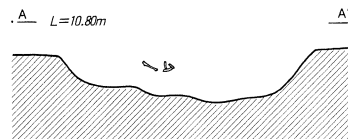
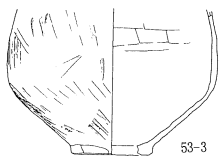
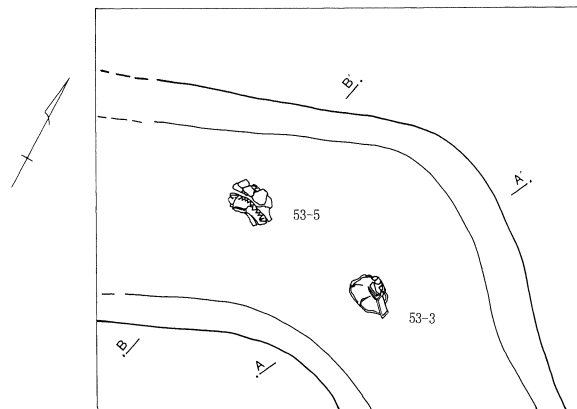
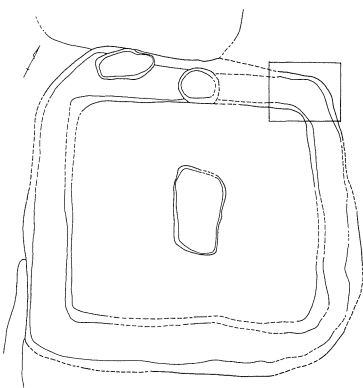
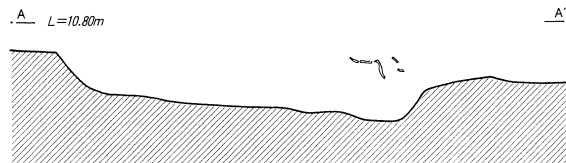
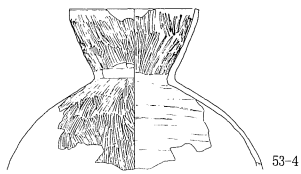
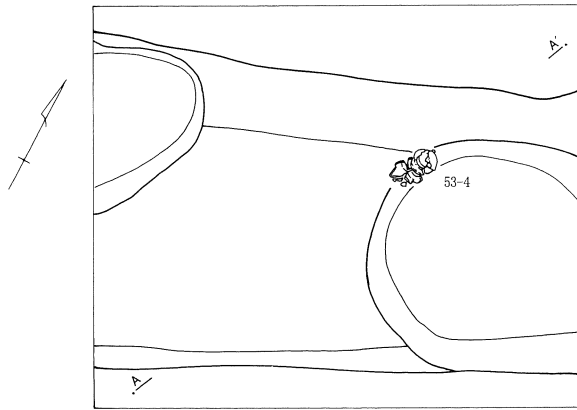
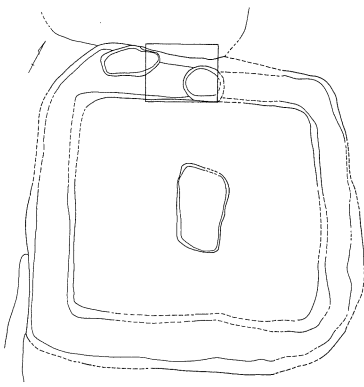
周溝は幅1.2～1.5mでほぼ均等な幅である。断面形は浅めのU字形で立ち上がりは方台部側が急になっていた。深さは20～50cmで、北東溝がやや浅めである。底面はほぼ平坦であった。覆土は5層が方台部の盛土の崩落土、4層が方台部側からの流れ込みと考えられる。

遺物は僅少で、実測可能なものは壺2点、台付甕2点のみである。第60図1は北東溝の北コーナー側の中央底面から若干浮いた状態で、2は北西溝の西コーナー側の底面から10cm前後浮いた状態で出土した。いずれも方台部からの転落、流れ込みと考えられる。

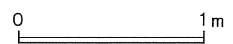
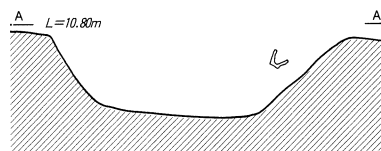
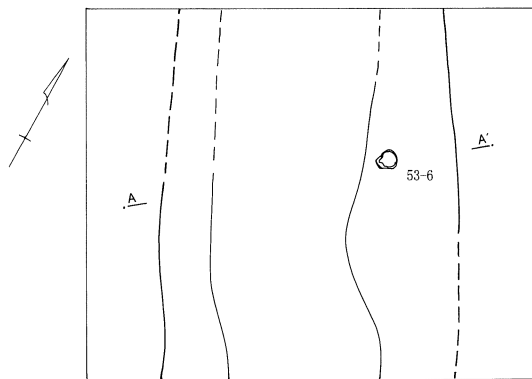
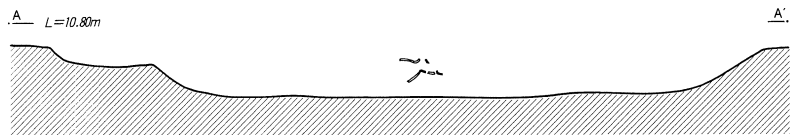
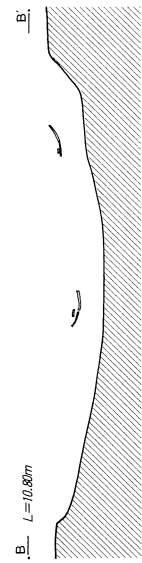
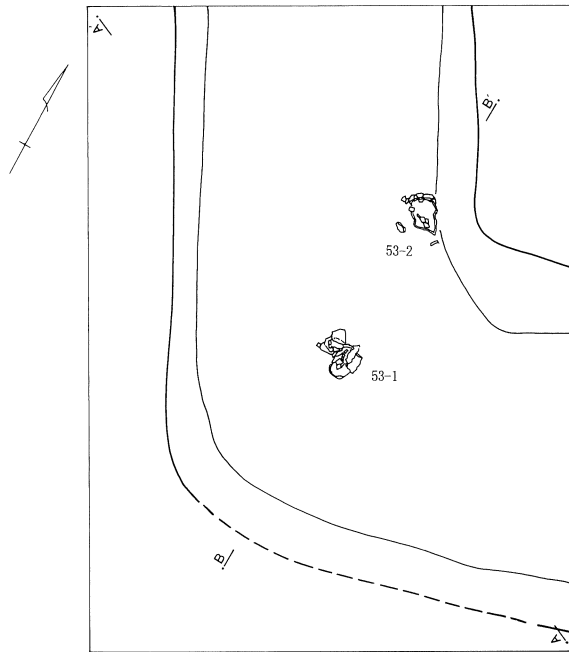
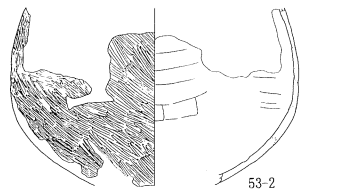
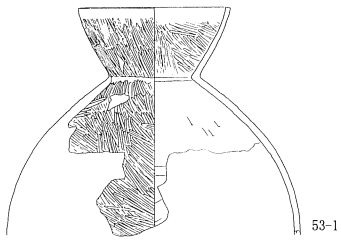
第60図1は、焼成後の内側からの底部穿孔が施されるもので、外面には木口状工具の当たった痕跡が多く残る。1・2とも内外面に少量の煤が付着する。

3・4は台付甕である。3は口縁端部に面を持つもので、外側から断面形の丸い棒状工具による押捺が施される。4は縦位の刷毛目が施された脚台部の破片である。

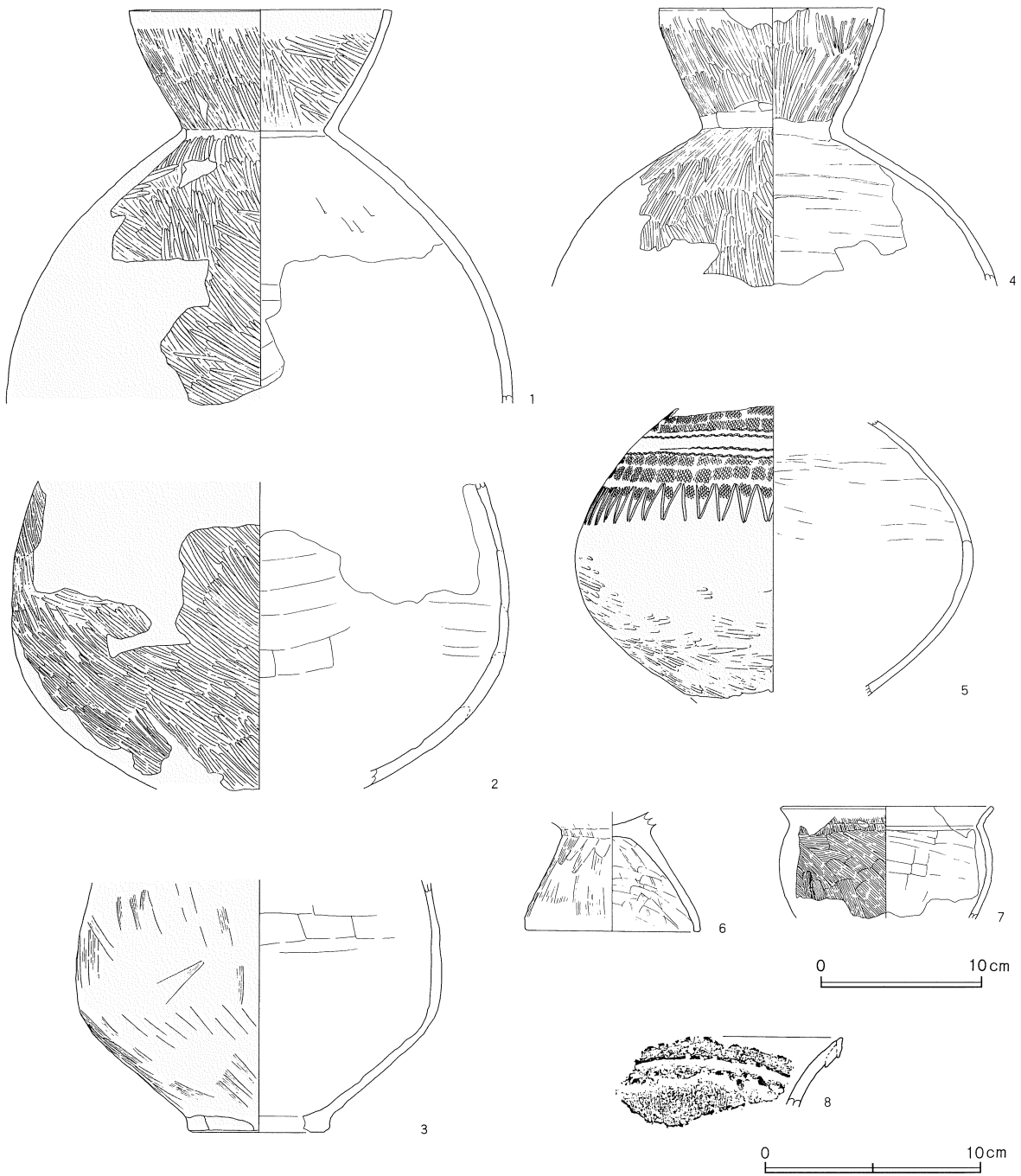
第51图 第1号方形周溝墓(3)



第52図 第1号方形周溝墓(4)



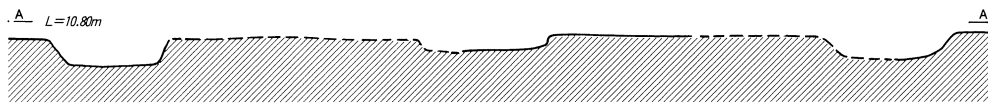
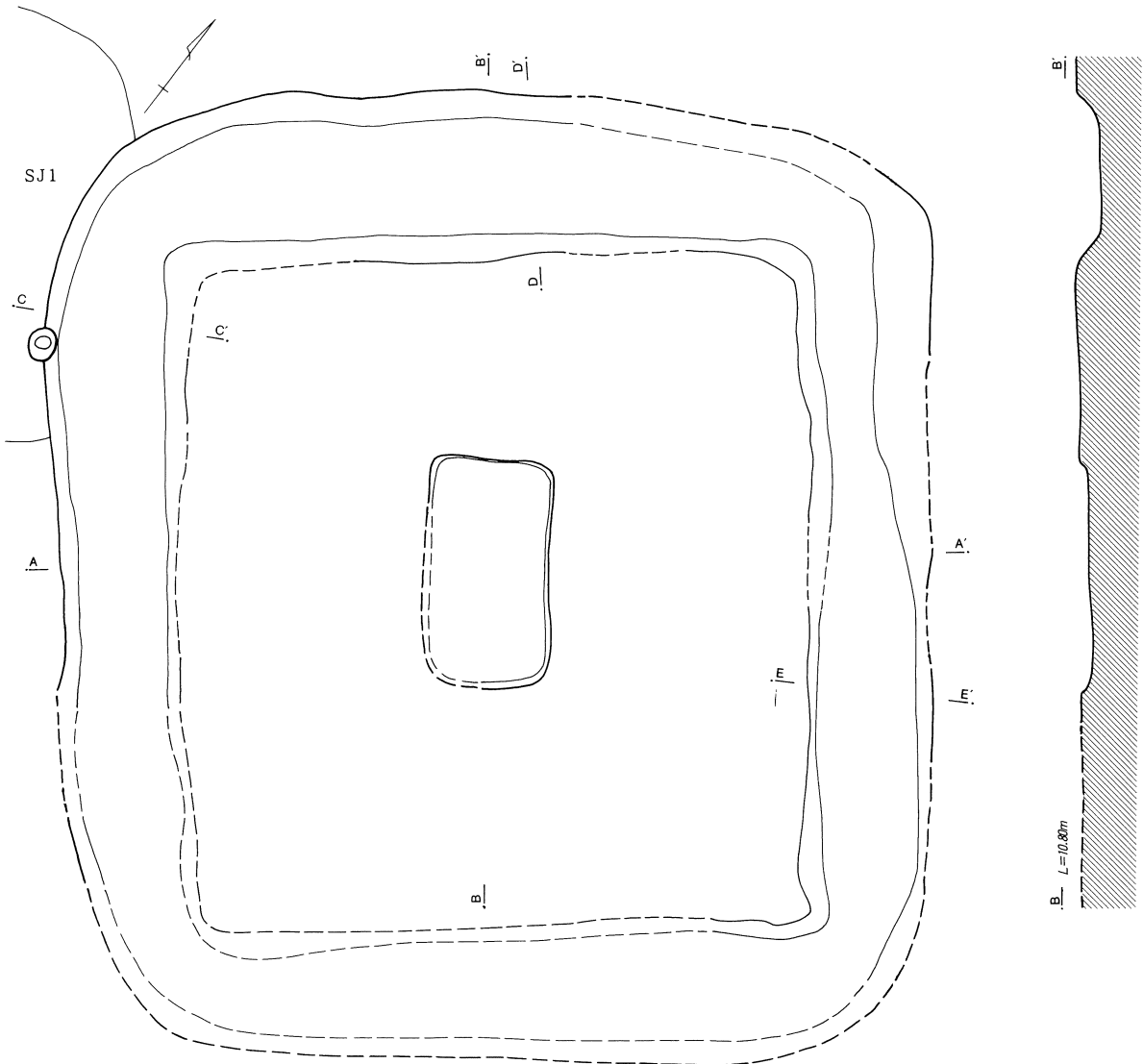
第53図 第1号方形周溝墓出土土器



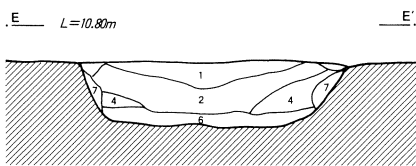
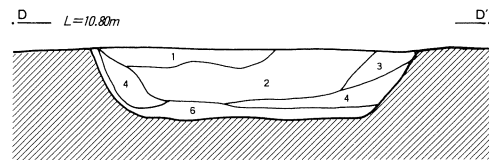
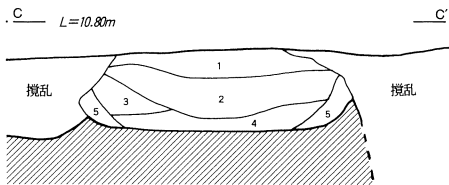
第5表 第1号方形周溝墓出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(16.4)	24.0		A~E	1	灰白	30	No.4、赤彩
2	壺		18.8		A~E	1	灰白	30	No.5、赤彩
3	壺		15.5	(8.8)	A~E	2	にぶい黄橙	40	No.1、赤彩、底部穿孔
4	壺	(14.0)	12.0		A~D	1	にぶい黄橙	20	No.3、赤彩
5	壺		17.5		A~E	1	にぶい黄橙	30	No.2、赤彩
6	台付甕		7.3	11.0	A~E	1	にぶい黄橙	90	No.6
7	鉢	(13.4)	7.0		A~D	1	黄褐色	25	

第54図 第2号方形周溝墓（1）



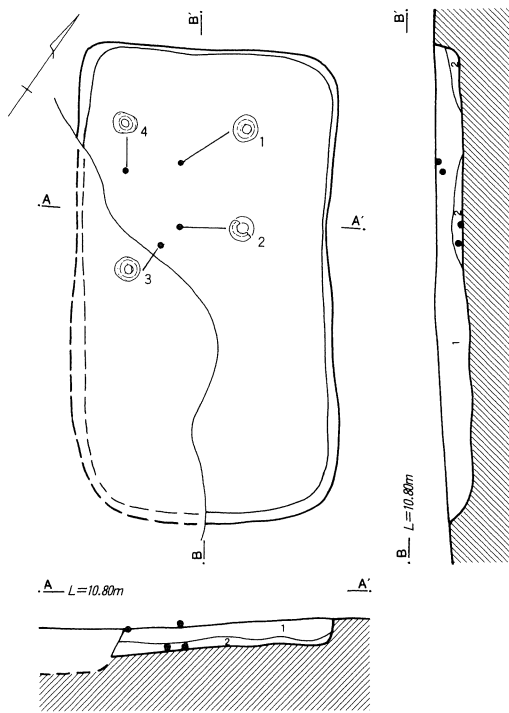
0 2 m



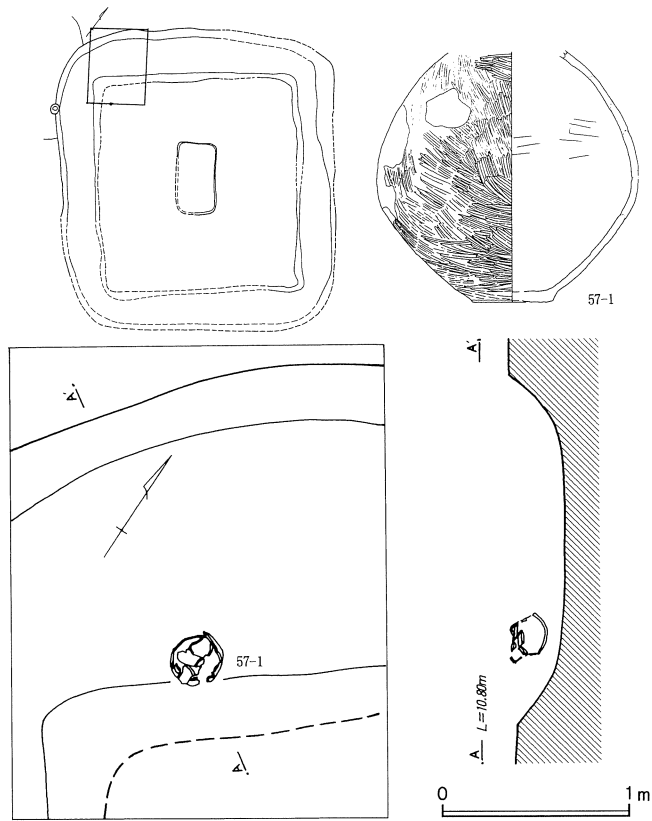
- 1 暗褐色土 ローム細粒を霜降り状に含む。
- 2 黒褐色土 ローム細粒を霜降り状に含む。
- 3 黒褐色土 ローム細粒を霜降り状に含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 5 暗褐色土 ローム細粒、ロームブロックを多く含む。
- 6 褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 7 黄褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。崩落土。

0 1 m

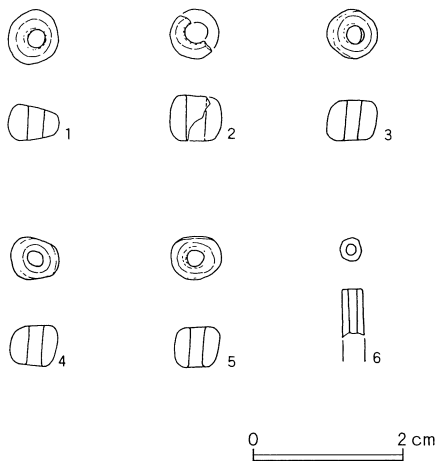
第55図 第2号方形周溝墓(2)



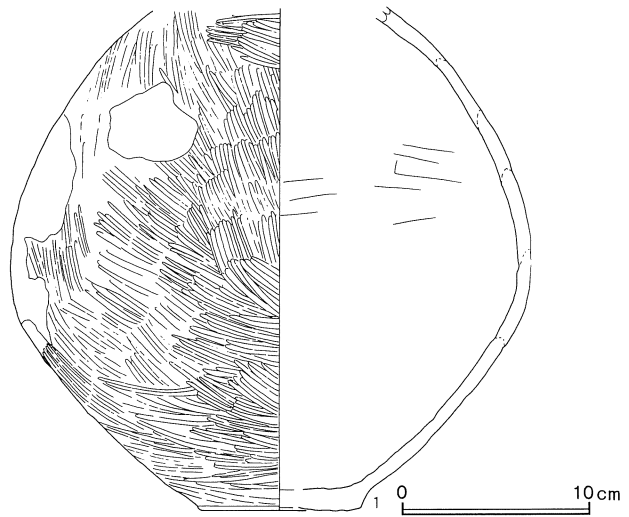
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。所々にロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを1層より多く含む。



第56図 第2号方形周溝墓出土玉類



第57図 第2号方形周溝墓出土土器



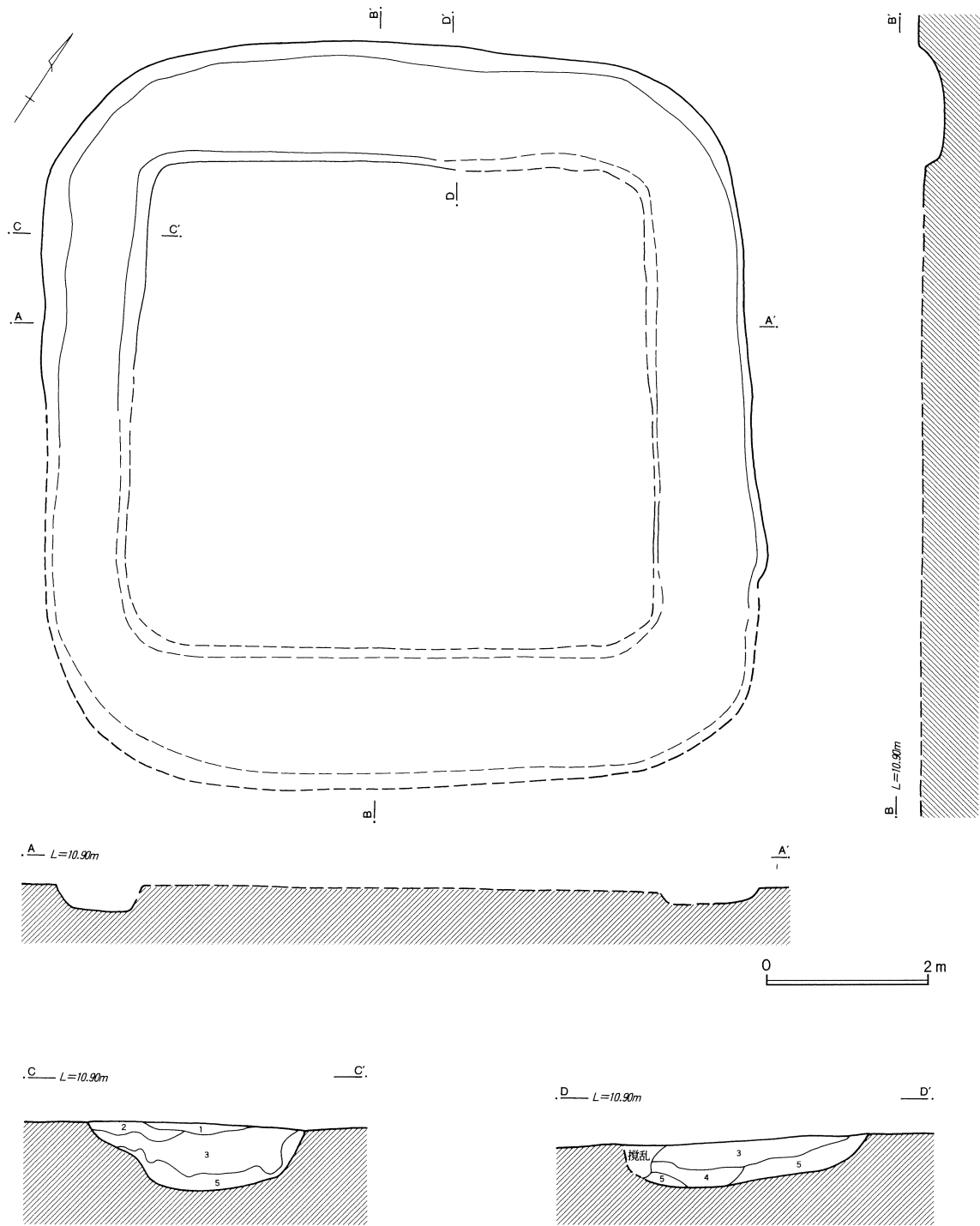
第6表 第2号方形周溝墓出土玉類計測表

No.	資料名	外径 (mm)	厚さ・長さ (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	備考
1	ガラス玉	6.80-7.11	3.19	2.05-2.22	0.26	丸味があり扁平。僅かにニゴリ感がある紺色。
2	ガラス玉	6.36	6.20	2.11-2.50	(0.20)	重量は、一番大きな破片の計測値。色調は1と略同じ。
3	ガラス玉	6.25-6.85	5.35	2.20	0.33	輝度・透明感のある紺色。
4	ガラス玉	5.81-6.50	5.69	1.85-2.40	0.30	側面に痘痕あり。2に近い色調。
5	ガラス玉	5.66-6.73	5.88	2.40-2.60	0.31	覆土出土。輝度・透明感のある紺色だが、3より僅かにくすむ。
6	管玉	2.89-3.00	(6.50)	1.31	0.10	赤色の瑪瑙製。側面に最大1mm幅の面が16面形成される。

第7表 第2号方形周溝墓出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺		26.5	8.4	A~E	1	にぶい黄橙	70	

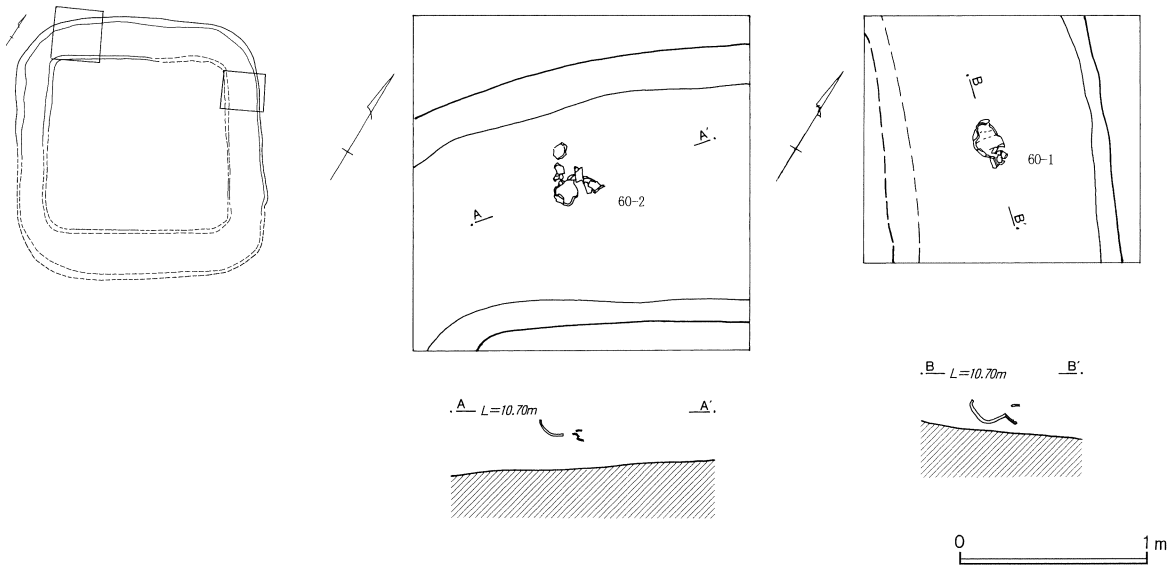
第58図 第3号方形周溝墓(1)



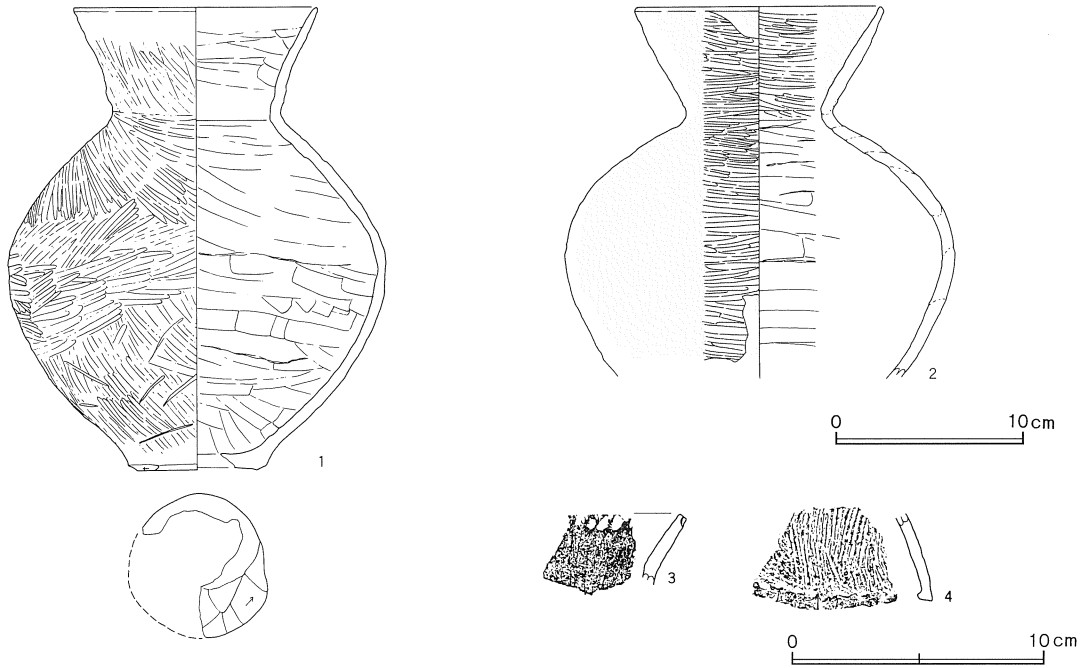
- 1 黒褐色土 ローム細粒をほとんど含まない。
- 2 黒褐色土 ローム細粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム細粒を少量含む。
- 4 黄褐色土 ローム細粒を多く含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを多く含む。

0 1m

第59図 第3号方形周溝墓（2）



第60図 第3号方形周溝墓出土土器



第8表 第3号方形周溝墓出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(13.0)	24.5	(7.4)	A~E	1	にぶい黄橙	30	No.2 底部穿孔
2	壺	(13.4)	19.6		A~E	1	にぶい黄橙	30	No.1

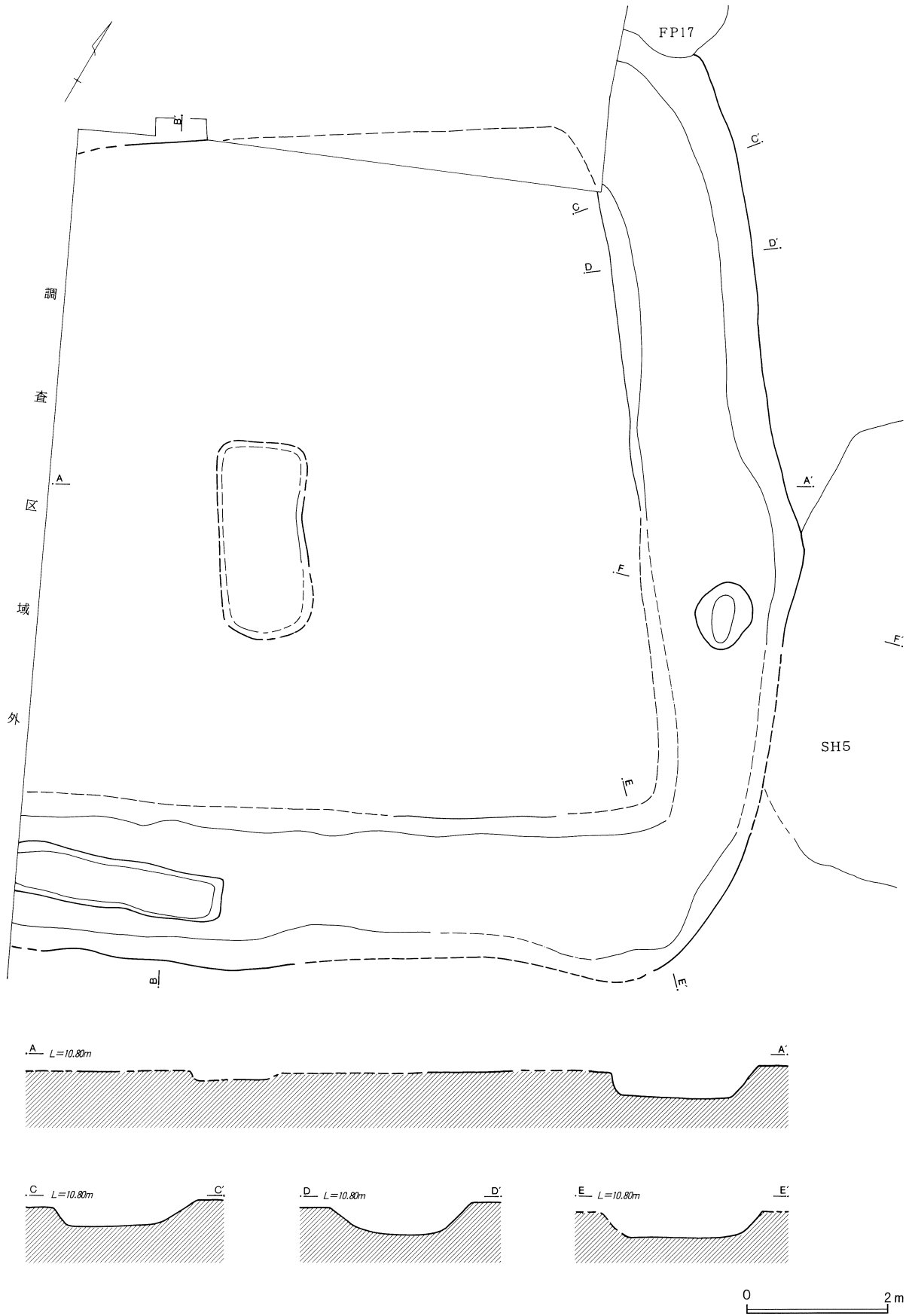
第4号方形周溝墓（第61図～第62図）

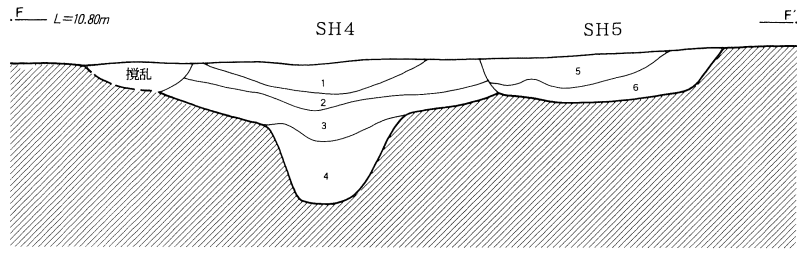
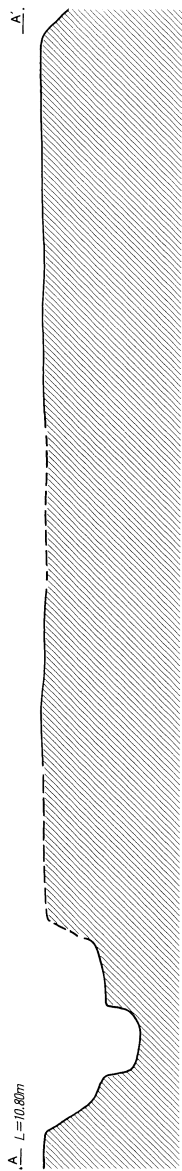
A・B-5～7グリッドに位置する。遺構の北側と西側は調査区域外になり、北東溝と南東溝を調査した。南東溝が第5号周溝墓に連結し、第5号周溝墓より古い。南東側2mに第1号周溝墓が、南側5mに第6号周溝墓がある。遺構の東側と南側が攪乱により壊され

ていた。主軸方位は、N-32°-Wである。全体の平面形は各辺がやや丸みを帯びた方形である。方台部は整った方形である。周溝は全周する。規模は検出できた範囲で9mを超えている。

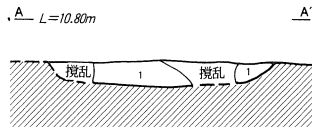
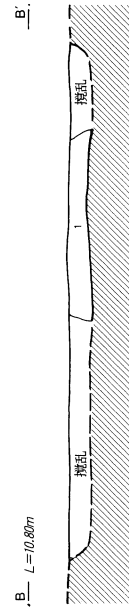
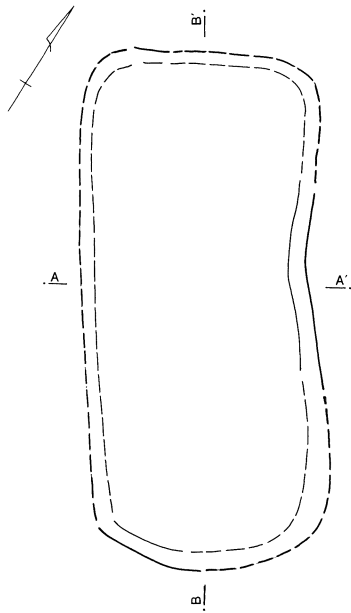
埋葬施設は、方台部の南側に検出された不整な長方形の土坑である。攪乱により大部分が壊されており、

第61图 第4号方形周满墓·出土土器(1)

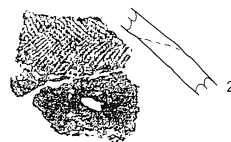
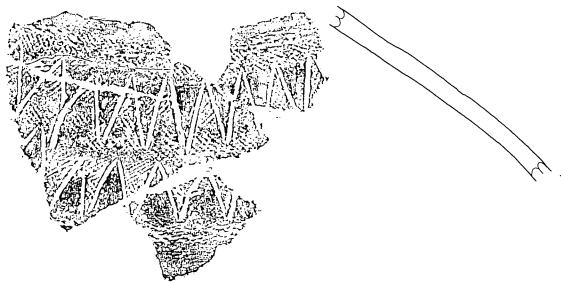




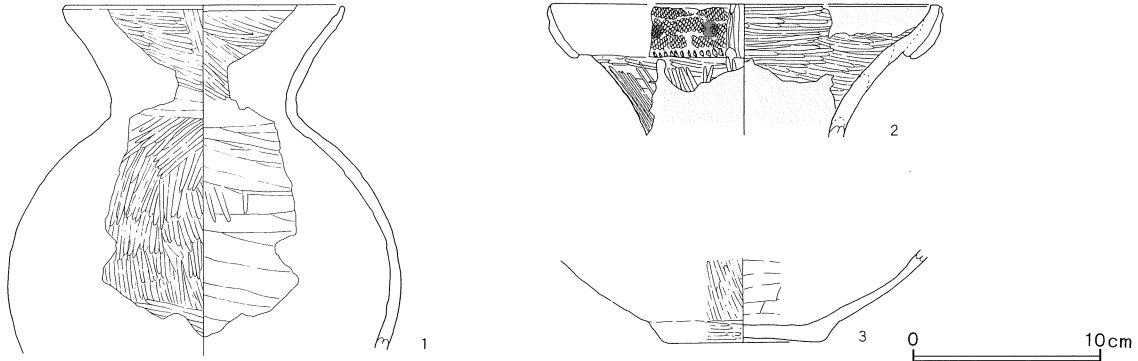
- 1 黒褐色土 ローム細粒を極く少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム細粒を霜降り状に含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。
暗褐色土のブロックを含む。
- 4 褐色土 ローム細粒を多く含む。



- 1 暗褐色土 径1mm以下のローム粒子
～径20mm前後のローム
ブロックを含む。



第62図 第4号方形周溝墓・出土土器（2）



第9表 第4号方形周溝墓出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(15.2)	18.2		A~E	1	浅黄	20	赤彩
2	壺	(21.0)	7.0		A~E	1	にぶい黄橙	30	
3	壺		4.8	(8.6)	A~E	1	にぶい黄橙	40	

検出できたのは北東側と南東側の辺の一部のみである。主軸方向2.8m以上、短軸方向1.0m以上と考えられる。深さは10~15cm前後と浅い。覆土は埋め戻しの可能性がある。遺物は出土していない。

周溝は北東溝のみが計測可能で幅2.0m、南東溝は幅2.2m以上になると考えられる。西コーナー付近が狭くなるようである。断面形はほぼ逆台形で、立ち上がりは方台部側がやや急になっていた。深さは30~60cmで、北東溝の北側がやや浅く30cm、遺構の南側が深くなり南東溝が60cmである。覆土は自然堆積である。底面はほぼ平坦で、北東溝と南東溝の2箇所にも溝中土坑がある。北東溝の溝中土坑は不整な円形で、長軸95cm、短軸80cm、深さ80cmである。第3・4層はローム土を多く含み、埋め戻された可能性がある。南東溝の溝中土坑は西端が調査区域外まで伸びていた。規模は、調査区内で長軸3.0m、短軸70cm、深さ20cmである。覆土に埋め戻しの状況は認められない。

実測可能な遺物は壺5点のみである。図示したもの以外にも壺の細片が出土した。出土位置は確認できなかった。

第63図1・2は胴部の破片である。縄文帯以外は赤彩される。1は縦位のヘラ磨き後、上位に単節LRの縄文1段、下位に山形の沈線区画を施し、その中にRL、LRの縄文を羽状に施文した後、再び沈線区画をヘラによって深く入れ直している。縄文帯の上下はS

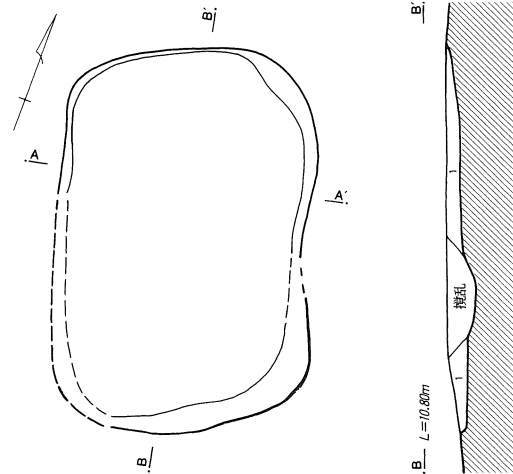
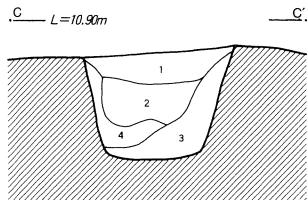
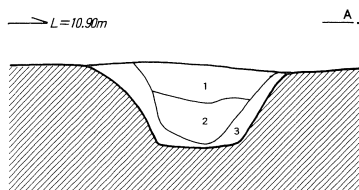
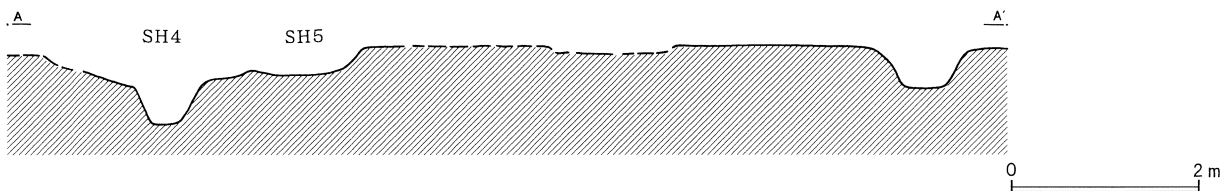
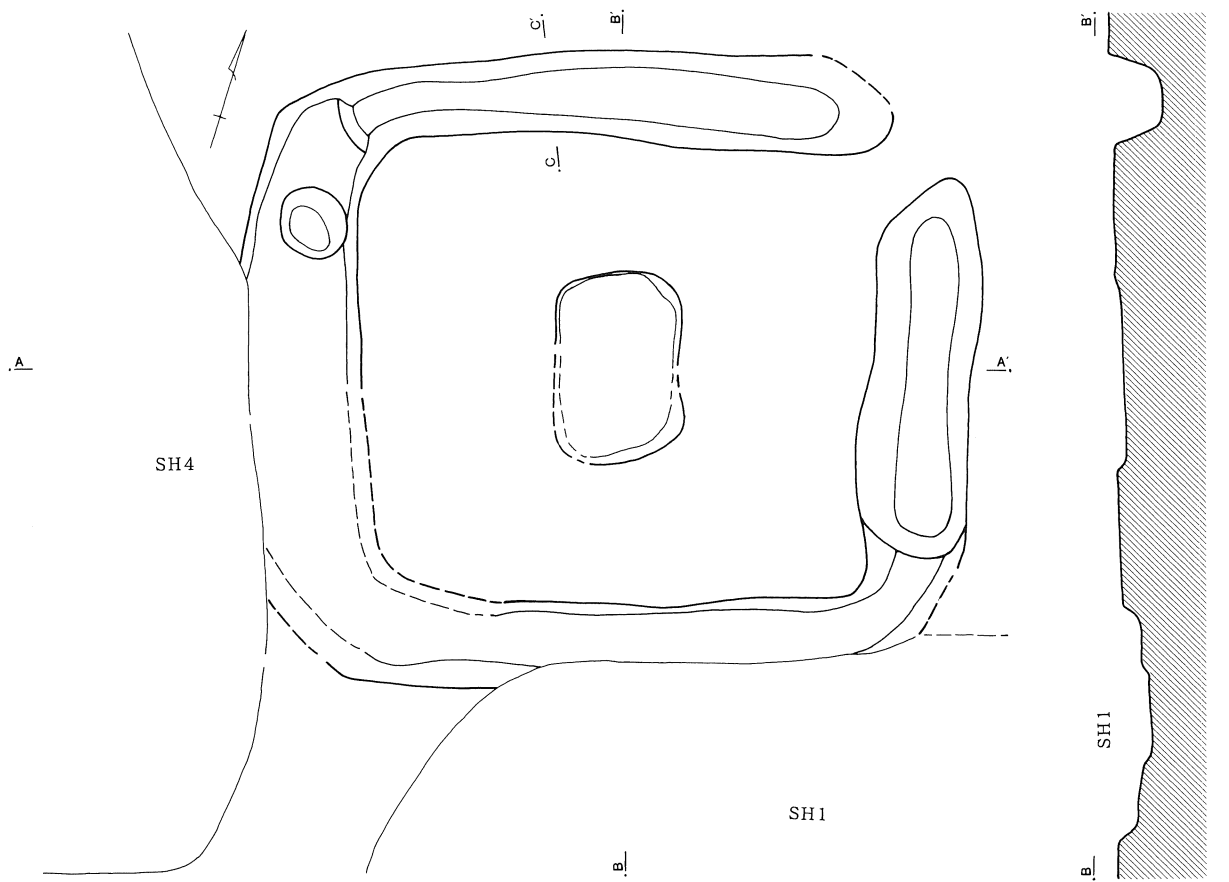
状結節文で区画される。2は1と同一の個体の可能性がある。上下2段の文様帯があるようで、下段に上端のS字状結節文が認められる。上段は細かいLR、RLの単節の縄文が施され、下端は非常に不明瞭なS字状結節文で区画される。第64図1は素口縁で、口縁端部が若干つまみ上げ状になっている。2は複合口縁で、複合部外面にはRLの単節の縄文が3段施されている。方向が乱れ、間隔がまちまちである。縄文の上に更に径8mmほどの円形朱文が施される。部分的であるため確実でないが、20単位施されていると推定される。また、棒状浮文が一部認められるが、部分的だが3本1単位で4単位と考えられる。

第5号方形周溝墓（第63図）

C・D-8・9グリッドに位置する。南溝が第1号周溝墓に、西溝が第4号周溝墓に連結する。第1号周溝墓より古く、第4号周溝墓より新しい。方台部の南西側と北東側は攪乱により壊されていた。主軸方位はN-17°-Wである。北西のコーナーに陸橋部がある。全体の平面形は各辺がやや丸みを帯びた東西に長い方形で、方台部も同様の形態である。規模は、6.0m×5.2mで、SH1~4に比して小型である。

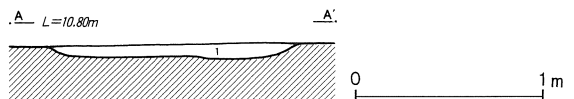
埋葬施設は、方台部の中央に検出された不整な隅丸の長方形の土坑である。主軸方向2.05m、短軸方向1.34mで、深さは5~10cm前後と浅い。底面は西側に若干傾斜していた。覆土は施設の外周が壊れたと考え

第63図 第5号方形周溝墓

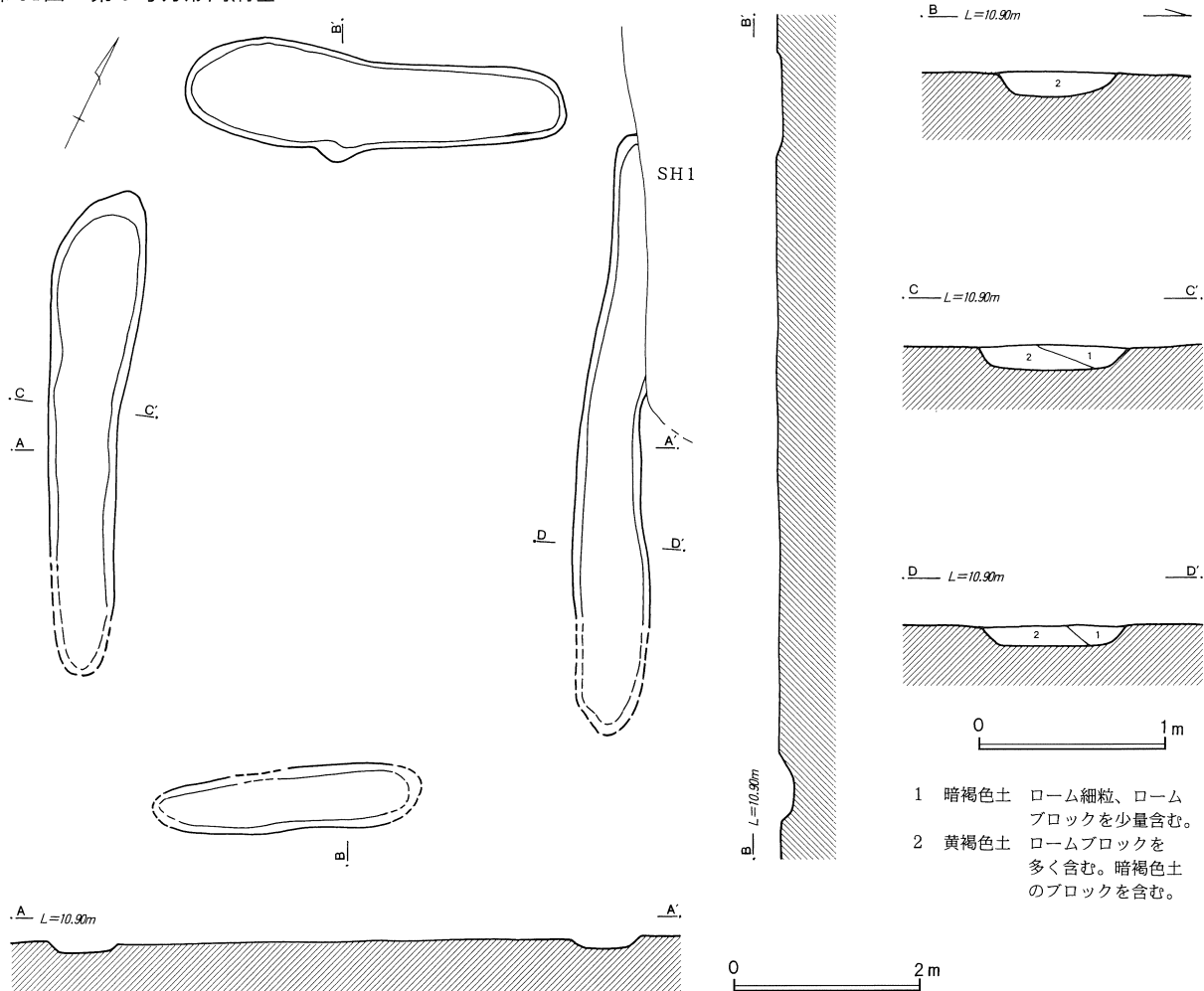


- 1 黒褐色土 ローム細粒を霜降り状に含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土 ローム細粒・ブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。

- 1 暗褐色土 ローム粒子、崩れたローム土を含む。



第64図 第6号方形周溝墓



られるローム土を含む流れ込みである。

周溝は幅80cm～1.2mで、東西の溝が幅広く、北西コーナーが狭くなっている。断面形はほぼ逆台形である。深さは15～55cmで、西・南溝が浅く、北東・南西コーナーで北・東溝に段を持って深くなる。底面はほぼ平坦である。覆土は1・2層が流れ込みである。3層は周溝壁面の崩落土と考えられる。4層は方台部からの流れ込みで、盛り土の崩落土である可能性がある。西溝の北寄りには80×50cmの溝中土坑がある。掘り込み面は確認できなかった。

遺物は壺の細片が出土したのみで、図示可能なものは出土していない。

第6号方形周溝墓 (第64図)

B・C-7・8グリッドに位置する。東溝の先端が

第1号周溝墓に連結する。南2mに第2号周溝墓がある。検出できた部分の深度がごく浅く、第1号周溝墓との新旧は不明である。長軸方位はN-27°-Wである。現状では四隅切れの平面形だが、遺存している深さが浅いため、その他の形態である可能性もある。全体の平面形は各辺がやや丸みを帯び、若干歪んだ南北に長い方形で、方台部も同様の形態である。規模は、6.7m×5.2mである。埋葬施設は検出されていない。

周溝は幅70cm～1.2mで、北・西の溝が幅広である。北西コーナーが狭くなっている。断面形は逆台形というより皿形に近い形態である。深さは5～30cmで、いずれも浅い。底面はほぼ平坦である。覆土は1層が流れ込み、2層が方台部側からの流れ込みである。

遺物は出土していない。

3. 平安時代

第2号住居跡 (第65図)

調査区北西部、A-4グリッドに位置する。南西コーナー部分は調査区域外に伸びる。東壁と西壁の一部や床面の半分近くは攪乱を受けていた。

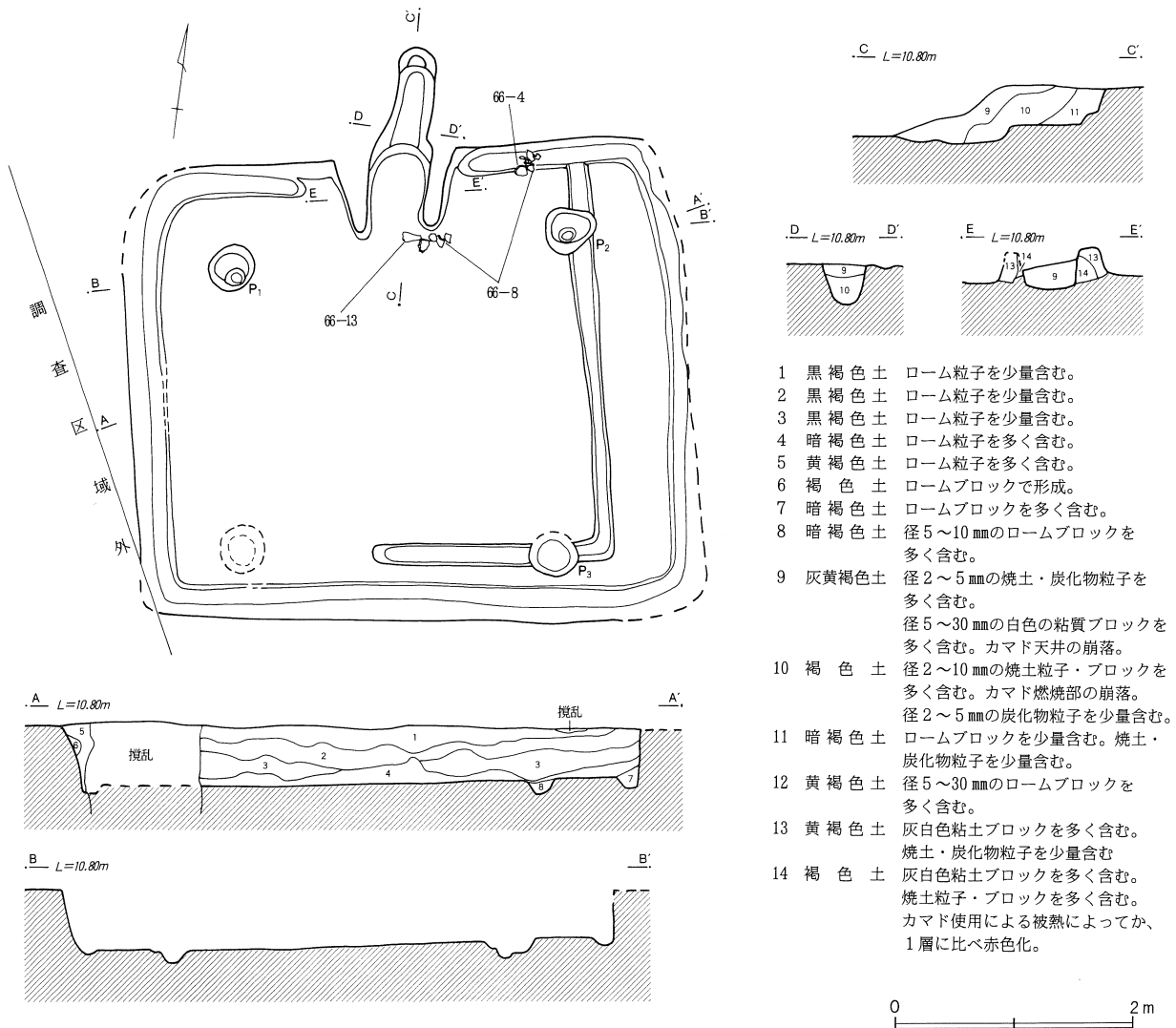
本住居跡は、床面とカマドを共有し東壁と南壁を外側に広げた拡張住居跡である。住居跡の平面形態はいずれも東西にやや長い長方形である。規模は、拡張前の住居跡で長軸4.02m、短軸3.50m、深さ0.50mである。拡張後の規模は長軸4.70m、短軸3.93m、深さ0.50mである。主軸方位はN-7°-Wである。

覆土はローム粒子を少量含む黒褐色土を主体とし、

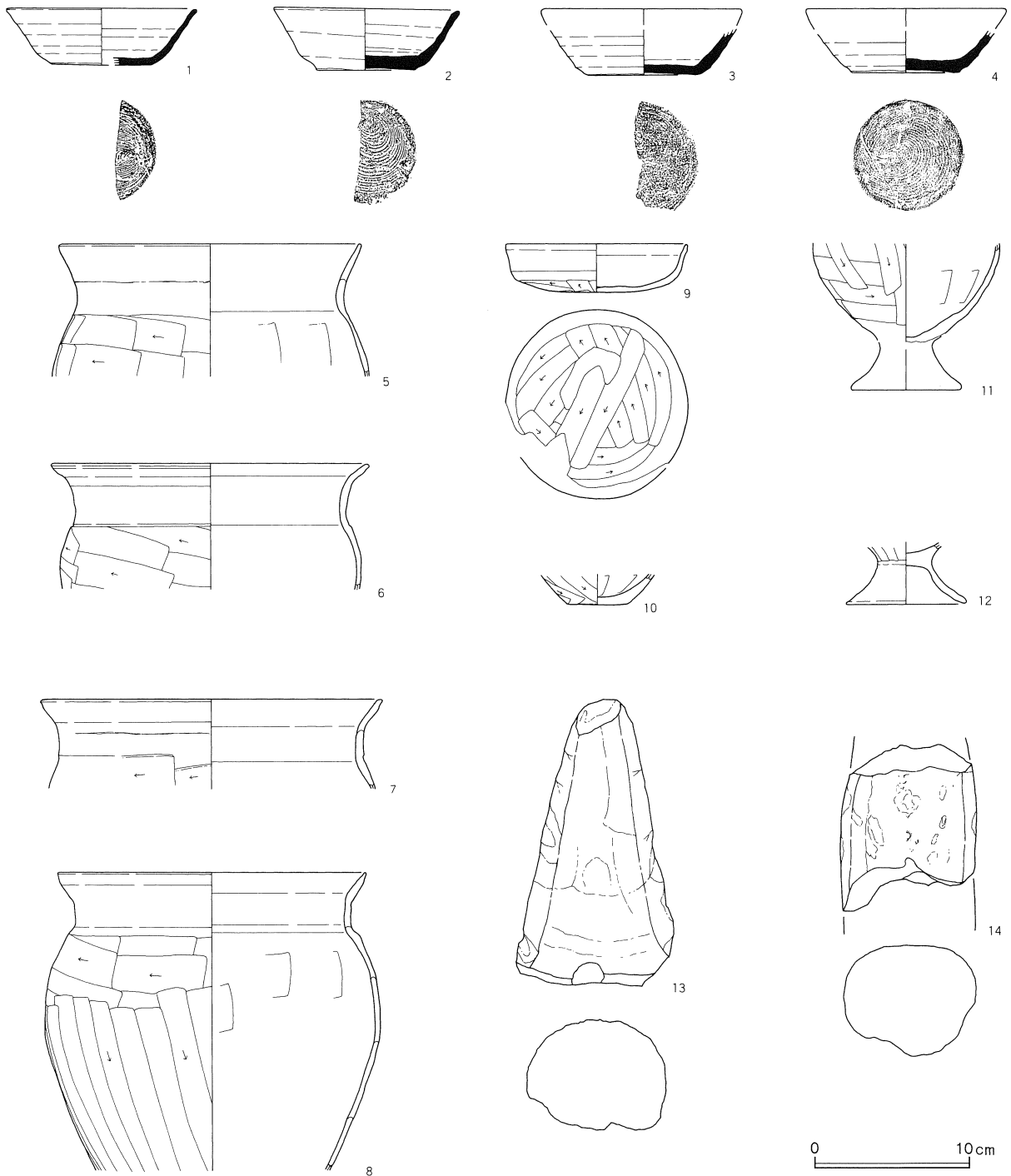
床面直上にはローム粒子を多く含む暗褐色土がみられ、堆積状況は自然堆積であった。

床面は、ほぼ平坦で中央から南側にかけて攪乱を受けていた。床面の東寄りでは拡張以前の東壁に伴う周溝と南壁に伴う周溝の一部を確認した。断面観察による第8層が周溝の埋土である。埋土はロームブロックを多く含みしまりをもち、人為的に埋め戻され突き固められたと考えられる。周溝幅13~21cm、深さ8cmである。拡張後の支柱は4本と考えられるが、南西の柱穴は攪乱により消失していた。P₁は深さ11cm、P₂は深さ15cm、P₃は深さ18cmである。周溝は全周し幅20cm前

第65図 第2住居跡



第66図 第2住居跡出土遺物



後、深さ7cmである。

カマドは、北壁の中央に設けられていた。壁からの掘り込みは0.85m、焚き口幅0.50mである。床面から緩やかに燃焼部に移行し、煙道はほぼ北を向き、燃焼部との境に10cm程の段をもって伸びる。

遺物はカマド内、カマド付近から出土したものが大半を占めている。

第2号住居跡出土遺物（第66図）

本住居跡から検出された遺物は須恵器坏、土師器坏・甕・台付甕である。

須恵器坏は第66図1～4である。1は胎土中に白色針状物質が含まれ南比企産である。器壁は滑らかで軽く薄い。2～4は東金子産である。器壁は滑らかでやや重く厚い。底部外面には全面に糸切り痕が残る。円

第10表 第2号住居跡出土遺物観察表(第66図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵器坏	(6.2)	3.6	(6.6)	A C E F 針	普通	灰色	40	覆土	南比企産
2	須恵器坏	(11.9)	3.9	6.4	A E	良好	暗灰色	50	覆土	東金子産
3	須恵器坏			(7.6)	A E	普通	乳灰色	30	覆土	東金子産 砂質
4	須恵器坏			7.1	A B C	良好	褐灰色	30	No.1・覆土	東金子産 器面は平滑
5	土師器甕	19.3	(8.4)		A B C D E F	普通	橙褐色	40	カマド	
6	土師器甕	(20.4)	(7.9)		A B C D E F	良好	橙褐色	30	カマド	
7	土師器甕	(22.0)	(5.7)		A B C D E F	普通	橙褐色	10	カマド	
8	土師器甕	19.9	(18.9)		A B C D E F	普通	橙褐色	50	No.2～7・カマド	胴部内面は斑点状剥離著しい
9	土師器坏	11.7	3.1		A D F	普通	褐色	80	覆土・覆土上層	内面底部に一部剥離
10	土師器甕		(1.9)	3.9	A B D F	普通	暗褐色	30	カマド	底部外面ヘラケズリ
11	土師器台付甕		(6.7)		A B D E F	普通	橙褐色	30	カマド	
12	土師器台付甕			7.6	A B C D E F	普通	茶褐色	30	カマド	
13	支脚	残存長 18.0、最大幅 10.0、厚さ 7.0cm					褐色		カマド	
14	支脚	残存長 8.8、幅 8.7、厚さ 7.1cm					褐色		No.7	

柱の糸切り位置が低いいため突出し台状に残り、底部の器肉も厚い。5～8は土師器の「コ」の字状口縁甕である。5は口縁部の屈曲が弱く古い傾向であるが胴部上位のヘラケズリ調整はいずれも右から左に施された横方向のヘラケズリである。8は胴部中位から下位方向へ縦ヘラケズリを施したのち、胴部上位に横方向のヘラケズリを施している。口縁部は「コ」の字状であ

り、口唇部を上方に摘み引き上げている。9は土師器坏である。口縁部はヨコナデを施し体部は指頭による未調整部分を残す。底部外面は同じ位置で数回ケズリ込み右回りに三度回し最後に底部中央をヘラケズリしている。器高浅く、平底化の傾向が見られる。

11・12は土師器台付甕である。13・14は土製の円錐状をした支脚である。

4. 中・近世

溝 (第67図)

3条の溝がD・E列から見つかった。遺跡の立地する台地は南南西から北北東に向かう細長い台地であり、溝の方向とはほぼ一致する。D・E列付近は綾瀬川の谷に向かう斜面にさしかかる部分であり、台地部分との境に設けられた溝であろう。第1号溝はD-4グリッド付近で弱く蛇行をしている。第3号溝は屈曲していた。溝の時期の詳細を示す遺物はなかった。

竪穴状遺構 SX1 (第68図)

D-7グリッドに位置する。攪乱が著しく、北西及び南東コーナーは検出できなかった。主軸はN-15°-W。長軸3.8m、短軸3.5mの正方形で、深度0.3mである。床面は平坦で、硬化は認められなかった。時期

の詳細を示す出土遺物はなかった。

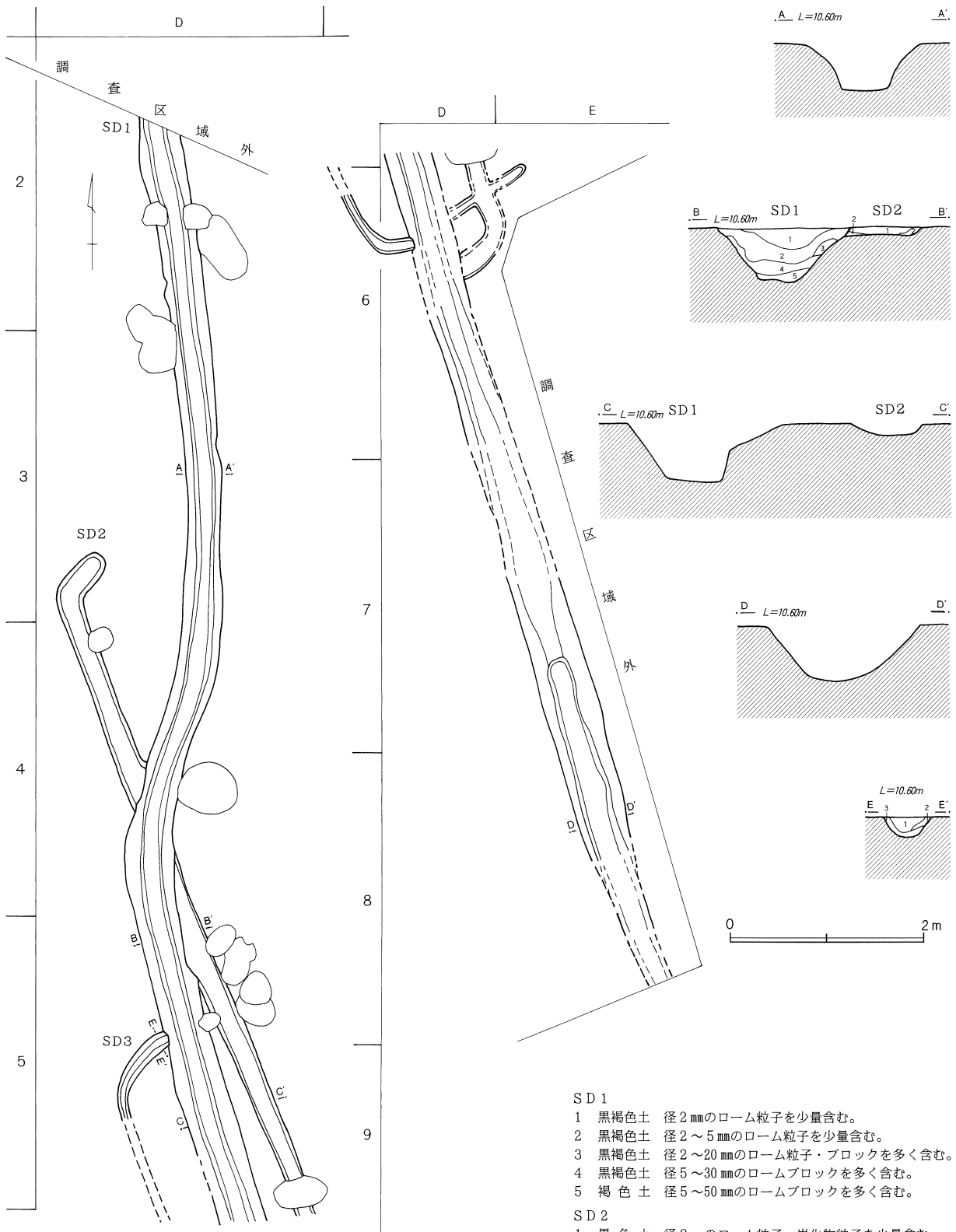
地下式坑 SX2 (第68図)

E-3グリッド。底面は長方形。長軸径3.0m、短径1.7m、深度は1.55m。入口部はロームを掘り残して階段にしている。底面直上に天井部の崩落土が認められた。入口部と反対の壁面は直立、左右の壁面はやや内傾する。時期の詳細を示す出土遺物はなかった。

第1号井戸 SE1 (第68図)

B-5グリッドに位置する。確認面の直径は2.7～3.0m、底面の直径は0.75m。確認面から掘鉢状に推移し、中頃の深さから直に掘り込まれている。縄文時代早期の炉穴・土壇を切っており、縄文土器が混在していたが、遺構の時期を示す遺物の出土はなかった。

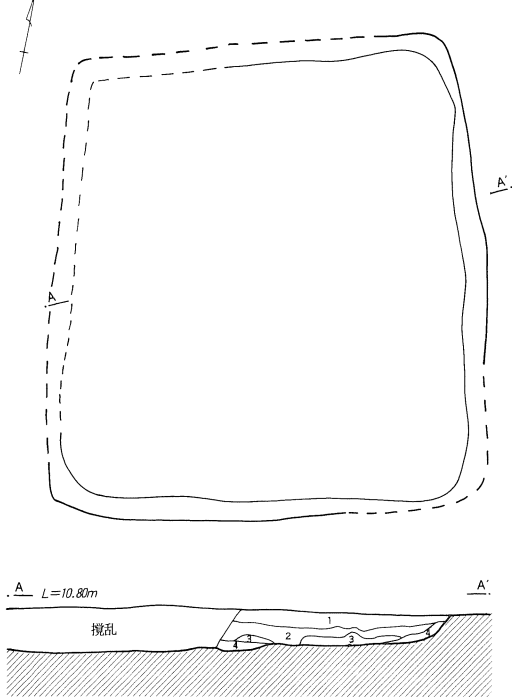
第67図 溝



- SD 1
- 1 黒褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
 - 2 黒褐色土 径2~5mmのローム粒子を少量含む。
 - 3 黒褐色土 径2~20mmのローム粒子・ブロックを多く含む。
 - 4 黒褐色土 径5~30mmのロームブロックを多く含む。
 - 5 褐色土 径5~50mmのロームブロックを多く含む。
- SD 2
- 1 黒色土 径2mmのローム粒子、炭化物粒子を少量含む。
 - 2 黒褐色土 径5~20mmのロームブロックを多く含む。
- SD 3
- 1 黒褐色土 径2mmのローム粒子を少量含む。
 - 2 黒褐色土 径5~15mmのロームブロックを少量含む。
 - 3 暗褐色土 径5~20mmのロームブロックを少量含む。

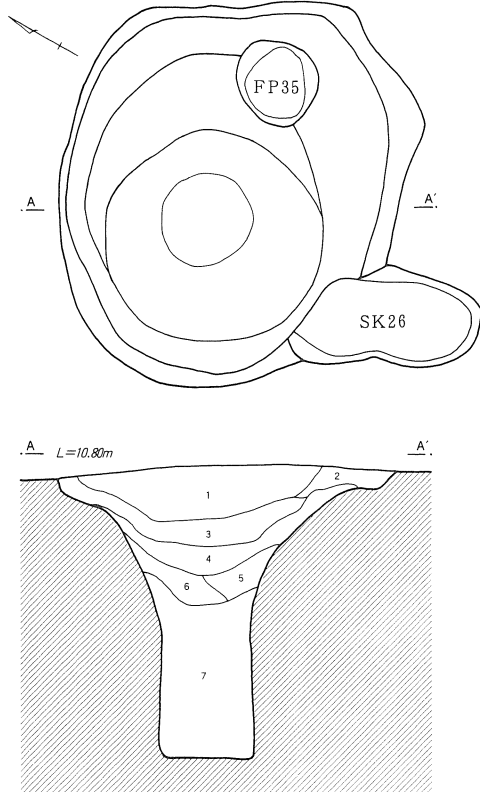
第68図 その他の遺構

SX1

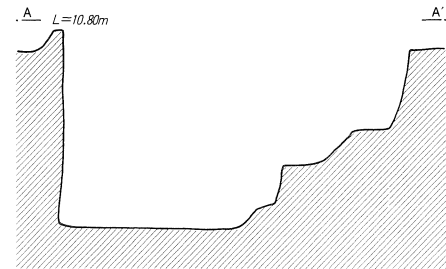
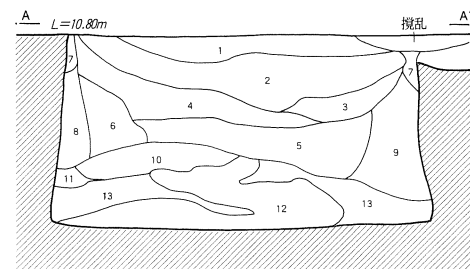
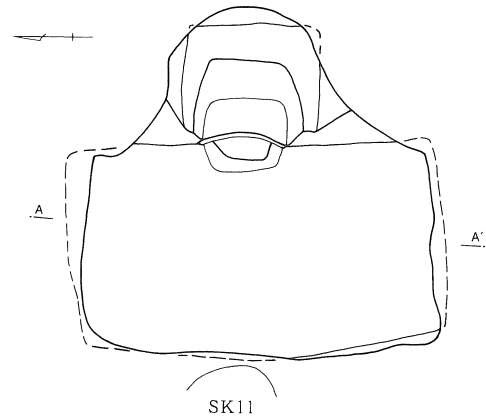


- 1 黒褐色土 ローム粒子をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 1層よりもローム粒子を多く含む。
- 3 灰黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを含む。

SE1



SX2

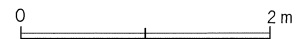


SX2

- 1 黒褐色土 ローム粒子、焼土を少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子をブロック状に含む。
焼土粒子をわずかに含む。
- 3 褐灰色土 全体にローム粒子を含む。
- 4 暗褐色土 焼土を少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子、焼土をわずかに含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子をやや少なく含む。
- 7 黄褐色土 崩落したハードローム。
- 8 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。
- 9 黒褐色土 ローム粒子を多く含む。
炭化物を少量含む。
- 10 黒褐色土 ローム粒子をわずかに含む。
- 11 暗褐色土 灰黄褐色土をやや少なく含む。
- 12 明黄褐色土 崩落した天井（ハードローム）。
- 13 灰黄褐色土 崩落した天井に入り込んだ黒色土。

SE1

- 1 暗褐色土 ローム細粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 黒色土 ローム粒子を霜降り状に含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子をやや多く含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを含む。
5層よりややロームの量少ない。
- 7 黄褐色土 ローム粒子・ブロックからなる。



V 結語

1. 縄文時代

上ノ宮遺跡の発掘調査によって縄文時代早期、条痕文系土器の野島式土器がまとまって出土した。神奈川県横浜市野島貝塚（赤星 1948）を標式遺跡とする野島式は茅山式が四細分（赤星・岡本 1957）された後、条痕文系土器の最初頭という位置を占めてきた。

野島式の土器研究は完形土器や共伴資料が少ないという資料的な制約があったが、資料の蓄積により、文様意匠の変遷について個体例をもとにして、論じられるようになってきている（金子 1984、齊藤 1987、井上 1997）。当遺跡では炉穴群 1～3 等の遺構内から、完形に近い土器を含む資料が出土した。これらの土器群は灰褐色～褐色の色調、胎土に白色の砂粒を一定量含むなど共通する質感があり、限られた時間帯の所産であると考えられる。

ここでは野島式のある段階を構成する遺構出土の一括資料という観点から文様、文様構成について当資料の内容を記述し、まとめにかきたい。

土器の分類に当たっては、資料が充実していた炉穴群 2 の土器を基準とし、他遺構の出土土器はそれに準じて分類を行った。細隆起線文を多用する第一類、沈線文を多用する第二類、貝殻背圧痕を施した第三類、無文ないしは無文部の第四類に大きく区分した。

第一類はさらに a～c に区分した（第 69 図）。a は縦位の細隆起線、b は鋸歯状文など斜位の細隆起線、c は梯子状の細隆起線を施すものである。

第一類 a を炉穴群 2 においては、縦位に平行する細隆起線文（a 1）、縦位に平行する細隆起線文の下位に各種の配列の細隆起線文を施すもの（a 2）、縦位の細隆起線文を斜位、横位に細隆起線文でつなぐもの（a 3）にさらに分類した。a 2 は炉穴群 2 でしか確認しなかったが、a 1、a 3 については、その他の遺構でも出土している。

a 1 は当土器群の中心的な存在である。

a 2 は少数であったが、短い細隆起線と長い細隆起

線（第 69 図 4）、縦位の細隆起線と斜位の細隆起線（第 69 図 5、6）、梯子状の文様と鋸歯状区画文（第 69 図 7）などの共存を示す資料であり、a～c の同時性を示唆するものである。

a 3 は後述する第二類 b のように縦位の区画を横位や斜位につなぐものであり、幅広の文様帯を構成するものである。

b は鋸歯状文（第 69 図 9）など、斜位の細隆起線文によって、口縁部に幅の狭い文様帯を設ける土器であり、文様、文様帯の幅など第二類 a と同様な構成をとるものである。炉穴群 1～3、第 11・12 号炉穴、グリッドなどに安定して存在する。

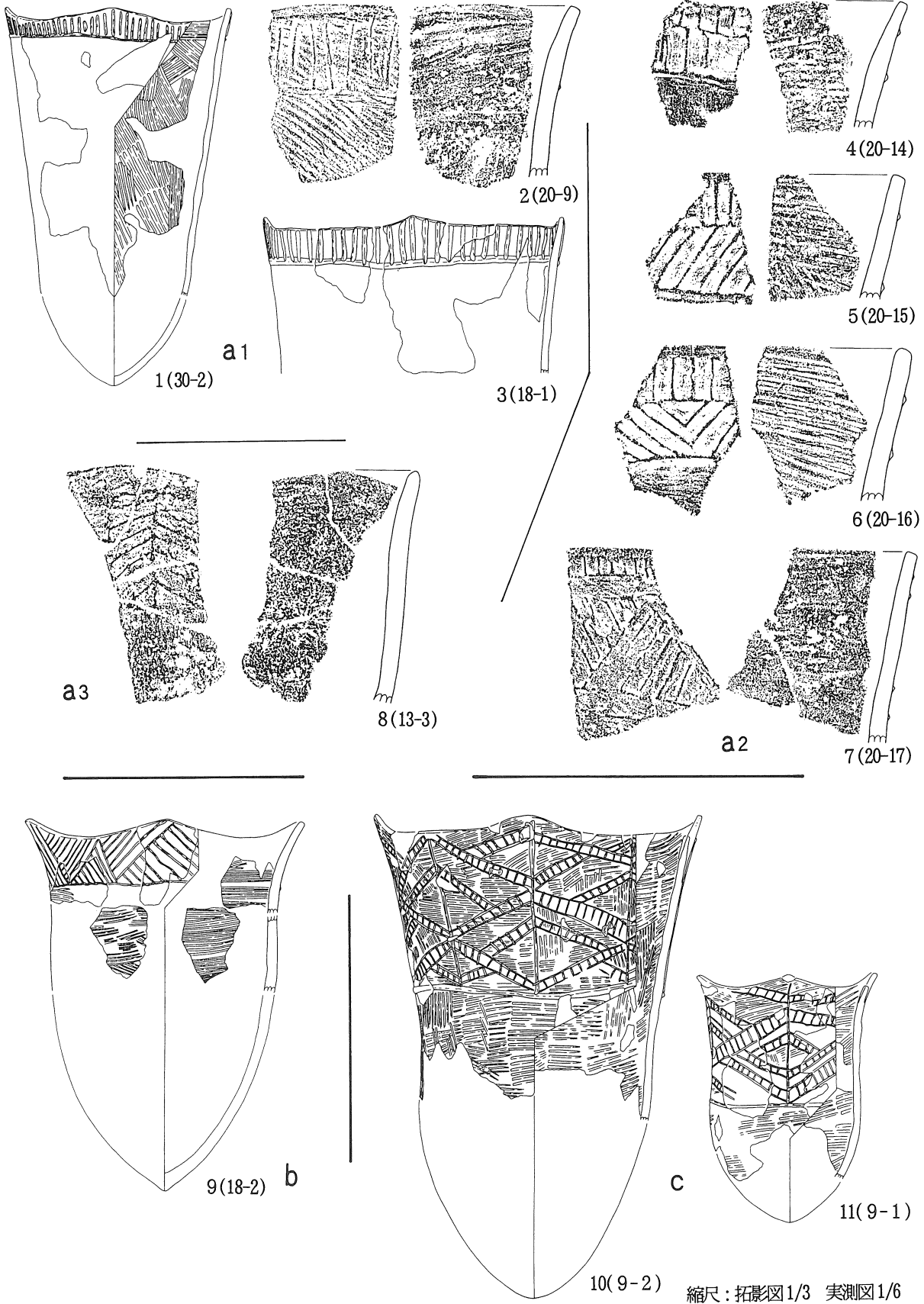
c は梯子状の文様を施す土器で、炉穴群 1 から胴部上半が残存する個体が出土した（第 69 図 10・11）。炉穴群 2 をはじめとする他の遺構においても安定して存在する。第 69 図 10・11 は縦位の区画を斜位につなぎながら、菱形の文様構成を意図したものと考えられる。補助的に斜行する梯子状文を付加して幾重にも菱形構成の文様を施している。

この梯子状文を口縁部以外に用いた土器は野島式の中に散見されるものの、好例がこれまで関東には少なかった。福島県下では竹之内遺跡（馬目 1982）に梯子状文の類例が認められる。竹之内遺跡例も菱形構成が意識されているように見えるが、梯子状文は多条に細隆起線文を充填する手法の一部として用いられており、第 69 図 10・11 のように梯子状文自体を自在に用いてモチーフを構成する土器とは趣を異にしている。

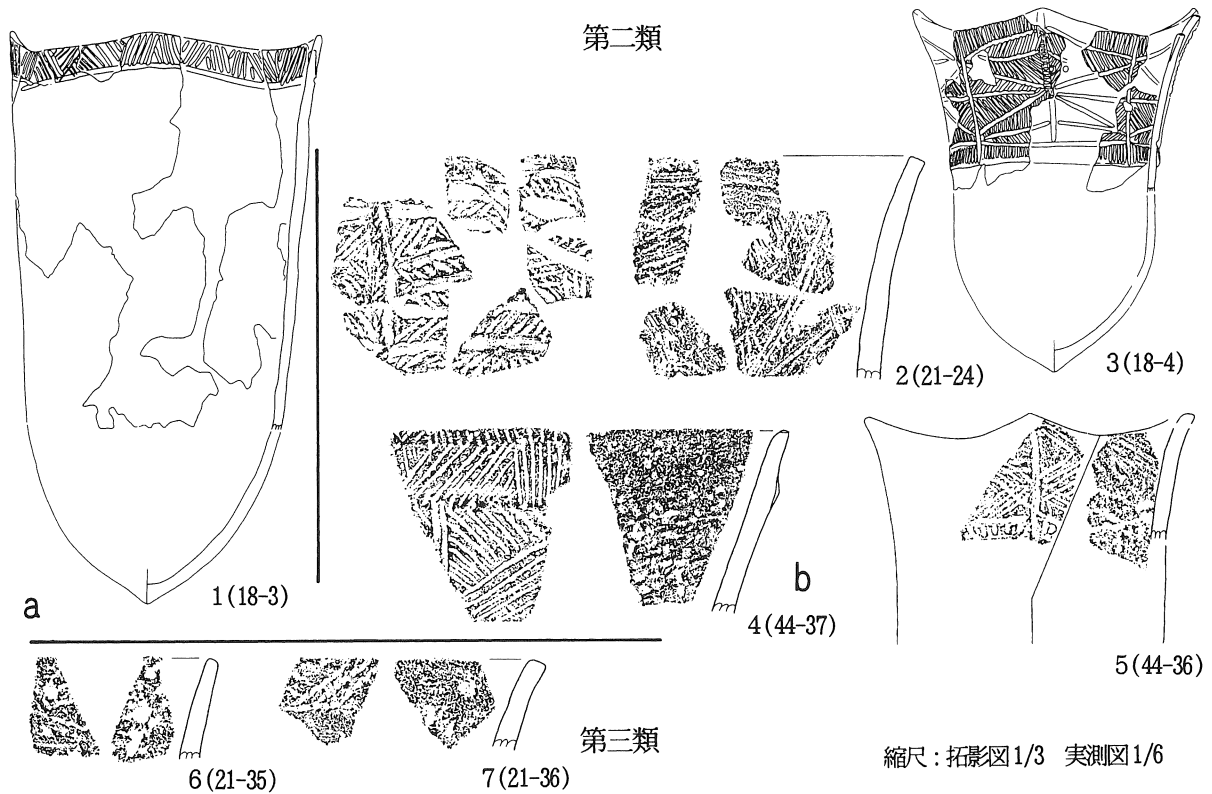
当遺跡の第一類は、第一に口縁部に横位に平行する細隆起線文を施す土器が欠如しており、第二に 2 条の細隆起線によって直線的、曲線的な区画を作出する文様が欠如している。a、b のような集合細隆起線文や c 類のような梯子状文などによって構成されるところに特徴がある。

金子直行氏は細隆起線文の出自を田戸上層以降の隆

第一類



第70図 縄文時代早期の土器



帯文の変遷を通じて考察され、「木の根A式」(安孫子 1982) 段階で新生の文様構造が確立するとして、沈線文系土器と条痕文系土器の画期を見だし、この段階を野島式の最古段階に位置づけられている(金子 1993)。

大宮台地の「木の根A式」段階の遺跡として、高輪寺遺跡(青木 1979)、猿貝北遺跡(金子 1986)などがある。口縁部の横位の細隆起線文、絡条体圧痕文、貝殻腹縁文などを施す土器が認められる。

当遺跡の第一類は口縁部の横位の細隆起線文や絡条体圧痕文などが認められず、「木の根A式」段階の要素を払拭した内容となっている。

2条の細隆起線によって直線的、曲線的な区画を作成する文様が欠如しているとした第二の特徴も他遺跡との時間差、地域差が反映していると思われる。当遺跡の段階において、こうした区画文様がすべて断絶することは、他の遺跡や後続する段階の様相に照らし合わせると考えにくい。

集合細隆起線文および梯子状細隆起線文と呼ぶべき

当遺跡出土土器群の位置付けを野島式全体の中でどのように説明するか、周辺地域との対比から再度検討する必要があるだろう。

なお、当遺跡と同様な細隆起線文を出土した遺跡としてささら遺跡(鈴木 1983)がある。ささら遺跡では少量であるが、当遺跡の第二類とした沈線文土器も出土している。

当遺跡では、第一類の細隆起線文に第二類の沈線文系土器が共伴しており(第70図)、第一類よりは少ないが各遺構において安定して存在する。

第二類aは口縁部に幅の狭い文様帯を構成する土器である(第70図1)。少量ながら炉穴群1、2、グリッドなどから出土している。

第一類b(第69図9)と同様な構成をとり、細隆起線文と沈線文との置換関係によるものと思われる。

同様に沈線文と貝殻腹縁文との置換関係にあるのが第三類(第69図6、7)である。7は方向を違えて斜行する貝殻腹縁文が施される。口縁部を欠損するが第21図37も同様な文様であり、第二類aと同様な構成を

とっている。

第二類bは特徴的な土器群で静岡県下ではまとまって出土している。また関東西部の遺跡においても野島式の中で中心的な土器である。当遺跡よりは段階的に後出と考えられるが、多摩ニュータウンNo.457遺跡などがあげられる(鶴馬 1982)。

第二類bは炉穴群2でややまとまっており、文様上、斜沈線・矢羽状沈線(b1)、鋸歯状文(b2)、矢羽根状沈線文(b3)、太沈線三角形区画・細沈線充填文(b4 第70図2、3)など各種の文様が認められた。

分類には至らなかったが、第二類bの文様帯構成について付言すると、第70図4などが口縁部に文様帯を有する。同様な例として、第21図19などがあつたがごく少数である。第二類bの一部、第一類a2を除くと当遺跡出土土器は横位に分割する手法が少なく、一帯構成をとるものが大多数であつた。

破片資料が多く第70図にはあげなかったが、第二類cは沈線のみによって梯子状文を施すものである。炉穴群2とグリッドから出土したのみでごく少数である。東北・関東を中心に分布する細隆起線文を沈線文に置換した一例と思われ、第一類c・第二類cの関係は先の第一類b・第二類aの関係と相似している。

土器の形態上の特徴は、胴部下半から直線的に移行する土器、胴部上半から外反気味に立ち上がる土器の2種類のみ比較的単純な様相であつた。胴部中位で段をなすものは顕著でなかつた。屈曲する形態の土器は認められなかつた。口縁部は角頭状で口唇部が平坦をなすものが主体をなし、口唇部が丸みを帯びているもの、口縁部を内削ぎ状に調整し、口唇部が尖り気味になる土器がそれに続いた。口唇部に刻みを施す土器は第二類bに認められるのみで少数であつた。

第四類土器については詳しくふれられなかつたが、内外面ともに条痕を施した土器が多数を占めた。条痕の種類は単一ではなく、各種の様相を含んでいた。

当遺跡の土器群についての概略にふれてきたが、野

島式の細分に照らすと、どのような位置づけが考えられるだろうか。

金子直行氏が野島式最古とされる「木の根A式」よりは新しい段階であることが絡条体圧痕文の欠如などにみる当遺跡第一類土器の様相によって推察できた。

「木の根A式」に後続する段階から野島式土器とする井上賢氏は野島式を古、新の2段階に区分されている(井上 1997)。井上氏の新段階の資料に照らし合わせてみると、流水文等の各種の「紋様意匠」は当遺跡の土器群とはやや隔たりがある。上下2段の文様帯構成をもつもの、細隆起線文上の刺突文、体部で屈曲する形態など鶴ヶ島台式につながる要素が当遺跡出土土器中には見あたらない。

したがって、「木の根A式」段階よりは新しく、野島式の新しい部分よりはさかのぼるといっておおよその位置づけができよう。

しかし、井上氏の古段階や金子氏の「木の根A式」に後続する段階に照らし合わせて、そのまま該当するかという疑問の余地が残される。繰り返しとなるが、細隆起線文を施す土器については2条の細隆起線によって直線的、曲線的な区画を作出する文様が欠如している。井上氏の古段階のうち、当遺跡の場合、細隆起線文の土器は「系譜2」(井上 1997)のみで構成されることになる。「系譜1」との関係が問われよう。

細隆起線文の土器(第一類)に沈線文系の土器(第二類)が伴うことも当遺跡の特徴である。

従来、細隆起線文は東北と沈線文は東海との関連が論じられてきた。井上氏はいわき市竹ノ内遺跡と沼津市清水柳北遺跡(関野 1989)の土器を対比させ細隆起線文と沈線文による関東周辺の対極的な構図を示されている。当遺跡の場合、大宮台地という地域にあつて、第一類の細隆起線文を主体としながらも、第二類の沈線文を客対的に含む地域性を指摘できるだろう。

当遺跡出土土器を位置づける際の疑問点についてふれたが、野島式を具体的にどう区分していくかという点には至らなかった。今後の課題としたい。

2. 古墳時代

(1) 方形周溝墓群について

上ノ宮遺跡からは、古墳時代初頭の方形周溝墓6基が検出された。いずれも大規模な攪乱を受けており、良好な状態とは言い難いが、方形周溝墓群の検出例が少ない大宮台地東部では貴重な事例である。ここでは方形周溝墓群の平面形、規模、陸橋部、群構成、周溝、中心埋葬施設、出土土器、ガラス玉の各項目について若干の検討を行いたい。

平面形 攪乱が著しく、2～4号は周溝の一辺が検出されていないので断定には至らないが、正方形基調の1～4と長方形の6に分けられると考えられる。

このような方形を基調とする多数と少数の長方形という群構成は、上尾市薬師耕地前遺跡（赤石 1978）、部分的な調査で全体の様相は明らかでないが浦和市井沼方遺跡（小倉 1987、柳田・小倉 1994ほか）等でも見られる。大宮台地では一般的なあり方とも言えるだろう。

一方、与野市中里前原遺跡群（中里前原・中里前原北・関東）（秦野 1980、奥村・秦野 1989、西口 1996、大谷 1998、岩田 1999）では、大部分の周溝墓が長方形である。平面形から言えば、大宮台地南西部霧敷川流域の中里前原遺跡群と大宮台地東部芝川・綾瀬川流域の遺跡群では造墓の意識が異なっていたものと考えられる。この長方形の平面形を持つものは神奈川県、東京都、埼玉県、千葉県を中心に認められ、群馬県や栃木県でも若干の例が知られている。中里前原遺跡群もその一例と考えられる。大宮台地の一角に長方形の平面形が取り入れられたことにより、大宮台地全体の平面構成に様々なバリエーションが生み出されたと考えられる。その様相は盛り土の高さと合わせて全く異なる墓地の景観を生み出したと推定される。

この時期に見られる方形周溝墓の「拡張」もある意味で方形の長方形化と考えることができるが、この点については稿を改めて述べたい。

陸橋部 攪乱が著しいこともあり明瞭ではないが、一

辺の途中のどこかが切れるような陸橋部はないようである。6基の中で確実に陸橋部が確認できたのは5号のみである。6号は一見四隅切れの形態に見えるが、遺存深度が浅く、各コーナーが浅くなっているのみで本来は周溝が全周する形態であった可能性もあり、断定には至らない。5号は北東コーナーが陸橋部となるもので、関東地方の弥生時代後期以後で最も一般的な形態である。

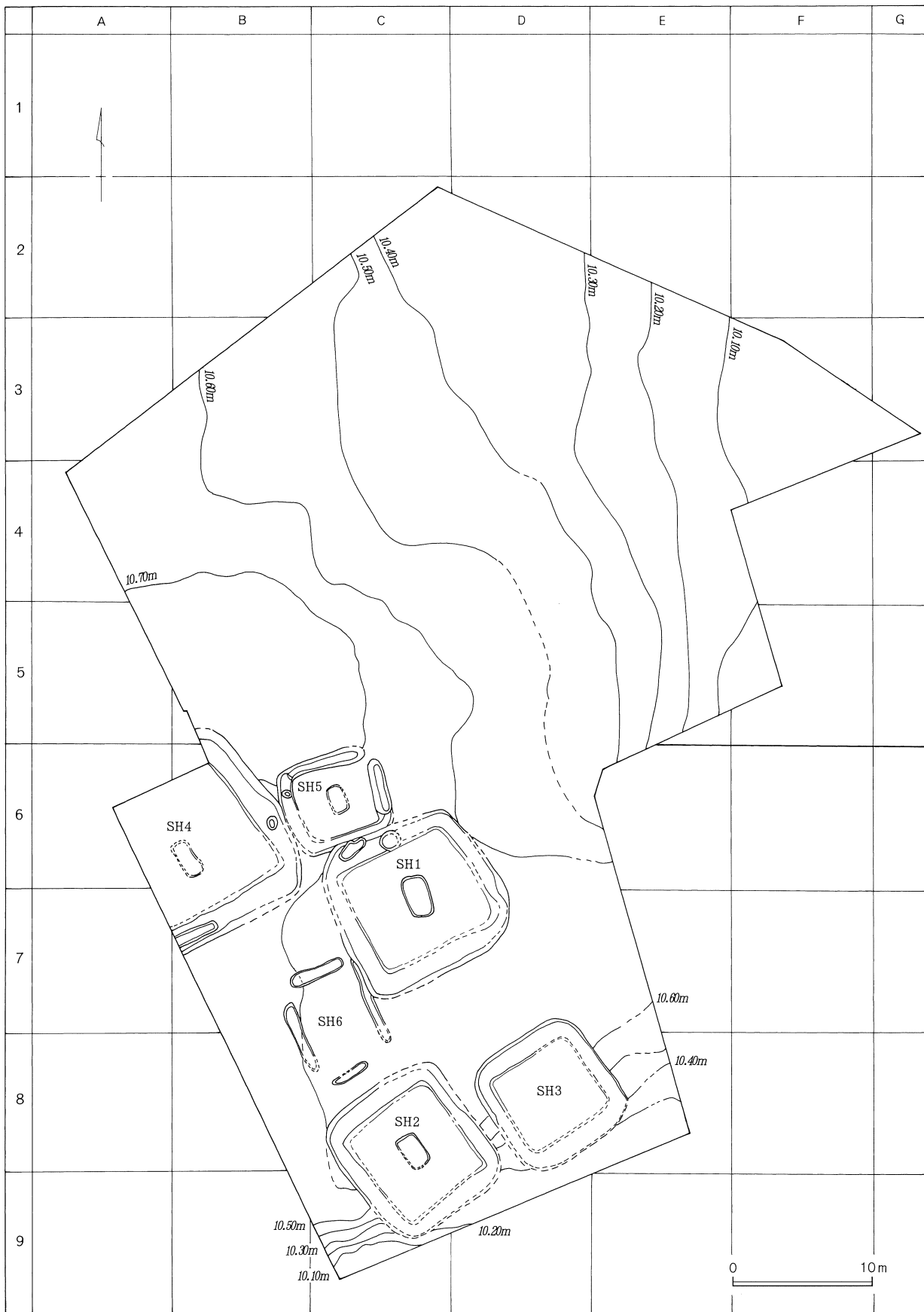
規模 今回調査された6基の内規模が明らかなものは1・5・6号のみだが、2～4号を正方形基調とするならば、7～9mの1～4号と6m前後の5・6号の2つに分けられる。大小の規模による造り分けが行われていたことが分かる。このような造り分けは、同時期の大宮台地の他の周溝墓群でも見られ、一般的な様相であることが分かる。

周溝 各周溝墓とも幅はほぼ均等で、どこか1箇所が拡幅されるという様子は見られない。大型の1～4号は、4号が若干幅広になるようだが概ね1.2～2.0mほどの幅である。小型の5・6号は70cm～1.2mで幅が狭い。深さは6号が極端に浅いが、その他は20～60cmである。周溝の内特に浅い部分は、1号が北溝、3号が北東溝、4号が東溝、5号が東溝と南溝、6号が各コーナーである。2号は攪乱が著しく明瞭でないが、東溝が浅いようである。

周溝内の施設は溝中土坑がある。1号は北溝に2箇所、4号は北東溝と南東溝に各一箇所造られている。形態は様々で、長楕円形、円形、長方形のものがある。この内土層観察から埋め戻しの可能性が考えられるのは1号の北溝西側、4号の北東溝のもので、埋葬施設等の可能性が考えられる。

また、4号の南東溝のようなしっかりとした長方形の溝中土坑は、少数例ではあるが、薬師耕地前遺跡7号周溝墓（2.7×1.3×0.4m）、浦和市外東遺跡4号周溝状遺構（君島 1999）、神奈川県横浜市道高速2号線

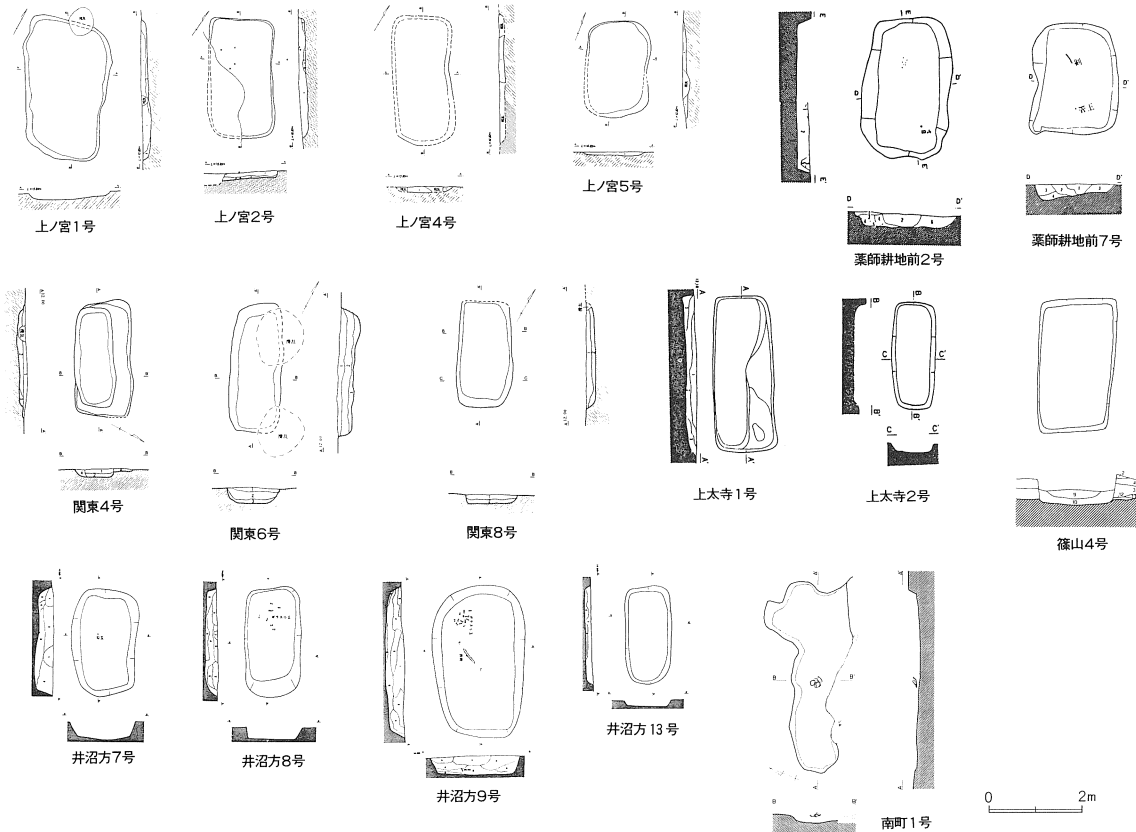
第71図 古墳時代の遺構



No.6 遺跡5号周溝墓 (1.5×0.7×0.2m) (岡田・藤井 1981、岡田・松本 1983) 等でも検出されており、一定の広がりがある可能性が高い。千葉県域では単独の長方形土坑が方形周溝墓と並存することが知られてお

り、あるいはその影響を受けている可能性も考えられる。良好な状態で人骨が検出されたことで著名な千葉県市原市草刈貝塚 (小林 1990) のものも同様の形態であり、埋葬施設である可能性が高いように思われる

第72図 大宮台地の中心埋葬施設



第11表 大宮台地の中心埋葬施設

遺跡名	遺構No.	主軸方向	規模 (m)			副装品	備考
			長軸	短軸	深度		
上ノ宮	1	N-29°-W	3.0	1.8	0.2		遺物なし
	2	N-38°-W	2.5	1.4	0.2	ガラス玉	土器片出土
	4	N-32°-W	(2.8)	(1.0)	0.2		遺物なし
	5	N-17°-W	2.0	1.3	0.1		遺物なし
葉師耕地前	2	N-14°-W	2.8	1.8	0.3	ガラス玉、壺	
	7-1	N-1°-E	2.3	1.7	0.2	剣、管玉	
	7-2	N-14°-W	2.7		0.4	ガラス玉	
関東	4	N-30°-E	2.5	1.2	0.2		2段の掘り込み、遺物なし
	6	N-26°-W	2.8	1.1	0.4		壺破片出土
	8	N-20°-W	2.2	1.2	0.2		遺物なし
上太寺	1	N-1°-W	3.3	1.2	0.2		土器片出土
	2	N-75°-E	1.9	1.2	0.2	ガラス玉	歯出土
篠山	4	N-9°-E	2.9	1.7			遺物なし
井沼方	7	N-10°-W	2.3	1.4	0.4	勾玉、石斧	
	8	N-17°-W	2.3	1.2	0.3	ガラス玉	
	9	N-27°-E	3.1	1.8	0.4	剣、ガラス玉、石斧	
	13	N-12°-W	2.0	1.0	0.1		遺物なし
南町	1	N-66°-E	(3.0)	(1.0)	0.1	壺	

が積極的な証左は得られていない。

5号周溝墓では、北西コーナーと南東コーナーに段が認められる。周辺からの出土遺物や土層の乱れはなく、施設である可能性は低いと考えられる。

その他のテラス等の施設は確認されていない。

中心埋葬施設 関東地方における方形周溝墓の中心埋葬施設については伊藤敏行（伊藤 1986）、長瀬出（長瀬 1997）によって既に基礎的な研究が行われている。

長瀬は1996年に刊行された『関東の方形周溝墓』（山岸 1996）所収の90遺跡343遺構について検討し、①Ⅱ期（中期後半）には単独埋葬と複数埋葬が並存し、②未成人の中心埋葬を窺わせる小規模土坑が認められる。③Ⅲ期（後期）には単独埋葬が大部分となり、小規模土坑の例はほとんど認められない。という各点を明らかにしている。上ノ宮遺跡の例も氏の挙げる③と同様の様相である。

上ノ宮遺跡の周辺で中心埋葬施設が確認されているのは、薬師耕地前遺跡、大宮市篠山遺跡（笹森 1988）、

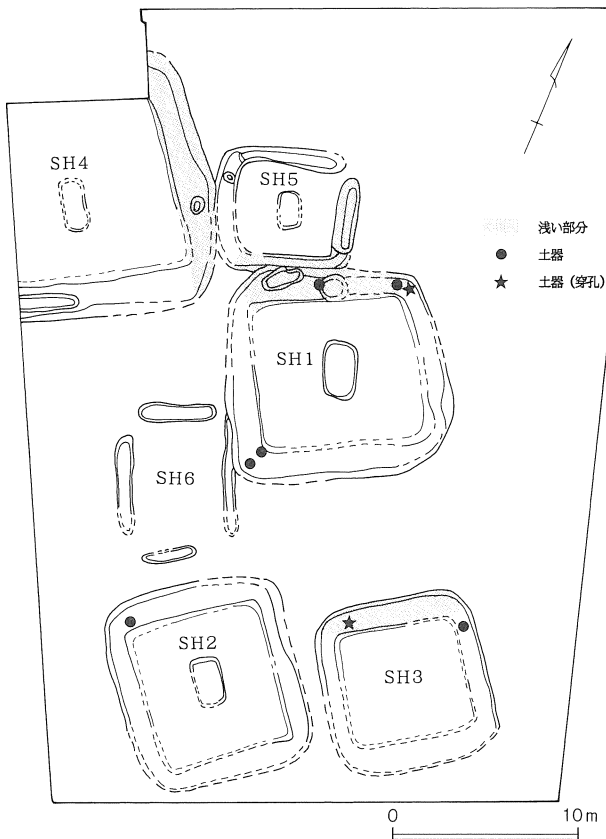
井沼方遺跡、上太寺遺跡、関東遺跡、戸田市南町遺跡（福田 1987）である。（第72図）（第11表）これを見ると長軸1.9～3.3m、短軸1.0～1.8mの範囲に収まっていることが分かる。上ノ宮遺跡の例はいずれもこの範囲に収まっている。軸方位はいずれも北北西から北西である。荒川水系の方形周溝墓の中心埋葬施設については、伊藤敏行が「土坑の規模は2～3mのやや長方形ぎみのものを基本とし、（中略）主軸方向は北北西を中心とし、比較的まとまっている」（伊藤 1988 P3 122～24）とまとめている。上ノ宮遺跡例もその範囲内に収まるものである。

この点は、方形周溝墓全体の平面形が、バラエティーを持つことと対照的である。

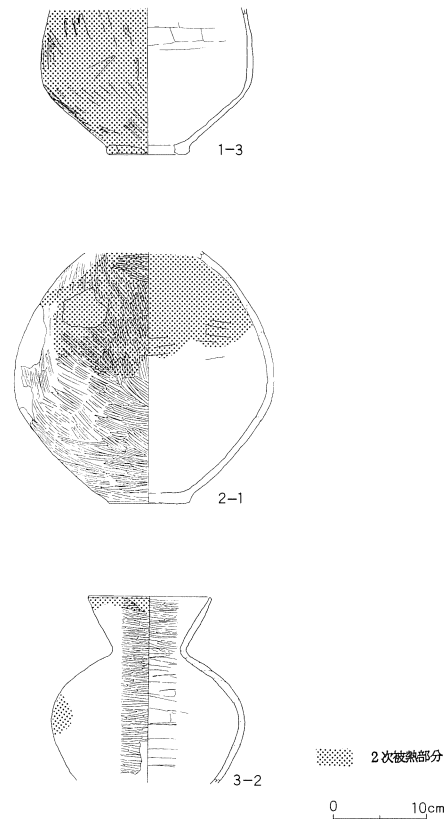
出土土器 1～4号から出土している。大部分が壺で、その他の器種は1号から台付甕と鉢が、3号から台付甕の細片が出土したのみである。

出土位置は1号が北溝中央と北西コーナー、西溝の南西コーナー寄り、2号が西コーナー、3号が西コー

第73図 土器の出土位置



第74図 土器の2次被熱部位

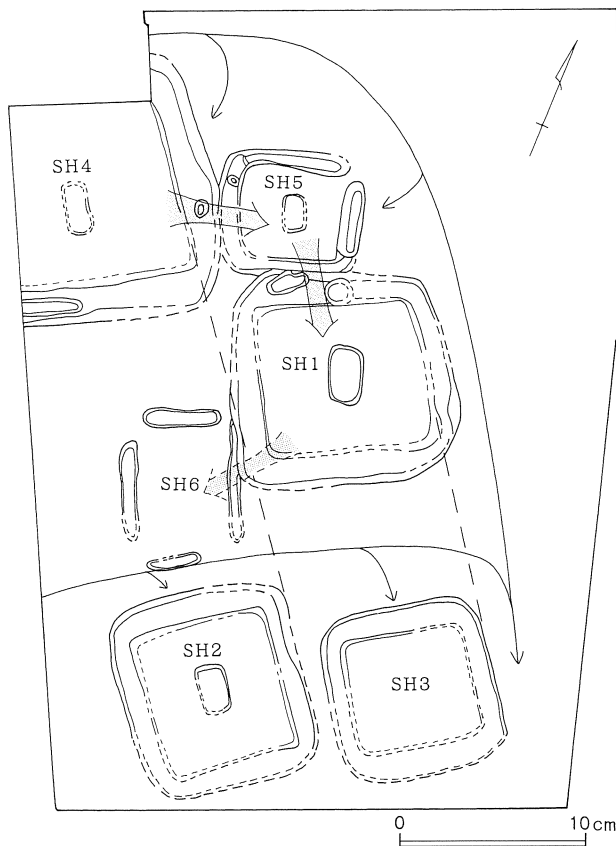


ナーと北東溝の北コーナー寄りである。各々の出土位置を模式的に示すと第73図のようになり、遺構の北・東側から出土する傾向が窺える。この傾向は、周溝の浅くなっている部分と対応する可能性がある。またコーナーやコーナー周辺からの出土とみることも可能である。1号の4は溝中土坑の北西側上位から出土しているが、溝中土坑との関係は不明である。

土器に対する変形行為は底部穿孔が認められた。1号-3、3号-1は焼成後に内側からの底部穿孔が施されている。上ノ宮遺跡周辺で、底部穿孔壺が出土しているのは、伊奈町向原1号(浜野 1984)、薬師耕地前遺跡7号、関東遺跡1号、篠山遺跡2号、大宮市大宮公園、井沼方10・11号などが知られている。いずれも焼成後の内側からの穿孔である。

土器に対する2次加熱行為は1号-3、2号-1、3号-1で認められる。(第74図) 1号-3は外面に部分的に煤の付着が見られる。その範囲については剥

第75図 上ノ宮遺跡の群構成



落が著しいため不明瞭である。2号-1は外面上半の大部分と内面の所々に煤が付着し、底部は変色しボロボロである。胴部外面下半には2次加熱痕が認められないことから、直接火に掛けたわけではないものの何らかの形で火のそばにあったと考えられる。3号-1は内面に若干の煤が付着していた。

このような土器に対する2次加熱痕についてはかつて論じたことがある(福田 1994)。地域設定や資料操作の恣意性に対して批判を受けているが、資料自体の観察結果については有効であろう。この中では、大宮台地南部、比企地域で弥生時代後期以後に、土器に対する2次加熱痕が明瞭に認められることを指摘し、何らかの形で方形周溝墓の儀礼の際に用いられた「火」の近辺に土器が置かれていたのではないかと推定した。検討範囲を広げ、更に資料を十分に吟味し相対化させる必要を感じているが、上ノ宮遺跡の例は上述の指摘と齟齬がないものと現時点では考えられる。

対の土器 1号-1・4と3号-1・2は、それぞれ実測図にするとかなり印象が異なるが、実際にそのものを目の前に置いた場合にはかなり似通った印象を受ける。

このように方形周溝墓それぞれで、よく似通った土器が出土することについては、早くは松本完(松本 1981)などによって注意され、合田芳正(合田 1995)によって「対」の土器」と呼称されている。

神奈川県海老名市海老名本郷遺跡の「対」の土器について検討した合田は、その特徴として①形態上の類似、見かけ上非常によく似ている点、②同様の土器が、集落域からは顕著に見られないか、あるいは全く存在しない、③製作技法、穿孔状態、胎土なども共通している。といった3点を挙げている(同P1027 116~21)。

上ノ宮遺跡の場合には、集落域との土器群の比較ができず、また底部穿孔などの状況も不明なため、曖昧な部分を残すが、同様のものである可能性が高い。

埼玉県内での同様な事例についてはまだ十分に検討を行っていないが、坂戸市中耕遺跡(杉崎 1993)などで認められる。東京都では及川良彦が杉並区都立和

田堀公園・大宮遺跡1号方形周溝墓、八王子市神谷原遺跡S X02・04・14・17の例を挙げている(及川 1996 P 224~226)。一定の広がりが見られ、更に類例を収集した上で再検討する必要があるだろう。

群構成 (第75図) 調査区内では、方形周溝墓群の東側には遺構が検出されていないため、墓群の東限であるとともに、古墳時代の遺構の東限と考えられる。平面的な位置関係と周溝の接続の様相からは、大きく北側の1・4~6号(北群)と南側の2・3号(南群)に分けられる。後に述べるが、現段階では南北の群の築造の先後は明らかでない。また、南群についても切り合い関係がなく、遺物も2号から出土するのみで築造の前後は不明である。

北群は切り合い関係から、4号→5号→1号の西から東、北から南へと順に築造されていることが分かる。6号と1号の前後は不明だが、この順序からは5号の後に築造されたと推定される。築造順序と規模の大小に関連は認められないようである。

北群と南群の直接の関係は不明だが、3号の方台部の北東辺と1号の東辺、2号の方台部の東辺と4号の北東辺がほぼ一致することから、4-2、1-3で何らかの築造に関する規則があったと考えられる。

陸橋部が全周する形態の1~4号と一隅切れの形態の5号から成る群の平面形の構成は、篠山遺跡、薬師耕地前遺跡とほぼ共通する。もとより、山岸良二が指摘するように現状の平面形は調査の確認面や遺存状況と密接な関係があるため、その他の遺跡も同様な平面形の構成を持っていた可能性は否定できない。しかしそうであるならばなおのことこの平面形の構成が大宮台地で一般的であった可能性が高い。

この陸橋部の存在と各周溝の浅い位置、出土土器の位置、築造順序を重ね合わせると方台部内に立ち上がった周溝の位置や経路を推定することができる。いずれも攪乱が著しく2・3号は南半が不明なため確実ではないが、方台部への立ち入りは北側と東側から行なわれ、経路はそれぞれの群の北側にあったと推定してお

きたい。

このような列状の群構成は井沼方遺跡などでも認められる。

ガラス玉 上ノ宮遺跡周辺で方形周溝墓からガラス玉が出土した遺跡は、薬師耕地前遺跡2・7号、上太寺遺跡2号、井沼方遺跡5・8・10号で、いずれも中心埋葬施設からの出土である。そのいずれについても、見たことがある程度で詳しく観察したことがなく、ガラス玉そのものについて何らかの私見を述べる段階にはない。ここでは、出土状況について若干のまとめを行っておく留めたい。

薬師耕地前遺跡2号では北西寄りの中央の壙底からやや浮いた状態で、7号では上層から散在して出土している。

上太寺遺跡2号では西寄りのほぼ中央から、骨粉、歯と共に出土している。

井沼方遺跡5号では北寄り、8号では北壁寄り、9号では北西隅から、壙底からやや浮いた状態で出土している。

このようにいずれの例においても、中心埋葬施設の長軸のどちらかに偏った状態で出土する傾向が認められるようである。

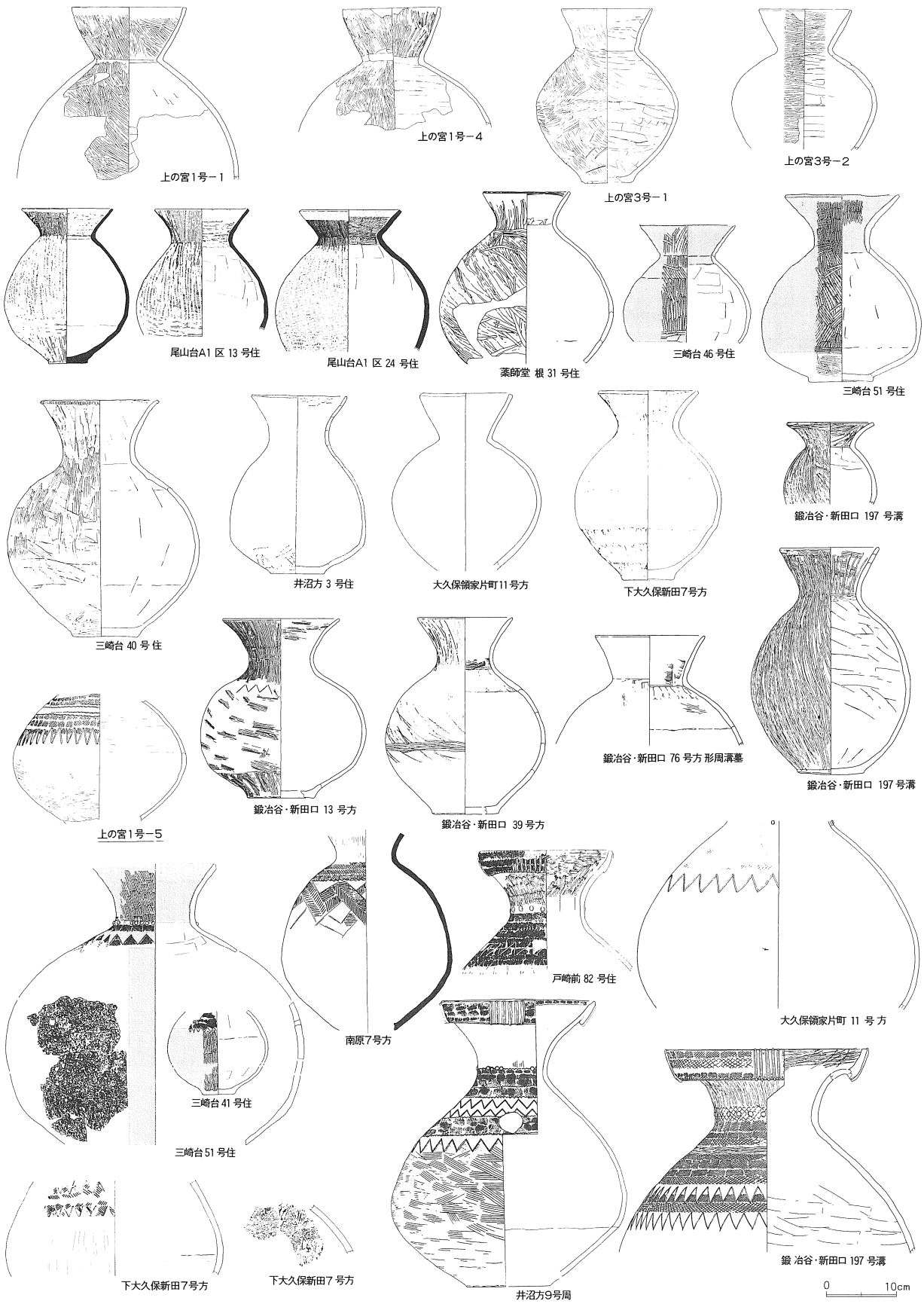
上ノ宮遺跡2号でも西側に偏った位置から出土し、他の例と同様である。

このような状況は、ガラス玉を装着した状態での埋葬を推定させるものである。上ノ宮遺跡の例もそのように考えていだろう。

また、出土ガラス玉の材質について非破壊分析では、東日本で一般的なカリ石灰ガラスであるという結果が得られている。更にデータの蓄積が必要であるが、参照されたい。

瑪瑙製の管玉については現在類例を調査中であり、言及できる段階にない。井沼方遺跡9号方形周溝墓からは端部を欠失した勾玉が出土しており、更に類例があると考えられる。改めて検討することとしたい。

第76図 上ノ宮遺跡周辺の単純口縁壺・山形文施文壺



(2) 出土土器について

出土土器は点数が少なく、加えて壺が大部分であるため、これらを用いて編年等を行うことは難しい。ここでは、出土土器で特徴的な単純口縁壺と胴部に山形の施文がある壺について周辺の遺跡例と比較し、相対的な位置付けを行うことにしたい。

単純口縁壺 上ノ宮遺跡では、1・3・4号方形周溝墓で単純口縁の無文の壺が出土している。2号出土のものは口縁部が不明だが、同様の壺である可能性が高い。

周辺で同様の壺を出土している遺跡としては上尾市尾山台遺跡A1区13・24号住居跡（埼玉考古学会 1996）、伊奈町薬師堂根遺跡31号住居跡（水口 1998）大宮市三崎台遺跡40・46・51号住居跡（笹森 1996）、井沼方遺跡3号住居跡（1981）、浦和市大久保領家片町遺跡11号方形周溝墓（柳田 1996）、下大久保新田遺跡7号方形周溝墓（山田・駒見 1998）戸田市鍛冶谷・新田口遺跡13・39・76号方形周溝墓、197号溝下層（西口 1986）などがある。系譜関係等は未だ未検討だが、荒川低地、大宮台地で一定の広がりを持つものと推定される。

ここで挙げた諸例を見ると、概ね口縁部の屈曲が緩やかな一群と、「く」の字状に強く屈曲する一群があるのが分かる。あるいは更に分けられる可能性もあるだろう。前者に対して後者が後出的であると考えられ、実際に両者を含む土器群を対置した場合にも齟齬はない。これらの単純口縁壺を含む土器群と上ノ宮遺跡出土例を対比すると後者の一群に含まれる。

胴部山形文施文壺 1号方形周溝墓-5は胴部に縄文帯を2段施文し、その上段の下端と下段の上端にS字状結節文を施し、更に下段にへら描きの山形文が加えられている。

上ノ宮遺跡周辺で帯縄文+山形（鋸歯）文という文様構成を持つ土器が出土している例としては、三崎台遺跡41・51号住居跡、伊奈町戸崎前遺跡82号住居跡（橋本 1999）、井沼方遺跡9号方形周溝墓（柳田・小倉 1994）、大久保領家片町遺跡11号方形周溝墓、下大久

保新田遺跡7号方形周溝墓、鍛冶谷・新田口遺跡197号溝下層、戸田市南原遺跡7号方形周溝墓（塩野・伊藤 1972）などで出土している。

ここで挙げたものは破片が多く、全形が知られるものは井沼方遺跡9号周溝墓例のみで、直接の比較は難しいが、山形文と縄文帯の關係に着目するならば、山形文に縄文を充填するもの（縄文→山形文→磨り消し）と、山形文が縄文帯の上下に施されるものがあり、後者には更に縄文に山形文が半ばかかる形（いわゆる鋸歯状文）で施文されているものと全くかからないものがあることが分かる。いずれも細かい部分が異なっており、全く同様のものはない。また、戸崎前、井沼方、鍛冶谷・新田口の各例では口縁部複合部外面に棒状浮文、頸部に円形浮文が貼付されている。これらの細かな差異についてここで論じる用意はないが、両者が伴出する下大久保例や鍛冶谷・新田口例などのこのような文様構成を持つ壺を含む土器群の様相からは、先の単純口縁壺とほぼ同時期の一定の時期幅を持って展開していると考えることができそうである。細かな差異は、そのような時期幅を反映するとともに、この文様構成の多様な展開を示している。

笹森紀巳子は早くから弥生時代後期の土器の文様構成に着目し、その推移について整理している。このような山形文についても言及し、「久ヶ原式段階には整然とした山形をなし、その内側に縄文が充填されている。弥生町式段階になると、山形文でなく間隔の狭い鋸歯状文となる。弥生町式後半段階には縄文の施文方法も充填縄文ではなく、磨り消し縄文となっている。この場合の磨り消し縄文とは、横位に縄文を施文後、鋸歯状文を描き、間を磨り消しているものである。」（笹森 1984P33 126～29）としている。周辺遺跡の土器群を見た場合首肯できる部分もあるが、例えば古いものとされる山形のモチーフは、新しい土器群と考えられる三崎台遺跡例、南原遺跡例でも認められるなど一様でないのが分かる。笹森が述べるような展開にはなっていない。

上ノ宮遺跡例は、縄文に粗密があり、S字状結節文が一周一致せず施されている点などから、このような文様構成が崩れつつあるものと見ることができる。

更に、伴出している単純口縁壺の形態を勘案すると、このような文様構成を持つ土器群の中でも新しい段階のものと考えられる。

上ノ宮遺跡周辺でのこのような文様構成は、あくまで少数例で客体的なものと考えられる。それに対して、下末吉台地や東京湾岸を中心とする地域には主体的に見出せるようである。この文様構成自体の時間的な展開や具体的なあり方を示す用意はないが、現状では下末吉台地や東京湾岸との文様構成の交流を示すものと考えておきたい。

時期 上ノ宮遺跡の方形周溝墓間での時期差を出土土器群から与えることは、現段階では行うべきではないと考えている。出土土器の時期については資料が断片的なこともあり、確実とは言い難いが、上述の特徴ある土器を含む他遺跡の土器群の様相から、筆者編年2

(3) まとめにかえて

このように上ノ宮遺跡の方形周溝墓群は、大宮台地ではごく一般的な周溝墓群といえることができる。上ノ宮遺跡のような一般的な周溝墓群が、これまで空白地域であった大宮台地の東側、大和田片柳支台で検出された意義は大きい。今後大宮台地と上総台地をはじめとする周辺地域との関係を考える上での結節点と考えることができるからである。

例えば上ノ宮遺跡の方形周溝墓群の平面形の構成や中心埋葬施設の様相は、大宮台地では一般的なものであり、ある程度の共通性を持った属性である。

一方で平面形が整った長方形の溝中土坑は、千葉県域との関係を推定させる。

同様に胴部に帯縄文とヘラ描きの山形文を施文する壺も千葉県をはじめとする東京湾沿岸域との関係を抜

段階後半～3段階（山川・福田・石坂 1998）、書上編年2段階（書上 1995）、橋本編年2～3段階、中里前原4期以後におおまかに位置付けておきたい。

さて、これらの土器群の時期を弥生時代終末と見るか、古墳時代前期と見るかは現在混沌とした状況にあり、筆者は個人的には弥生—古墳移行期とするのが最も適切な表現と考える。この議論には大きく2つの側面、即ち古墳が造られるから「古墳時代」、土師器を使うから「古墳時代」という側面があり、それが縋い交ぜになって混乱しているように思われる。従って、そのような状況の中では自らの立場を明示して、時代を呼称するほかないであろう。筆者は、古墳の築造がいつからか、あるいはどれを、何をもって古墳と呼ぶべきかという問題について立ち入る用意はない。

ここでは、当該期の広範囲で頻繁な土器交流。それを主体的に取り入れて作り出されていく土器群の登場を積極的に評価し、上ノ宮遺跡を古墳時代前期初頭とする立場をとっておきたい。

きにしては考えられない。また、系統などは明らかでないが広範な分布が予想される素口縁の無文長胴壺も、上ノ宮遺跡の多方向へのつながりを示唆するものである。「対の土器」やガラス玉についても同様である。

このように特殊でない、ごく一般的な上ノ宮遺跡の方形周溝墓群は、一般的であるが故に多方向へ伸びる線の重層的な重なり合いとして見ることができる。

本稿では上ノ宮遺跡の方形周溝墓群の各要素や遺物についての広がりや重なり合い、それによって生じる変容について十分な検討を尽くせなかった。遺跡の相対的な位置付けは、本書の検討によって端緒に付いたばかりである。後考を期し、ひとまず稿を閉じることにしたい。

引用・参考文献

- 青木秀雄 1979 『高輪寺遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書 久喜市教育委員会
- 赤石光資 1978 『薬師耕地前遺跡』上尾市文化財調査報告第4集 上尾市教育委員会
- 赤星直忠 1948 「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』1-1
- 赤星直忠・岡本 勇 1957 「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』1
- 上尾市教育委員会 1996 『尾山台-尾山台遺跡発掘調査報告書-』上尾市史編さん調査報告書第10集
- 安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討-清水柳遺跡第二群土器の検討を中心として-」『東京考古』1 東京考古談話会同人
- 石坂敏郎 他 1997 『土器が語る-関東古墳時代の黎明-』古墳時代土器研究会 第一法規
- 伊藤敏行 1986 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」『研究論集』Ⅳ (財)東京都埋蔵文化財センター
- 伊藤敏行 1988 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ」『研究論集』Ⅵ (財)東京都埋蔵文化財センター
- 井上 賢 1997 「野島式土器二細分論」『人間・遺跡・遺物』3 発掘者談話会
- 岩田明広 1999 『中里前原遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第228集
- 岩槻市史編さん室 1983 『岩槻市史』
- 植木 弘・金子直行 1980 『金平遺跡』嵐山町金平遺跡調査会
- 及川良彦 1996 「方形周溝墓出土の土器 南関東②東京都」『関東の方形周溝墓』同成社
- 大谷 徹 1998 『小村田西/小村田/関東』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第229集
- 大宮市教育委員会 1971 『小深作遺跡』大宮市文化財調査報告第3集 大宮市教育委員会
- 奥村恭史・秦野昌明 1989 『中里前原北遺跡・上太寺遺跡』与野市文化財調査報告書第13集 与野市教育委員会
- 岡田威夫・藤井和夫 1981 『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 1980年度 (No.6 遺跡-Ⅰ)』 横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
- 岡田威夫・松本 完 1983 『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 No.6 遺跡-Ⅲ No.9 遺跡Ⅱ 1982年度』 横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
- 小倉 均 1981 『大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第15集
- 小倉 均 1987 『井沼方遺跡 (第8次) 発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書59集
- 岡本東三 1994 『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』千葉大学文学部考古学研究報告第1冊
- 書上元博 1994 『稻荷台遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集
- 金子直行 1982 「野島式土器について-金平遺跡出土土器を中心に-」『土曜考古』6 土曜考古学研究会
- 金子直行 1984 『明花向・明花上ノ台井沼方馬堤・とうのこし』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 金子直行 1985 『貝塚山遺跡発掘調査報告書-第2地点-』富士見市遺跡調査会報告書第24集
- 金子直行 1986 『猿貝北・新町口』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第61集
- 金子直行 1992 「子母口貝塚資料・大口坂貝塚資料」『山内清男考古資料』5 奈良国立文化財研究所
- 金子直行 1993 「子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討-細隆起縄文土器の出自と系譜を中心として-」『研究紀要』10 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 君島勝秀 1999 『大久保条理/外東/神田天神後』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第206集
- 合田芳正 1995 「d「対」の土器」『海老名本郷 (X-4)』富士ゼロックス・本郷遺跡調査団
- 小林清隆 1990 『市原市草刈貝塚』千葉県文化財センター
- 小林照教・青木文彦 1993 『岩槻市内遺跡発掘調査報告書』岩槻市教育委員会
- 小林照教・青木文彦 1995 『加倉中島遺跡発掘調査報告書』岩槻市遺跡調査会
- 斉藤悟朗・吉田健司 1985 『吠原遺跡 (先土器・縄文時代編)』川口市文化財調査報告書第二十三集
- 斉藤悟朗 1987 『吠原遺跡 (考察編)』川口市文化財調査報告書第二十五集
- 埼玉県遺跡調査会 1972 『加倉 西原 馬込 平林寺』東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
- 笹森紀巳子 1984 「久々原式から弥生町式へ-壺形土器の文様を中心に-」『土曜考古』9 土曜考古学研究会
- 笹森紀巳子 1988 「篠山遺跡」『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊4
- 笹森紀巳子・小川岳人 1996 『三崎台遺跡-第3次調査-』大宮市遺跡調査会報告第56集
- 笹森紀巳子・田口勝一 1986 『B-13番遺跡 A-79番遺跡 A-239番遺跡 A-116番遺跡』大宮市遺跡調査会報告書第15集
- 塩野 博・伊藤和彦 1968 『鍛冶谷・新田口遺跡』戸田市文化財調査報告Ⅱ 戸田市教育委員会
- 塩野 博・伊藤和彦 1972 『南原遺跡第2・3次発掘調査概要』戸田市文化財調査報告Ⅴ 戸田市教育委員会

- 下村克彦・宮内正勝 1976 『丸ヶ崎遺跡発掘調査報告 氷川参道並木調査報告』大宮市文化財調査報告第10集 大宮市教育委員会
- 下村克彦・庄野靖寿 1978 『貝崎貝塚第3次発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第12集 大宮市教育委員会
- 下村克彦・宮崎由利江 1988 『中里遺跡 篠山遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊4
- 杉崎茂樹 1993 『中耕遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集
- 鈴木秀雄 1980 『卜伝』埼玉県遺跡発掘調査報告書第25集
- 鈴木敏昭 1983 『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集
- 瀬川裕市郎他 1976 「清水柳遺跡の土器と石器」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1
- 瀬川裕市郎 1981 「条痕文土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 関野哲夫 1989 『清水柳北遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告第47集 沼津市教育委員会
- 田代 治・笹森紀巳子 1985 『宮ヶ谷塔遺跡群発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第18集
- 田代 治他 1994 『深作稻荷台遺跡-第2・3次調査- A-137号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第44集
- 立木新一郎・山口康行 1982 『膝子八幡神社遺跡』大宮市遺跡調査会報告第4集
- 立木新一郎他 1983 『小深作前遺跡 青葉園東遺跡』大宮市遺跡調査会報告第7集
- 立木新一郎他 1984 『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会報告第10集
- 立木新一郎・山形洋一 1985 『宮ヶ谷塔貝塚』大宮市遺跡調査会報告第13集
- 立木新一郎・山形洋一 1985 『A-77番遺跡 A-146番遺跡 B-2番遺跡 B-29番遺跡』大宮市遺跡調査会報告第14集
- 立木新一郎・田代 治他 1987 『B-92号遺跡 A-230号遺跡 A-61号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第20集
- 鶴岡正昭 1982 「多摩ニュータウンNo.457遺跡」『多摩ニュータウン遺跡-昭和56年度-(第3分冊)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集
- 長瀬 出 1997 「南関東地方における方形周溝墓被葬者の検討」『法政考古学』23 法政考古学会
- 西川博孝 1978 『飛ノ台貝塚発掘調査概報』飛ノ台貝塚発掘調査団
- 西口正純 1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
- 西口正純 1996 『中里前原北遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第176集
- 橋本 勉 1999 『戸崎前Ⅱ/薬師堂根Ⅱ』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第218集
- 秦野昌明 1980 『中里前原遺跡-第1次発掘調査報告書-』与野市中里前原遺跡調査会
- 浜野一重他 1984 『向原・上新田・西浦』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第41集
- 福田 聖 1987 『南町Ⅰ遺跡』戸田市遺跡調査会報告書第1集
- 福田 聖 1991a 「溝中土壙小考」『研究紀要』8 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 1994 「方形周溝墓と土器Ⅰ」『研究紀要』11 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 毒島正明 1983 「子母口式土器研究の検討」『土曜考古』7 土曜考古学研究会
- 松本 完 1981 「本遺跡出土の久ヶ原・弥生町期の土器について」『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 1980年度 (No.6 遺跡-I)』横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
- 馬目順一 1982 『竹之内遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第8冊 いわき市教育委員会
- 宮 重行 1981 『木の根』千葉県文化財センター
- 水口由紀子 1998 『薬師堂根遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第200集
- 三田村美彦 1990 『小深作遺跡発掘調査報告第3次調査』大宮市文化財調査報告第28集 大宮市教育委員会
- 三友国五郎・安岡路洋 1962 『後遺跡』埼玉県立文化会館
- 三友国五郎・安岡路洋 1966 『稻荷原』大宮市教育委員会
- 柳田博之・小倉 均 1994 『井沼方遺跡発掘調査報告書 (第12次)』浦和市遺跡調査会報告書第185集
- 柳田博之 1996 『大久保領家片町遺跡発掘調査報告書 (第5地点)』浦和市遺跡調査会報告書第215集
- 山川守男・福田 聖・石坂俊郎 1998 「北武蔵における土器群の画期と交流」『庄内土器研究XⅧ』庄内土器研究会
- 山形洋一他 1993 『深作稻荷台遺跡 東北原遺跡-第9次調査-』大宮市遺跡調査会報告第40集
- 山岸良二(編) 1996 『関東の方形周溝墓』同成社
- 山田尚友 1994 『下大久保新田遺跡発掘調査報告書 (第1次)』浦和市遺跡調査会報告書第176集
- 山田尚友・近藤行仁・岩井昭子 1996 『大久保領家片町遺跡発掘調査報告書 (第8地点)』浦和市遺跡調査会報告書第205集
- 山田尚友・駒見佳容子 1994 『下大久保新田遺跡発掘調査報告書 (第4次)』浦和市遺跡調査会報告書第238集
- 吉田健司他 1986 『八本木遺跡』川口市遺跡調査会

付編

上ノ宮遺跡より出土したガラス玉の材質分析

小泉好延

小林紘一

1. はじめに

上ノ宮遺跡から出土したガラス玉の分析を行った。遺物を損なわないで得られるガラス玉の特性は大きさ、重量、密度、色調、内泡状態などであり、これらの形状と簡単な観察内容から、製造技術や産地、流通などの考古学的な知見を得るには限界があるだろう。古代ガラス玉の製造技術で重要なことは材質に関することである。ガラス材質の定量分析を行う目的は、主成分と着色成分を明らかにし、それらの組成から系統的な分類を行い、そこからガラス原料の同定、製造技術、国際的な流通と伝播、地域間流通を探ることにある。形態より材質が重視される考古遺物である。

日本の古代遺跡から出土するガラスの主成分は、アルカリ石灰ガラスと鉛ガラスであるが、東日本の遺跡から出土したものは、大部分がアルカリ石灰ガラスである。アルカリ石灰ガラスはSi(珪素)、Al(アルミニウム)、Mg(マグネシウム)とCa(カルシウム)、K(カリウム)、Na(ナトリウム)を主成分とし、これらを含む複数の鉱物を溶解して作られる。アルカリ石灰ガラスは、さらに、主成分の濃度によって、K濃度の高いカリ石灰ガラスとNa濃度の高いソーダ石灰ガラス、K、Naの両方を含む石灰ガラスに分類される。これまでの分析によれば、東日本では弥生時代から古墳時代前期ではカリ石灰ガラス、その後の時代ではソーダ石灰ガラスが増加することが認められた。ガラスの色調は主成分、着色成分の組成と濃度、酸化、還元状態によって決まるが、この時代に多く出土するガラスの色調は紺、青、緑、それらの濃淡と中間色が大部分である。これまでの分析によれば、紺色系の着色成分としてMn(マンガン) 鉱物が用いられたと思われる。Mn鉱物にはFe(鉄)と微量のCo(コバルト)が含まれている場合が多く、FeとCoも着色に寄与し

ていると思われる。青、緑色系の着色成分としてCu(銅) が用いられている。

本遺跡出土のガラス玉は古墳時代前期の方形周溝墓から出土し、紺の色調を持っていることからアルカリ石灰ガラスのカリ石灰ガラスに属し、Mn鉱物を使用した着色が行われているものと予想される。以下、分析結果とこれまで行った東日本の同色ガラス分析結果との検討を行う。

2. ガラス玉試料と分析方法

2-1. 分析試料

分析した試料は、上ノ宮遺跡から出土したガラス玉5点である。試料は埋蔵した年代が明確な古墳時代前期の方形周溝墓中心埋葬施設から出土している。色調はすべて紺色である。赤茶色の管玉(石製) 1点も供出している。ガラス製ではないが参考のため分析を行った。

2-2. 分析方法

分析にはPIXE分析法(荷電粒子励起X線分析、Particle Induced X-ray Emission)を用いた。PIXE分析は、加速器によって陽子や α 粒子を高エネルギーに加速し、分析試料に照射する。試料の含有元素から発生する特性X線のエネルギースペクトルを半導体型放射線検出器で測定し、多元素を同時に分析する方法である。一般には環境汚染物質や金属、半導体、生物などの主成分や微量分析に使用されている。これまで、装置の制約により、考古学試料の化学組成分析ではあまり普及していないが、海外の博物館などではこの方法による分析が始まっている。PIXE分析の特長は、試料破損が無く、放射線による着色が生じないこと、多元素を同時に分析できることである。筆者らはPIXE分析をナトリウムから鉛、ウランまで同時に

分析できるよう改善し、考古遺物のガラス玉、青銅、陶磁器、真鍮金属などの材質分析に使用している¹⁾。

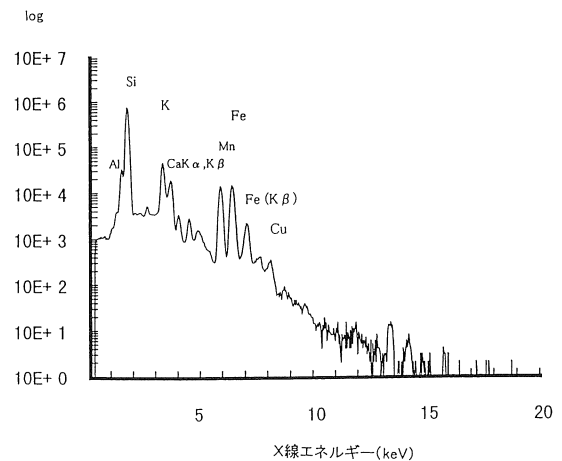
2-3. 試料処理と分析装置の条件

試料は表面の汚れを除去するために、蒸留水・エタノール1：1溶液で、低出力にした超音波器で3分間の洗浄を行った。PIXE分析は東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器を用いた。照射エネルギーと粒子は3 MeVのプロトン、照射ビーム径0.5mm、照射電流値0.5～1 ナノアンペア (nA)、照射電荷量200～1000ナノクーロン (nC)である。X線検出は高純度Si半導体検出器とCZT半導体検出器の両者を使用し、検出された特性X線エネルギースペクトル (PIXEスペクトル) の解析から元素同定と定量を行った。使用した標準試料はNBS611, 621, 1411, 1412, 70a, 標準岩石試料 (地質調査所) JA1～JG1などである。

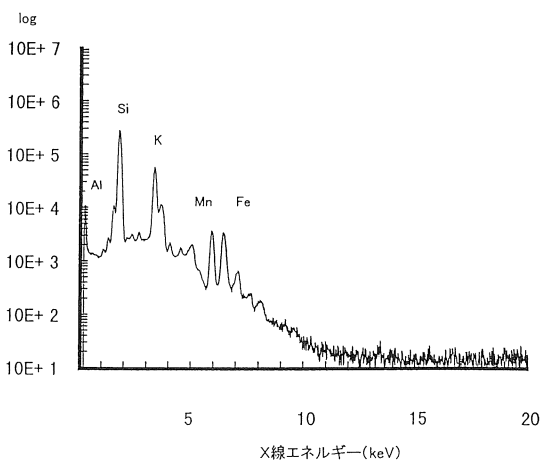
3. 結果

分析結果を表に示す。分析された主成分、副成分は酸化物として重量パーセントで示した。また、測定したPIXEスペクトル例を第77図に示した。また、同時に他の遺跡から出土した紺色ガラスのPIXEスペクトルの第78図、第79図に示した。

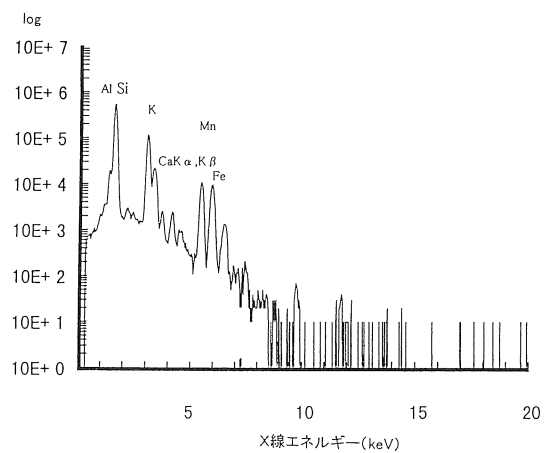
第77図 本遺跡出土の紺色ガラス玉のPIXEスペクトル



第78図 長野県榎田遺跡出土紺色ガラス玉のPIXEスペクトル



第79図 神奈川県受地だいやま遺跡出土紺色ガラス玉のPIXEスペクトル



第12表 ガラス玉の分析結果

濃度は酸化物重量パーセント (wt%)

試料番号	色調	SiO ₂	Al ₂ O ₃	K ₂ O	Na ₂ O	CaO	MgO	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	CoO	PbO	TiO	BaO
ガラス玉-1	紺	86.1	4.1	3.8	n.d	1.1	0.6	1.8	2.1	n.d	0.04	n.d	0.2	0.2
ガラス玉-2	紺	83.0	5.1	5.3	n.d	1.5	0.5	2.0	1.9	n.d	0.05	n.d	0.2	0.3
ガラス玉-3	紺	88.8	3.4	4.0	n.d	0.9	0.5	1.1	0.9	0.03	n.d	n.d	0.1	0.2
ガラス玉-4	紺	86.6	4.6	3.5	n.d	1.0	0.6	1.5	1.8	0.04	n.d	n.d	0.2	0.2
ガラス玉-5	紺	84.6	3.0	8.5	n.d	1.0	0.5	1.0	1.2	0.04	n.d	n.d	0.1	0.2
管玉 石製	赤茶	97.2	1.0	n.d	n.d	n.d	0.2	n.d	1.5	0.03	n.d	n.d	n.d	n.d

*n.d : 検出限界値以下、Na₂O 0.1wt% CuO 0.02wt% CoO 0.02wt% PbO 0.05wt%など

*元素の定量値はガラス玉の表面が不定型なことから、Na～Pbの分析結果を100wt%とした。酸化物濃度である。

4. 考察

古代ガラスの材質

主成分

5点の Na_2O は0.2wt%以下(検出限界値以下、n.d.)ときわめて低い濃度であり、他の主成分の平均値は SiO_2 86.6wt%、 Al_2O_3 4wt%、 K_2O 3.8~8.5wt%、 CaO 1.1wt%、 MgO 0.5wt%であった。やや K_2O 濃度が低いが、 Na_2O が低く、アルカリ石灰ガラスのカリ石灰ガラスに分類される。筆者らによって行われた、東日本の弥生時代~古墳時代前期のガラスの分析結果とはほぼ同様な組成を示している。

これまでに分析を行った主な弥生時代遺跡は、埼玉県与野市上太寺遺跡(方形周溝墓、主体部出土)²⁾、埼玉県大宮市下土屋遺跡(住居)³⁾、長野県榎田遺跡(弥生時代後期~古墳時代前期の住居)⁴⁾、群馬県有馬遺跡(周溝墓、礫床墓主体部)⁵⁾、神奈川県奈良町受地だいやま遺跡(方形周溝墓、主体部)⁶⁾などで、住居も含まれるが、多くは周溝墓主体部から出土したガラス玉である。上太寺遺跡、下土屋遺跡では紺色のみが、有馬遺跡、受地だいやま遺跡では紺、青色ガラス玉が出土している。これらのガラス分析は定性分析を含めると総数は約500点に達し、定量分析も100点を超えている。各遺跡の詳細なデータを述べることは別な機会として、概要を示すと次のようになる。

アルカリ石灰ガラスの主成分は、 SiO_2 74%~86wt%、 K_2O 4~15wt%、 Na_2O 検出限界値(n.d. 0.2wt%以下)~1wt%、 CaO 0.3~2wt%となり、カリ石灰ガラスの成分を示している。また、 Al_2O_3 、 MgO は2~6wt%、0.2~2wt%である。各成分の濃度の広がり大きいと思われるが、各遺跡内では少ない。受地だいやま遺跡では SiO_2 74~83wt%、平均値78.3wt%、 K_2O 8.5~14.0wt%、平均値12.5wt%である。なお、2点が例外として出土している。下土屋遺跡の1点がソーダ石灰ガラスであり、上太寺遺跡の1点がソーダ成分2wt%を越えるアルカリ石灰ガラスであった。

着色成分

ガラス玉の色調はすべて紺である。着色成分は MnO が0.9~2.0wt%、 Fe_2O_3 1.0~2.1wt%、各平均値は1.5、1.6wt%である。 CoO は0.02~0.05wt%で高濃度ではない。 MnO は濃度が高く、主成分に含有されていた不純物とは考えられず、着色成分として調査されたと思われる。 Fe_2O_3 は主成分の鉱物にも含有されているが、 MnO との相関があり多くは MnO 鉱物によるものであろう。 CoO はきわめて微量で意図的に調査されたとは思えない。 Co は化学的に類似する Mn 、 Fe 、 Ni (ニッケル)などと混合することが知られていることから、 MnO 鉱物に含有されていると考えられる。微量ではあるが紺色の着色に寄与していると思われる。

受地だいやま遺跡の紺色ガラスでは、 MnO 、 Fe_2O_3 が1.3~2.2wt%、1.3~2.5wt%、各平均値は1.9、2.0wt%と本遺跡試料の濃度にきわめて近い。上太寺遺跡、下土屋遺跡、榎田遺跡も同様であることから、紺あるいは紺青色の着色を意図して調査されたものである。古墳時代前期の東京都大田区、宝萊山古墳⁷⁾出土の紺色ガラスも同様な濃度であった。

青、緑色の着色材として知られる Cu は、検出限界値(n.d. 0.01wt%)~0.04wt%と低く、紺色の着色には寄与していない。本遺跡では、色調が青・緑のガラスは出土していないが、他の弥生時代、古墳時代の遺跡では盛んに出土している。榎田遺跡では60%、受地だいやま遺跡では90%が青色のガラス玉であった。それらの CuO 濃度は1.1~2.0wt%である。また、この色調のガラスは0.2~0.4wt%の PbO (鉛酸化物)と0.07~0.3wt%の SnO (錫酸化物)を含有している場合が多い。 CuO と PbO の濃度には弱い相関があることから、鉛ガラスのように意図的に添加されたものではなく、着色材として調査された Cu に含有されていると考えられる。 SnO も Cu に含有されたものであろう。

従来、東日本において古代ガラス玉の出土は少ない

と思われていたが、今年発行された埼玉県江南町の遺跡報告書⁸⁾によれば、埼玉県の方形周溝墓、古墳などから出土したガラス玉の総数は約4700個におよんでいる。他の地域でも同様な状況であろう。ガラスは他の遺物に比較して出土が少ないのではなく、形態が単純なため考古遺物として注目されず、県レベルでのデータ整理が行われていなかったことが、従来の認識を与えた一因であろう。最近、メッシュを使った水洗を採用した調査が行われ、極小遺物が取り上げられていることから、ガラスの出土はさらに増加すると思われる。ガラス玉が多量に出土している事実は、今後の材質分析数の増加を可能とする。それらの定量分析の結果は、データの信頼度を高め、ガラス材質の時代変遷の有無、国内の地域や国際間の比較、製造技術、流通伝播の解明に大きな寄与ができると思われる。

西アジアやエジプトを起源とするガラスの材質はソーダ石灰ガラスが多く、中国黄河流域では鉛ガラスが作られていたことが知られている。しかし、東日本出土のガラス分析結果から、弥生時代から古墳時代前

期にカリ石灰ガラスが多く出土していることがほぼ確認できる。また、この時代、日本の九州、対馬ではソーダ石灰ガラスとともに、カリ石灰ガラスが出土し、近畿などの地域でもカリ石灰ガラスが出土している。カリ石灰ガラスについては、中国の広東、広西地域、漢代南越国の墓から広く出土し、その製造が中国南方にあるか、西方から海路もたらされたものかが論じられている⁹⁾。今後、中国南方、東南アジア、インド、アラビア海沿岸の遺跡調査が進むことによって、製造地域が明らかになってくるであろう。着色成分もこれらの地域との比較が必要である。紺、青、緑色以外の赤(赤茶)色¹⁰⁾や古墳時代に出土する黄色のガラス⁸⁾も流通経路を解明する手がかりとなる。カリ石灰ガラス、着色成分の類似性、分布などを海外を含め調査を行い、製造地域の同定を行うことが今後の課題である。

謝辞：加速器による分析に協力いただいた東京大学原子力研究総合センター、中野忠一郎さんに感謝いたします。

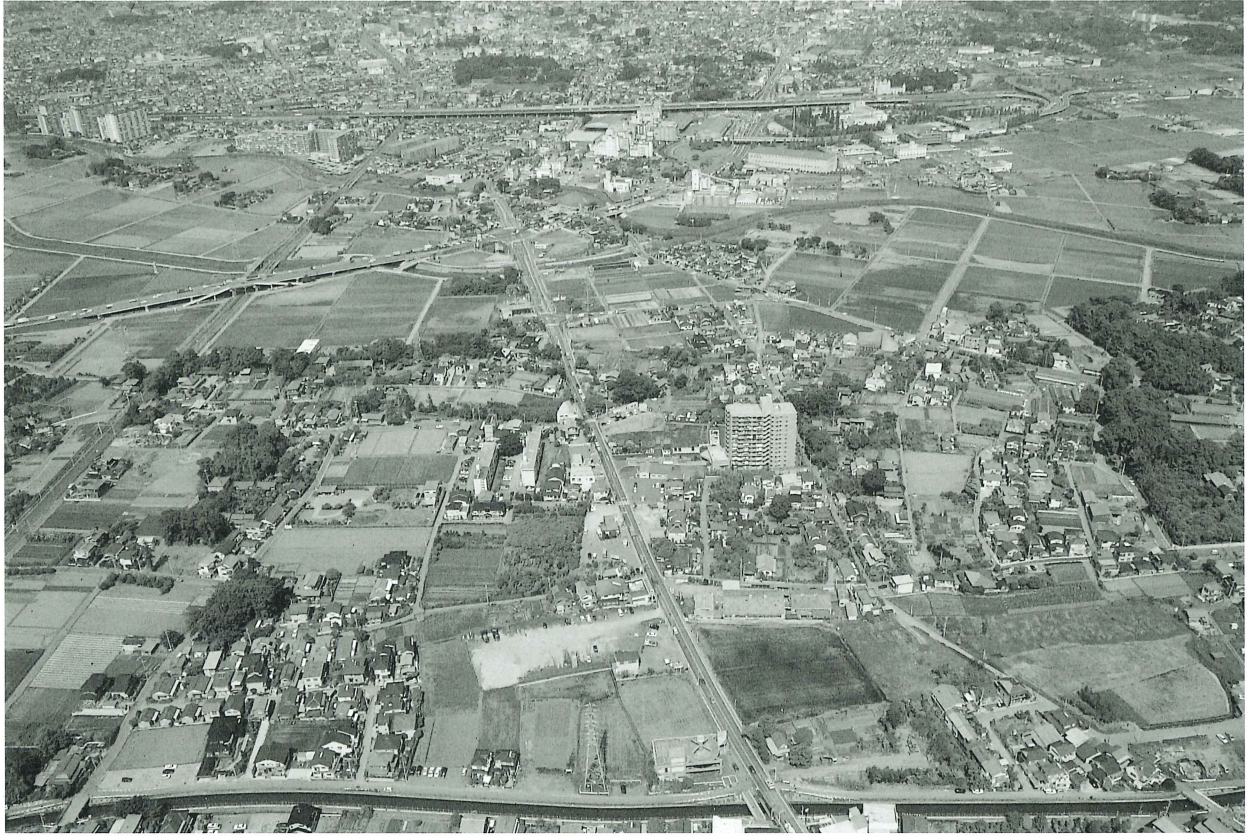
参考文献

1. K. Kobayasi, Y. Koizumi, C. Nakano, S. Hatori, Y. Sunohara Nuclear Instruments and Methods. B [Dual detector system for PIXE measurement covering a wide element range] 1999 144-149p
2. 小泉好延、小林紘一分析、ガラス分析データは未発表、埼玉県与野市上太寺遺跡
3. 小泉好延、小林紘一分析、ガラス分析データは未発表、「土屋下遺跡」 1994 埼玉県大宮市遺跡調査会報告 第47集
4. 小泉好延、小林紘一分析、「榎田遺跡より出土したガラス玉の材質分析」長野県埋蔵文化財センター発掘報告書37 1999. 3
5. 富沢威、富永健、小泉好延 「有馬遺跡出土ガラス玉の材質分析」関東自動車道地域文化財発掘報告書第32集 有馬遺跡二 1990
6. 小泉好延、小林紘一分析、ガラス分析データは未発表、神奈川県奈良地区遺跡 I 発掘報告書上巻受地だいやま遺跡
7. 小泉好延、小林紘一 1996 「宝萊山古墳から出土したガラス玉の材質分析」 大田区立郷土博物館紀要 第7号
8. 小泉好延、小林紘一 「狸塚27号墳から出土のガラス玉の材質分析」 埼玉県江南町埋蔵文化財調査報告書12集 1999. 3 埼玉県内のガラスリストは森田安彦整理、表10、11
9. 「中国古代玻璃研究」1984年北京国際玻璃研究学術討論会文集 1986
10. 小泉好延、小林紘一分析、ガラス分析データは未発表、長崎県対馬峰町東沿岸地域埋蔵文化財発掘調査報告書11「椎の浦遺跡」 1981

参考資料

1. 藤田 等 1994 「弥生時代のガラスの研究」 名著出版
2. 伊藤 彰 1997 「ガラスにおける「炎と色の技術」 アグネ技術センター

写真図版



遺跡遠景



遺跡遠景



遺跡全景（調査区東半）



遺跡全景（調査区西半）



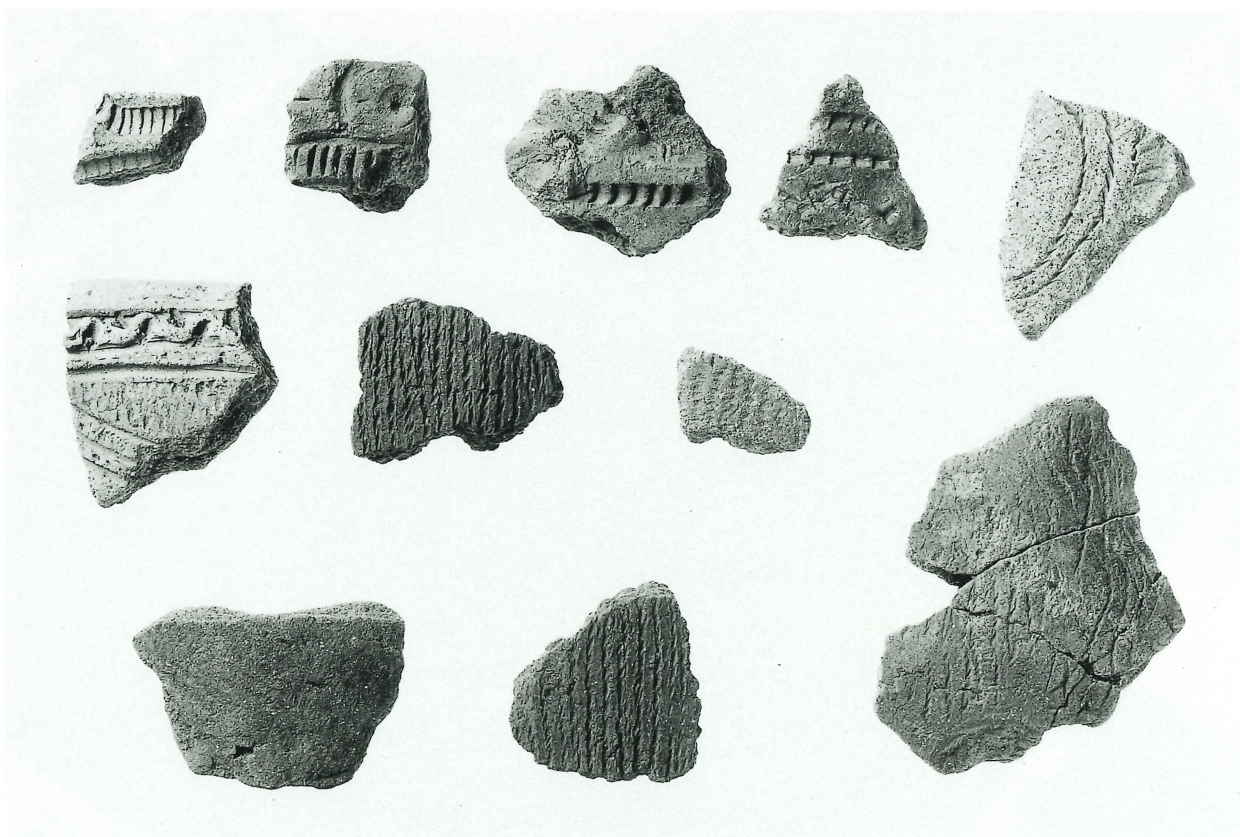
遺跡近景（調査区東半）



遺跡近景（調査区西半 遺構確認時）



第 1 号住居跡



第 1 号住居跡出土土器



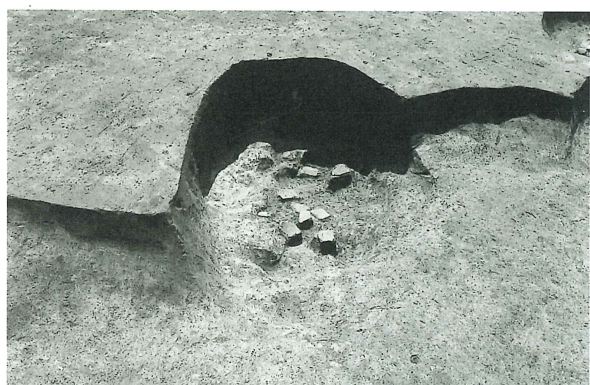
炉穴群 2 (第13~17・19号炉穴)



第13・14号炉穴



第15号炉穴



第16号炉穴



第17号炉穴



炉穴群 1 遺物出土状況



炉穴群 1 遺物出土状況



第11・12号炉穴



第27号炉穴



炉穴群3 (第28号炉穴他)



第31号炉穴



第20·21号炉穴



第24·25号炉穴



第26号炉穴



土壤群近景



土壤群近景



炉穴群 2 出土土器 (第18图5)



炉穴群 2 出土土器 (第18图4)



炉穴群 3 出土土器 (第30图3)



炉穴群 2 出土土器 (第18图3)



炉穴群 3 出土土器 (第30图2)



炉穴群 2 出土土器 (第18图1)



炉穴群 3 出土土器 (第30图1)



炉穴群 1 出土土器 (第13图)



炉穴群 1 出土土器 (第13图内面)



炉穴群 1 出土土器 (第 15 图)



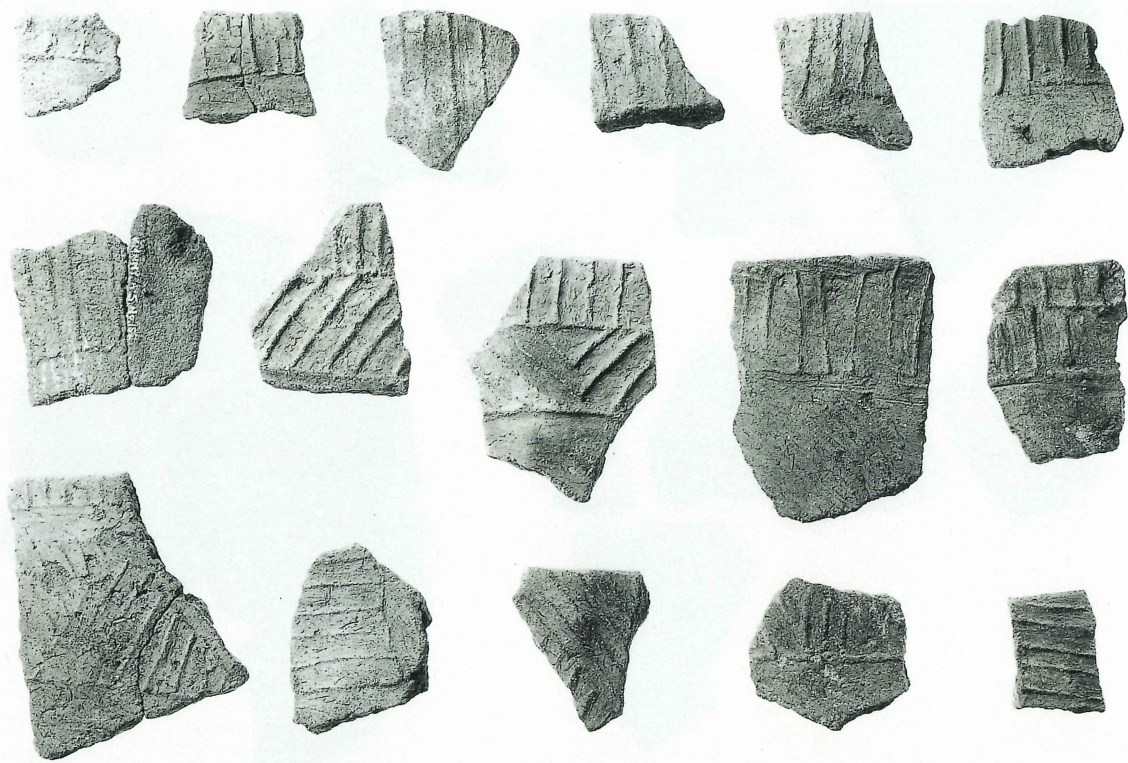
炉穴群 1 出土土器 (第 15 图内面)



炉穴群 2 出土土器 (第 18 图 2 · 6 · 第 20 图 · 第 21 图)



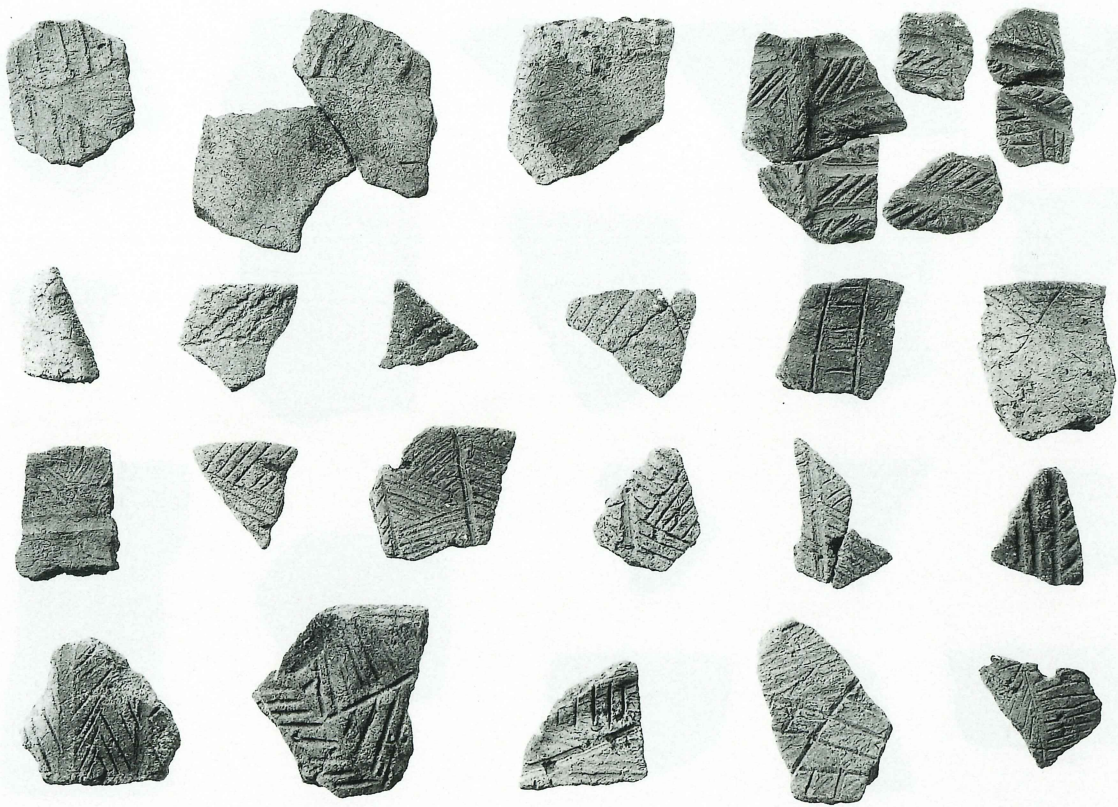
炉穴群 2 出土土器 (第 18 图 2 · 6 · 第 20 图 · 第 21 图内面)



炉穴群 2 出土土器 (第20图)



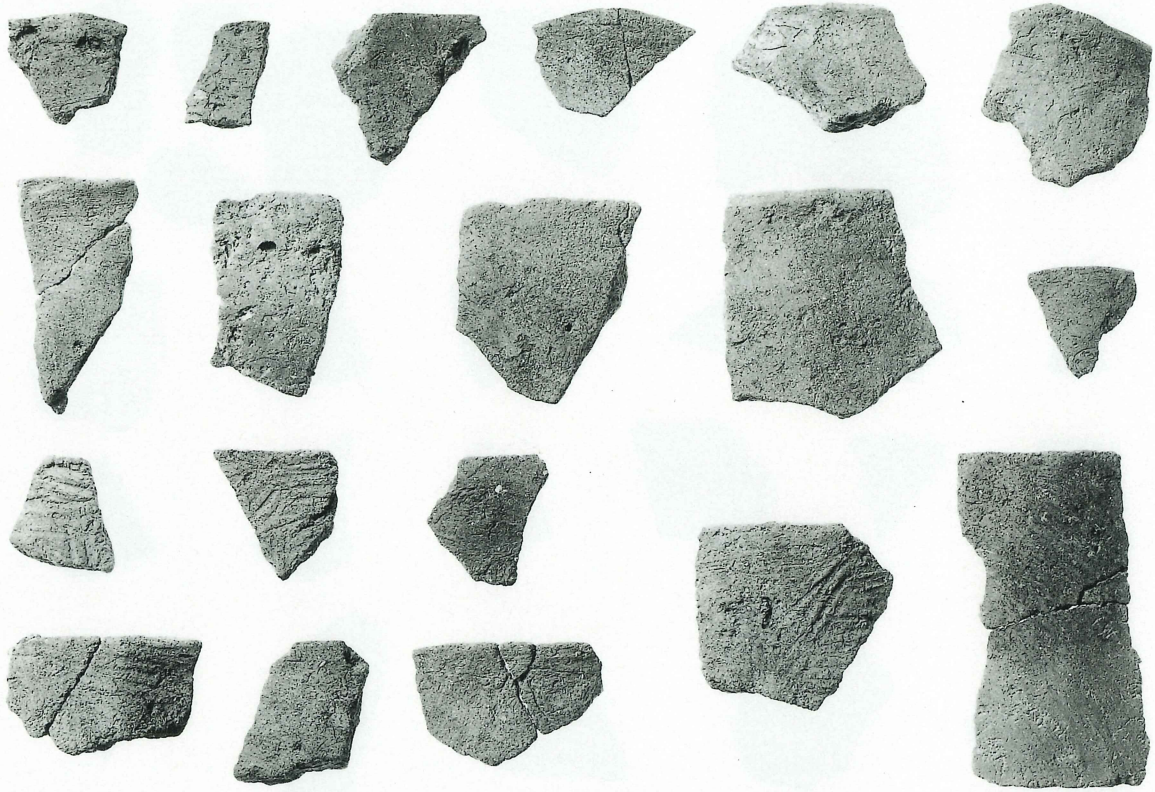
炉穴群 2 出土土器 (第20图内面)



炉穴群 2 出土土器 (第 21 图)



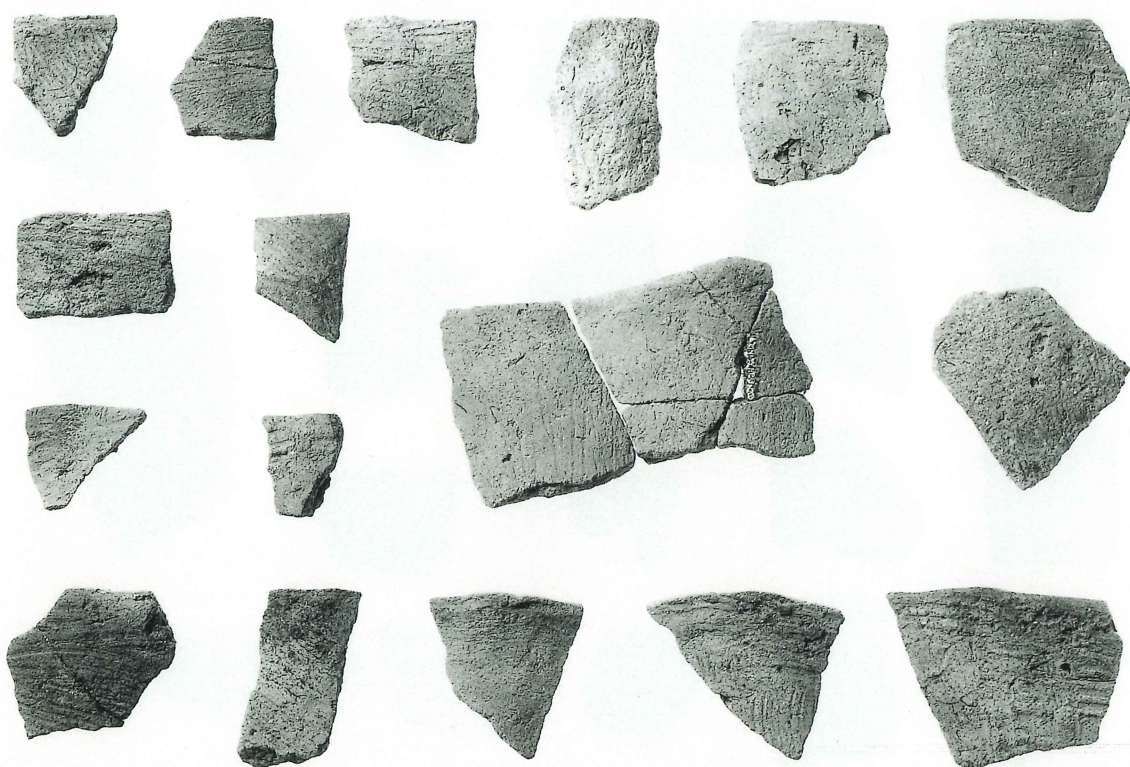
炉穴群 2 出土土器 (第 21 图内面)



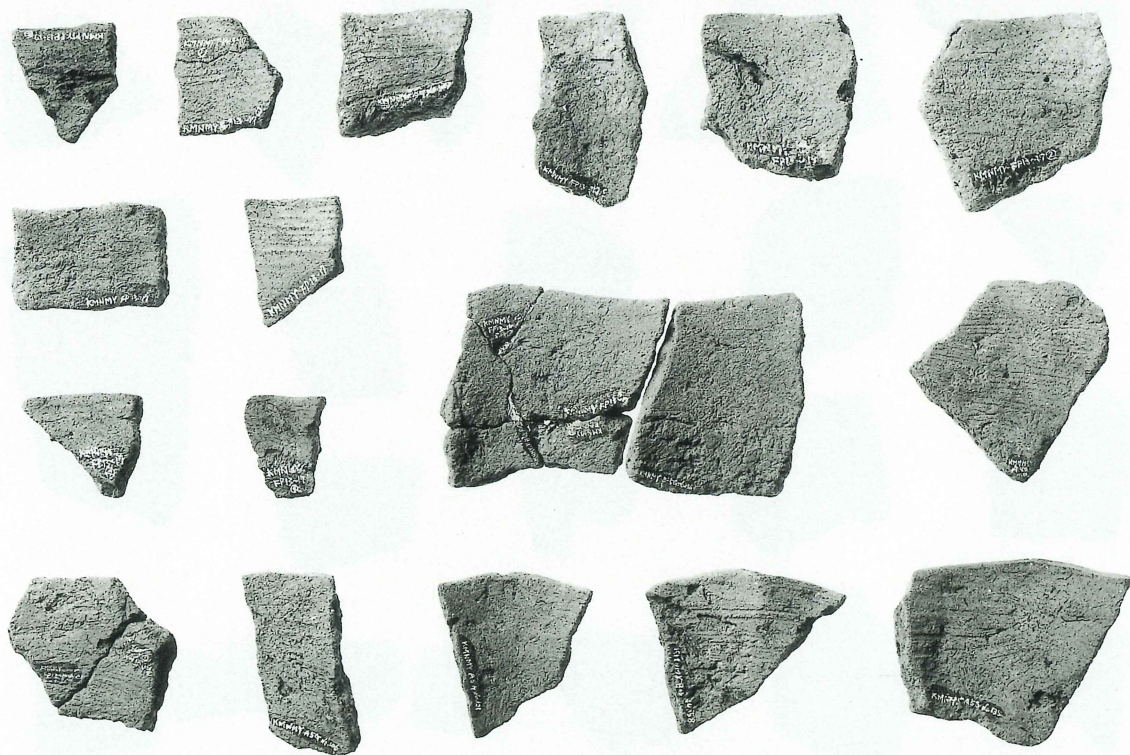
炉穴群 2 出土土器 (第22图)



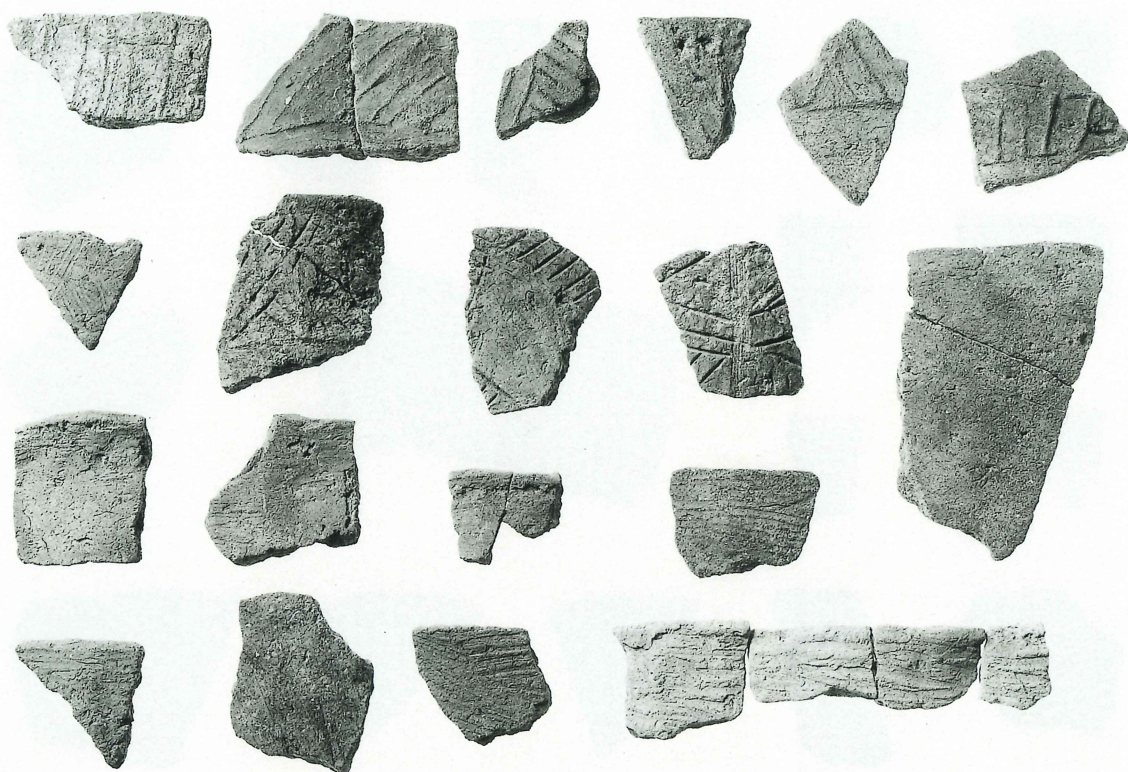
炉穴群 2 出土土器 (第22图内面)



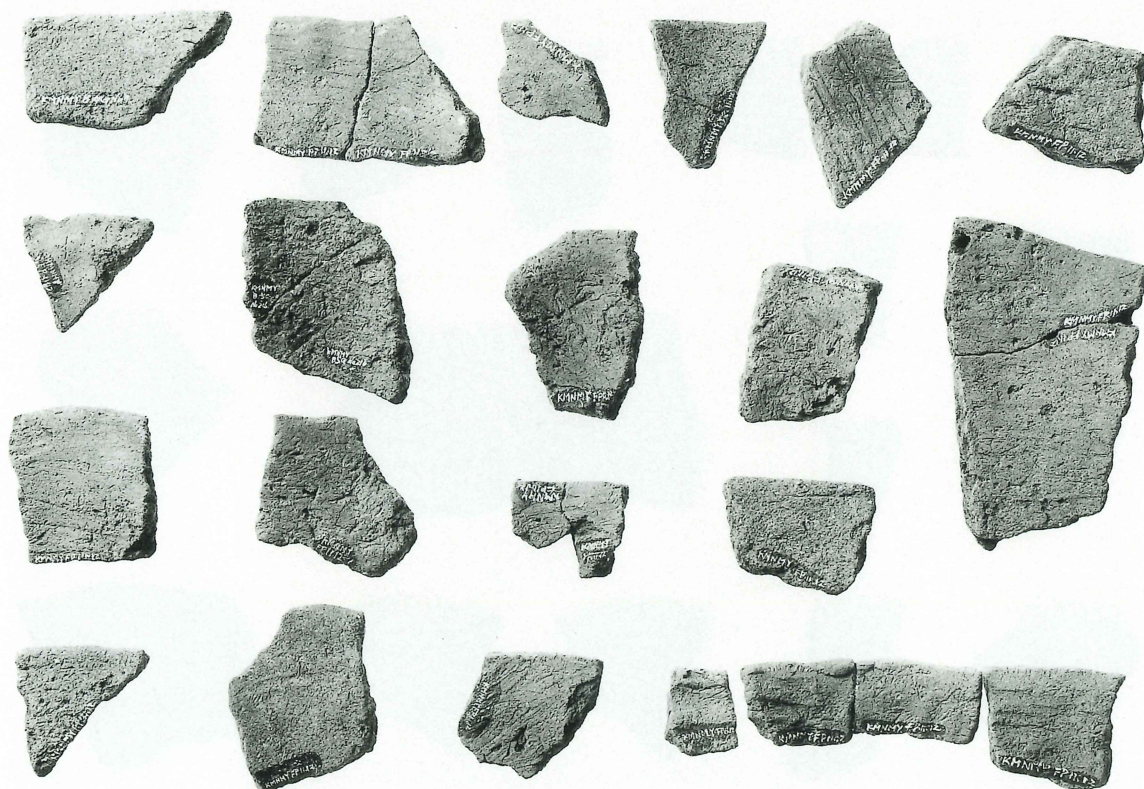
炉穴群 2 出土土器 (第 22 图 · 第 23 图)



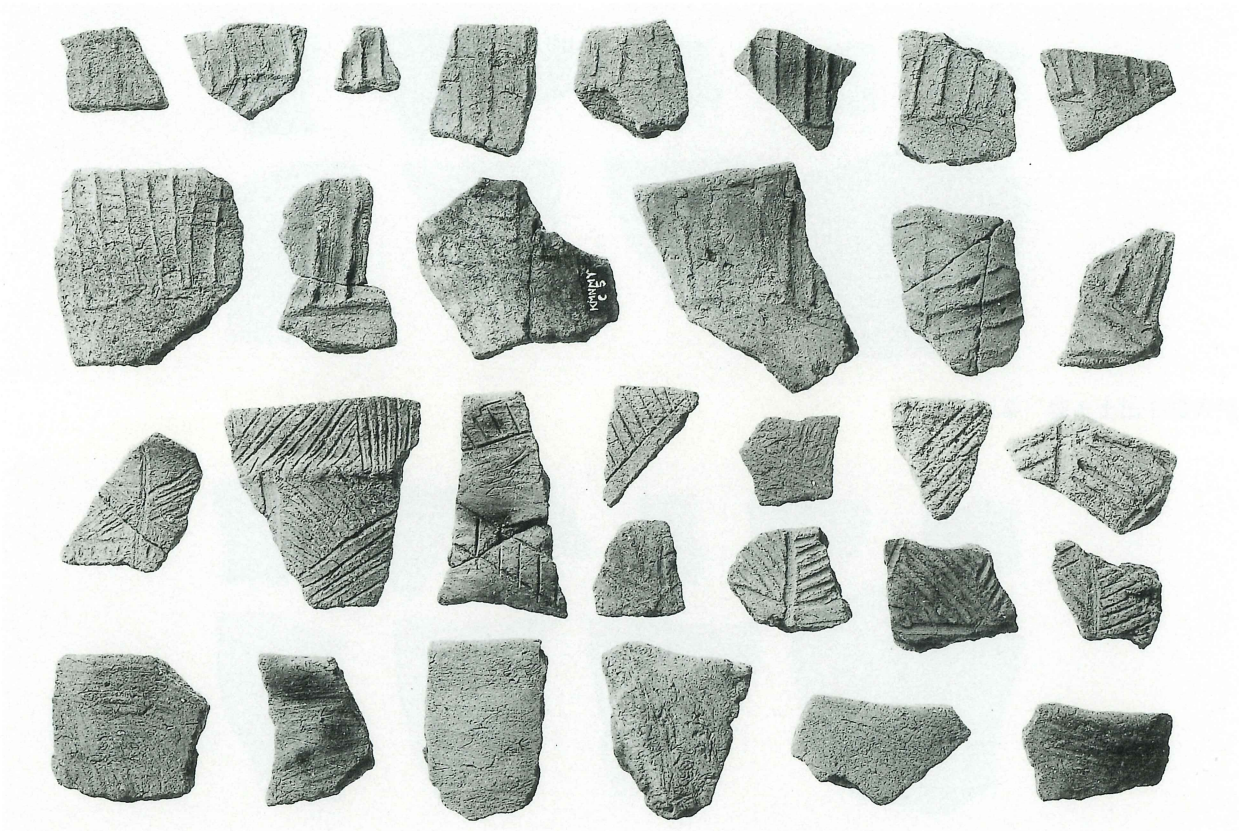
炉穴群 2 出土土器 (第 22 图 · 第 23 图内面)



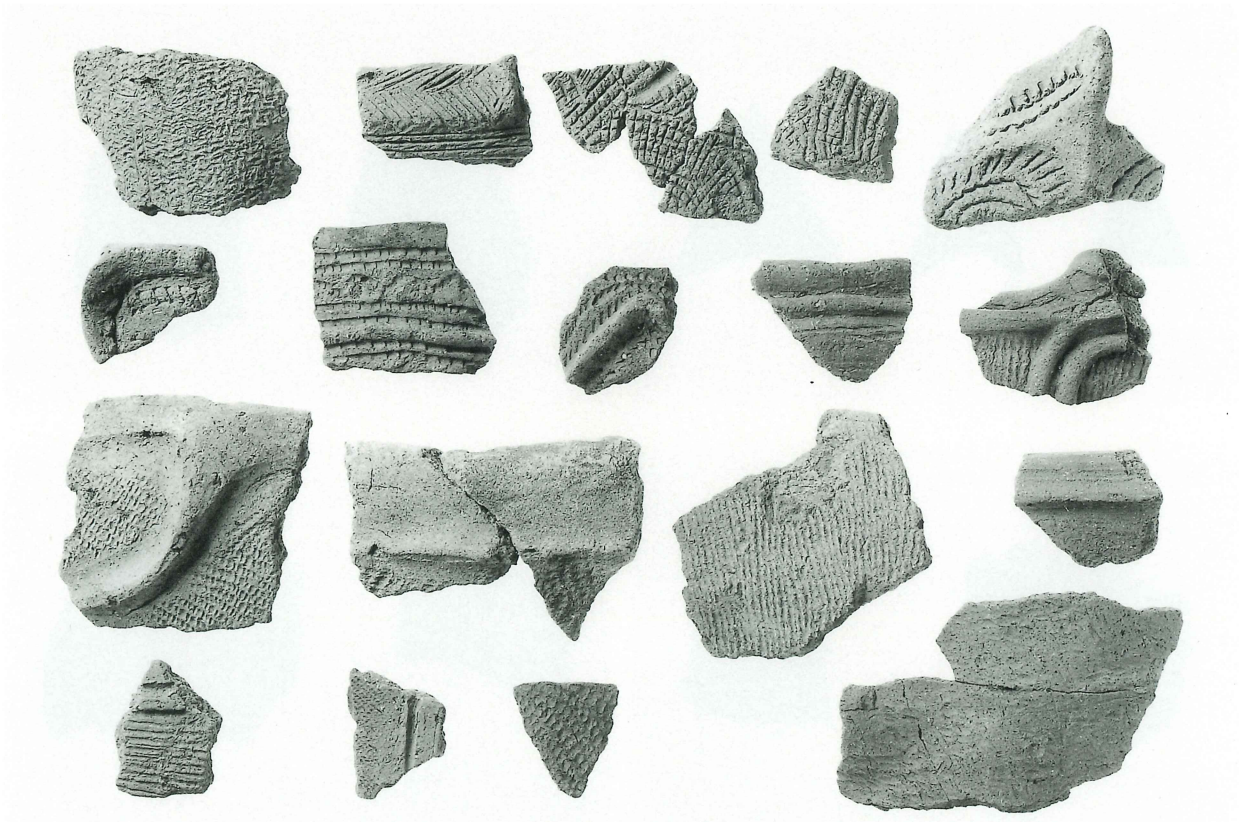
第11・12号炉穴出土土器（第34图・第36图）



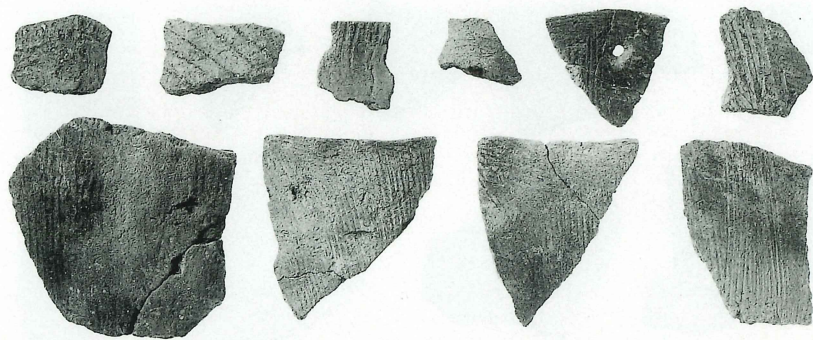
第11号・12号炉穴出土土器（第34图・第36图内面）



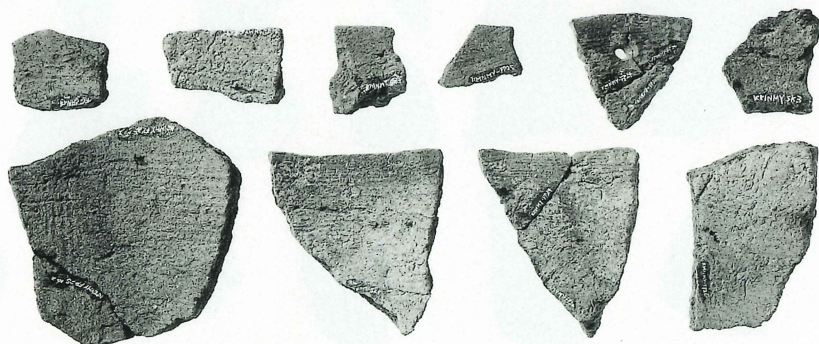
グリッド出土土器 (第46図)



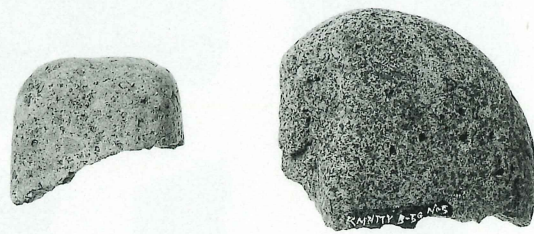
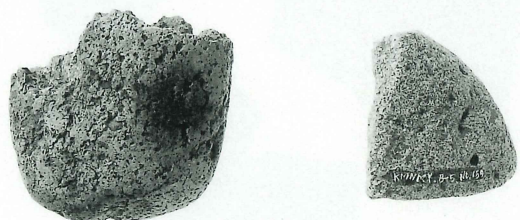
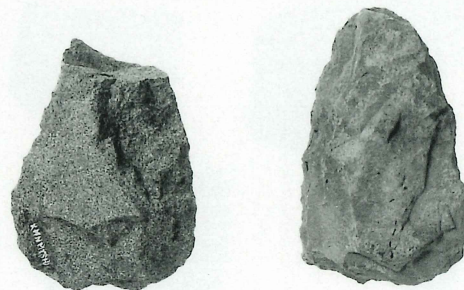
グリッド出土土器 (第47図)



炉穴群 3 出土土器 (第31图)



炉穴群 3 出土土器 (第31图内面)



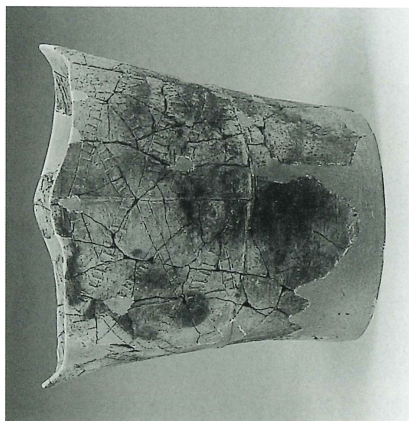
出土石器 (第48图)



(第9图2)



(第9图2内面)



炳穴群1出土土器展開写真



第1号方形周溝墓



(第53图4)



(第53图1)



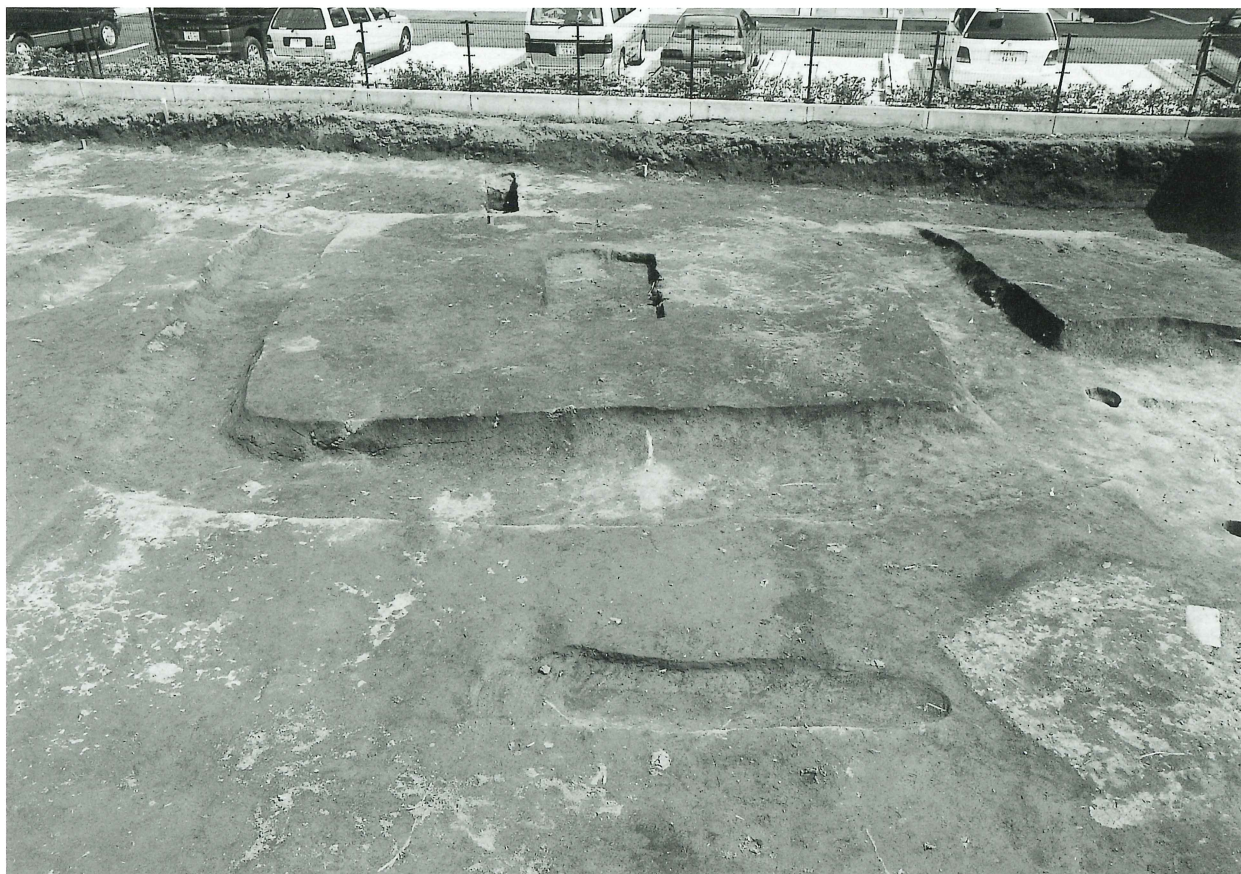
(第53图6)



第1号方形周溝墓遺物出土狀況 (第53图3・5)



(第53图2)



第2号方形周溝墓



第2号方形周溝墓中心埋葬施設



第2号方形周溝墓遺物出土状況（第57図1）



第3号方形周溝墓



第3号方形周溝墓遺物出土狀況（第59図1）



第3号方形周溝墓遺物出土狀況（第59図2）



第 4 号方形周溝墓



第 4 号方形周溝墓溝中土壤



第5号方形周溝墓



第6号方形周溝墓



第2号住居跡



第2号住居跡カマド



第1・2・3号溝近景



第1・2・3号溝近景



地下式坑 (SX2)



第1号井戸



第 1 号方形周溝墓出土土器 (第 53 图 1)



第 1 号方形周溝墓出土土器 (第 53 图 4)



第 1 号方形周溝墓出土土器 (第 53 图 3)



第 1 号方形周溝墓出土土器 (第 53 图 5)



第 1 号方形周溝墓出土土器 (第 53 图 6)



第 1 号方形周溝墓出土土器 (第 53 图 7)



第3号方形周溝墓出土土器 (第60图2)



第4号方形周溝墓出土土器 (第62图1)



第2号方形周溝墓出土土器 (第57图1)



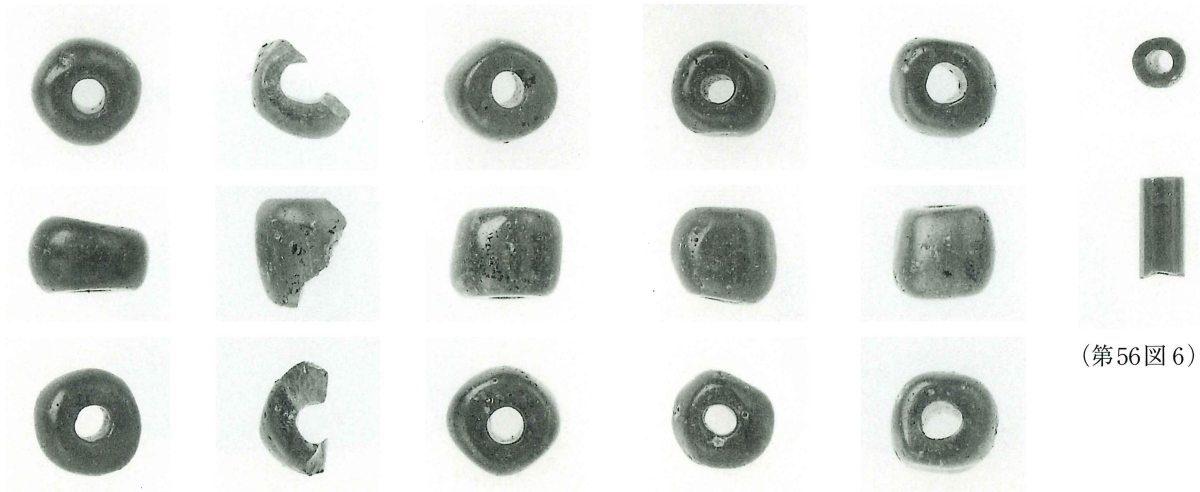
第3号方形周溝墓出土土器 (第60图1)



同上底部



同上底部



(第56图6)

(第56图1)

(第56图2)

(第56图3)

(第56图4)

(第56图5)

第2号方形周溝墓出土玉類



第2号住居跡出土土器 (第68图2)



第2号住居跡出土土器 (第68图9)



第2号住居跡出土土器 (第68图8)



第2号住居跡出土土器 (第68图5)

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみのみやいせき							
書名	上ノ宮遺跡							
副書名	県営大宮東門前団地関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第252集							
編著者名	新屋雅明 福田 聖							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0105 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦 1999(平成11)年10月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみのみやいせき 上ノ宮遺跡	さいたまけんおおみやし 埼玉県大宮市 おおあざひがしもんぜん 大字東門前 あざかみのみや 字上ノ宮 446-1他	11205	118	35° 56' 05"	139° 40' 48"	19980401~ 19980630	2967.47㎡	県営団地 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上ノ宮遺跡	集落跡	縄文時代早期	炉穴 35基 土壇 75基		縄文土器 石器 土師器 須恵器 土製品 ガラス玉 石製品			
		縄文時代中期	竪穴住居跡 1軒					
		古墳時代	方形周溝墓 6基					
		平安時代	竪穴住居跡 1軒					
		中・近世	溝 3条 竪穴状遺構 1軒 地下式坑 1基 井戸跡 1基					

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第252集

大 宮 市

上ノ宮遺跡

県営大宮東門前団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成11年10月20日 印刷

平成11年10月29日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369 - 0108 大里郡大里村船木台4 - 4 - 1番地

電話 0493 (39) 3955

印刷／有限会社 平電子印刷所